

研究紀要

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

縄文中期土器群の再編

- 谷井 彪、宮崎朝雄、大塚孝司、鈴木秀雄
青木美代子、金子直行、細田 勝(1)

女影系瓦の一試論 高橋 一夫(138)

国を越える同范瓦に関する一考察

昼間孝志(146)

縄文中期土器群の再編

谷井 鮎、宮崎 朝雄、大塚 孝司、鈴木 秀雄
青木美代子、金子 直行、細田 勝

第1章 縄文中期土器群の再編にあたって

埼玉県における中期の研究が本格化したのは昭和30年以後である。戦前にも稻村坦元氏らが入間郡日高町高麗川にある国指定史跡である縄文中期の遺跡を発掘調査しているが、その報告（稻村 1929）は住居址を中心にして簡単なものがある。土器研究の面ではほとんど注目されていなかった時代といってよい。

昭和30年代に入ると、いくつかの調査例がみられるようになる。栗原文藏氏らが行なった吹上貝塚の発掘調査（栗原他 1969）では加曾利E式初頭期を中心に3軒の住居址が検出され、その覆土中から多量の土器群が出土した。このような住居址の覆土中から完形あるいは半完形の土器が一括して多量に出土する現象を「吹上バーナー」（小林他 1965）と呼ばれるようになったが、吹上貝塚はこの現象が最初に注意された遺跡として著名となっているが、出土した土器も加曾利E式初頭期の代表する組合せ例であり、當時としては貴重な数少ない存在であった。また、その報文では、勝坂式終末と加曾利E式初頭期の土器の併出する事実も指摘されていた。

昭和38年に報告された新座遺跡（坂詰 1963）も早い時期のまとまった内容の報告である。坂詰秀一氏はこの時点で加曾利E式の3細分を試みている。また、昭和40年には、勝坂式の3軒の住居址を調査した下加遺跡（宮内 1965）が報告された。いずれも多量の勝坂式土器が出土している。各住居址の土器は、阿玉台I式を中心としたもの、縦位区画の変形した文様帯を重ねた土器を含む一群、勝坂式終末期特有の円筒形土器が加わったものと3軒とも異なる様相を示していた。このため、一時は関東での勝坂式編年の一の基準として使われることもあったようである。

埼玉でも、昭和40年代になると、大規模な中期の遺跡が発掘されるようになり、多数の住居址が検出されることとなった。しかし、いずれも中期後半の加曾利E式期の集落が中心である。勢い土器の編年的研究も加曾利E式が中心になっていった。

これら多くの遺跡のうち、膳棚遺跡（岩井他 1970）は、このような動向の早い段階で調査された遺跡である。中期前半の新道式の段階から始まり、中期後半の加曾利E式まで多數の造構が検出されているが、やはりその中心は後半期の加曾利E式で占められていた。中期前半の土器では勝坂式よりも阿玉台式の方が多く出土し、埼玉では阿玉台式の占める比重の高いことが予想された。また、加曾利E式土器の出土量では、当時の埼玉では初めてといえるほどの多さであった。

その報告の考察は、意欲的に中期社会の総合的分析を目指したものであり、藤森栄一氏らが展開してきた中期農耕論（藤森 1965）を土台に、生態学的・文化動態史的視点から分析している。

加曾利E式土器の編年研究も意欲的に取組んでおり、その成果は、現在の埼玉で一般化している加曾利E式分析の出発点となっている。この編年は、「日本考古学講座」での吉田格氏の加曾利E式についての概説（吉田 1956）や「日本の考古学」での岡本勇氏の概説（岡本 1965）を基礎としたものであり、さらに從来の加曾利E I式、E II式とも3細分を試みている。さらに、新たに岡本氏が提唱した加曾利E III式やE IV式の資料も提示された。

その後、西原遺跡（小川他 1972）、花穂貝塚（下村他 1970）、坂東山遺跡（谷井他 1973）、志久遺跡（佐森他 1976）、松の木遺跡（荒井他 1980）などで多量の加曾利E式土器が報告されている。その多くの報告でみられる土器の分析は、諸遺跡の報告が示した加曾利E式の細分案を基礎に行われたものであった。特に、加曾利E III式、E IV式については、多数の資料の検出で埼玉独自の土器の組合せに対する考え方方がとられるようになり、現在他地域の研究者の考え方とはずれができている。

東京、神奈川、千葉の近県では、埼玉にまして大規模な集落が発掘され、土器研究もそれぞれ独自な展開がみられる（新藤 1976、白石 1978）が、研究の中心はやはり加曾利E式であった。

埼玉での中期前半の報告は下加曾利式を除くと断片的な例しかない。そのなかで、やまとまつたものや注目されるものに、平松台遺跡（金井塚 1971）の阿玉台式、金堀沢遺跡（中島 1977）、松ノ木遺跡、舟山遺跡（谷井他 1980）がある。最近、注目されるものでは、亀居遺跡（小泉他 1980）で出土した阿玉台 I b式と猪沢式土器の伴出例があげられよう。

勝坂式期の発掘例の多くは東京都下のものが圧倒的に多い。その分析も多摩ニュータウン駒ヶ根遺跡（安孫子他 1969）で試みられた方法が其出発点となっている。

中期初頭期の五領ヶ台式土器では今村啓爾氏が神奈川の宮の原貝塚（今村他 1972）での豊富な土器群をもとに2細分し、さらに、山口明氏が4細分案を提出した。関東全体では出土量が徐々に増加しているが、埼玉では示すようなものは少なく、今後に期待されるところである。

東関東の阿玉台式は佐藤達夫氏の「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間」（佐藤 1974）のなかで、西村正衛氏の阿玉台式の分類（西村 1970, 1972）を採用して、東関東の土器と西関東の土器を対比した編年を示したことで一躍脚光を浴びることとなった。現在、中期前半の編年を進める時、阿玉台式の果す役割は大きいが、問題点も多く指摘されており、今後、若干の変更が行われることとなろう。

このように、中期全般にわたって着実に資料が増加している。しかし、編年研究の面では、前半期の五領ヶ台式、勝坂式、阿玉台式は検討されることが少なく、今後一層議論を深める必要がある。これに対して、後半の加曾利E式土器は各地で出土することもあって多くの論考があるが、現在は、互いの相違点を明確化し、問題点を整理する段階にきているといえよう。

最近、各地でこの種の試みが進められている。特に、神奈川考古同人会の主宰で行なわれた、関東中期後半の編年再編（鈴木他 1980, 1981）は、大冊の資料集、系統別展開図、その解説およびシンポジウムでまとめるという体系的な試みであり、高く評価しえるものである。これらの基礎となつた神奈川編年は戸田氏等の使用した從来の型式内容を基礎としていることは、具体的な内容がよく示しているが、資料が多數示されたことで、細分基準がより理解しやすくなつたことは大きな功

讀である。また、同シンポジウムでは中部の土器群の編年とも対比して進められており、その基礎となつた中部研究者による曾利式再編の試み（中部高地繩文土器集成グループ 1979）も重要なものである。

型式の設定は新出資料の検出をもって行なわれる場合が多く、基準資料は限られているのが常である。仮に、かなりの量の資料で設定されたとしてもそれを上まわる資料が加わることは明白な事実である。したがって、型式内容は設定された当時のものとは変化し、充実するとともに、設定資料とのずれで複雑化することは宿命であろう。その意味でも中部地域の研究者が行なった曾利式再編の試みは型式内容検討の今後の指針となろう。

しかし、これらの編年内容もいづれまた再編され、より高次に分類されたものとなることであろう。

埼玉でも多くの研究者が中期の細分を進め、一定の成果をあげてきた。しかし、その成果は報告書の中でまとめられたものであり、資料的制約や紙数の関係もあって、体系だったものは少ない。独立した論考としては宮崎の加曾利E式（宮崎 1979）や谷井の勝坂式（谷井 1977）を挙げたものが目立つ程度である。

たまたま、昭和56年度日本考古学協会秋季大会で「繩文中期のシンポジウム」（小林他 1981）が行われ、私達も末席を汚した。その際、関東を中心とした各県で中期を10期に分けて土器群が提示された。

私達は、これを契機に中期上器編年の勉強会を続けてきたが、十分なものといえないまでもその成果を形として残して置きたいということもあって、南関東を中心とした編年案を作成することになった。

本論では、第2章で中期社会の特色を概観し、第3章で関東の中期土器の研究史を振り返り、第4章で土器の動態を通して視し、さらに、第5章で各段階の土器を解説しようとするものである。

対象とした地域は、埼玉とその周辺ということで、東京、千葉を中心に神奈川の一部も加えた。また、理解を助けるために、その周辺地域の土器も随時採用することとした。

（谷井 慶）

第2章 中期社会とその特色

(1) 時期区分

縄文時代の時期区分は、かつて山内清男氏が提唱した早期から晚期までの5つの時期（山内 1937, 1940, 1964）に分けるのが一般的である。その後、早期の前に草創期が追加されたが、先土器時代の絡みから議論が多い。

この5細分には山内氏が土器の編年を組立てるにあたって、各期それぞれが均等の型式数となるよう機械的に割り振った結果といわれている。そのため、時代相にあった時期区分を設ける試みも古くから行なわれてきた。かつて、八幡一郎氏が山内氏の時期の前期後半にはすでに中期的様相をもっているとして、縄文式段階以後を中期とした試みもその一つである（八幡 1935）。

最近では、岡本勇氏が縄文社会の発達段階に則して4期細分を試みている（岡本 1975）。いずれも時代相を反映させるという点では意義の深い提案といえよう。

しかし、大勢は山内氏の提唱した5期区分法がとられ、縄文時代史の記述する多くの論考では、この5細分法を極力活かすべく、時代相を反映した時期区分とみなして論が進められる。もちろん、現実の地域社会は、それぞれ歴史的展開過程に違いがあり、同じ時期にあたるといっても、文化の内容が異なってくるのは当然であろう。

本論では、山内氏以来の5期区分法の上に立ち、区分された時期に文化的な内容を付与する一般的な理解の上にたって中期を取りあげた。

(2) 遺跡数と集落の変遷

さて、5期区分のなかで占める中期は、遺跡数の著しい増大、大規模な集落構成、立体的で装飾に富んだ土器群の盛行など、多くの要素から縄文時代のなかでも最も発展した、あるいは特異な時期といわれる。

近年、時期を追った遺跡増減表がいくつか提出されている（小林他 1981、及川他 1980）が、中期が他のどの時期に比べても圧倒的に多くなることで共通している。ただ、東京の多摩ニュータウン地区のような起伏に富んだ丘陵地帯では、遺跡数のピークが前期となる例もある。これは、地形的な制約で、通常の中期のような大遺跡の立地が困難であることや前期では規模の小さな遺跡が支配的になること等に起因のする例外的な事例と考えられよう。

ところで、遺跡数の多い傾向が中期全体にあるわけではなく、細かく時期を追ってみると、大きな波があり、地域による差も大きい。一般的には、前期末から中期初頭や中期終末は遺跡の少ない時期にあたる。

埼玉を例にとると、前期末から中期前半期の勝坂式の段階までは遺跡が少ないだけでなく、いずれも破片が断片的に出土するようなごく小さな遺跡である。これに対して、東京の多摩丘陵沿いの扇状地では、神谷原遺跡（中西他 1982）のように、埼玉に比べてかなり早い段階から大規模で継続性のある集落の形成される例もある。

この頃の遺跡数の動向を関東から中部までの広い範囲でみると、極端な遺跡減少期の幅がやや狭

くなり、前期末の十三菩提式から中期の五領ヶ台式までとなる。それでも、中部は関東より遺跡数、規模ともはるかに豊かといえよう。

この時期の土器は近年に至るまで、その変遷や具体的な土器組成がはっきりしなかったが、遺跡の稀少性が決定的な要因と考えられる。

中期終末の加曾利EⅡ式から後期初頭の称名寺式の段階も前期末から中期初頭と同様、極端に遺跡の少ない時期である。今村啓爾氏は人口の減少について、絶対的遺跡数や遺構数、遺跡での繼続性などを考慮して分析し、前期末と同様、中期終末から後期初頭期でも遺跡が減少するだけでなく人口も減少していることを明らかにした（今村 1977）。

中期を象徴するものの一つに、大規模集落の多さがあげられる。そこで、集落の変遷を前期から通観してみよう。

関東の前期初頭花瓶下層式段階は、遺跡数、遺構数とも少ないが、次段階の関山式になると、大規模集落の例があり、集落形態も環状をなす。埼玉の打越貝塚（荒井他 1978）はその代表例であり、千葉では幸田貝塚（岡根 1972）等が著名である。もちろん、小規模な構成の遺跡も多い。

埼玉の水子貝塚（中村 1971）は次段階の黒浜式から諸葛a式の環状集落であるが、諸葛式の後半になると水子貝塚のような環状集落はあまりみられず、環状集落の形態をとるまでの集落の規模と繼続性をもつことは少なかったといえよう。

中期の環状集落は前期内半と比較できないほどの規模と割合で一般化する。小規模集落もあるが、どの地域でも環状集落が存在し、特に、勝坂式後半以後はその傾向が著しい。

さて、我々が目にする環状集落は、どの場合も集落の開始から廃棄までの住居の累積の結果である。各時期ごとに分けると10軒を大幅に越える例はそれほど多くないのではないか。したがって、一時期だけ住居が完全な環状に分布する例はほとんどないと思われる。このことから集落が環状となる条件としては、長期間村が維持、經營されていること、空間を意識した対峙する2つ以上の集団が存在することなどが考えられる。

中期でも、その初頭期や終末期は環状集落の形成要因に照してみれば、長期間の集落および集団関係の維持が不可能なほどの人口の不安定さに要因があったと考えられよう。遺跡数の少なさなどを考えれば、人口の減少に伴い、集団がそれぞれ孤立せざるをえなかつた困難な状況の時代といえるのではないか。

後期前半の堀之内式の段階では、数軒を単位とする集落がある一方、大規模集落が復活している。特に、関東部では貝塚を伴う大規模な集落が増え、この傾向が著しい。関東を中心とした広い地域にわたる中期終末の遺跡減少期をへて、大規模集落は地域による偏在を生むことになったのである。中部は、中期全般であれほど大規模集落を形成されながら、中期終末以後、晚期まで大規模集落の復活はほとんどなかった。

このような遺跡数の消長や集落規模からみた縄文時代の変遷は、文化盛衰の一端をよく示しているものであろう。もちろん、文化の質的側面は別個の展開を遂げる。集落構成および規模の問題も縄文社会の制度という側面もあり、文化の質的側面にかかわるものであるが、少なくとも、後期堀之内式には千葉県を中心とした環状集落の例が多くあって量・質とも一定の水準が保持されること

から考えると、環状集落という制度的側面では崩壊しているといえない。

いずれにしても、縄文時代は、地域の独自性を越えた人類史の基層的面で発達段階にあることはまぎれもないところであり、一定の文化水準に達した以後は、量的展開と質的展開とを別個に考察してゆく必要があるのではないかろうか。

(3) 遺跡数の増長と自然環境

さて、このような中期の文化的变化は自然環境と結びつけて考察されることが多い。特に、中部では、中期前半から後半にかけてみられる大規模な集落群と内容豊かな遺跡群をもつが、その終末では質・量ともに貧弱なものになってしまう事実は、気候変動による植物相の变化と結びつけるとかなり理解しやすいことも事実であろう。

縄文時代の気温の変動については、海平面の変動に伴う海進海退現象と結びつくため、古くから貝塚の分布にもとづいた縄文時代の海進、海退が論じられ、各時代ごとの海岸線を推定してきた（江坂 1965）。海岸線の推定される沖積地は、台地から流失した大量の土砂が堆積し、現状とは全く姿を変えていることから、最近では、松島義章氏のように沖積地の分析を加えた厳密な方法がとられている（松島 1979）。また、海進、海退を明らかにするには、地盤の変動による隆起や沈降も考慮する必要があることから問題も多いとされている。しかし、近年の研究成果（スチュアート・ヘンリー 1982）によれば、早期終末から前期の海進にあっては、現在よりも +3.5~5 m 程高かったとされる。

最高海面に達する時期はほぼ黒浜式の頃と推定され、その後、一進一退を繰り返しながら海退したようである。縄文中期ではどうであったであろうか。最高海面時よりかなり低下したことは疑えないが、正確な数値はこれからである。

現在では花粉分析による植相の復元から古气候の推定も行われるようになった。花粉分析のデーターから 4000 B.P. に気候の冷涼化がみられるとする見解（藤 1946）がある。また、現在よりも寒冷化するのは晚期以後で、中期は現在の気候とそれほど変わりないとする研究者（安田 1981）もある。

大宮市の寿能泥炭層遺跡（堀口 1982）は縄文早期から平安時代までの泥炭の発達した低湿地遺跡で、各時代にわたって自然環境と考古遺物を相関して考察しうる貴重な例である。花粉分析の成果によれば、大宮台地では、前期以後、中期も含め晚期に至るまで落葉広葉樹林が支配的であることが明らかにされた。昆虫の分析では気温が 4°C 前後低かったことが窺えるデーターもあった。

縄文社会では、植物採集が生業の中心だったといわれるが、木の実の収穫にとっては、いわゆる照葉樹林の常緑広葉樹林より落葉広葉樹林がはるかに勝っているといわれる（安田 1980）。寿能泥炭層遺跡にみられるように、中期以後でも植相に大きな変化がみられないとすれば、これら自然環境のみを時代の盛衰と結びつけるのは必ずしも適切ではないであろう。このような意味で、前期末から中期初頭にかけた時期の自然環境も急変は窺えない。したがって、この時期の衰退は、縄文社会の内的要因も考えられよう。しかし、現状では、この減少期を明確に説明するものはないといえるだろう。

無文字社会の多くは、近代になってヨーロッパ等の新しい参入者があると免疫のない細菌を持ち

込まれると、たちまちのうちに感染し、村全体に大打撃をあたえる例がしばしばあるという。日本の歴史の中でも、しばしば疫病の流行と冷害があり、人口が著しく減る場合もあったといわれる。近代的衛生設備のない時代の平均寿命のあり方をみれば、疫病の流行は人口減少の有力な原因となろう。しかし、これを考古学的にどのように明らかにするかは、今のところ全く手掛りがないが、今後の研究が期待される。

(4) 遺構・遺物の特色

ここで、中期社会のいくつかの要素を概観しよう。

まず、集落構成の単位となる住居址である。前期の住居址はその前半が豊富であり、構造や変化の様子も具体的に明らかにされつつある。平面形態は一辺の長い台形から長方形、方形へ変り、柱穴も壁柱穴を多数もつものから4本柱穴中心へと移る。後半は方形の角の丸みが加わる。中期直前の扇平遺跡では、円形と方形が相半ばする。中期になると、かなり広い地域で円形あるいは橢円形プランへ統一される。近年、中期初頭の発掘例が多くなったが、いずれも円形住居址が主体である。構造的には前期と同様、中央の各種の炉と4本ないしは6本の柱穴がある。石囲い炉、さらに埋甕等が飛躍的に増大し、形態的にも発展を遂げる。住居空間は炉を中心とした分割構造を取り、基本的には前期の住居址と変わらないであろう。しかし、平面形態は方から円に変って統一されることはある。どのような背景をもつかは別に検討を要しよう。

住居址が構造的に変るのは、中期後半の入口部埋甕出現以後である。炉の裏にある石壇遺構もこの変化と関連しよう。東北南部では住居址内の炉の位置が逆転しているが、巨大化した複式炉の出現も注目される。これらの変化は炉を中心とした分割から埋甕あるいは入口部と炉を結ぶ分割線の出現による空間分割の変化であり、住居址に対する意識が変わったことを表わしていくよう。平面形態とは別次元の問題であるが、縄文時代でも重要な変化の一つではなかろうか。中期終末の柄鏡形住居址は、入口部が様式的に発達したものであり、以後姿を変えるが、住居の基本構造はこの段階で規定されたことになろう。

遺物は土器だけでなく、石器群も中期社会を考察する重要な役割を果している。藤森栄一氏は中部の中期集落の規模、定着性、各種の豊富な遺物から中期での原始農耕を想定した。農耕が当時の社会で占めた比重等をまず置くにしても、遺物群の多様さには目をみはるものがある。特に、生業の道具となる石器群の量は特筆されよう。

しかし、これら生業関係用具を機能的側面でみれば、中期に限られるわけではなく、生活の基層に関わる石器といえ、特殊な機能に結びついて発達した例はあまりないのではないか。また、一般的に、石材の入手が容易な地域では、中期に限らず莫大な出土をみる例も多い。逆に中期といつても、石材の確保が困難なところでは極端に少ないことが多い。近年、各種の打製石器を特定の機能に比定した論考（小林他 1978）もあるが、はたして一つの形態と機能が結びついていたものであろうか。我々の用意した分類にあてはまらない中間形態も多いはずであり、可能性の一端を示したものと理解しておきたい。ただ、中期の打製石斧の出土量が多いことも事実である。有効な方法論をもって検討する必要があろう。

その他、石皿、磨石も出土量が多く、様式的な発達がみられるが、多くは縄文時代の早い段階に

出現した器種で、基層的な石器の一つである。後・晚期ではさらに様式化が進んでいる。

祭式関係の遺物では石棒の出現が注目される。中期前半ではその例がほとんどなく、後半以後、縄文時代の基本的な石器に加わる。これはちょうど住居址の変化の時期と符合する。

同様に祭式に関連する土偶も、早期の古い段階からあるが、中期での立体的土偶の出現は注目される。表現形式に土器と共に通すところもあり、土器の構造的变化と関連するかも知れない。

生活用具としての土器は多様な発達をする。五領ヶ台式段階ではすでに中期的な大形浅鉢が普遍化する。有孔鋸付土器も中期を特色付ける器種である。大石遺跡19号住には無文の口縁下に隆帯の横円区画がつき、隆帯による逆「U」字文等の構形の有孔鋸付土器がある。孔はないが、同じ形態、文様構成の土器が東北の中期にもある。関東では前期の諸磯b式に鋸がないが、孔の巡る浅鉢が知られる。諸磯c式でも同種の有孔浅鉢で、中期の構形の有孔鋸付土器とはつながらないことが明らかであった。大石遺跡例から東北にみられる構形に、中部、関東の浅鉢にある列孔を取り込むことによって成立したものだろう。東北との関連は、撫糸圧痕で文様を描く浅鉢と同一文様を角押文で描いた浅鉢の例も知られ、中部と東北との交流も無視しえない。

この他、器台、台付土器等があるが、中期前半腰板式での深鉢の変異の多さも特筆されよう。

このように、各種の文化要素をみると、様式的変化の過程にあるもの他、中期後半では質的側面で大きな変化をみせている。今後とも土器を含めた文化総体からの考察が重要となろう。

(5) 関東および周辺地域における土器群の様相と展開

前期末の関東には十三菩提式が広く分布する。神奈川の室ノ木遺跡（塚田他 1973）が比較的まとまっているが断片的である。結節浮線文、結節沈線文で文様を描くもの、三角印刻、結節沈線文を組合せたもの、平行沈線が主文様となるものなど多様である。これら十三菩提式を構成する土器群の分布域は広く、鍋屋町式に代表されるように細部の差しかない。山口明氏は北陸の鍋屋町式を検討し、諸磯c式後半から十三菩提式にかけた別型式と位置づけ、I a、I b、II式に3細分した（山口 1980）。そして、その成立が北陸であることを指摘している。

関東東部では、鍋屋町式や十三菩提式とは全く異なる栗島台式（安藤 1979）が提唱されている。口縁部に撫糸圧痕文によるモチーフが描かれ、胴部は繩文となる。文様帶の構成としては円筒下唇式に近い。口縁部に鋸歯状に切り取られた隆帯があり、十三菩提式と共通する点もわずかにみられる。

東北では、北端が円筒下唇d式、南は大木6式が分布する。大木6式は波状線で、波頂下に渦巻文をもっており、円筒上唇式と共通した構成となる。大木7a式（丹羽 1982）は平線が多く、円筒下唇式と共通した文様帶であり、交錯した関係は注目されよう。

関東の中期初頭は五領ヶ台式が編年されている。山口明氏は今村氏の五領ヶ台式2細分（今村 1972）を受け、該期を地域性と細分の観点から分析し、五領ヶ台式が、十三菩提式からくる細線文系土器群と諸磯c式からの系譜を引く平行沈線文の土器群から構成されたとした。この二者は共存して出土することが多いが、主とした分布は細沈線文系土器群が関東、平行沈線文土器群が中部にあると推定している。編年的には4細分を提示したが、第2段階の設定が明瞭でないことから今回は3細分に留めた。終末の段階は地文に細かい地文を多用した一群が大多数を占める。前段階とは

大きな変化が起っており、従来の五領ヶ台式の範囲を越えているが、今回は第3段階におさめた。なお、前期末から本稿のⅢ期までの各段階の間にはまだ大きな隔りが残り、系統的な分析と細分を進める必要がある。

この段階の近畿以西は爪形文を多用した一群の土器があり、別系統である。東日本は円筒上層式および大木7a式がある。純粋な円筒上層式は前半で独自の展開を示すが、文様帶の分帯および口縁部文様モチーフは、大木7a式、五領ヶ台式と共通する部分もある。大木7a式はかつて今村啓爾氏が指摘しているように（今村 1972）、五領ヶ台式と共通した要素も多い。

しかし、五領ヶ台式そのものが前期末からスムーズな系譜をたどれるだけの資料は不足しているようであり、両者の関係はさらに検討すべきであろう。

地文繩文を多用した五領ヶ台式以後は議論の多いところである。それは西村正衛氏の提唱した阿玉台式発生の過程の問題で、西村氏は五領ヶ台式→雷七類→第一群土器→阿玉台1a式とした。関東西部の勝坂式分布図では、五領ヶ台式以後は、井戸尻編年の名称でいう猪沢式、新道式と続き、猪沢式のある段階からは確実に阿玉台1b式が平行することから、関東西部から中部では五領ヶ台式以後、猪沢式までの段階を欠いてしまうという結果となっている。詳細は第5章で検討するが、本論では発掘例の多い中部、関東西部の土器で再編し、東部関東の土器の再検討を進める。

勝坂式をどの段階とするかも議論が分かれる。本稿では土器の様式構造が地文繩文から角押文多用へ変り、展開していくことから猪沢式段階からとしている。現状では五領ヶ台式と猪沢式を比較すると文様構成的に類似したこともあるが、施文手法上の断絶は大きい。

猪沢式相当の土器の分布は関東、中部が中心となる。他の地域では全く別構造の土器であり、孤立的存在である。関東東部は阿玉台式、東北は円筒上層a式系の土器、大木7a、b式が展開しようが、関東の編年との正確な対比は今後の課題である。

新道式段階では、北陸地域との交流がみられ、半截竹管による区画手法、器面全体に展開する渦巻文など多くの要素が入る。逆に北陸では爪形文、角押文等により口縁部三角区画文が構成されるものが認められ、相互に文様の交流がみられる。

勝坂式の小画期をなすのは本稿Ⅵ期の藤内式段階であろう。佐藤氏はこの時期以後を勝坂式と考えていた（佐藤他 1976）。口縁部文様帶を欠く土器群が多くを占める。しかし、近年新道式に一般化する三角区画口縁部文様帶がⅦ期まで確実に残ることがはっきりした。

勝坂式後半は中部と関東でしだいに変化の過程が異ったものになる。中部は曾利式へと比較的スムーズに移行する。関東では勝坂式的な土器が残り、大木8a式その他の要素も加わって、勝坂式とは全く異形な加曾利E式土器を生む。

阿玉台式土器はⅢ期あるいはⅣ期前半の五領ヶ台式終末あるいは猪沢式古期に成立する。

西村氏の阿玉台1a式が当る。波状線の土器は東北地方の文様モチーフとの共通性が濃厚であり、五領ヶ台式終末、特に東部の土器と共に共通したものが多い。

後続して阿玉台1b式、Ⅲ式と続くが、文様帶や文様モチーフ上の断絶が大きい。西部関東へかなり進出しているが、勝坂式とは明らかに様式上の差異をもつといえよう。

とくに、阿玉台1b式は分布域が広いといわれ、中部地方にも出土例がかなりある。阿玉台Ⅲ式

はいまのところ関東西部どまりである。東北地方では福島に完形品の類例がある。

阿玉台Ⅱ式後半になると、勝坂式の施文手法や文様帶モチーフ等を取り入れた土器が出現する。西村氏のいう阿玉台Ⅲ式にあたるが、共存している例も多い。勝坂式と併出している例はこの阿玉台Ⅲ式タイプの土器が普通である。終末は墻帶等に縄文を施す阿玉台Ⅳ式があるが、その成立は茨城北部を中心とした地文縄文をもつ一群の土器（鈴木他 1980）との関連を考える必要がある。縄文施文は阿玉台Ⅲ式と呼ばれる土器にもあり、一要素の展開として別に考えなければならない。関東西部でも勝坂式に併出するが、浅鉢例が多い。関東東部ではいわゆる中峰古式と併出する。

関東東部で重要な役割を果すものに大木8a式がある。栃木県湯坂遺跡（海老原他 1979）や櫻沢遺跡（海老原他 1980）ではいわゆる阿玉台Ⅲ式と併出して安定して存在する。福島県の大畠貝塚（馬目 1975）も同様な傾向の土器群である。口縁部に横円区画文、「S」字状文をもつもの、口縁部文様帯を胴部文様帯をもつものなど変化の種類が多い。胴部に文様帯が展開するもの、角押文の多用も目立つ。器形、文様帯の変化が多く、複雑な展開を示す。これに対し、東北北部の西田遺跡（佐々木 1980）はキャリバー形を呈し、口縁に墻帶による連結三角区画文をもつ土器が多い。基本モチーフとして、五領ヶ台式終末に東北から関東に広くみられた三角区画文の系譜をもつ土器である。

関東の加曾利E式土器の典型例としては武藏野台地に多いタイプがあげられよう。キャリバー形で、口縁部に「S」字の変形した渦巻文、胴部地文燃糸のみで構成される。勝坂式土器が器面全体を一つの文様帯として構成されるものが主体なのに対して、この加曾利E式は文様構成の上からいっても大きな変化であり、内蔵的要因だけでは解決しない。ただ、勝坂式のなかにも加曾利E式と同様な文様帯構成をとるものが少數ある。武藏野台地の加曾利E式は大木8a式からの影響を通常考えているが、栃木周辺にみられる大木8a式と比べるとその一部が具体化されているにすぎず、多くはそのままの形では入ってこない。むしろ、文様帯構成的には東北北部のキャリバー形土器に類似した構成をとっているといえよう。

口縁部に文様帯が集中するという文様帯構成は中期だけでなく、縄文土器の底流にあるといっても過言でない。文様帯構成法としては一つの安定した姿ともいえよう。円筒上層式や大木7a、b式、勝坂式の一部に広くみられるものであり、加曾利E式でも基本的な文様帯構成として展開している。栃木から福島にかけた一連の大木8a式をみると、胴部文様帯の発達が著しく、阿玉台式の文様帯分帯を始め、骨格のみの勝坂式的文様モチーフ、淨法寺タイプと称される馬高式的な土器、墻帶に沿う角押文にみられるような、大木式的あるいは阿玉台式的な文様手法など多くの要素が複雑に入り組んだものといえる。

関東西部の加曾利E式は大木8a式の影響といっても、栃木的な複雑な土器群の内容そのものを指すというよりは、勝坂式と対比してみた場合の文様分帯のあり方を指すといってよいだろう。

この頃、関東東部は中峰式が展開する。大木的な文様分帯のあり方に、勝坂式的、阿玉台式的要素が器形、各文様帯、文様要素に至るまで、複雑な組合せをもって展開するため、きわめてタイプの多い土器群である。その要素の組合せのあり方は栃木にみられるあり方とは組合せの取り入れ方の違いがあるといえ、同様な現象といえよう。一部の土器は利根川流域をたどり群馬県まで広く分

布しており、いわゆる三原田式を生む（能登他 1975）。三原田式は大木式的な文様分帯で、器形は中部の勝坂式の一部の器形が類似し、口縁下で強くえらが張り、口縁部文様帯を形成する。文様描出手法は半肉彫り風の半截竹管が多用した北陸の要素も加わる。

大木 8 b 式段階になると、各地域の特色を残しながら関東西部の加曾利 E 式と同一の文様構成と文様要素の土器に統一されるようになる。東北地方においても口縁部文様帯は三角区画文に代って渦巻文が登場し、立体的装飾で飾られた馬高式も大木 8 b 式的土器へと代る。加曾利 E 式的土器が西日本へ分布域を拡大するのもこの段階である。

東海の吹呴式や近畿、中国の里木 II 式などは地域的色彩が強いとはいえない、加曾利 E 式の存在なくしては成立しないものであろう。

中部の曾利式と加曾利 E 式土器との関係は議論の多いところである（鈴木他 1980, 1981）。従来の曾利式編年では、曾利 I 式段階に口縁部に渦巻文をもつキャリバー形土器が出現すると考えられていた。加曾利 E II 式に相当する。最近の研究によれば、曾利 I 式段階から加曾利 E 式的な口縁部文様帯をもつ土器の存在を認めようとする傾向にある。いずれにしても、曾利式前半の土器は中部における勝坂式の展開したものであり、地域的特色が色濃く、独自性も強い。中部では関東の加曾利 E 式の影響は他地域に比べてやや遅れる可能性が強い。

このように、中期後半の加曾利 E 式土器は東日本だけでなく、西日本の土器までも影響を与えている。そこで、加曾利 E 式のキャリバー形土器を示す文様帯構成の変遷をみてみよう。地域による差も大きいが概ね次のように変遷する。

成立期は渦巻文の口縁部文様帯と地文のみの胴部文様帯で、次いで、頭部無文帯が形成され、胴部に懸垂文が付いて加曾利 E I 式後葉（X 期）までつづく。X 期の加曾利 E II 式ではこの頭部無文帯が消失し、やがて、胴部の懸垂文にも磨消手法がみられるようになる。加曾利 E III 式終末では口縁部文様帯の消失した一群の土器が加わる。口縁から直接懸垂文の垂下するもの、連弧文系土器によくあるような交互刺突文列下に懸垂文がくるものなどである。

加曾利 E IV 式は口縁部文様帯をもつ土器が根強く残るが、大半の土器は、長く続いた加曾利 E 式の口縁部文様帯とは大きく変化する。口縁から直接懸垂文の垂下するものだけでなく、波状沈線様帯を描き、「U」字状懸垂文の土器が加わる。加曾利 E V 式の加曾利 E 式終末段階では、口縁部に渦巻文をもつ土器が消失しているといえよう。

加曾利 E 式の後半に相当する段階では各地域独自の土器の変化が起る。東北地方は大木 8 b 式の新しい段階あるいは大木 9 式から始まるが、器面の文様の単位が独立化する傾向を示し、やがて変形し、複雑な磨消織文の区画文へ向う。中部では曾利 I 式の段階で渦巻文の口縁部文様帯と懸垂文の胴部文様帯の土器の比重が高くなつたが、曾利 IV 式の段階では口縁部文様帯が急速に衰退する。関東での加曾利 E 式の伴出関係から加曾利 E VI 式の終末にあたる。以後、口縁部文様帯の復活はなく、曾利 V 式以後は関東的な土器の進出が著しい。千曲川水系の巾田遺跡では、一段階早く曾利 II 式段階でも関東色の強いものとなっている。

東海では、口縁部が異常に内凹する独特の土器を生む。もちろん、加曾利 E 式的な土器や曾利式的な土器も存在する。奈良県の大官大寺遺跡下層出土の土器（奈文研 1978）は中期終末から後期

初頭の土器であるが、SK 320には口縁部文様帶を残した土器群がみられる。その他、近畿周辺のこのころのものとして裏陰遺跡（杉原他 1980）、島根県桂見遺跡（中山他 1978）などいわゆる平式と呼ばれる土器がある。これらは、いずれも文様単位として摘出しがたい横に列なった加曾利E式から大きく変形した口縁部文様帶となった土器群である。

関東の中期終末に当る加曾利EIV式土器は東関東では微隆起、西関東では沈線が文様抽出の主流となる。文様モチーフも東関東では上半のモチーフと下半のモチーフが組み合い、西関東では上下2帯に分れるのが一般的となる。東関東の微隆起は文様モチーフが異なるとはいえ、東北地方の隆帶抽出手法と関連するところであろう。

これら加曾利EIV式系統の土器は、磨消繩文の発達した称名寺式成立後も引き続いている。称名寺式土器の成立当初はいわゆる西日本の中津式のモチーフをもつ土器群と在地の加曾利EIV式の磨消繩文手法の土器の2群の土器があるとされるが、これに、加曾利EIV式の基本モチーフを受けつぐ一群の土器が加わる。西関東においては加曾利EIV式系統の土器が比較的早い時期に減少するが、東関東では称名寺式の中頃以後でも存続する。また、東関東タイプの加曾利EIV式と称名寺式の手法を合体したような独特な一群も成立する。加曾利EIV式系統の土器が関東一円でなくなるのは堀之内式成立以後と考えられよう。

（谷井 雄）

第3章 中期土器群編年研究史

中期の土器は、明治時代に厚手式と呼称されて以来、関東地方における代表的な縄文土器として知られてきた。遺跡数や土器量が圧倒的に多いことから盛んに検討も行われ、内容豊富な研究史を持っている。研究史について特に取り上げた代表的なものとしては、松村恵司氏の五領ヶ台式（松村1974）、堀越正行氏の加曾利E式（堀越 1972）がある。加曾利E式については、その他にも多数あり混乱した研究史として詳細に分析されている。

本稿では、1期、1879年陸平貝塚発掘調査～1940年日本先史土器図譜発表 2期、1945年第2次大戦後～1965年日本の考古学刊行、3期、1965年井戸尻刊行～現在の3期に分けて中期土器研究の動向を全体的に概述する。

1期（1879年～1940年）

近代考古学の出発となった大森貝塚の発掘調査に統いて、1879年、陸平貝塚、1883年、阿玉台貝塚の発掘調査が行われた。これらの調査の中で、出土土器は、大森貝塚の土器と比較して厚手で粗い事が指摘された（八木・下村 1894）。1920年、島居庵藏氏は「武藏野の有史以前」と題する一文において、縄文土器の違いを部族の違いとして考え、海岸地方には薄手式派、台地地方には厚手式派が分布するとし、台地地方における調査の必要性を述べている（島居 1920）。島居氏の意を受けたかのごとく、1925年大山史前学研究所によって勝坂遺跡の発掘調査が行われた（大山 1928）。報告書において大山柏氏は、打製石斧についてその用途を土搔きとして原始農耕と結びつけ、出土土器を文様展開図によって示し一応厚手式と把えた。打製石斧の分析、土器の文様展開図など、中期研究の基本的視点が既に示されていることは一驚に値する。1925年頃までは、中期の土器は一般的に厚手式と呼称されていた。

1924年、加曾利貝塚の発掘調査が行われ、層位的な土器の違いが注目された（八幡 1924）。この頃から山内清男、八幡一郎、甲野勇氏等によって縄文土器の縄年的研究が進められた。1928年、山内清男氏は人類学雑誌に発表した「下総上本郷貝塚」の中で、関東の土器型式を「(一)織維を含む土器型式、(二)織維を含まない諸破式、(三)勝坂または阿玉台、(四)加曾利E、(五)織之内、(六)加曾利B、(七)安行」と年代的に順序付けた（山内 1928）。統いて1937年「縄文土器型式の細別と大別」の中で、「記述に多くの便宜を生ずる」ものとして、早・前・中・後・晩期の5期大別を設定し、縄文土器型式の縄年体系を大別と細別で示した表として発表した（山内 1937）。ここに、現在に至る縄文土器縄年の基礎体系が確立された。この縄年表において、從来厚手式といわれていたものに相当する中期は、「五領台、阿玉台・勝坂、加曾利E、加曾利E(新)」の細別型式が縄年されている。1928年の縄年と比較すると、中期初頭に五領ヶ台が加えられ、加曾利Eが細分された。1940年「日本先史土器図譜」第Ⅸ集、Ⅹ集において、勝坂式、加曾利E式の具体的土器が示され、型式設定に至る経過とその内容が説明された（山内 1940）。勝坂式は細分の可能性と阿玉台式との併出関係が指摘された。加曾利E式は、「磨消織文を伴なわない古い部分（大木8a式及び8b式）とこれを伴う新しい部分（大木9式及び10式）」に細分された。連弧文土器についても別型式ではある

が新しい部分に属することを明確にしている。戦後、加曾利E式の細分について、種々の解釈が生まれ混乱を招いたが、山内氏の意図は大木式との対比を考慮すれば、古い部分、新しい部分両者の細分にあったと思われる。五領ヶ台式については特に触れることがない。このように、山内清男氏によって既に戰前に中期編年の枠組が確立された。

2期（1945年～1965年）

第2次大戦後、若い研究者により各地域で発掘調査が盛んに行われ、山内編年を基本としながら内容の充実化と型式の細分が進められた。中期では、従来の貝塚の層位的調査とともに、住居址の発掘調査が特徴となった。貝塚の調査としては、五領ヶ台貝塚、下小野貝塚、白井雷貝塚等が上げられる。1949年、江坂輝也氏は発掘資料により初めて五領ヶ台式を具体的に示した（江坂 1949）。また、西村正衛氏は白井雷貝塚の報告で、出土土器を分類し、五領ヶ台式から阿玉台式への変化を検討している（西村 1954）。

一方、住居址の調査は吉田格氏等により武藏野台地を中心に行われた。流久保遺跡、恋ヶ窪遺跡、玉川野毛町公園遺跡、貫井遺跡等で勝坂式、加曾利E式の住居址が検出され、吉田氏は住居址出土土器を比較する事によって加曾利E式の細分を進め、細分型式に対してⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式とローマ数字を与えていた。1956年、吉田氏は「日本考古学講座」の中で、加曾利EⅠ式、Ⅱ式の細分を示し、Ⅱ式は更に1類、2類に細分している（吉田 1956）。具体的な内容として、玉川野毛町公園遺跡は加曾利EⅡ式（吉田 1956）、恋ヶ窪遺跡は、それより新しい加曾利EⅢ式（吉田 1956）と位置付け、貫井遺跡では1片の土器を加曾利EⅢ式としている（吉田 1958）。吉田氏による住居址を単位とする分析方法は、住居址の検出が一般的な加曾利E式において有効な方法であり、新しい方向として評価できる。しかしながら、山内編年との関係が全く検討されず、その後の混乱の原因となった。

吉田氏に代表されるような山内編年に対して数字を与える傾向は1950年代の特徴であり、1959年刊行の「世界考古学体系一日本」の巻末編年表に最も良く示されている（江坂1959）。この編年表で中期は、下小野・五領ヶ台、勝坂1、2・阿玉台1、2、加曾利E1、2、（3）と細分された。加曾利E式だけでなく、勝坂式、阿玉台式も細分されたが、具体的な資料の呈示はない。加曾利E式については、数個体の写真が示されているが、渦巻の口縁部文様帶を持ち頭部無文帯が確立したキャリバー形土器に対して、西村正衛氏の文中写真は加曾利EⅠ式、写真図版の2個体は加曾利EⅡ式と比定されており、細分型式名に対する研究者間の違いを窺うことができる。また、編年表には、「ローマ数字は層位を、算用数字は型式細分を、（ ）は確定していないもの」と注意書きが付されているが、日本考古学講座との比較で明らかのように、厳密なものとは思われない。

細分型式に対する認識の相違は、1960年代に至り、加曾利E式において増幅され一層明確になった。1962年、栗原文蔵氏は大藏遺跡の報告において中期の土器を8類～12類に分類し、阿玉台式、勝坂式、加曾利EⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式に比定した（栗原 1962）。ここでは、山内氏の古い部分をⅠ式、新しい部分をⅡ式、称名寺式に近い中期終末の土器をⅢ式と把握している。翌1963年、岡本勇氏は吉井城山第一貝塚の報告において、出土土器をA～F類に分類し、キャリバー形土器について、墻帶による口縁部文様帶を持つA類から、口縁部文様帶が退化し沈線化したB類への変化を把え、A類からB類への移行を中心に他類を組み合わせて、各段階の土器群を加曾利EⅠ式、Ⅱ式に

比定した。更に「加曾利EⅡ式土器につづくもの」としてF類を主体にC類、D類の一部を含めた一群の土器を「加曾利E式と称名寺式とのあいだに存在する空白がみたされるかもしれない」とその位置付けを予想した（岡本 1963）。この土器群は、1965年岩坪貝塚の報告において杉山莊平氏により加曾利EⅣ式と呼称された（杉山 1965）。同年、坂詰秀一氏は報告書「新座」の中で、J 5 → J 4、J 6 → J 1・2・3という住居址の変遷を想定し、各段階に加曾利EⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式を当てた（坂詰 1965）。

吉田、栗原、岡本、坂詰の各氏により示された細分型式を、山内編年における加曾利E式古い部分（大木8a式、8b式）、新しい部分（大木9式、10式）の中に位置付けてみると、吉田氏は古い部分をⅠ式とし、新しい部分を連弧文土器の存在を中心にⅡ式、Ⅲ式に細分し、栗原氏は古い部分をⅠ式、新しい部分をⅡ式、現在では大木10式併行の土器をⅢ式とし、岡本氏は古い部分をⅠ式、新しい部分をキャリバー形土器の変化を中心にⅡ式、Ⅲ式に細分し、大木10式併行の土器をⅣ式とし、坂詰氏は古い部分をⅠ式、Ⅱ式とし、新しい部分をⅢ式としている。坂詰氏のⅠ式、Ⅱ式は若干の差があるが、共に大木8b式併行と考えられ、細分は難かしい。このようにみると、おおよそ古い部分はⅠ式として一般化したが、新しい部分は、様々な細分案が出されている。さらに、山内編年では大木10式に併行する、岡本氏のⅣ式を欠いていたことから混乱に拍車をかけることになった。能登健氏が指摘したように（能登 1975）、大木式との対比からみても、山内氏は古い部分の細分も示唆している。このように、山内編年の体系を十分理解することなく、あまりに地域的な資料に基づいて型式細分を進めた結果、新しい部分以後が先行した加曾利E式の細分論になってしまったと思われる。しかし、吉田、坂詰氏による住居址を単位とする土器群の把握、岡本氏によるキャリバー形土器における文様変化の分析、岡本、栗原氏による大木10式併行土器の摘出と正確な位置付けは、その後の加曾利E式研究において着実に受け継がれたといえよう。

さて、加曾利E式が型式細分に重点が置かれたのに対して、勝坂式、阿玉台式は相互関係及び加曾利E式との関係に焦点が当たられた。1950年代後半から1960年代に「考古学手稿」等を中心として、多数の資料が報告された。鳴神山遺跡（高橋 1959）、下高井戸遺跡（谷口 1960）、布瀬貝塚（金子 1961）、諏岐山遺跡（滝沢 1963）、下加遺跡（宮内 1965）が上げられ、勝坂式、阿玉台式の関係を中心で分析されている。勝坂式、加曾利E式との関係から、高橋良治氏は阿玉台式をA式—阿玉台式単独で出土する時期、B式—勝坂式と併行する時期、C式—加曾利EⅠ式と併行する時期に分類した（高橋 1962）。統いて1964年には、中村第1地点貝塚出土土器を取り上げ、「阿玉台式、勝坂式、加曾利EⅠ式それぞれの手法を持つ土器群」と把え、加曾利EⅠ式直前に編年付けた（高橋、江森、湯浅 1964）。これらの土器群は、翌年、プレ加曾利EⅠ式と仮称された。

勝坂式と加曾利E式については、1959年、吹上貝塚の報告において住居址—括土器として共伴關係が明確にされた（栗原 1959）。類似資料として中村橋遺跡（大沢、芝崎 1962）も報告されている。勝坂式、阿玉台式の細分は、加曾利E式を含めた相互関係を主としたものであったといえよう。

勝坂式、阿玉台式、加曾利E式については資料も増加し研究が盛んしたが、五箇ヶ台式については加茂遺跡（松本他 1952）、白井雷貝塚（西村 1954）で資料が追加されただけである。

1965年、「日本の考古学Ⅱ 繩文時代」が刊行された（岡本、戸沢 1965）。関東の中期は、下小野式、

五領ヶ台式、阿玉台式、勝坂式と説明され、阿玉台式、勝坂式の細分は可能性を指摘するに留まっている。加曾利E式は吉井城山貝塚の成果からⅠ～Ⅳ式に細分された。巻末の編年表は、五領ヶ台・下小野・勝坂】、【・阿玉台】、【・加曾利E】・阿玉台】、加曾利E】、【・Ⅳと編年付けられている。阿玉台式と加曾利E式併行説は高橋編年を採用している。日本の考古学では、世界考古学体系とは対称的に、勝坂式、阿玉台式、加曾利E式いずれの細分もローマ数字に置き換えられた。

2期では、地域研究が盛行した結果資料が増加し、山内編年の具体化が図られるとともに型式細分が進められた。しかし、細分は数字によって示されたが具体的な検討が欠けており、あまりに細分し数字を与えることが先行したといえよう。

3期（1965年～）

1960年代以降開発に伴う発掘調査が激増し、1期、2期とは比較にならない多量の資料が集積された。各地域において遺跡を中心とした地域の編年作業が行われ、型式細分も進められた。中期研究については関東地方が一步先行していたが、1965年、藤森栄一氏により中部地方八ヶ岳西南麓を中心とする地域研究の大成果が「井戸尻」として発表された（藤森 1965）。この中では、土器編年を時間軸として中期文化全体が考察され、黎明期、確立期、極盛期、爛熟期、終焉期という総合的な変遷が描かれた。土器は、住居址一括出土土器を単位として、重複関係を基本にしながら型式的検討を加え、九兵衛屋根】式、【式、新道式、落沢式、藤内】式、【式、井戸尻】式、【式、Ⅲ式、曾利】式、【式、Ⅲ式、Ⅳ式、Ⅴ式と統く編年体系が設定された。この成果は、以後「井戸尻編年」として中部地方の基盤になっただけでなく、関東地方の中期研究にも多大な影響を与えていた。井戸尻編年との対比により、関東編年の空白や細分の必要性が示唆されたと言える。関東では住居址単位の把握や加曾利E式新しい部分の細分において成果を挙げながら、編年全体が体系的に検討されることがなかった。井戸尻は縦文中期研究において初めて地域研究が体系化されたものであった。

1966年、吉田格氏は下向山遺跡住居址出土の五領ヶ台式土器を発表した（吉田 1963）。従来、五領ヶ台式の資料は断片的であったが、下向山遺跡はまとまった資料である。

1969年、岡本勇氏は五領ヶ台貝塚の発掘成果より、落沢式に対比され五領ヶ台式と勝坂式をつなぐ土器として「五領ヶ台上層式」を提唱した（岡本 1969）。翌年、五領ヶ台貝塚の報告において、五領ヶ台上層式の資料が示された。また、五領ヶ台式細分の可能性についても触れているが、具体的ではない（岡本他 1970）。五領ヶ台上層式の類例は、清水台遺跡において発見され、戸田哲也氏等は「清水台式」と呼称している（戸田 1971）。

1972年、今村啓爾氏は宮の原貝塚出土土器を分析し、五領ヶ台式を【式、】式に細分した（今村他 1972）。下向山遺跡など従来認識されてきた五領ヶ台式を【式とし、宮の原貝塚出土の豊富な資料によって【式、】式とも具体的内容が示された。更に、円筒下層【式の影響を主体として五領ヶ台式の成立を考え、五領ヶ台式の編年的位置付けを明確にした。また、1974年のとけっぱら遺跡の報告では、宮の原貝塚報告で保留していた集合平行線文の土器を】式に加える事を明示した（今村他 1974）。

1974年、佐藤達夫氏は「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」の中で、西村正衛氏によ

る阿玉台式の細分（西村 1969, 1972）を時間軸として援用し、五領ヶ台式直後（雷7類）、阿玉台1a式、1b古式、1b新式並行期を設定し、各期における西関東の土器を分析し、五領ヶ台式以後勝坂に至る変遷を明らかにした（佐藤 1974）。五領ヶ台式直後は竹ノ下貝塚、平尾遺跡第9地点、阿玉台1b古式並行期は、五領ヶ台上層式、清水台式、1b新式並行期は鳴神山貝塚、平台遺跡、勝坂遺跡1号住居址等が比定され、1b古式は落沢式、1b新式は新道式と併行関係に位置付けられた。1a式並行期については資料が多く不明な部分が多いとしている。今村、佐藤氏によると、井戸尻縄年や阿玉台式西村縄年に對比される五領ヶ台式から勝坂式に至る段階的縄年が整備されてきたといえる。

1978年、山口明氏は五領ヶ台式をA～H型態に分類し、4段階を設定した（山口 1978）。おおよそ、1、2段階は今村氏の五領ヶ台I式、3段階は五領ヶ台II式に対応し、4段階は佐藤氏の五領ヶ台式直後と類似する。その後、静岡県で開かれた該期シンポジウムの報告では、第1～3段階の大略な内容変更が行われた（山口 1980）。1981年に刊行された「縄文土器大成中期」では五領ヶ台I式、II式として資料が整理されている（能登他 1981）。五領ヶ台式直後、山口氏の第4段階について、土肥孝氏は主頭形波状口縁を持つ土器の変化を中心にして細分を行った（土肥 1981）。また、佐藤達夫氏により竹の下貝塚との類似が指摘されていたが、海老沢稔氏は竹ノ下式を中心に取り上げ、五領ヶ台式（併行）、竹ノ下式I段階、II段階とする細分を提示している（海老沢 1982）。

以上のように五領ヶ台式から落沢式段階に至る過程は近年特に研究が進み、詳細な段階設定による変遷が検討されて来ている。しかし、各段階の内容は研究者間にかなりの相違がみられ、今後、資料の充実とともに検討していく必要があろう。このような点で、最近報告された神谷原遺跡は住居址一括出土土器として極めて良好な資料といえよう（中西 1982）。

一方、勝坂式についても関東地方西部を中心に資料が増加し分析が進められた。1969年、安孫子昭二氏は、多摩ニュータウンNo.46遺跡の報告において出土土器を文様展開図によって示し、文様全体の規則的配置関係から分析した（安孫子 1969）。文様の複雑さだけが強調されていた勝坂式土器が、全体的な文様構造として把握され、勝坂式の理解において画期的なものとなった。続いて、1974年貫井南遺跡の報告では、勝坂I式（新道式）、勝坂II式（藤内式）、勝坂III式（井戸尻式）と井戸尻縄年と対比し、住居址出土土器を単位として各段階に位置付けた（安孫子 1974）。安孫子氏により初めて内容の伴う勝坂式の細分が行われた。

1975年、勝坂式、阿玉台式の併行関係を示す良好な資料として西上遺跡が報告された（和田 1975）。報告の中で、和田哲氏は西上遺跡を中心に貫井南遺跡、下加遺跡、清水台遺跡等の併行関係を検討し、阿玉台式西村縄年と井戸尻縄年を対比させる中で、西上遺跡を位置付けた。阿玉台1b式・新道式・落沢式、阿玉台II式・藤内I式、阿玉台III式・藤内II式・井戸尻I式、阿玉台IV式・井戸尻II式・III式が併行関係に置かれた。佐藤達夫氏が行った阿玉台1b式古、新の細分と落沢式、新道式の関係が生かされていないが、井戸尻縄年及び阿玉台式西村縄年に対応した細分の方向が示された。

1977年、谷井恵は「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察」において、中部、関東地方を通観して勝坂式の検討を行った（谷井 1977）。井戸尻縄年を時間軸とし、落沢古、新、新道古、新、藤内I、II、井戸尻I、II、IIIに細分した段階設定を行ない、各段階に相当する中部、関東地

方の住居址出土土器を中心に位置付け、阿玉台式との対比を行っている。井戸尻編年や阿玉台式西村編年に対応するものとして、関東地方における勝坂式が細分され、内容の検討が進められてきたが、谷井によって落沢式、新道式は更に古、新段階に細分され、勝坂式は詳細な分析と変遷が検討されるようになった。

1981年、鈴木保彦氏は「縄文土器大成中期」の中で、勝坂式土器を井戸尻編年と対比し、勝坂1式（落沢・新道）、2式（藤内I、II）、3式（井戸尻I、II、III）と大枠で把え、1～3式を各々a、bに2細分している。また、南関東西部を中心とする遺跡の位置付けではa、bを更に2分する意図も示されている（鈴木 1981）。

1982年に報告された神谷原遺跡は五個ケ台式から勝坂式中葉まで連続した集落であり、極めてまとまった資料である。この中で中西充氏は、出土土器をI段階a・b・c（五個ケ台式）、II段階a・b（落沢式）、III段階a・b（新道式）、IV段階a・b（藤内式）に細分して位置付けた。

以上のように井戸尻編年の落沢式、新道式、藤内式、井戸尻式を枠組として、更に2～3細分した段階が確実なものとして整理されてきている。しかし、各遺跡住居址の扱いや、個々の土器の位置付けに相違がみられ、阿玉台式の細分整理とともに今後の課題と言えよう。一方、時間軸の設定と併行して、勝坂式については文様構造の分析と理解が進められ、その結果、「勝坂式とは何か」という本質的な問題も呈示されている。佐藤氏は「ペネル文様」の成立をもって勝坂式とし、藤内式段階に置いている。安孫子、中西氏は学史的な方面から新道式段階に置いている。谷井は勝坂式文様の基本を「反対称」構造にあるとして、それが成立する落沢式段階から勝坂式と把握した（谷井1979）。鈴木氏も落沢式段階を勝坂1式に含めている。勝坂式の分析に呈示されている文様構造の理解は、土器研究を社会的レベルにまでの止揚をめざした新しい研究方向が含まれている。

さて、加曾利E式については「日本の考古学」以後加曾利E I、II、III、IV式細分の岡本編年が一般化する。1966年、蟹ヶ沢遺跡の報告では住居址出土の加曾利E II式がまとまって呈示され、加曾利E II式、III式の細分を裏付けた（寺村 1966）。

1969年、山内清男氏はミージアム誌上に縄文土器の編年表を発表した（山内 1969）。この中で、加曾利E式は1～4に細分されている。細分の意図は、既述したごとくおそらく能登、戸田氏らが主張するように日本先史土器図譜の古い部分、新しい部分の各々2細分と思われる。しかし、岡本氏らによって進められてきた新しい部分の細分及び大木10式と併行する加曾利E IV式の存在についての考えは示されていない。加曾利E IV式の存在を認めた上で新しい部分を細分したとすれば、加曾利E式は1、2、3、4、5と細分されるべきではなかったろうか。いずれにしても、内容が示されなかつたために具体的な提示に成り得なかった。

1970年、船田遺跡（城近 1970）、仲町遺跡（甲元他 1971）、八幡平遺跡（戸田 1970）において、住居址や敷石遺構から出土した加曾利E IV式土器が報告された。報文の中で、城近氏は加曾利E式と称名寺式の中間に存在する事を認めたが、一型式としての設定には疑問を呈示した。甲元氏は、型式内容が不明瞭であり大木10式、曾利V式、称名寺式を含めた検討が必要としている。戸田氏は、加曾利E III式以降曾利V式の影響を受け、それと同時期かやや遅れて6群土器（加曾利E IV式）が作られるとして、6群土器は称名寺式の母体となる中期末の土器として位置付けた。戸田氏のいう加

曾利EⅢ式は、坂詰編年に従っており、岡本編年の加曾利EⅣ式に相当し、Ⅲ式との関係は検討されていない。このように加曾利EⅣ式の型式設定には疑問が提出されながらも、加曾利E式と称名寺式の間、中期末に位置する土器の存在が確認されてきたといえよう。

1970年代に入ると大規模な集落の発掘調査報告が相次いで刊行された。膳棚遺跡はその嚆矢となった(岩井 1970)。報告の中で、加曾利E式はⅠ式を3細分、Ⅱ式を2細分し、Ⅲ式、Ⅳ式を含めてⅤ類～Ⅹ類に分類された。加曾利EⅠ式、Ⅱ式の細分は住居址の重複関係を基本としているが、実際には型式学的分析による部分が多い。統いて高根木戸遺跡(岡崎 1971)、海老ヶ作貝塚(岡崎 1972)、中山谷遺跡(横山 1972)、鶴川遺跡J地点(河野 1972)が報告された。これらの遺跡では、加曾利EⅠ～Ⅲ式が住居址を単位として位置付けられ、加曾利EⅣ～Ⅹ式の内容はおおよそ岡本編年を基本にしている。中山谷遺跡では、膳棚遺跡の加曾利EⅠ式の細分が追認された。

1972年、堀越正行氏は「加曾利EⅣ式土器研究史(1)～(3)」を発表し、岡本氏以来の加曾利EⅣ式土器論に対して、痛烈な反論を行なった(堀越 1972)。堀越氏は、加曾利E式の研究史を詳細に分析し、山内編年の把握における研究者の相違による混乱した状況を明確に示した。これは、戰後続けられてきた研究史把握の怠り及び体系性の欠けた加曾利E式研究への警鐘となつた。しかし、堀越氏の主張が加曾利EⅢ式、Ⅳ式の細分否定にあつたために、加曾利EⅣ式の存在が確認されていく状況にあっては逆行するものであった。

同年、宮地遺跡(城近 1972)では、加曾利EⅠ式、Ⅲ式の住居址、Ⅳ式の敷石遺構、馬込遺跡(小川他 1972)では加曾利EⅣ式の住居址、西原遺跡(小川他 1972)では加曾利EⅠ式、Ⅳ式の住居址が確認された。統いて、1973年、岩の上遺跡(栗原 1973)では加曾利EⅠ～Ⅲ式の住居址、坂東山遺跡(谷井 1973)では、加曾利EⅠ、Ⅱ式の住居址、Ⅳ式の敷石住居址、1974年、花影遺跡(谷井 1974)では、加曾利EⅠ～Ⅲ式の住居址、平山橋遺跡(高林 1974)では加曾利EⅠ、Ⅱ式の住居址、貫井南遺跡(佐藤 1974)では加曾利EⅠ、Ⅱ式の住居址が確認された。これらの遺跡において、加曾利EⅠ～Ⅳ式は住居址を単位としてその内容が把握され充実化が図られた。埼玉県では、膳棚遺跡以来の加曾利EⅠ式を3細分、Ⅱ式を2細分する編年が確立された。東京都の平山橋遺跡、貫井南遺跡では、加曾利EⅠ式後半からの曾利式の影響及び、連弧文土器の存在が注目され、キャリバー系土器を含めて、系統的分析が行われている。

1975年、能登健氏は「縄文文化解明における地域研究のあり方」において、加曾利E式研究史の分析から、混乱の原因となった加曾利EⅠ～Ⅳ式を破棄し、三原田遺跡の仮編年であったⅠa、Ⅰb、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに対して、山内氏が1969年に提唱した算用数字の1～4細分に置き換えることを提唱した(能登 1974)。確かに能登氏によって初めて山内編年体系が正しく把握されたと思われるが、米田明訓氏が後に指摘した如く(米田 1980)、山内氏の加曾利E 1～4細分は具体的な内容の示し無かったのであり、呼称問題を別にすれば能登氏も堀越氏同様加曾利EⅢ式、Ⅳ式細分否定論であったといえよう。能登氏同様山内編年を再評価する戸田哲也氏は、加曾利Ⅲ式、Ⅳ式の細分をほぼ認めた上で、加曾利EⅣ式古、新と把え直している(戸田 1977)。加曾利EⅡ式、Ⅳ式細分否定論は、新藤康夫氏、白石浩之氏によつても示された。新藤氏は加曾利E式を口縁部、頸部、胴部の文様帶構成からⅠa、Ⅰb、Ⅱ、Ⅲとし、Ⅳ式はⅢ式に合めた(新藤 1976)。白石氏も文様帶構成を基本として、頸部無

文帯の有無からⅠ式を前半、後半に細分し、Ⅱ式、Ⅲ式とⅣ式はⅤ式に含めている(白石 1978)。

一方、笠森健一氏は、志久遺跡の報告において、加曾利EⅠ式の口縁部文様帯を持つ土器が、系統的にⅤ式にまで残存することを住居址の併出関係から明らかにした(笠森 1976)。このような住居址の併出関係は、裏慈恩寺東遺跡(並木 1978)、ゴシン遺跡(並木 1978)においても確認された。1977年、笠森氏は島の上遺跡、出口遺跡の加曾利EⅠ式～称名寺式土器を分類し、加曾利EⅡ式、Ⅲ式、Ⅳ式を各々2細分し、加曾利EⅤ式から称名寺式に至る段階的変遷を、住居址を単位として示した(笠森 1977)。同年、折原繁氏が提唱した僧御堂Ⅰ式、Ⅱ式は、笠森案を基本にしながら加曾利EⅢ式、Ⅳ式の細分を文様の類型化により示したものである(折原 1977)。また、1977年頃より、称名寺式の分析が盛んに進められた(谷井 1977、青木 1977、今村 1977)。この中で、加曾利EⅣ式との関係も検討された結果、加曾利EⅣ式の存在及び、称名寺式への系統的連続性が確認された。

ここに至り、混乱の主たる原因であった加曾利EⅢ式、Ⅳ式細分論は結論を得たといえよう。能登氏や戸田氏が主張する山内編年の評価は、單なる呼称問題としてではなく、体系としての評価であり、加曾利E式の編年体系を確立する中で検討していく必要があろう。

1978年、神奈川考古同人会は、当麻遺跡(白石・山本 1977)、尾崎遺跡(岡本 1977)の成果を中心に、神奈川県における中期後半加曾利E式、曾利式の編年を神奈川第Ⅰ期～Ⅴ期として資料を集成した。加曾利E式は、神奈川Ⅱ期が更にa～cに細分されている。従来の編年は、資料の具体性に欠けていたり、報告書の細分では体系性に欠けていた。多量な土器群に対して、最初に地域における編年体系を行ったものとして評価される。就いて、1980年神奈川において、神奈川、東京・埼玉、長野における各地域編年を基本に検討し合うシンポジウムが行われた(神奈川考古同人会 1980)。住居址単位を中心に資料が集成され、具体的議論が行われた。安孫子昭二氏らにより示された東京・埼玉編年は、加曾利E式をⅠ～Ⅴ段階に細分し、段階的変遷として把握している(安孫子、秋山、中西 1980)。この東京編年は、おおよそ加曾利EⅠ式を3分、Ⅱ式を2分、Ⅲ式、Ⅳ式としたものであるが、従来の型式枠を越え、土器群の実態に合わせた編年であり、新たな試みといえる。段階としての時間軸を設定し、土器群の実態を把握していく方法は、前述した勝坂式においては、佐藤達夫氏、谷井彪等によって行われ、詳細な段階設定による土器群の変遷が検討されて来ている。

1981年、栃木県で日本考古学協会秋の大会が開かれ、シンポジウム「北関東を中心とする畿文中期の諸問題」が行われた。この中で、中期の土器は栃木県を中心としてⅠ～Ⅹ期の段階に設定され関東各都県と福島県の各段階の資料を呈示し、検討を行った。Ⅰ～Ⅹ期は大きな枠組であるが、各期の細分や土器の位置付けを比較すると、地域による細分を含めた把握の相違や研究方向を窺うことができる。取りあえず、各地域の土器群の様相と、現在の研究状況をまとめたものといえよう。

以上、中期土器の研究史を概観してきた。1期では、山内清男氏により、五頭ヶ台、阿玉台・勝坂、加曾利Eという基礎的編年が確立し、2期では、各型式の内付けと、個々の細分が進行したが、3期では、各型式間が充填され、中期全体として連続する変遷が段階的に把握されてきている。豊富な住居址を単位として段階設定が可能な中期の土器研究では、型式学的分析を進めながら、詳細な時間軸を設定し、段階的変遷を整備する事が、最初に必要と思われる。 (宮崎 輝雄)

第4章 土器の変化について

型式に関する諸論はいずれも私達が土器をいかに理解にするかという私達側の分類的思惟の產物であって、当時の社会の土器製作にまつわる思考様式が直接考察の対象となるものではないということを常に考えておく必要がある。したがって、型式論の終局の目的は、縄文社会の思考様式の具体的イメージをいかに描きえるかであり、これが型式論の前提ともなろう。

しかし、考古遺物は、残された遺構、遺物とその関係のみが一次的対象物となることから、そこに附帯している分析のための情報は著しく限定される。遺物のおかれた状況、固有の特性、資料相互の関係が挙げられるにすぎない。特に、情報として遺物にまつわるもののが大きな比重を占めることから、遺物自体を対象とした分類的操作、系統的分析ともに有効な手段であることは間違いない。この分類と総合をいかに実体にあったものにするかが縄文社会の思考様式を解明する鍵となるであろう。

そこで、いくつかの分類法についてみていく。一地域のある時点での土器の組合せはいくつかの特色をもった、いわゆる構造体の集まりである。型式は一定の広がりをもつ地域で、時間的単位として把握しうる特定の土器に対する呼称であった。したがって、当初みられた型式概念は土器が示す現象に対する分類概念の基礎となつたものであり、様式概念は、土器群の組合せに形態の要素を取り込んで時間の単位としたものである。

その後になると、次第にこのような分類概念である型式が即物的であって、人間不在であるとする観点から間い直す空気が強くなる。考古学手帖誌上などで盛んな論議を呼んだ（高橋 1958、芹沢 1958）。しかし、いずれの論も単純化、概念化されたきらいがあり、資料解釈にあたっての操作概念を生むまでに至らなかった。その意味で、同誌上の終り頃に掲載された鈴木公雄氏のセット論（鈴木 1964）は晩期の土器のみを対象としたものではあったが、様式にみられた型態概念と文様要素と型態、文様要素相互の関係を取り上げた画期的なものであった。

このようななかで、小林述雄氏の範型論（小林 1967）の登場は縄文社会土器製作の関わりを理念的観点から脱却したものであり、現象的分析から縄文社会そのものへ一歩踏み込んだことは、全く新しい観点を生むことになったといえよう。氏は従来の型式だけであった概念を、「範型」「型式」「様式」「形式」などの新しい用語を分析概念としての採用することで、初めて説明が可能であるとした。

近年の動向は小林氏の提倡した分析概念に対するアンチテーゼという意味もあって、山内氏の文様帶系統論的分析手法の発展（今村 1977、鈴木他 1980）と、佐藤氏の提出した小型式概念（桐生 1981）を生むこととなり、従来の型式概念は大きく変ろうとしている。特に、小型式概念は、文様帶系統論的観点と組合って多くの新型式を生み、小林氏の新しく提倡した型式に近いものから、「型式群を一部の特徴でまとめたもの」まで研究者によって包括する内容に著しい違いがある。このような、様々な型式が生れたのは、従来いわれた型式の年代差、地域性をもつという定義だけでは不充分であることを具体的に示している。今後も様々な分類概念としての「型式」が生れ、錯

綜すると思われるが、よりよい分類概念を生むための通過点といえよう。

本論で型式論を扱うにはこのような錯綜した型式論の現状では、問題が大きすぎる。ここでは立ち入らずに從来の地域と年代の単位という最も簡素な観点から進めてゆくことにする。時期の設定は、任意に区切り、第何期という無機的呼称法をとった。また、從来一般化している型式名称も併用しているが、研究史的、慣用的呼称の立場で使うこととする。

そこで、現在進められている土器型式の細分の現状をみてこう。土器の縄年の細分は、縄文土器だけでなく多くの分野で進行中である。特に土師器の細分は20～25年を単位で変化が読み取れるようになり、さらに、細かな細分を試みたものもある(中村他 1980、利根川 1982)。縄文土器についても各時期にわたって細かな細分案が示されており、山内氏が示した縄年表に使われた型式数と比較にならない数となっている。はたして、個人差、地域性を越えて土器の変化をどの程度読みとることができるようになるのであろう。

これら土器の変化を起す要因の一端を考えてみよう。土器の変化を起す要因として考えられるものに、土器自体のもつ構成、あるいは構造がある。しかし、これは、土器の系統性に関する部分が多く、手法やその他、細部の要素の変化から時間差を見出している現在の細分論からすれば、別の観点から考察しなければならない大きな問題である。これを除くと社会と土器との関わりということになろう。大きく分けると外的要因と内的要因とが挙げられる。外的要因とは社会の相互関係から生じるものであり、土器の特徴の大きな変化に関わる。代表的なものは系統あるいは様式の交代であり、文様帶の一部消失などもこれにかかわるかも知れない。時期ごとの土器群組合せの変化もこれによろう。

内的要因は土器製作にあたる思考様式の変質および世代間伝達過程にかかる。思考様式の変質は外的関係と共に進む基本的なものであり、高次の変化の反映である。通常の細部の変化は、他のすべての文化的要素と同様、世代間の伝習と新たな学習による。

ところで、当時の人間の寿命は著しく短命であることも知られており、30歳を前後するものである。土器作りの伝習はこの短かいサイクルのなかで、確実に行われたものであろう。内的な土器変化は短かいサイクルの繰り返えされる伝習によるところが多いであろうが、その変化は手法的レベルが中心となることが予想される。小林達雄氏の「手抜きの方向性」は、土器の社会的变化のなかでも起りうるが、内在的要因も多分にあるのではなかろうか。実際に起る土器の変化はこれに加え社会的要因や外的要因によってダイナミックなものとなろう。

本論では後述するように、中期の時期区分を小区分も含めて19期に細分した。これをC14による年代測定の結果(第4紀学会 1976)によって得られた、5000B.P.～4000B.P.の約1000年を単純に割り当てるに一期あたりほぼ50年弱の年代が得られる。ほぼ2世代に当る年代といえよう。本論の細分はまだ充分なものではなく、さらに細かな変化の予想される時期も多くあり、一期当りの年代は50年よりさらに狭まることになろう。

このような時間的区分はどの程度の時間であれば識別することができるであろうか。進展の著しい土師器の縄年の実態を例にとると、時間的区分は20年から25年を単位とするのが一般的となっている。このように一単位の幅が短くなると、土器の製作から廃棄までの時間が問題となる可能

性がある。一般に各単位で提出された土器群は一遺構出土土器を単位として分析されるが、これら全てを一部の例外的場合を除いて、土器製作時の組合せとして、扱いえないことから、一段階の組合せとして抽出された土器は、変化の流れや各遺構相互の関係から割り出したモデルとしての性格が強いものである。現在では一軒の遺構出土の土器にかかる製作時から廃棄時までの時間幅より短い年代と考えられる例もかなりみられる。このようななかで、モデル化は一層進められることとなろうが、どの程度求めうるか、時期区分の限界に近づく試みが続くこととなろう。

縄文中期の場合、弥生時代以後とは社会的背景を全く異にすることから同一には論じられないが、C14年代から割り出した一時期50年の幅は確実に縮まることとなろう。今後どの程度まで短縮して考えることができるかは、住居址の継続年代ひいては集落構成の考察へも大きな影響を与えることから今後一層進展させなければならないだろう。

(谷井 慎)

第5章 繩文中期土器群の変遷

第1節 はじめに

縄文中期土器群の編年研究は、山内清男氏が『日本先史土器図譜』（山内 1940）のなかで示した編年序列を中心に進められ、現在多くの論考が発表され、議論の沸騰した状態が続いている。たしかに、山内氏はきわめて正確な編年を組立てており、氏であれば、現在私達のみができる豊富な土器群に対しても正確な編年序列を組立てたであろうことは疑いえない。残念ながら、多くが型式呼称の提示で終り、具体的な内容の提示されることが少なかったため、その実態はペールに包まれたままである。

現在、山内の付した型式名称で多く議論されているものに、加曾利E式細分の際の数字の問題がある。これについて多くの論考がみられるが（能登 1975、鈴木他 1981）、いずれも東北の大木式との並行関係および『日本先史土器図譜』の行間を読むような分析に基づく分析と考えられるが、その後の資料の増加によって、『日本先史土器図譜』の段階、さらに『ミュージアム』誌上（山内 1969）に載った編年表においても必ずしも十分な編年でなくなっていることは、具体的に示されている中期の様々な細分案の現状を考えられれば明らかであろう。

現在の編年研究の動向にはおおよそ2つの流れが読みとれよう。一つは、従来一定の評価を得ている細分型式を軸に、より細かな変遷をたどるもので、中部の研究者が試みた曾利式の再検討や神奈川の研究者が試みた加曾利E式土器の再編がある。他の一つは、従来の型式呼称から離れ、任意の時期区分に沿ついて行うものであり、東京都の研究者が進めている加曾利E式の再編や日本考古学協会の縄文中期シンポジウムで取り上げられた中期土器の編年がある。ただ、任意といっても、従来の型式名称の細分が進んでいるために、その枠をはずすということであって、個々の内容が大きく変化するわけではない。

これらの動きはいずれも、設定根拠となる資料が提示されているものであり、研究者相互間に共通の基盤が持てるようになった点で、意義ある試みとして高く評価できる。

本論では、中期全般を扱うということもあって、従来の型式呼称とは切離した任意の設定を行った。時期の区分は通常の型式区分と合致する場合もあるし、かけ離れた場合もある。本論の各時期は我々が現段階で明瞭に区分しえると考えたものや細分した時期がそれぞれ強い共通性のため切り離しがたいと考えた場合、また、前後関係が推定されるが、該当する他地域の土器が充分摘出しえず、具体的な全体像が十分でないものなど、様々な場合を含んでいる。

いずれにしても、今回の編年案で土器群の構成や構造が十分に解明されたものとはいえない。多くの御批判、御教示をえて、土器群の系統的な分析や構成・構造の再検討を行い、時期区分の再編を一層進める必要がある。

（谷井 龍）

第2節 I期、II期、III期

(1) 時間軸としての時期設定

I期は、関東地方で五領ヶ台I式とされる土器群によって構成される段階である。

今村啓爾氏は、宮の原貝塚（今村 1972）出土の土器群を、その層位的出土状況と系統性に基づいて、前期終末の十三菩提式と五領ヶ台式の中間に位置付けた。そして研究史を踏え、五領ヶ台I式とII式として細分した。I式の内容は、平行集合沈縫文土器、細縫文土器、隆起帶上に縦文が施文されたもの一部であり（註1）、I期はほぼこれらの土器群が該当する。

また五領ヶ台I式については、集合沈縫文土器と細縫文土器を別の土器型式として取り扱うとする考えがある（山口 1980、池谷 1981）。これは、両群を前期終末からの系統と地域性に基づいて分析検討し、全く系統の異なる土器群であるとした、山口明氏の研究成果によるものである。確かに、土器型式が、その系統性をひとつの柱として成立する以上、両氏の提唱は妥当なものと言えるだろう。

これには、良好な資料を提示した遺跡例の発見がなかったことなど、宮の原貝塚における当時の学史的状況というものが考えられる。中部では、羅場式（藤森 1934）や梨久保式（戸沢 1951）をはじめとして、該期にあたる複数の土器型式が設定された。しかし、これらの諸型式は、土器に内在する地域性や系統性の比較検討が不充分であったために、中期土器編年体系のなかでは、容易に編成されるものではなかった。

このような状況もあって、本論では論旨の進行のなかで既存の土器型式名称が使用されることはあるが、それを各段階に充当させることは行わず、I期、II期、III期と各々呼称することとした。

I期は、五領ヶ台I式とされる段階である。宮の原貝塚第7群b類のほか、北八王子西野遺跡（横山 1974）出土の土器群から構成される。これは飼田第IV遺跡（中西 1979）の4軒の住居址から該期の土器群がまとまって出土し、段階設定が確定した。中部では、火石遺跡（伴ほか 1976）等の良好な遺跡例が発見され、その内容を充実したものとしている。

II期は、阿玉台直前型式（西村 1972）や五領ヶ台式直後（佐藤 1974）と各々が呼称した段階に相当する。両氏は、五領ヶ台式から阿玉台式あるいは勝板式への暫移的な変遷をたどるうえで、該期の段階設定を試みている。しかし、これは前者が白井雷貝塚（西村 1954）出土第八類土器を中心に、後者は第七類に対比される西関東の土器と、両氏が取扱った土器群には微妙なくらい違いをみせている。このため両者は一概に対比されるものではなく、研究史的にもその位置付けは苦慮する。近年では、飼田第IV遺跡、神谷原遺跡（中西 1982）が相次いで報告された。特に神谷原遺跡S-B 113一括出土資料は、該期土器群の実態を解明する糸口となるものと思われ、また、III期の段階設定を確定的にした。中部では、船塚社遺跡（島田 1980）がII期の単純な様相を呈し、該期の好例に上げられる。

山口氏は、五領ヶ台式を第1段階から第4段階に4細分した（山口 1978、1980）。これを本論のI期～II期に充当させると、ほぼ、氏の第2、第3段階がII期に該当するだろう。これは第2段階を構成する土器群が資料的に内容の乏しいものと考え、第2段階の一部をI期に再編成した。

註1 今村氏は「宮の原貝塚」の報文で平行集合縦文土器の型式的位置付けを保留したが、後に「とけっぱら遺跡」で五領ヶ台式に属するものとしている。

(2) 土器群の分類(図1)

1群土器

器面のはば全面にわたって半載竹管工具による平行集合沈線文が描出される。「く」の字状に屈曲して外反する口縁上端には爪形文や撫糸の押圧文が連続して施文される。基本的には平線で、1単位の突手や突起を配したものもあるが、波状口縁は頗例が少ない。

A類(1) 文様構成は、口縁部、頸部、胴部の文様帶が明確に区分され、数条の沈線がそれを区画する。横帯区画内は、斜状、羽状、格子目状等の平行集合沈線文で埋められる。

B類(2・3) 繩文が施文されるもの。地文として、あるいは胴部に結節繩文が行われる。

C類(4) 形刻文的手法を文様要素に取り入れたもの。三角形や玉抱き三叉文をモチーフとして描出したり、鋸歯状文帯を構成する。

2群土器

ハケ目状の細線文やヘラ状工具による刻目文を地文的文様手法とする。口縁部の上下端や頸部を連結する橋状把手を配することがよく行われ、口縁は4単位を基本として大波状線や叉状山形の突起を付し、平縁形態をとるものは少ない。突起上端やその裏面には渦巻状の貼付文や彫刻文が施文される。

A類(5) 口縁部文様帶に三角形や渦巻のモチーフを単沈線で描出し、空間を刻目文や彫刻文で充填するもの。

B類(6) 細線文を地文的文様手法とするもの。口縁部は凹線帯や鋸歯状文帯を挟んで2段の文様帶を構成することがよく行われる。それ以外にも、胴部に区画を意図した文様施文や複数段の横位文様帶を構成するようである。文様要素には彫刻文のはかに三角形の重帯文や弧線文のモチーフを大きく展開させている。

C類(7) 文様手法やその構成にB類と異なることはない。ただ、口縁部下端に施文された「Y」字をモチーフして連続的に描出した意匠文は特徴的である。

D類(8) 細線文の使用が特徴的に行われないものを一括した。個々の土器に施された文様は多様であるが、いずれも独特的の橋状把手を配することから2群を逸脱するものでないと考える。

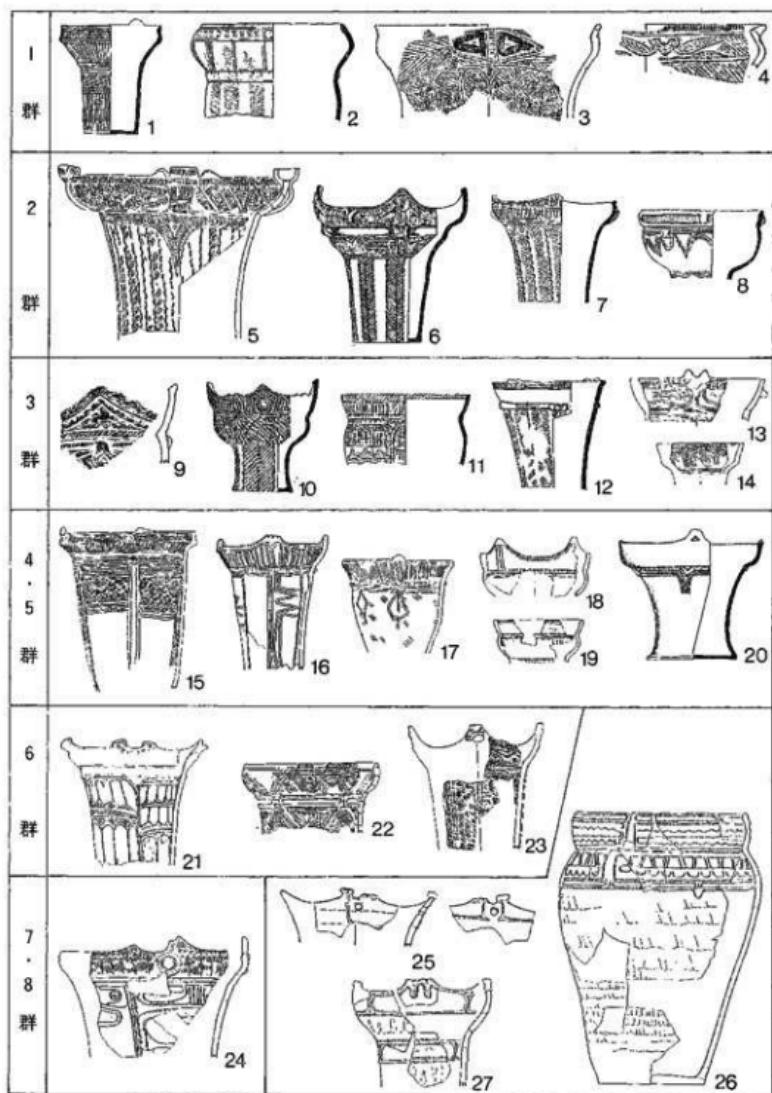
3群土器

口縁に沿って繩文帯が施されるもの。

A類(9) 地文に繩文が施されることを除けば、沈線に刻まれる三角形彫刻文などその文様構成や手法が2群によく類似する。

B類(10・11) 繩文帯下に集合沈線文、鋸歯状文、連線刺突文等を充填した文様帶を構成する。そして単位化(4単位)した円形や「V」字状の貼付文、渦巻状の隆線文等が配される。胴部は懸垂する隆帯と沈線文による多様な文様が展開する。

C類(12) 繩文帯下に無文帯を構成するもの。胴部にはB類と同様の文様施文が行われる。



1図 Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期土器分類表

D類 (18・14) 繩文帶は構成しないが地文繩文で、口縁部に沈線で区画状のモチーフを描する。口縁や隆帶上には刻目文や連続刺突文が施される。

4 群土器

集合沈線文を多用するもの。器形は、口縁部が「く」の字状に屈曲して、頸部で強く括るもの (A類) と、外反して 4 単位の大波状線のよく行われるもの (B類) とがある。

A類 (15) 口縁や隆起線上に刻目文が施文され、また、鋸歯状文も口縁や口縁部と胴部を区画する位置によく施される。胴部は 4 単位の懸垂する隆起線によって縦位区画され、さらに、その空間を横帯区画して埋めている。

B類 (16・17) 半波竹管工具による沈線文を用いてほとんど文様の描出が行われる。胴部の懸垂文も隆線はあまり使用されない。また突起下や懸垂文の上端には「V」字状の貼付文がよく施される。

5 群土器

沈線文、刺突文、刻目文等を多重的な帯状に用いて、それを横走させ、あるいは懸垂して特異な文様構成する一群。地文繩文のものはあまりない。

A類 (18・19) 多様な器形に合せて横位の帯状文様を数段にわたって施文する。口縁や波頂部から口縁部を区画するように懸垂する手法が特徴的である。

B類 (20) 口縁に平行した帯状文様は一段で、そこから「Y」字を意匠したように懸垂する。したがって、連結部は突起状となる場合がある。

6 群土器

地文に繩文が施され、太い沈線文を主体的にして大きく展開したモチーフの描出が行われるもの。

A類 (21) 口縁部は繩文帶で構成され、横走する凹線帯が胴部を区画する。胴部は沈線や隆線による 4 単位の懸垂文で区画され、さらに小区画を構成するようなモチーフを沈線による描出で埋めているものもある。

B類 (22) 沈線や隆線による連弧状、波状、三角形状のモチーフが器面全体に大きく展開する。波状口縁の波頂下や文様描出によって区画された空間には玉抱き三爻文が意匠化して施文される。

C類 (23) B類の沈線が角押文に変換されたもの。その手法や構成上に相違はないが、地文に繩文が施されないものがある。

7 群土器 (24)

口縁部に「くさび」状の文様が連続して施文されるもの。沈線から角押文に表出技法が変化するものや、区画化された胴部に同様の手法を充填されるものがある。

8 群土器

地文が無文で、隆線と角押文を文様要素とするもの。

A類 (25) 突起下や波頂部より「Y」字を意匠化したものなど特異な隆線が懸垂する。角押文はその隆線や口縁に沿って施文される。胴部には隆線がクランク状に懸垂する。

B類（26） 亂帶によって口縁や器形の屈曲部などに極端な細長い橢円区画を構成する。角押文は単独で用いられて波状や弧状のモチーフを描出する。

C類（27） 口縁部や胴部には隆線で橢円区画が構成される。大形化した把手が施されたりする。

（3）土器群の構成

Ⅰ期

Ⅰ期は明確に型式分離される1群、2群土器によって構成されることが特色である。この共存関係は、宮の原貝塚の層位的出土状況や、池辺第4遺跡（今井他 1974）、東方第7遺跡（坂上他 1974）における両群のあり方から想定される。しかし、八王子市明神社北遺跡（門他 1976）の住居址から一括出土した土器群は、2群を主体的に構成される。つまり両群の共存関係は、このような性格も内包されており、それが両群の型式的分離を強固なものにしていったと考えられる。

山口明氏はこの両群の関係を、前期終末期土器群からの系統性と地域性に基づいて解釈した。そして、両群が別の系譜上に位置する土器群であるとする考えを述べている（註2）。系統性の問題に関しては、細分化の作業のなかから同一系譜上に置かれた土器群の変化を読み取ることが肝要と思われる。2群は、すでに山口氏が明かにしたように、刻目文を充填的に施文する手法から細線文を地文的に施文する手法への転換が図られる。この2群A類からB類への変化過程の想定は、さらに、図版5—9、10にみられるような沈線に沿って三角形彫刻文を刻んでいくことをしない、彫刻文手法が不充分な土器群の抽出によって、霧ヶ丘遺跡（今村他 1973）や中駒遺跡（今村他 1971）から出土した浮線文による文様描出の手法を持つ土器群にまで遡ることが可能である。また、これは2群の細分化を示唆するものであるが、前期終末に位置付けられる十三菩提式の型式内容に吟味検討を必要とするのが現状（註3）であろう。

1群はA類にみられるように、口縁部、頸部、胴部が明確に区画されて文様帯を構成し、型式的には完成度の高い形態で出現する。前期終末からの系統的変化は不明な部分が多い（註4）。1群B・C類は纏文の施文や彫刻文の手法が特徴的である。これは多くの場合、文様手法や構成のうえで、2群のものを採用しているが、図版5—7にみられる幅広の縦齒状文帯などは、前期終末から1群の系譜上にある文様手法である。2群についても、C・D類の橋状把手で区画された口縁部文様帯を連続刺突文で埋める手法は1群A類の口縁部によく用いられて本来1群の文様要素と言える。2群C類と1群の図版5—8の頸部に施文された「Y」字をモチーフとした意匠文は、両群が同様の手法を使用している。このような両群における型式的に錯綜した現象はどのように理解されるのであろうか。

中部の駒ヶ根市中沢高見原横山B地点遺跡（林 1979）1号住からは1群A類に対比される資料がまとまって出土した。中には北陸系の要素を持つものもあるが、2群に対比される資料は1片も出土していない。中部で2群に対比される土器群は梨久保遺跡例などがあり、2群B・C類に対比される。このほか龍煥遺跡（武藤 1983）例などあるが2群B類で、2群A類に対比される土器群は中部に類例をみない。つまり関東の様相に比較して2群の分布は時間的ずれを生じている。明神社北遺跡（図版1—12）は、2群がまとめて出土し、特にB類を主体としている。1群は

B・C類が破片で出土している。筆者は先にA類からB類という2群の変遷について述べた。横山B地点遺跡1号住の1群A類が単独で成立する状況、中部における2群分布の時間的流れ、また明神社北遺跡の伴出例、これらはⅠ期の時間的段階分けを促すものである。つまり、第1段階は1群A類と2群A類、第2段階は1群B・C類と2群B・C・D類から各々構成される。そしてこれは、両群の型式的に錯綜した状況に対するひとつの解答とも考えるのである。しかし、現状ではこの2段階を保証する住居址一括出土の良好な資料が希少である。またここではⅠ期土器群の細分を積極的に押し進めることを意図してはいない。Ⅰ期土器群の構成をその変遷のなかに語ろうとしたものであるから、Ⅰ期をさらにa期・b期として段階設定し扱うことは考えていない。

また細分化にあたっては東北地方の大木7a式との関係を考慮しなければならないと考える。宮城県の長根貝塚第8・9層出土の土器群(註5)は、刻目文を充填的に施文するA類と共通した施文手法を有して、器形や横状把手のあり方など、2群A類と同質的な型式内容を保持する。この大木7a式と2群A類は、近年、茨城県虚空藏貝塚(大島 1978)出土例など類例の増加はあるが、地域的空白を埋めるには未だ不充分で、資料の希少性が相互の土器群の比較分類を不確定なものにしている。両群の関係は、2群の出自にかかわって、A類からB類への変化過程を、以後の研究の深化によっては、否定する材料となる要素も含まれるものと考えるのである。

明神社北遺跡では1群と2群の他に、口縁部に繩文の施される土器(図版1-11, 12)が伴出した。これは口縁に繩文帯を構成する一群として3群A類に分類した。A類は波状口縁をはじめとする多様な器形と口縁や頸部に横状把手が配されることが特徴である。また施される文様は、図版5-17の幅の狭い口縁繩文帶にみられる玉抱き三叉文を意匠化した彫刻文、区画や三角形、連弧状のモチーフを描出す沈線に刻まれた三角形彫刻文等である。これは地文の相違を除けば、2群に著しく類似した型式内容である。また、3群にあっては、その彫刻的手法が、他のB・C・D類と明確に分離される。よって3群A類はⅠ期の土器群を構成する一群と考える。

Ⅱ期

Ⅰ期は主に1群と2群の全く異なる系譜上にある土器群によって構成されていた。両群はその変化過程の中で、相互に影響し合い型式的に錯綜した状況をつくり出した。これを契機として両群は、文様要素やその構成が再編され、型式的に大きく変換する。しかし両群の系統性は維持され、その中で対称的な展開をみせるようだ。

1. 集合沈縫文系土器(4群)

4群A類は、1群の系統を直接的に引くものである。しかし新しい文様要素等の採用は、全く別の型式を成立させている。「く」の字状に屈曲した口縁部はその幅を狭くし、突起や円形の貼付文等は4単位化する。そして図版2-32のような円筒形の器形も加わる。口縁部や胴部を区画する位置に多用される鋸歯状文は新しい文様要素である。胴部には4単位の帯状の懸垂文が配される。鋸歯状文は彫刻的施文手法をとる2群のもので、4単位の懸垂文も図版5-14や6-9にみられるように2群で行われている。Ⅰ期後半の錯綜した状況の中で2群の手法を単純に採用することなく、全く固有のものとして内在化したことにより4群A類の成立をみるのである。

4群B類は、口縁が外反し4単位の大波状口縁がよく行われる。文様は半截竹管工具による集合

沈線文が口縁部を埋め、あるいは胴部を懸垂する。波頂下や懸垂文の上端にはよく「V」字状の貼付文が配される。問題となるのはA類との関係である。簡略化という現象をもって、A類からB類への変遷を導き得ることには困難があるようと思われる。B類の波状口縁の形成は、A類からの簡略化という変化から生じるものではないだろう。Ⅰ期で4単位の波状口縁は2群でよく行われた。4群B類に分類された図版6—13は、波頂下に玉抱き三叉文が施文され、横状把手を備えている。これは2群の手法を色濃く残すB類で、おそらくB類はA類同様に1群をベースに2群の波状口縁手法を独自のものとして成立した一群であると考える。特徴的な「V」字状の貼付文は、その配される位置からして、横状把手に変るものと思われる。

A類とB類はその出自からして共存関係にあると思われるが、門田第Ⅳ遺跡SB13は、B類をまとめて出土するがA類は欠落する。SB15は僅かに破片で伴出するが不確定である。長野県の大石遺跡1号住はA類に対比される資料が多量にまとまって出土した。しかしB類に対比されるものは2図7など数個体で、胴部の横帯区画文などはA類化が目立つ。A類とB類は、Ⅰ期における1群と2群に同様で、細分される可能性がある。

2. 細線文系土器（3群B・C・D類）

口縁部に繩文の施文される土器群はⅠ期に出現する。3群A類がそれで、しかしA類はその器形や文様手法から、基本的には2群に包括されるものである。3群B類は彫刻文的文様手法を消失して2群から脱却する。しかしその保持する型式的内容は非常にあいまいである。図版2—22、4—1、6—14は、「く」の字に屈曲する口縁部を連続刺突文や鋸齒状文で埋めている。図版2—23、6—16は纏文帯下に集合沈線文が行われ、「V」字状貼付文が付される。これらは4群の文様手法とするものである。胴部に描出された文様も2群の手法を引きずって来ている。3群C類に至っては口縁部に無文帶を構成してより簡略化されたものとなる。この3群の変化は、4群が新しい手法のもとに大きく展開した型式を成立させたことに対して、あまりにも対称的である。しかし3群の中でもD類には新しい手法を垣間みることができる。口縁部には半截竹管工具による沈線で区画を意図した描出や、渦巻状、三角形のモチーフを大きく展開している。胴部は横走する隆線によって明確に区画され、4単位の懸垂文が施文される。

門田第Ⅳ遺跡のSB14、15では、C類が4群B類などと併出している。

3. 5群土器

5群A類は波状縁や口縁部に2段の屈曲を持つ器形がよく行われる。また沈線や刺突文、刻目文によって構成される帯状文様は特徴的な手法である。これは2群の系譜上にあり、纏文があまり施文されないことから、2群D類に分類した図版6—11、12に直接的に系統を求めるものと考える。また波頂部や口縁から沈線を懸垂させる手法は、4群B類と関与するものであろう。

門田第Ⅳ遺跡SB14では、A類と4群B類が併出する。

5群B類は、帯状文様の手法などをみても、A類からそうかけ離れた存在でない。ただ、口縁に沿って横走する帯状文様から垂れるように施文される懸垂文は、胴部の区画構成を意図しておらず、胴部上半で止まる。これは、図版5—14にみられるように2群で行われ、基本的には図版6—9などを経て、4群の懸垂文手法へと変化するのであるが、B類では素形的なものをそのまま継承して

いる。

4. Ⅲ期へ継続する土器（6群A類）

6群A類は、口縁部の繩文帯とその直下に配された凹帯が特徴的である。これは図版6—18等の3群C類から変化したものと考えられ、無文帯は凹帯化して幅を狭くする。胴部を区画する2段の横走沈線は、A類では隆線で行われている。胴部の懸垂文は、沈線や隆線を多重に施した帶状文で、その端には刻目された棒状や「Y」字状の貼付文がよく配される。この懸垂文手法は4群と同様のものである。このような状況を端的に示したのが東野市山之台遺跡（滝谷 1981）例3図1・2で、報文では一括出土としている。1は4群A類、2は6群A類に各々対比されるが、器形が同様の円筒形であるために容易に比較され、懸垂文の手法に限らず、その文様構成でもよく類似していることがわかる。下向山遺跡（吉田 1963）例（3図3・4）も4群A類が併出している。

3は山之台例1と同様であるが、A類に対比される4は、器形がキャリパー形である。上記したA類の器形が円筒形であるため異和感を与えるが、帶状懸垂文や沈線の抽出に半截竹管工具の凹面が使用されるなど、やはりA類に対比される土器である。また、口縁部文様は3群D類からの変化が想定される。図版2—25にみられる突起直下の「V」字状貼付文や区画をモチーフしたような沈線の抽出は、3図4ではより安定して確立したものとなる。

以上のようにみてくるとA類は、口縁部の文様構成や施文手法に3群C・D類の手法を繼承しながらも、4群と密接に関与した土器群であることがわかる。特に懸垂文をはじめとする胴部の文様構成にその特徴は顕著で、図版2—5・3—6の懸垂文で分割された空間を、複数段に横帯区画文を形成して埋める手法は、4群A類でよく行われている。

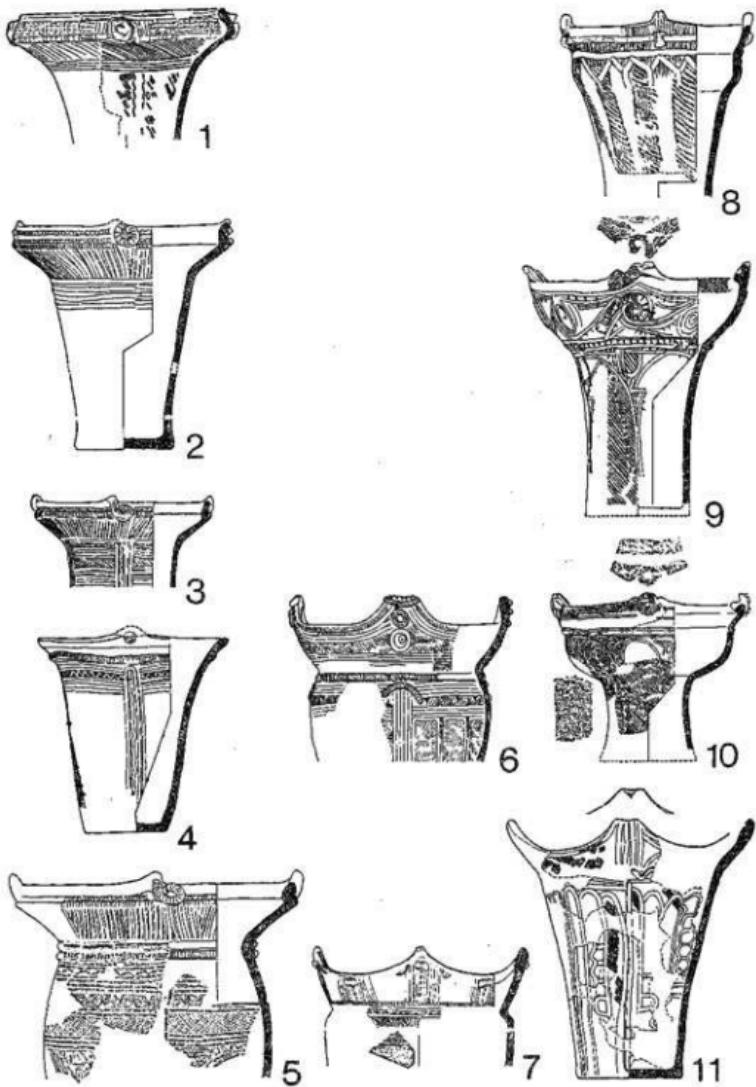
このA類の成立は、Ⅰ期を構成する土器群の動態を端的に表したものである。Ⅱ期において盛行する集合沈線文系土器（4群）とは対称的な様相を、細線文土器の系譜上にある3群はみせる。

それは遺跡の様相としても確実に把えられ、Ⅱ期段階の良好な遺跡例の大石遺跡では、4群はまとまって出土しながら、3群が出土の主体を占める住居址は発見されなかった。多くが土壇等からの単独出土である（2図）。2図8～11は細線文土器の系譜上ある土器である。8は2群C類、9は3群A類、10は3群C類、11は3群D類に各々対比され、およそ8→11への変化過程が想定される。しかし11は、波頂部から懸垂する沈線文や胴部の懸垂文手法など4群B類が大きく影響している。また、2図6は波頂下の玉抱き三叉文的文様や鋸歯状文など細線文系土器の文様手法と、胴部の区画文手法を共用して、3群と4群が相互に関与した様相を示している。つまり3群の系譜上に4群が介入する。このような状況を前提としてA類の成立があり、また、これを契機としてⅢ期の土器群は大きく変換するのである。

Ⅲ期

Ⅲ期の土器群は、Ⅰ期、Ⅱ期以来の系統性を逸脱して、型式的に大きく変貌する。この変換を生む要因については先に述べた。Ⅲ期は6群A類から直接的系統にある6群B類が盛行する。しかしⅢ期の段階設定を確定した神谷原遺跡SB113の件出関係は、6群C類・7群・8群等もその構成員とすることを示唆している。

6群A類から6群B類への変化は、A類がその系譜上から繼承してきた文様要素や手法を発達さ



2図 大石遺跡出土土器（2～7、1号住 1、8～11、土塙單独出土）

せた過程である。それを半截竹管工具の凸面を用いた太い沈線と隆線で描出している。口縁部によく表出される連弧状や渦巻状のモチーフは、2群の文様手法のなかにみられる。連弧状モチーフは図版1—3、6—8・11、渦巻状モチーフは図版5—14、6—7等である。それが3群に継承されて（図版5—16・19—23）、B類で発達するようである。波状線の波頂下や区画された空間を埋める玉抱き三叉文も同様である。また、口縁裏面に施される彫刻文も、2群で渦巻状のものを貼付けする手法が行われている。A類で構成された横走する凹帯は、「メ」字状の貼付文も配され、極端な長梢円区画文を形成する。

6群C類は文様表出が沈線から角押文に変化して行われる以外、文様構成上はB類に同様である。また、無地文でも行われるようで（図版3—20）、三福向原遺跡（小野 1971）に例がある。

7群は口縁部に施されたクサビ状の文様で分類した。クサビ状文は彫刻的手法によって描出されるが、図版3—14は角押文、図版4—9は沈線で行われる。図版4—10は脇部の横帯区画内に施されており、これは6群A類の図版3—6にさかのぼることができる。本来クサビ状文は2群C類の「Y」字状モチーフの連続した意匠文を継承する過程で変化したものと考えられる。

脇部の文様は、図版4—13では隆線の懸垂文と沈線で連弧状のモチーフを描出している。図版3—21は沈線で横帯区画を意図した描出が行われている。また中部の大石遺跡例をみると、図版4—18の隆線によるクランク状懸垂文も行われるようである。

7群は、「クサビ」状文の成立過程や図版4—9・3—23の脇部文様から6群が関与した、Ⅱ期からの系譜上にある土器群と考えられる。しかし、口縁部のクサビ状文手法に固執しながら、脇部では新しい文様要素であるクランク状懸垂文への組替えを行っている。これは、クサビ状文の索形からの継承過程を考慮した場合、この意匠文に対する執着は特異で、Ⅳ期以降に残る可能性が高いようである。

8群は繩文を地文として施文せず、角押文と隆線が器面を飾る唯一の文様手法である。この場合6群C類が同様の文様表出技法を持ち、相互の土器群の関係が考慮される。

8群A類の口縁形態は、波頂部に刺目した大波状線や非対称化した叉状突起で、口縁裏面には彫刻文が施される。これらの手法は6群B・C類でも行われるものである。また、図版4—15・17は波頂部に「Y」字状の貼付文が懸垂するが、これは6群A類から継承される手法である。A類には、図版3—16・4—16の口縁から渦巻状や屈曲した隆線を単純に懸垂したものもあり、図版4—18のクランク状懸垂文だけを配したものもあるだろう。中部の船塚社遺跡で多くの類例を出土している。

角押文手法は、沈線の描出技法が半截竹管工具の凹面から凸面に変化した時点での萌芽を見るようと思われる。これは1群や2群のなかすでに刺突状の結節手法を使用するものがあることにによる（図版6—5・10）。

地文に繩文を施さない無地文の土器は、6群C類の一部だけでなく、6群B類や7群のなかにもみられる。それは図版3—14・4—4の口縁部であったり、図版3—21の脇部に行われることもある。

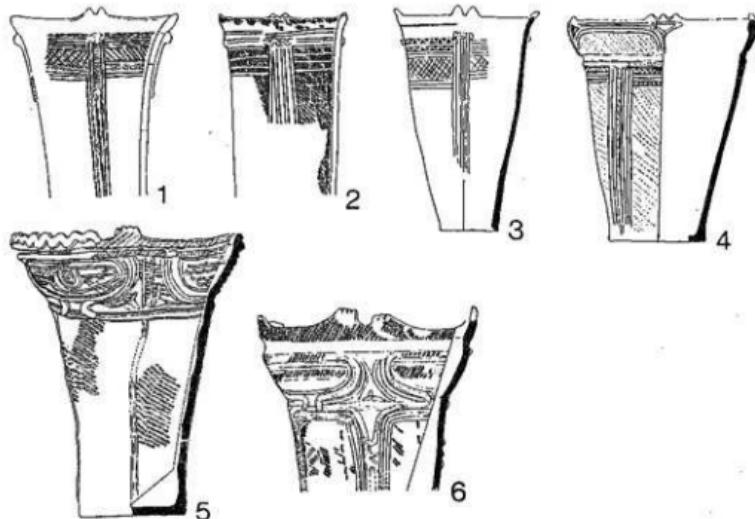
8群B類は、6群B類で形成された極端な長梢円区画文を自在に配して文様構成する。図版3—

23はそれを口縁と胴部上半に配して文様帯が構成され、図版3—21の胴部には類似した横帯区画文を整然と描出している。

8群C類は口縁や胴部に構成される楕円区画文が特徴的である。これはB類の長梢円区画文からの変化と即断できない。C類の楕円区画の成立は、6群B類の隆線による区画手法があるように思われる。6群B類の隆線は、口縁部を波状に区画構成するだけでなく、胴部では懸垂文の「Y」字状部が拡大して三角形状や弧状の区画が重層して構成される。さらに、凹帶部に長梢円形区画文を形成する「X」字状の貼付文は、口縁部と胴部の隆線を連結する。3図5・6は船塚社遺跡例で、上記の状態がみられる。これは隆線区画の多様な構成を可能にするが、連結するところは器形に順化して整理統合される。

以上のようにみると、Ⅲ期は6群の盛行を特色する段階でありながら、すでにⅣ期への胎動を窺わせている。8群A類については、クランク状懸垂文等の単純な隆線懸垂文手法の出自は不明瞭であるが、6群・7群の地文として繩文を施文しなくなる傾向や、角押文手法の成立等を考えると、8群A類が、6群・7群に対峙する存在として浮上ってくる。基本的にはこの土器群の関与が、Ⅳ期に継続する8群の成立を促し、それと表裏一体をなす6群の消失という状況を生成したようと思われる。

神谷原遺跡SB113の伴出例は、Ⅲ期土器群の構成を分析するなかで、時間的幅を有するのでは



3図 1、2 山之台遺跡 3、4 下向山遺跡 5、6 船塚社遺跡出土土器

ないかとする問題が生じてきた。しかし現状ではSB 113以外に良好な件出関係がなく、また、中部の船塚遺跡などは土器群の構成が異なる様相を示している。したがって今回はSB 113出土の土器群を1段階として取り扱うこととした。

註2 細線文土器は、十三善提式に系統をたどるもので、ソウメン状浮線文手法が沈線化した段階で成立したものと想定した。また、集合沈線文土器は、諸表C式の系統上にあるとしながら、その前期末葉段階の実態は不明確であるとしている(山口 1980)。

註3 今村氏は、結節状浮線文からソウメン状浮線文への変遷過程を、諸表C式以後、五領ヶ台I式直前まで4時期に分けて説明した(今村 1974)。また山口氏は、十三善提式に先行する土器として「室ノ木式土器」を提唱した(山口 1980)。

註4 註2参照。

註5 丹羽氏は、長根貝塚第8・9層出土土器と第6・7層出土土器を分離し、前者を第1段階、後者を第2段階として大木7a式を2細分した(丹羽 1981)。ここでは第1段階の深鉢Bとして分類された土器群を指す。

(4) 地域における様相

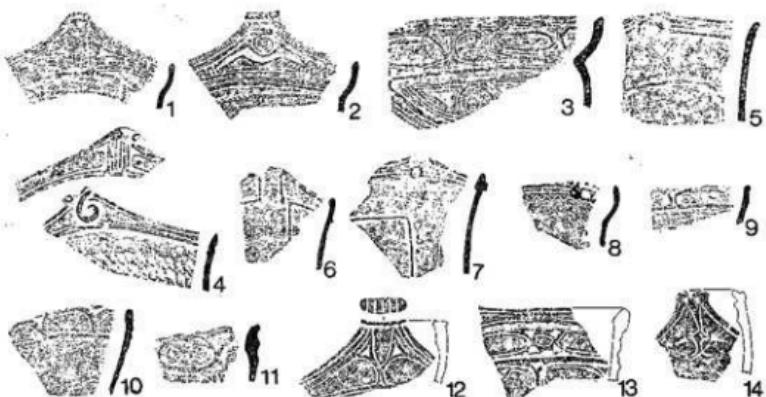
I期～Ⅲ期については、東京都と神奈川県の限定された地域を対象とした。これは関東の他の地域において該期の土器群が断片的な出土例しかみないためである。また中部の遺跡例を取り上げたのは、対象とした地域内においても該期土器群の一部欠落した様相が窺われ、それを補償する意味で、論旨の進行のうえで隨時援用した。

ここでは本論の片寄りを少しでも補うために、千葉県の白井雷貝塚出土土器について若干述べてみたい。白井雷五類・七類・八類は、本論でも課題を残したⅢ期段階におおむね対比される土器群である。またこの土器群の位置付けが該期の問題を解く鍵とも思われ、その吟味検討は必要に迫られたものである。

五類に含まれる4図1・2は、9群B類に対比されるだろう。波頂下の玉抱き三叉文(2)や、口縁部を分帶して懸垂する「Y」字状貼付文(1)など、文様手法は同様である。ただキャリパー状の器形の場合、口縁部文様帯の幅が、6群B類に比較して狭いようである。また、胴部を区画する位置に特徴的な凹帯が形成されないという相違があり、この横走して胴部を区画する隆線上に施された連続刺突文は、6群B類では行われない手法でC類に近い。これは、隆線に沿って施される角押文手法の初源的様相を思わせる。いざれにせよ五類の一部は単純に6群B類に比定されるものではなく、独自の地域性を有していたと考えられる。

七類は、報文によると五類と層位的に混在した出土状況にあったようだ。七類とされる4図3は、やはり6群B類に対比されるものと考える。胴部の弧状の隆線区画やその内側の空間を埋める玉抱き三叉文は、B類でもよく行われる。しかし口縁部に配された「X」字状貼付文は梢円区画を意図したもので、B類にこのような区画文手法はない。

八類は、五類・七類と明確にその出土層位を分けるようだ。4図6・7にみられるクラシック状懸垂文は、8群A類と同様のものと言えるだろう。しかし、6や7は隆線に沿って細かな角押文が施され、7の口縁には4図4・5のような、角押文による幅の非常に狭い区画帯が構成される。こ



4図 Ⅱ期に對比される東関東の土器（1~11 白井電貝塚 12~14 竹ノ下貝塚出土土器）

れは6群・7群・8群のいずれのなかにも見い出しえない手法である。6群C類の無地文化した土器が、全体の印象として類似した様相を窺わせようか。

8群B類に対比される長横円区画を配した土器は、4図8・9が該当する。角押文を単独で施した文様描出や区画間に配された円形貼付文もB類で行われる。横円区画文でも、4図10・11にみれる隆線で「X」字状や「Y」字状を現出したような区画手法は8群C類のものではない。

八類と8群は同様に無地文で、角押文と隆線を文様手法とする土器群であるが、その構成上各々に共有したりあるいは欠落する土器があるようだ。クランク状懸垂文や、長横円区画文を用いて文様構成される土器は相互に共有する。しかし、横円区画の形成には全く相違する区画手法が行われ、8群C類と10・11は各々の地域性を内在して、異なる系統の上に位置付けられるものと考える。

また、四類や六類の存在も考慮されねばならないだろう。四類の一部は明らかに下小野式と区別して抽出されている。口縁に沿った隆線とそこから垂下する「Y」字状懸垂文が特徴的で、刻目の施された簡単な貼付文も行われる。

六類の無文土器も五類・七類・八類に併出する。隆線や沈線等による文様施文はほとんど行われず、わずかに一例、口縁に沿って横走する刻目の施された隆線の土器がある。六類はほぼ8群A類の一部の土器に對比されようか。ただ報文では量的に相当数の出土があったとされており、8群A類の絶対量の不足した様相と比較して対称的である。

また、雷貝塚の土器群には7群が欠落する。そしてそれを穴埋めするように、幅の狭い口縁区画帯を構成する上器がある。両者は胸部に同様のクランク状懸垂文を配することをよく行う。

以上で述べてきたことは雷貝塚の主な土器についてである。雷貝塚の土器群は、概ねⅡ期段階に對比されるとしながらも、しかし大きな相違も指摘された。これによって雷貝塚とⅡ期土器群の、

次期段階の土器群へ展開していく異なる系統上に対峙した様相の一端を提示し得たものと思われる。

西村正衛氏は八類を阿玉台直前型式と阿玉台Ⅰa式に細分し、五類・七類（五領ヶ台式）→阿玉台直前型式（第一群土器）→阿玉台Ⅰa式の変遷過程を想定した（西村 1972）。これはⅡ期土器群の構成で課題として残した状況に対するひとつの解答と思われ、非常に示唆に富むものである。しかし、現状では資料の希少性から、阿玉台Ⅰa式の実態そのものは不明瞭な部分が多い。

茨城県にはいわゆる「竹ノ下式」があり、佐藤達夫氏によって、五領ヶ台式直後（雷七類）に相当する土器とされた（佐藤 1974）。その後、藤本赤城氏が資料紹介して、その型式内容を提示した（藤本 1977）。

近年では海老沢稔氏が、県内の中期前半の土器様相として、吟味検討している（海老沢 1982）。海老沢氏は、火木7a・b式や五領ヶ台式、阿玉台式等の周辺地域の土器との比較分類から、竹ノ下式を雷五類・七類に類似して、西村氏の阿玉台直前型式に並行する土器群として編年的位置付けをしている。さらにこれを2段階に細分したが、そのⅠ段階、Ⅱ段階が、雷貝塚出土の土器群に对比して、どのような位置を占めるものであるかは明示されていない。

また、竹の下式の構成を、縄文地系と無文地系土器に類型化し、前者を在地性の強い「諏訪式」に系統をたどるものと、後者を次期の阿玉台Ⅰa式に展開する土器とした。

海老沢氏が2期の段階分けを想定したのは、上記した2系統の土器群が、各々次期段階に向けてその型式的様相に、引き継がれるものをみせ始めることにある。縄文地系土器は隆線による文様抽出が胴部の懸垂文手法だけに限られ、口縁部文様は口縁部に沿った角押文手法に集約される傾向を示すとしている。無地文系土器は、4図13の梢円形区画文の成立が特徴的ようだ。4図12は、4図2から1を経て縄文地系土器に位置付けられている。このように、下向き弧線文モチーフの描出から、波頂下の文様帯を上位に押し上げ、12に至る過程は、4や5・7の幅の狭い口縁部文様帯を持つ土器の存在から、縄文地系土器の変遷のなかでだけ行われるものではないと考える。特に5は波状線の平線化によって、12からの直線的な変化が想定される。また、沈線から細かな角押文への文様表出技法の変換も符合するように行われる。13は、3の口縁部文様を繼承して、5と同様な文様構成を行っている。口縁に沿って文様帯が集約される土器は、4の隆帶上や5の隆線が横走して区画するなかに角押文が施され、波頂下には必ず渦巻状や円形状の貼付文が配される。それは、8や9の口縁形態が平線化あるいは小突起化した土器では、細長の梢円区画文を構成している。また大波状線を呈する6や13では、口縁に沿って一条の角押文が施文され、波頂部から隆線が懸垂したり、角押文が单独で多様なモチーフを描出する。6では胴部のクランク状懸垂文に連絡している。

西村氏の阿玉台直前型式の抽出は、Ⅱ期に該当する東関東の土器群の変遷をたどることを可能にしている。また、竹ノ下式の段階分けもそれを補完するものである。しかしぬ次期段階（阿玉台Ⅰa式期）では、これらの土器がその変遷過程のなかで継承してきた多くの文様要素は、10や11の梢円区画文や胴部の懸垂文手法に残すだけで、漸移的な展開を示さない。あるいは梢円区画文の発達がそれを阻害するのだろうか。また、大波状線で単純な隆線や角押文で構成される土器群は、隆線を曲線的に複雑化して配し、把手化の傾向を示して展開する。このような次段階の成立にかかる判

然としない多くの点が、今日においても阿玉台【a式の実態の把握を困難にしていると考えられる。

(鈴木秀雄)

第3節 IV期、V期、VI期

(1) 時間軸としての時期設定

Ⅲ期は從来の五領ヶ台式終末にあたり、地文に繩文をもつ土器が中心であった。文様帶の構成は、主に沈線による三角区画口縁部文様帶と下端の区画されない懸垂文状の胴部文様帶で構成されている。Ⅳ期になると、施文手法を中心に大きな変化が起こる。まず、地文の繩文が消え、文様の抽出は、ほとんど広い意味での結節沈線で飾るようになる。角押文、幅広爪形文等の出発点となる段階である。

角押文等の結節沈線の手法は既にⅡ期、Ⅲ期の段階で存在する。一つはⅡ期を中心とした浅鉢につくもので、内面に並列して施文される。Ⅲ期では、深鉢の一部にも用いられる。

Ⅳ期になると、文様帶の構成は、Ⅲ期と全くかけ離れているとはいえないが、飛躍は大きい。文様帶の構成では、Ⅲ期の口縁部と胴部の2带構成からⅣ期では文様帶が多段化し、口縁部と胴部の間に複数の横帶文が加わる。

このように、両者の間に多くの点で相違があるため、この間にⅢ期の深鉢の沈線が角押文に変わった一群の土器をⅢ期から切離して、五領ヶ台式直後の土器(池谷他 1981)とする研究者も多い。今回は、これらの土器がⅣ期の土器と同モチーフであることから、Ⅲ期での変異として扱った。

Ⅳ期は中部の井戸尻編年でいう猪沢式に当り、関東では清水台式(戸田他 1971)あるいは五領ヶ台上層式と呼ばれてきた(岡本 1969)。

從来、関東ではこの時期の遺跡が少なく、いずれも断片的であって、井戸尻編年との対比によってはじめて抽出が可能になった時期といえよう。

井戸尻編年では、Ⅳ期とⅤ期の前後関係が不確定であったが、佐藤達夫氏は文様系統の立場から猪沢式→新道式となることを提唱した(佐藤 1974)。その後、この考え方は、曾利遺跡(武藤他 1978)や大石遺跡(伴他 1978)等で発掘された住居址の複合関係から確定した。

筆者はⅣ期について、中部の土器も参考にし2細分したことがあるが、不充分なものであった。近年、関東でも、藤の台遺跡(川口他 1982)、神谷原遺跡でまとまった土器群が出土した。中西充氏は神谷原遺跡の土器をもとに2細分を試みている。神谷原遺跡の豊富な資料を系統的に分析した次元の高い分析だが、一住居址内の土器を型式学的観点として前後に振り分けている例が多く、土器の組合せも今回私達の検討した結果とずれがある。ここで再検討をしておきたい。

Ⅴ期は井戸尻編年でいう新道式にあたり、Ⅴa、Ⅴbの2つの時期に細分した。

標準資料の新道遺跡1号住、九兵衛尾根遺跡3号住(藤森編 1969)の土器を関東の膳棚遺跡1号住(岩井他 1970)や西上遺跡(B2地点下層)の土器(和田 1975)と比較し、モチーフの動き、組成等から一段階新しく位置づけたことがある。しかし、その後、中部でも大石遺跡等でⅤ期

の良好な土器群が多数検出された。これらの土器の組合せをみると、Ⅴa期とするものでも、Ⅵ期系統の土器や、新しい段階の土器も含まれ、多様な組合せであることが明らかにされた。したがって、標準資料を全て新しくする理由は消えたといえる。

一方、関東でも、Ⅵ期に近い土器群を含む新しい段階の土器群が増えた。したがって、今回提示するⅦ期の新旧の内容は從来と異なることを断っておく。

東関東のⅤa期には阿玉台Ⅰb式、Ⅴb期は阿玉台Ⅱ式土器が相当する。Ⅴa期の東関東では子和清水遺跡（松戸市教委 1978）1号住や鳴神山遺跡（高橋 1959）例があるが少ない。從来のⅠb式の例では平縁で肩状把手の土器が多くを占めるのに対して、Ⅱ式では平縁は少なく、大波状縁の土器が目立つ。各期の組合せは今後の課題である。茨城県諏訪遺跡（鈴木他 1980）でⅠb新式と思われる波状縁の土器があるが、いわゆる諏訪タイプの土器が出土し、これをキーにクロスチェックすると、この段階にはすでに竹の下式系統（海老沢 1982）で、簡略化された文様をもつ土器が存在しよう。

Ⅵ期は勝坂式の最盛期あるいは勝坂式の出発点といわれた段階で、井戸尻編年でいう藤内Ⅰ式が相当する。

從来からの三角形区画口縁部文様帯の土器が減少し、抽象文土器、縱位区画文が組成の中心になるとされてきた。この段階で文様描出手法は角押文、幅広爪形文、三角押文などの結節沈線手法の比重が減る代りに沈線が増す。区画内充填手法も変化し、Ⅵ期にみられた区画文襷文から沈線列に代表される区画内を密に埋める傾向が強くなる。

近年の調査結果によれば、Ⅵ期を代表すると考えられていた抽象文土器、縱位区画文土器は、Ⅵb期でもかなりの割合を占めていることが明らかにされた。神谷原遺跡でⅥb期にあたる土器は、基本モチーフや全体の構成では從来の藤内Ⅰ式とされた土器と大きな隔たりは感じられない。Ⅵb期のうち、三角区画口縁部文様帯の土器などの結節沈線手法の一群を欠くと藤内Ⅰ式に分類されてきた可能性もある。各種の土器を系統的に編年する必要があろう。したがって、Ⅵ期は從来考えられたより若干新しい部分に寄っている印象となるかも知れない。

なお、藤内Ⅰ式に後続する藤内Ⅱ式と井戸尻Ⅰ式段階と考える土器群については、今回の編年を組立てるにあたって各住居址から出土した土器群の伴出関係を再検討してみた。従来、特定の群の土器を細分の基準として考えていたため、たまたまこの群を欠く場合、古い要素をもてば藤内Ⅱ式、新しい要素だけの場合は井戸尻Ⅰ式段階に比定している可能性があるのでなかろうか。今回は両者を合せて一段階とし、Ⅶ期にまとめた。

このように、Ⅶ期に從来の二つの段階をまとめたため、Ⅵb期との土器様相の隔たりが著るしい。したがって、Ⅶ期の具体的な内容は再検討すべきだが、その設定は欠かせないといえよう。

以上、Ⅳ期からⅦ期までの時期区分の目安を概観した。これらの時期はいずれも勝坂式の成立をどこに置くかで議論されてきた時期である。Ⅶ期とする意見（土肥 1981）は三角区画口縁部文様帯成立とその分帶のあり方に、Ⅶ期とする意見（佐藤 1976）では縱位区画文の成立が主なる理由であった。本稿では、文様描出手法、系統的にみた土器群の展開と組成、集落の構成とその離散性や規模の変化等の社会的背景を考慮して、Ⅶ期以後と考えたい。

(2) 土器群の分類

IV期(5図)

1群土器

内縁する口縁に引れた沈線から三角印刻文等の「Y」字状文が下がる。沈線が角押文に代わることも多い。

A類(1) 脚部は懸垂文のみ基本だが、口縁下に1段から数段の梢円区画文となる例がある。

B類(2) 脚部に方形区画文が配されるもの。文様は半截竹管による2本の半浮彫り沈線で描かれることから北陸の新崎式の手法が窺える。

C類(3) 本来の構成とは離れ、4群的な区画内充填手法がとられるもの。鋸齒状角押文列、三角印刻文等で埋める例も多い。

2群土器(4)

平縁の内縁する口縁で、頸部で括り、胴が張る。胴上半に幅の狭い区画文を多段に配す。懸垂文は欠く。波状文、上向き弧線文等が角押文で描かれる。

3群土器

重層区画文をもち、隆帯に沿う1列の角押文、小波状角押文列が加わる。胴下半の懸垂文は角押文が省略され、輪積痕を残すなど阿玉台式の器面整形と共通する。

A類(5) 口縁部の区画文が強調されたもので、2段目以下は角押文が省略される。口縁部文様帶は隆帯等が下りて区画され、長方形ぎみとなる。区画は2本の隆帯、渦巻文、円形貼付文等がある。1群的な「X」字状隆帯が基本であろう。

B類(6) 2段目の梢円区画文が「凸」状に1段目の区画間に嵌入するもの。

C類(7) A類の口縁部文様帶に多段の胴部区画文が加わる。2段以下は完成した梢円区画文となる。

D類(8) その他、梢円区画部を多段に重ねるが、1段目が細い梢円区画文のものや口縁部文様帶のみのものなどがある。中部には波状縁の例がある。

4群土器

3群の区画内を、継位、斜行、鋸齒状等の角押列が埋めたもの。複数の小波状角押文列や隆帯に沿う角押文の2列化や幅広の爪形文手法が加わる。

A類(9) 3群A類の区画内を斜行、継位の角押文列で埋めるもの。

B類(10) 3群B類の区画内を埋めるもの。

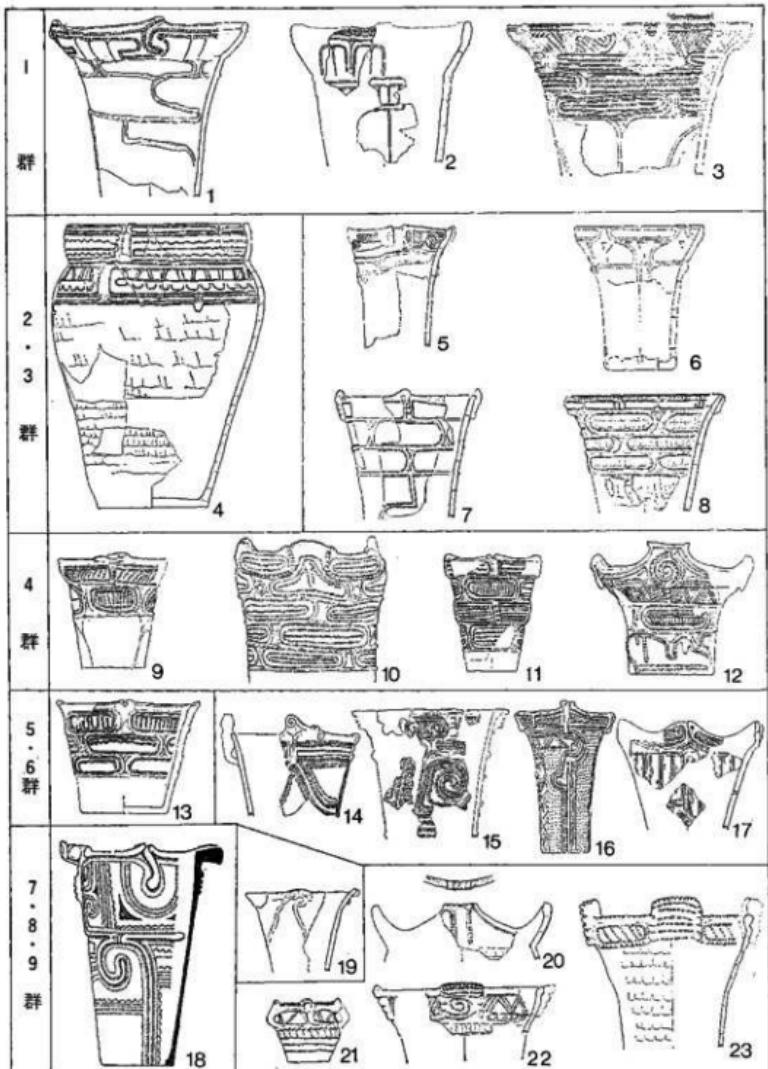
C類(11) 3群C類の区画内を角押文列が埋める。継の角押文、波状角押文列等がある。2段目以下は2列の角押文列、波状角押文列が加わる。

D類(12) 波状縁のもの。上端を平らにした形が多く、頂部下に渦巻文が置かれる。

5群土器(13)

口縁は外傾ぎみの平縁。口縁の無文帶下に多段の梢円区画文がある。最上段が完結した梢円区画文になることから、通常の文様帶構成のうち口縁部文様帶を欠くものと考えられる。

6群土器



5圖 IV 期土器分類表

口縁部文様帶下に縱長な文様帶を置く。口縁部文様帶は縱の隆帯が下がり、方形ぎみとなる。

A類（14） 下端の区画された縱位区画文となる。渦巻文を中心に空間を角押文で分割する。

B類（15） 下端が区画されず、懸垂文状となる。単純に「ハ」の字に聞く懸垂文や懸垂文上部が渦巻状で、鋸歯状角押文列、三角印刻文を組込んだ文様帶をもつ特殊な変化をしたものもある。

C類（16） 楕円区画2段の下に、文様帶から伸びる渦巻と下端に聞く隆帯を置いたもの。抽象文土器の索形か。楕円区画内は角押文列、鋸歯角押文と三角印刻文で埋める。

D類（17） 口縁部文様帶下に半截竹管による渦巻で縱位区画文を置く。北陸の手法による。

7 群土器（18）

口縁部文様帶を欠き、縱長の文様帶となるもの。口縁から下りるクラシック状懸垂文で器面が分割され、渦巻文隆帯や角押文で区画をつくり、さらに三叉文等が加わる。

8 群土器（19）

口縁に簡単な隆帯の単位文が付き、他は無文あるいは輪積痕を残すもの。直線と渦巻の2本の刻目の隆帯、「Y」字状隆帯、先端の曲る「Y」字状隆帯、口縁大きく聞く2本の懸垂文が下がり、一方の端が丸しくしたものもある。

9 群土器

阿玉台式の色彩の強い土器。西関東では阿玉台式より単純なモチーフで、胸部の懸垂文は省略されるものが多い。東関東では大波状縁の土器がよく知られる。

A類（20） 上端が平坦な山形波状縁で、「Y」状懸垂文が下がる。1本と2本の例がある。

B類（21～23） 平縁で内彎する口縁。口縁部の区画は、間隔を置いた2本の隆帯、「Y」字状隆帯、結節状隆帯、「？」字状の刻目ある隆帯等で分割する。扇状把手も区画の一種である。区画内は無文、斜行角押文列、鋸歯状文等がある。

C類（図版16—1） 大波状口縁の土器。頂部は山形と平坦なものがある。頭部に文様帶を置く例もみられる。

V期（6図）

1群土器（1）

V期1群の系譜を引く土器で、関東のⅤa期ではまだ類例がない。Ⅴb期の例は口縁にカマボコ状の縱の沈線が引かれる。沈線上端は蓮華文状となる。胸部は抽象文や方形区画文等が配され、変化の幅が大きい。

2群土器

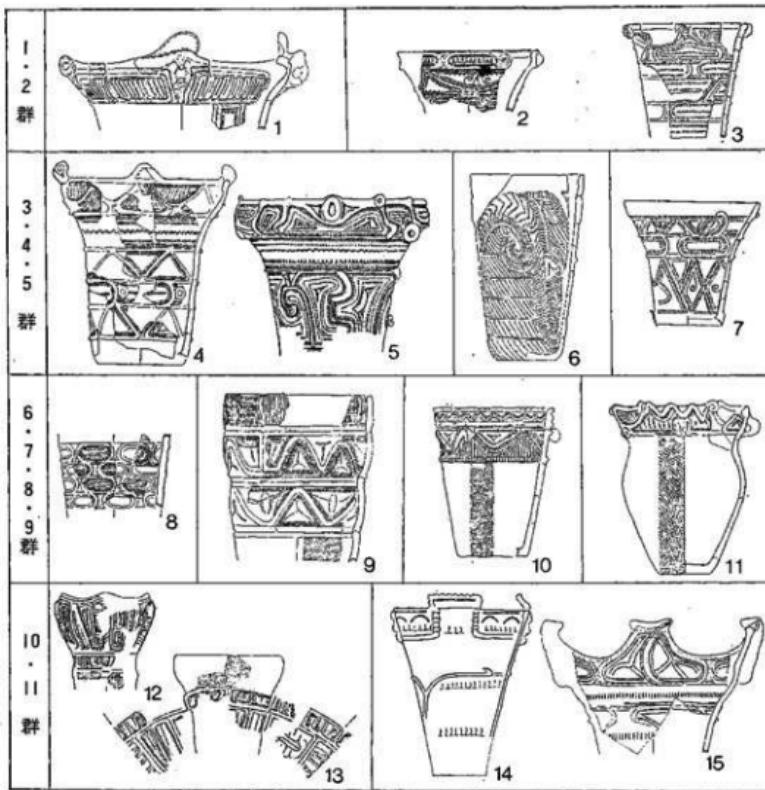
重層した区画文だが、三角区画口縁部文様帶をとらず、口縁、胸部、底部と分帶されないもの。

A類（2） 口縁に細長い楕円区画文をもち、頭部は横に延びた三角区画がみられる。施文は三角押文列に刻目が加わる。区画内の使い方はⅤ期に近い。

B類（3） Ⅴ期4群B類の口縁部文様帶を受けて成立。斜行隆帯で区画した文様帶がある。

3群土器

2群B類に近い三角区画口縁部文様帶と胸部文様帶間に頭部素文帶を置くもの。V期の主要な文様帶構成で、以後の基本となる土器の一つであり、変異も多い。胸部文様帶は2つのタイプがあ



6図 V期土器分類表

る。

A類（4） 三角区画を中心とした横長の胴部文様帶。南北区画を加え数段重ねるものもある。

B類（5） 縦長の胴部文様帶をもつ。Ⅳ期6群A類の胴部文様帶の系譜か。

4群土器（6）

いわゆる抽象文の土器。円筒形で、口縁に素文帯、胴部に抽象文を置く。草履虫状文の並ぶ土器も含めた。抽象文は口縁部文様帶下にくる隆帯による渦巻のモチーフが特に発達したもの。

5群土器（7）

Ⅳ期5群の系統の土器で、外反する口縁部は無文帯となり、胴部は重層した横帯区画文となる。

Ⅴb期では定着し、区画文を半截竹管で描き、縦文で埋めるものもある。

6群土器（8）

横円区画文が重層したもの。平縁で、口縁に無文帯を置く。区画文は地文縦文となる。

7群土器（9）

素文の口縁下に多段の幅の狭い区画文を重ねたもの。器形は円筒形や各段の張るものがある。文様帯内の三角区画は、Ⅴb期では隆帯が独立化して鋸歯状となる。4、7群の口縁部文様帯と共通。

8群土器（10）

円筒形で、口縁に三角区画の文様帯一帯のもの。上半は三叉文があり、鋸歯状隆帯化する。

9群土器（11）

三角区画文口縁部文様帯のみで、胴部は無文あるいは縦文のみの土器。中部にも多い。

10群土器

継位区画文の土器。2本の沈線で区画されることから、新崎式の手法を引くと考えられる。

A類（12） 幅の狭い口縁部文様帯下に長方形区画を重ね、縦文や爪形文、三叉文で埋める。

B類（13） 継位区画文だが、変形したり、区画内を途中で区切る例がある。内彌する縦文のみの口縁もあらわれる。爪形文、三叉文で埋める。

11群土器（14、15）

阿玉台式系の土器群。Ⅳ期の無文を基調とするものが減少する。胴部懸垂文は一般的な阿玉台式に近い土器となる。Ⅴa期はⅠb式、Ⅴb期はⅡ式が相当する。Ⅰb式は扇状に突出した把手のつく例が目立つが、全体の組合せははっきりしない。Ⅱ式は上端が平らな山形波状縁で、弧状斜帯を付したタイプや波頂部が「U」字状に窪むタイプ等がある。東関東の阿玉台Ⅱ式は波頂部からまっすぐの隆帯が下り、逆「T」字状隆帯化したものが多い。

Ⅵ期（7図）

1群土器

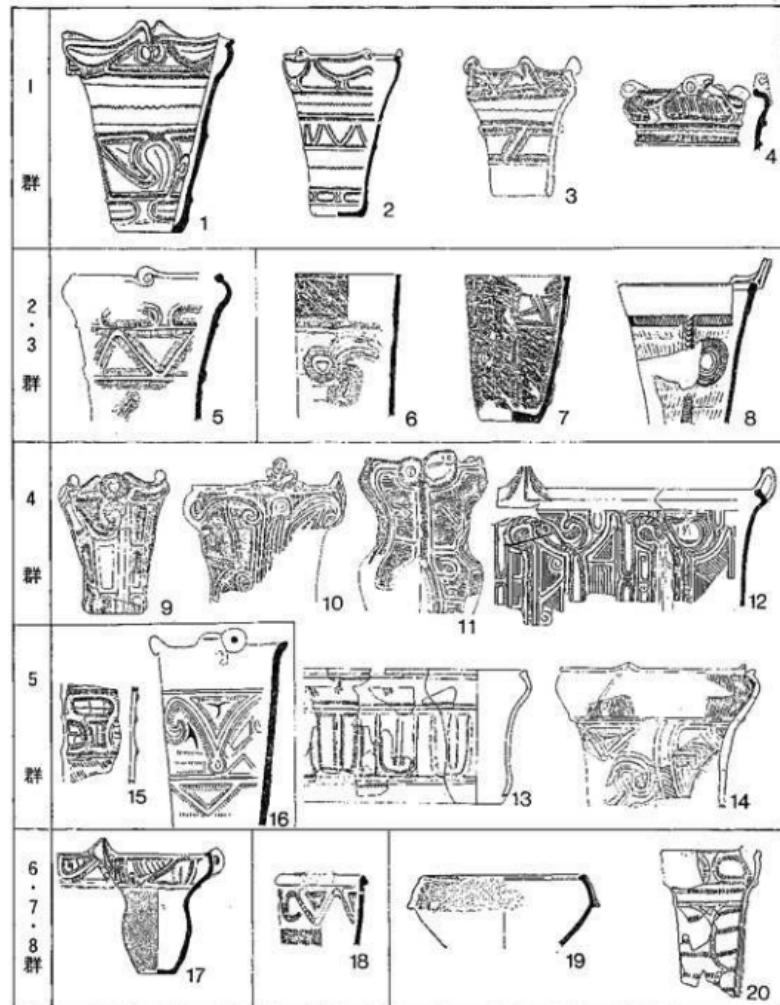
三角形区画口縁部文様帯をもつもの。Ⅵ期3群を受けたものである。Ⅵ期では胴部文様帯が省略され、口縁部文様帯と胴部文様帯とからなることもある。胴部文様帯に連続三角文あるいは渦巻文を含むかで分けた。また、三角区画口縁部文様帯の変種も類を設けた。

A類（1） 胴部に幅広の横帯文をもつもの。讚岐山遺跡（滝沢 1963）例が典型で、区画下端から立上がった渦巻文が上端と接する部分で離れ、それぞれが独立した文様の単位となる。

B類（2） 胴部文様帯が狭く、斜帯の連続三角文となるもの。宮田遺跡（宮塚他 1972）では一部に渦巻文をもつが、一体化して、横長の文様帯に取り込んでいる。

C類（3） 口縁部文様帯が縦に分けられて長方形になるが、区画内を三角形に仕切ったもの。区画文の一端に渦巻文の加わる例がある。しばしば阿玉台Ⅱ式の2列の刺突文が隆帯に沿う。

D類（4） 口縁部文様帯内の充填を爪形文、波状沈線の他、縦の沈線列で埋めた区画文を組合せたもの。



7圖 VI期土器分類表

2 群土器（5）

内彎する無文の口縁下に梢円区画文、三角区画文が重層したもの。陸帯には爪形文、波状沈線が沿う。口縁と頸部の文様帶が内彎する無文の口縁で代用されたとも考えられる。

3 群土器

抽象文系の土器。IV b期の千ヶ瀬遺跡（青梅市郷土博 1981）例は完成した抽象文の構成やモチーフに最も近く、直接的な素形を思わせる。V b期にはほぼ完成し、VI期に続く。

A類（6） 素文の口縁部文様帶下に抽象文がつく。抽象文のみや抽象文と幅の狭い横帶区画文と組合ったものがある。

B類（7） 口縁部文様帶を欠き、地文區画に草履虫状文が縱に並ぶ。

C類（8） 直行する無文の口縁下に草履虫状文が並んだもの。器面は輪積痕や擦痕で素面。

4 群土器

縱位区画文土器。縱長の方形区画文を中心に器面を埋める。区画は半截竹管による2本の沈線で描く。文様帶の下端は区切らず、懸垂文状に流すものが多い。

A類（9～11） 口縁から底部まで縱長区画となるもので4群の中心となる。器形は口縁だけ内彎する例、口縁、胴部とも張る例がある。VI期では前者が多くなる。文様帶は大小の三角形、変形矩形、渦巻文等が組合う。区画内は爪形文と三叉文、沈線列および両者を組合せたものなど様々である。

B類（12） 無文の内曲、内彎する口縁下に縱位区画文を置く。2対の細長い副文様帶と幅広の主文様帶で構成される。主文様帶頂部から派生する渦巻文を中心とした区画文となる。

C類（13） 内彎する口縁で、垂下する陸帯を囲む「V」字陸帶文を単位とする。下端に区画。陸帯に沿って爪形文が巡る。

D類（14） 縦の沈線群で埋める内彎する口縁で、胴部はA類的な縱位区画文を配す。区画は半截竹管沈線で引く。主文様は渦巻文を中心に、区画間を細かく分割する。各小区画は爪形文、三叉文等で埋める。

5 群土器

重層した文様帶をもつもの。円筒形であり、口縁部無文帶が意識される。

A類（15） 多段の梢円区画文をもつ。前原遺跡（C. T. キーリー 1976）例があるが、梢円区画文は2段。区画内の充填は区画に沿った爪形文のタイプである。

B類（16） V期7群と同様に分帶を重ねたもの。下加遺跡（宮内 1965）例は渦巻文を中心とした幅広の文様帶と三角区画文からなる。

6 群土器（17）

変形した三角形区画口縁部文様帶と胴部の縦文からなるもの。V期の9群と同一分帯法である。日野吹上遺跡（上川名 1970）例は区画内を長い裁痕で切込む。多くの種類が予想されよう。

7 群土器（18）

円筒形の口縁に陸帯で鉛垂文を描く。V期8群の系統である。区画内の充填も上半が爪形文と三叉文、下半は沈線列となる。下半の充填文を欠く例も多い。

讃岐山遺跡例は、文様帶が縦位区画文的であり、縦位区画文の副文様帶はそのまま残り、幅広の主文様帶内を三角形に区切っている。

8群土器（19, 20）

Ⅵ期に伴出した阿玉台式。貫井南遺跡（安孫子 1974）16号住には幅広の爪形文をもつ阿玉台式があるが、口縁部と懸垂文の構成で阿玉台Ⅱ式より古い。また、1群C類の口縁部に2列の刺突文列があるが、阿玉台Ⅱ式的である。なお、東関東のⅥ期阿玉台式には子和清水遺跡、蕨立遺跡（岡崎他 1982）、下加遺跡などがあるので、後で触ることにする。

（3）土器群の構成

Ⅳ期

Ⅳ期は2期に分けた。Ⅳa期の西関東では藤の台遺跡3（図版7—1～6）、4号住（図版7—7～8）、神谷原遺跡SB155（図版7—14～21）、160（図版7—22～26）、178（図版8—1～18）等がある。東関東の様子ははつきりしないが、加茂遺跡（松本 1952）の一部の土器が考えられよう。Ⅳb期は神谷原遺跡SB10、147、150、千ヶ瀬遺跡を想定した。

Ⅳ期a期とした土器群はいずれもⅢ期の地文繩文の土器群を欠き、角押文の沿う陸帯の区画で統一されている。Ⅲ期は繩文地文の土器がその大半を占め、モチーフ的にも両者はかなりの飛躍があり、中期のなかでも一大転換期にあたろう。

ところで、Ⅳ期で盛行する角押文あるいは連続爪形文の手法は、Ⅱ、Ⅲ期の浅鉢に広くみられる手法だが、深鉢は沈線主体であった。Ⅲ期は地文が繩文で、Ⅲ期の文様と全く異なるが、沈線が主体であることに変りがない。しかし、一部では沈線と同様なモチーフを角押文で描く土器も若干出現する。これら一群の土器をⅢ期から切離して五領ヶ台式直後とする意見も多い。これらの土器群は深鉢にも角押文が使用され、注目すべき土器群であるが、一時期を画するような良好な一括資料がなく、文様モチーフはⅣ期と異なる。最近、両者の関係を暗示する例が神谷原遺跡で検出された。

神谷原遺跡SB113は風倒木で一部が壊された住居址であるが、周辺に同期の遺構がないことから、通常の住居址内一括遺物（図版3—17～23）に近い土器群といえよう。

この住居址ではⅢ期の土器と共に地文繩文の1群A類、2群、さらに、9群A類の阿玉台Ⅰa式的な土器が伴っている。このうち、2群土器は角押文手法が用いられ、椭円区画文も極端に細いとはいえない完成して、すでに、Ⅳ期以後とつながる要素をもっており、従来のⅢ期の概念に含まれない土器群である。全体の文様帶構成や個々の区画内のモチーフは西村氏の「第一群土器」（西村 1972）や大石遺跡18号住の地文繩文例に近いと思われる。他にこのような組合せの例がなく断定できないが、2群土器をⅣ期に先行する角押文の使用と椭円区画文の成立した土器と考えたい。

ところで、Ⅳ期を特徴づけるものに3群、4群の重層した区画文の土器である。多段の区画文の成立の結果、口縁部文様帶の意識が薄くなり、口縁部文様帶と以下の文様帶が一体化する。したがって、懸垂文を欠く土器もみられるようになる。

さて、このような3、4群土器を含むⅣ期の細分について、区画内充填手法から分けることがある。この観点に立てば、3群土器がⅣa期、4群土器がⅣb期となるが、住居址の伴出関係では両者の共存した例が増加している。神谷原遺跡では3群土器のような、陸帯に沿う角押文が1列の

土器はⅣ a期の住居址に多く、Ⅳ b期では区画内を角押文で埋める4群の土器が多くなる。一方、Ⅳ a期とした藤の台遺跡では4群土器が主体であり、遺構によって組成に偏りがみられる。

千ヶ瀬遺跡は施文手法、文様モチーフで明らかにⅣ b期に属するが、3群土器の区画内充填手法をもった土器群が多く占めている点は注意されよう。

それでは、4群土器はⅣ a期とⅣ b期ではどのような違いがあるであろうか。口縁部文様では、口縁との区画線の下に、次段の区画文で下端の区画効果を生む例が多く、1群土器のような下端を区画しない意識の残りが窺える。隆唇も上端が太く、下端の細くなるのが原則である。文様帯の区画はいすれも「Y」字状隆唇の変形であり、横円区画化したものでも片側の太い例が多く、8群土器にみられる先端の曲った「Y」字状懸垂文と同一なモチーフが起源となろう。口縁部の方形区画化は既にⅣ a期にあるが、Ⅳ b期では、懸垂する隆唇の区画や方形区画も定形化する。しかし、文様帯の基本構成や文様モチーフはあまり変化せずに残る土器群もあり、手法上の変化や他の要素の組合せで分けるしかないものも多いようである。Ⅴ期には胸部文様帯の多段化も一つの特徴だが、口縁部文様帯と同様決定的な差とはいいがたい。

区画内手法上の変化は幅広の爪形文、方形区画内の鋸歯状文、角押の鋸歯状文、三角印刻文の文様帯などがあげられる。このうち、幅広の爪形文は区画内の文様を密に埋める効果をもたらしたといえよう。

3群、4群土器を中心とし、前半と後半の変化をみてきたが、時期によって要素が交代するのではなく、両者ともⅣ期全般に存続し、多系統に展開する。中部ではⅤ期にもⅣ期的な文様帯構成をとる土器が残ってくる。

他の群の土器も概観しておこう。1群土器は口縁の地文織文を失い、Ⅳ期では口縁の区画が「Y」字状印刻だけでなく、角押文手法の加わる例も多い。神谷原遺跡SB160の直線と彎曲した隆唇の口縁文様帯区画線をもつ土器（図版7-22）には「W」字状の角押によるモチーフがある。2本の「Y」字状懸垂文と共にモチーフであり、東関東から東北にかけて広く分布するモチーフが取り入れられる。この口縁部文様帯下には区画文が置れるものも多い。基本形に近いものでは、胸部との区画線と「X」字経帶で頭部文様帯的な構成をとり、阿玉台式とも共通した要素をもつ。また、口縁部区画内を「Y」字状印刻文に代わる充填文の入るC類がある。Ⅳ a期では藤の台遺跡（図版7-1）、Ⅳ b期では神谷原遺跡SB147があり、それぞれの段階で特徴のある充填手法が取られる。

5群土器は口縁部無文帯を置く土器であり、Ⅴ期に盛行する口縁部無文帯をもつ土器の先駆となるものであろう。Ⅲ期の中部には口縁部に織文帯を置き、以下に文様帯を置く土器が多い。文様帯が異なるとはいっても、構成的には類似する。Ⅳ b期にはまだよい例がない。Ⅴ a期では完成して存在することから今後検出される可能性が強い。

4群D類は波状縁の土器で、量は少ないが、Ⅲ期の波状縁土器と共通した文様モチーフを取って強い関連性を示す一方に、手法上の隔たりも表わす土器である。波頂部周辺のモチーフが竹の下式や阿玉台I a式など東関東の土器とも共通する。中部では山形の波状を取る例として月見松遺跡例（庶那他 1973）がある。口縁部は粹状文で加茂遺跡出土の阿玉台I a式（？）といわれる土器と同

—モチーフである。茅野和田遺跡(宮坂他 1970)例は山形波状で波頂下に逆「U」字の角押文例がある。波頂下を中心にして分離するモチーフであり、素形は共通しよう。井戸尻遺跡2号住(藤森編 1965)にも波顶部中央を埋ませた独特な波状縁の土器がある。波頂下に渦巻文を置いた同一の構成となる。Ⅳ期で独自に発達したものであろう。Ⅴb期にも同系統の口縁(図版8-21)がある。

6群土器はⅣ期の藤の台遺跡3号住がある。下端は既に区画されているが、本米は、口縁下の懸垂文が発達した土器である。縦位区画形と特殊に発達した懸垂文の2つの方向で発達したことを示す。このような6群土器にみられる二つの方向は以後の基本的な文様帶のあり方とつながる。Ⅳb期には懸垂文状モチーフが著しく発達し、多くの種類を生む。Ⅴ期以後の主体となる抽象文土器の素形はⅣb期の千ヶ瀬遺跡にあり、横に延びて単位化した抽象文的モチーフとなっている。縦位区画文は多くの変化があり、個体による文様構成の差が大きい。

6群土器B類は、半截竹管の沈線で区画文を描く北陸の新崎式の文様モチーフと手法がみられる。

6群土器C類の胴部は関東ナイズされているが、同様の系譜上にある。この種のものではⅣb期に属する柏原遺跡(後藤 1933)例(図版8-11)は著名であり、長沢遺跡(川崎他 1972)(図版8-12)例も波状縁となるが、同様な文様帶構成である。4群土器B類は2段の口縁部文様帶が置かれ、胴部は両側に大きく開く2つの懸垂文で分割され、半截竹管による半浮彫り風の縦位区画内を細線で埋めている。縦位区画文の素形の1つといえる。

7群土器の口縁から直接クラシック状懸垂文で器面を分割するものとして、鳴神山遺跡を代表例として上げたが、高根木戸遺跡(西野他 1971)72号住(図版17-5)、中部の茅町和田遺跡にも基本構成に近い土器がある。Ⅳa期にはいまのところない。全て、阿玉台Ⅰb式が伴出している。

8群土器は単位文が口縁に付くだけで取り立てた型式変象をもたないため、単独では時期を判定しがたいが、前後の時期での出土状況からⅢ～Ⅳa期にほぼ限定されると思われる。8群土器を系統的に跡付けると西村氏の「第一群二類」の延長上にある土器群と考えられよう。

Ⅳ期には阿玉台式土器の伴出する例が多いが、東関東の阿玉台式とは若干様子が異なる。

西関東の9群の阿玉台式土器は懸垂文が省略され、口縁部の区画文のみを置く傾向が強い。1群土器の口縁部下の区画文と一連の動きとなろう。千ヶ瀬遺跡には1群土器の口縁部文様帶のみの例があるが、西関東の阿玉台式と同じ変化を示す例であろう。多層の区画文を重ねた3、4群土器、特に4群土器は懸垂文が中部の例に比べて未発達であり、この傾向を表わすものだろうか。

Ⅳa期の神谷原遺跡SB155には口縁部の区画文間が累状に突出せず、間隔をあけたままのものがある。西村氏の阿玉台Ⅰa式に近い。しかし、区画文は完結し、区画内のモチーフも完結している。神谷原遺跡SB178では区画間のモチーフが下端の区画から立上り、「？」状の把手となる例もある。中部の阿玉台式類似の土器は、この把手が単位文化して「S」字状隆帯となるものがあり、一段階新しく考えることができよう。また、藤の台遺跡3号住にも阿玉台式土器(図版7-5、6)が伴うが、口縁部の区画文はほぼ完成していた。この他、9群A類、C類土器はモチーフが単位文化し、著しく簡略的であるが、基本モチーフとしては阿玉台Ⅰa式に共通している。地域の差か時間差かをはっきり区別しがたいが、モチーフ簡略化の観点に立てば、一段階新しく考えられよう。Ⅳ期にはこの2者のタイプが想定されるが、全体としては、阿玉台Ⅰa式そのものよりは

やや下ったⅣb式に近づいたものであろう。

Ⅳb期は阿玉台Ⅰb式土器の伴出する段階である。神谷原遺跡SB10は良好な組合せ例だが、阿玉台式類似の土器は脣部の懸垂文が省略され、西関東ナイズされている。千ヶ瀬遺跡では、波状線を中心とした東関東の典型に近い阿玉台Ⅰb式土器群が検出されており、遺跡による差が生じている。遺跡の個性か時期差かは検討しなければならない。

Ⅴ期

Ⅴ期を特徴づけるものは、三角区画口縁部文様帯が確立することである。この土器の文様帶構成は、膳棚遺跡の一つの典型例（8図）にみられるように、口縁部文様帯、頸部素文帯、幅広の脣部区画文、底部区画文という何段もの横帯区画を重ねることである。

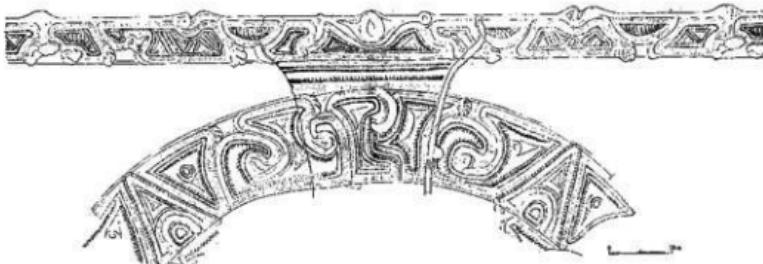
施文手法ではⅣ期にある角押文、幅広爪形文に加えて、三角押文が加わり、多形な区画内充填手法がそろっている。区画内の文様も波状三角押文、直線の角押文列、三角形印刻文が残り、関東のⅣb期に安定して存在する三叉文も加わる。

今回、これらの特徴のあるⅤ期を2段階に分けて考えてみた。従来も2分する考え方があるが、論者によって内容にずれがみられる。筆者もかって2分して考えてみたことがある（谷井 1979）が、当時は地域的に資料的な片寄りがあり、特に中部の土器が不充分であったこともあって、今から振り返ると問題が多い。

そこで、まず関東における各遺跡での土器群のあり方と各群の分析を中心に検討してみよう。

西関東Ⅴa期の遺跡としては、西上遺跡B：地点下層の土器（図版9-1～6）がまとまっているほか、膳棚遺跡（図版15-6）、江戸坂貝塚（赤星 1933）などがあるが、西上遺跡を除くといずれも断片的な例があるにすぎない。Ⅴb期はかって、貫井南遺跡10号住（図版9-15～19）、栗山遺跡（根本他 1975）B地点（図版9-20～27）等少なかったが、神谷原遺跡の報告で大幅に増加した（図版10）。

各期の土器群の構成をみると、Ⅴa期で西上遺跡の一括資料から、2群B類、3群、5群、11群上器の阿玉台式で構成されていた。いずれも結節沈線が主要な文様抽出法であり、その多くはⅤb期へ系統的に引きつがれる土器群である。Ⅴb期ではほとんどのタイプがそろう。特に、4群土器の完成した抽象文土器、6群の多段の横帯文土器、10群の縦位区画文土器などⅤ期へつなぐ系統が



8図 膳棚遺跡1号住炉体土器実測図

安定して存在し、著しい器種の増加が窺える。

これら多くの土器はⅤb期で新たに出現したタイプの土器も存在すると思われるが、中部のⅤa期の土器群組合せの多様さから考えると、関東の独自性を考慮してもⅤa期でもかなりの土器の存在が予想される。いずれにしても関東でのⅤa期の資料は絶対的に不足していることはいなめない。

そこで、各群の土器について、中部の例も考慮しながら、その特徴と変遷の過程を概観しておこう。

1群土器はⅤa期ではなく、Ⅴb期では当初の形から大きく姿を変え、内壁する口縁部に半截竹管を引く半浮彫り風の隆帯列が並び、Ⅵ期の下加邊跡の8単位の波状口縁（図版18-10）につながるものであろうか。中部では本來の形に近いものや口縁下に区画文を置く例も多く、様々な展開をみせる。

2群B類土器はⅣ期4群B類の口縁部文様帶を受けたもので、区画が三角区画文様帶に近いことや三角押文をもつのが特徴である。文様帶構成はⅣ期的であり、Ⅴa期に相当しよう。

2群A類土器は、口縁に細い辯円区画をもつことからⅣ期的な文様帶である。神谷原遺跡S B122の例は（図版11-19）区画の崩れ、区画充填手法や他の伴出土器からⅤb期としたが、問題が残る。この種の口縁部区画文は3群土器の三角区画口縁部文様帶に代わって多用されるが、神谷原遺跡では多くがⅤb期まで残ることを示す。

3群土器は口縁下に頸部素文帯を置く。以後の勝坂式の基本の一つとなる。Ⅴb期にはみられない要素である。この種の構成は現象的にみるとⅥ期の多段の区画文のうち、口縁部下の区画文一帯が素文化したといえるが、頸部素文帯は西関東ではなく、Ⅴa期の阿玉台1b式の頸部文様帶の存在が注目される。

4群の抽象文土器はⅤa期でまだ検出されていないが、Ⅴb期には既にしっかりした素形があり、Ⅴa期で確立することから、いずれ検出されるのではないか。

5群土器はⅤa期から系譜がたどれる。Ⅵ期以後の口縁部無文帯の円筒形土器の素形となろう。

6群土器はⅤ期に出現した土器である。中部の伴出例からⅤa期には存在しよう。

7群・8群土器は從来Ⅵ期になって作られるとしていた。神谷原遺跡や中部のⅤb期では確実に存在する。Ⅴb期では、胴部文様帶を横に分帶するものがあるが、直接はつながらない。

10群土器の縦位区画文は中部でもⅤa期ではまだ出現していない。内部を爪形文、三叉文で埋めるのが普通だが、山梨の中溝遺跡（山本他 1974）では無文の口縁下に弧線と渦巻文で構成され、沈線列で埋めた縦位区画文土器がある。

このように、各群を概観すると、Ⅴa期の西関東では組成が不十分であり、Ⅴb期との組成上の差がありすぎ、今後の資料の増加が待たれる。ところで、かつて中部のⅤb期として、新道遺跡1号住、九兵衛尾根遺跡3号住、後田原遺跡（戸沢 1970）2号住の土器を取りあげた。いずれも、Ⅴ期の古い要素を欠くと考えたからである。中西氏もこれらの土器に対し、「抽象文、縦位区画文の欠落した偏在したもの」と指摘している。

これらの土器群をⅤb期とした具体的な理由としては、玉抱き三叉文をもつこと、隆帯に沿う各

種の結節沈線は單列の施文が多く、三角押文の多用が目立つこと、Ⅴa期に比定した関東の牆柵遺跡や西上遺跡B地点下層の土器に比べて文様帶の崩れがみられ、各文様や区画内充填手法の簡略化が著しいこと、さらに、抽象文の素形と考えた土器や胴部が横走する沈線で多段化し、沈線間が斜線列で埋められた横帯文などのいくつかの新しい器種が出現していることなどをあげられる。

当時はたまたま中部地方ではⅤ期の資料が標準資料の新道遺跡1号住、九兵衛尾根3号住、後田原遺跡ぐらしかなく、しかもいざれも関東のⅤa期とした土器に比して簡略的な要素が多かったということが重なり、一括して新道式の新段階としてしまった。

しかし、その後、中部では荒神山遺跡（伴 1974）、大石遺跡等のⅢ期からⅥ期にかけての大遺跡の発掘によりⅤ期に比定される多数の住居址が検出されたが、住居址での伴出関係をみると先述したような從前の編年基準では前後が錯綜して説明のつかない組合せであった。

代表例として、大石遺跡3・19号住、荒神山遺跡103号住などがあるが、これらには、いざれもⅣ期に盛行する多段の橢円区画文の土器も多く含まれ、施文手法的にも一見するとⅣ期としてしまうものも含まれていた。また、從来Ⅴb期と考えていたような九兵衛尾根遺跡3号住などの標準資料的な土器もみられた。つまり、從来は新しいとしていた、沈線で区画された多段の横帯文の土器や玉抱き三叉文等が含まれていたということである。

このようにみると、從来の単純な定形的文様から簡略化あるいは崩れた文様へ変化するというⅤ期細分の考え方ではなく処理しきれないことはあきらかであり、Ⅳ期からⅥ期までの間、多系統的に分析を進める必要がある。

ところで、関東では神谷原遺跡でⅤb期の多くの住居址が発掘されたことにより、從来知られていた栗山遺跡B地点や山梨の中溝遺跡等に加えて具体的な内容が明らかになりつつある。

これらⅤb期の住居址では、先にあげたいくつの要素の他に、完成した抽象文土器や縦位区画文土器が含まれていた。しかし、新しい要素が加わっていると考へた中部の土器では縦位区画文や抽象文土器を欠くのが一般的であり、Ⅴb期の段階に下げることは困難である。逆に、從来新しいと考えていた多くの要素はすでにⅤa期に段階に出現していたとする方がより自然ではなかろうか。中部でも大石遺跡5、12、17、24号住のように神谷原遺跡と類似した組合せをもつ明らかに一段階新しい一群が存在しており、このことを裏付けていよう。

それにしても、関東のⅤa期に当る土器群は中部の各遺跡に比べて単純であるが、遺跡数が少なくて問題が残る。資料の増加をもってあらためて検討すべきであろう。

さて、このようにみると、かつての新道式の標準資料は、九兵衛尾根3号住がⅤa期に、新道遺跡1号住や後田原遺跡2号住がⅤb期に分けられよう。

Ⅴ期の阿玉台式は、西関東では前半がⅤb式、後半にⅤ式が伴出する。Ⅴa期に伴出したⅤb式の典型例に、西上遺跡の扇状把手と橢円区画文で口縁部文様帶を構成したもの（図版9-5）がある。子和清水遺跡252号住にも扇状把手を有する深鉢（図版16-11）がある。また、子和清水遺跡1号住には口縁が橢円区画文、胴部が多段の橢円区画文を重ねた例（図版16-13）もみられた。

池田遺跡（斯波 1976）（図版15-5）、動坂遺跡（安孫子他 1978）（図版9-13）では枝状縁の頂部を「U」状に寄せ、両側に区画文を配したものがあるが、いざれも出土土器がはっきり

しなかった。モチーフ的にはⅤa期に近いものであろう。

Ⅴb期に伴出する阿玉台Ⅱ式は神谷原遺跡にまとまつたもの（図版11—4、12、14）がある。波状線で、頂部片側から弓状の隆帯が下りて口縁部文様帶を区画する。文様は2本の刺突文列や沈線で描かれる。子和清水遺跡では扇状把手の阿玉台Ⅰb式的口縁をもち、2本の刺突文列で文様を描く土器（図版17—1）があり、阿玉台Ⅱ式段階でもこの系統が残ることを示している。

Ⅵ期

Ⅵ期は口縁部文様帶を欠く、いわゆる「パネル装飾文」の縱位区画文土器が比重を増し、勝坂式土器の変遷のなかでも大きな転換の時期にあたる。

文様帶の構成でも、Ⅶ期に一般化した三角区画文構成等の従前の口縁部文様帶を欠くものが普通となっている。文様施文手法は、Ⅳ、Ⅶ期では角押文、幅広爪形文、三角押文などの結節沈線手法が大部分を占めていたのに対し、Ⅵ期になるとこれらも粗大化して使われているが、区画内を密に埋める傾向も強まる。区画内を沈線列で埋める手法や区画内を繩文で充填するのもこの傾向の現れといえるだろう。

このような文様帶内の充填傾向は、Ⅶ期とくに関東ではその後半から始まっているが、さらに下ってⅧ期になると一般化する。

これらの特徴のみられるⅥ期は、もともと関東独自の勝坂式の範囲的分析から導びき出されたというよりは、井戸尻編年藤内Ⅰ式段階に相当するものとして抽出された土器群といえよう。近年西村氏の阿玉台式の編年が注目されているが、この編年も加味して検討されるようになった。なお、この段階は、井戸尻編年以前ではⅦ期と同一に扱われるが多く、明確に分離できなかったといえよう。

この段階の関東での主な土器群としては、日野吹上遺跡（図版13—1～8）、前原遺跡（図版13—3～15）、中山谷遺跡（肥留間ほか、1971）（図版13—9～15）がまとまつたものである。他遺跡ではいずれも数個体のみで、各類型の変遷過程に照らして抽出され土器群である。

まず、Ⅴb期の土器を中心に比較しながら各群をみていく。

1群の三角区画口縁部文様帶の土器では、Ⅶ期に一般化した区画内玉抱き三叉文を欠くことが多くなり、波状沈線などの簡略的なモチーフとなる。口縁部文様帶の区画内に三叉文のあるものでは、中山谷遺跡7号住（図版13—10）や神谷原遺跡S B 154号造構群（図版14—9）など数少ない例があるが、三叉文を中央に一つ配するのみとなる。将来はⅤb期に一般的な玉抱き三叉文や複列の爪形文、角押文等で空間を密に埋める手法の土器が出土することも充分予想されるが、今回提示した1群土器にみられるように、空間処理の簡略化の方向がこの時期の主流となるのは間違いないだろう。

Ⅶ期になると区画内を縦の沈線列で埋める手法へその中心が移るが、Ⅵ期と考えている中山谷遺跡7号住の例（図版13—11）ではすでにこの手法が存在しており、口縁の三角区画内の充填手法の上からもⅦ期は変換期であり、様々な変異をもつと考えられる。

胴部文様帶は上下の区画よりも区画内に描かれる隆帯文のモチーフにその中心が移っている。

2群土器は胴部に1群A類の文様帶をもつ土器であり、この土器につく無文の内壁する口縁はⅦ

期では一般化しておらず、この時期の口縁部のあり方を象徴するものであろう。

3群の抽象文、4群の縦位区画文の土器は、V期にきわめて近いモチーフをとる。

抽象文系土器はVI期にも残る。亜系のB類では地文繩文をもち、VI期と似たものが多いが、典型的のA類では地文が無文となったり、モチーフも崩れ、簡略化が著しく、基本的にはVI期までといえる。

縦位区画文土器は勝坂式を象徴する土器の一つだが、器面の分断法や文様区画手法に北陸の新崎式の手法が取入れられていることが最近明らかにされた（伴他 1976）。特に、器面の区画を半截竹管による半浮彫り状の隆帯で行う手法はVI期にあり、Vb期では定着し、多くのタイプの土器に採用されている。

Vb期の縦位区画文土器は爪形文、三叉文で埋める手法が加わって多くの種類を生み、この群の土器の比重を増している。文様帶の基本構成は主文様帶、副文様帶それぞれ1対が交互に配される。各文様帶は同一モチーフとなることはほとんどなく、細部は意識的に変形される。対応する区画文でも異った施文具で描かれたたり、同じ施文具でも異なるモチーフをとるのが一般的である。

この縦位区画文の土器は勝坂式の最盛期であるVI期に最も盛んに使われ、各種のものが作られる。また、文様モチーフも各文様帶が相互に入組んで横位に展開する傾向をみせるが、VI期ではまだ各文様帶の独立化傾向が強い。それぞれの区画文は縦長長方形を組合せたものが主であり、三角形や不規則に変形した区画文は少ない。

中山谷遺跡7号住の土器（図版13-10）は口縁部の橋状把手から延びる「S」字状隆帯が横走し、これを境に上半が爪形文、三叉文をもつ幅の狭い文様帶、下半は縦長の沈線列で埋めて区画文と異なった充填手法がとられる。中部では、口縁が強く屈曲し、屈曲部の文様が著しく発達している。「S」字状隆帯下の縦位区画文の構成はVI期の基本形といえよう。

長沢遺跡には口縁部下に刻目のある突帯の巡る縦位区画文の土器がある。中部ではこの突帯の著しく発達した土器がVI期を中心にみられる。長沢遺跡例は中部の基本形に近いものであろう。

なお、中山谷遺跡例にある勝坂式特有の口縁につく把手は、環状隆帯に沿って蛇様の沈状隆帯文が取りまいている。中山谷遺跡例が確実にこの段階とすれば、最も古い例となろう。

さて、この4群土器の最も早い段階の例にはVb期と考えた中溝遺跡1号住例がある。文様帶の構成、区画内充填も日野吹上遺跡の例とはほとんど変りがない。中溝遺跡の例を素直に解釈すれば、Vb期に既に存在していたことになる。事実、神谷原遺跡のVb期にはVI期以後に盛行する文様帶やその構成がみられる。仮に、明らかにVb期とできる土器を全く組合せて従来の編年基準に照すると、VI期に入れてしまうことが多いであろう。現在、神谷原遺跡の例から同一構成でも内部のモチーフが各段階で少しづつ異なり、一応区別できるようになったが、VI期にVI期と区別しがたい土器を含まないといきれない。中溝遺跡の例がこれにあたる可能性もある。しかし、現在までのところ他にこのような伴出例がなく、Vb期に出現していないとすれば、中溝遺跡の一括土器をVb期からVI期にかけた土器群とするか、あるいは、何らかの形で混入したと考えざるをえない。解決には今後の出土例を待つしかないであろう。

5群土器は多段の区画文の土器で、A類の梢円区画文土器はVI期に少なく、VI期で爆発的に増加

する。B類は全体を横に分帶したものであり、区画は一周した半截竹管による沈線である。

6、7群土器は口縁部文様帶1帯の土器で、胸部が纏文のみ土器である。6群の三角区画口縁部文様帶の土器は少量ながらどの時期にもみられる。本来の勝坂式土器からはずれた分帶のあり方といえる。7群土器はⅦ期になるときわめて少なくなる。Ⅶ期以後の口縁部には無文の内彎する口縁部が一般する傾向と相入れないためかも知れない。

以上、関東西部を中心にⅦ期とその前後の土器と比較しながら各群を概観してきた。しかし、関東のこの段階でまとまった土器群は数例を数えるのみで、しかも、断片的なものが圧倒的に多く、上記のように全体像は依然としてはつきりしていないといえよう。したがって、問題も多く残されるが、数少ない資料から判断して、いくつかの要素で前後の時期とは区分されるが、個々の土器の流れではⅦb期とのつながりが強いことも事実である。住居址内での組合せによっては、Ⅶ期と明確に区別しがたい場合もあるのではないかと考えられる。

西関東でⅦ期に伴出した阿玉台式は例が少なくはっきりしないが、貫井南遺跡16号住例(図版12-4)は爪形文手法ながら、文様分帶のあり方や各文様帶のモチーフから阿玉台Ⅰ式と考えられる。Ⅶb期に伴出した阿玉台式はⅠ式であることからⅠ式でも新段階となろうが、西関東だけで具体的な変化は追えず、東部の土器群を参照する必要がある。

関東中部にある下加須跡5号住例(図版18-1~10)は阿玉台式を主体とした土器群である。変形しているが勝坂式タイプの土器も含み、Ⅶ期段階にあたると思われることから、この時期の阿玉台Ⅰ式のあり方を知ることができる。

(4) 地域における様相

前項では西関東の勝坂式を中心に、各期ごと概観してきた。ここでは、東関東に分布の中心をもつといわれる阿玉台式を中心に地域の様相をみてゆくことにする。

Ⅳ期

Ⅳ期は2分して考えてきたが、この段階の埼玉以東の地域は阿玉台式の色彩が強いと考えらる。さらに、西関東でも既にみてきたように、この段階のほとんどの遺跡で阿玉台式ないしは阿玉台式の変形した土器群が勝坂式系の土器と共に共存している。また、分布域から離れた関東周辺の地域まで広がっている。

しかし、東関東に戻ってⅣa段階の阿玉台式が具体的にどのような内容をもっているかとなると、まとまった資料がないことや西関東の土器を伴出した例がほとんどないことから、明確な具体像を描くことは困難である。現状では西関東で伴出した阿玉台式土器から推定するしかない。

神谷原遺跡(図版7-17~21)の例では、西村氏の示した阿玉台Ⅰa式から変形した土器や口縁部区画間をつなぐ文様が「S」字状縫合となる阿玉台Ⅰb式に近い土器も含まれていた。藤の台遺跡3号、4号住の例(図版7-5、6、8)もⅠb式に近い土器あるいは簡略な文様しかもたない土器であった。このように、この段階の阿玉台式を西関東の例から判断すると、Ⅰa式から変形した土器群およびⅠb式に近いタイプの両者の土器群が予想され、Ⅰa式とⅠb古式の間に従来具体的な内容のはっきりしなかった一群の土器がくることになるのではなかろうか。

Ⅳb期の阿玉台式である鳴神山貝塚(図版16-1、2)、高根木戸遺跡(図版16-3~5)例はとも

に波状線をとるものが含まれる。これらは頸部素文帯に楕円区画文を加えたり、胴部を横に分帶する区画が加わり、胴部では懸垂文のみの素形的な阿玉台式からの変形を思わせる要素もある。最も素形に近いものとしては、本米の地域と全く逆になるが、西関東の千ヶ瀬遺跡がまとまっている。

阿玉台Ⅰb式は阿玉台式諸型式のなかでも最も広い地域に拡散している段階と説かれてきたが（能登 1981）、いずれも断片的なものであり、全体の組合せのわかる例はない。

Ⅰa式からの系統性をみると、扇状把手をもつ土器群は比較的スムースなつながりがたどれるが、波状線の土器は量が少なく、Ⅰa式と断絶もあり、Ⅳa期の阿玉台式が具体的にどのようなものかは今後に残された課題である。

埼玉で知られるⅣ期は全てⅣb期である。亀居遺跡（小泉他 1980）では、西関東の土器とともに阿玉台Ⅰb式の完形品の出土例がある。また、金堀沢遺跡（中島 1977）では、阿玉台式の浅鉢3個体（図版15-12～14）を中心に、Ⅳb期にあたる落鉢式の深鉢の破片も相当量出土している。最も千葉に寄った風早遺跡（背木 1979）でも破片資料ながら西関東系の土器の量がかなりあり、全体に占める阿玉台式の比重が高いとはいえる、両者は相応の割合で共存する関係となっていたようである。

V期

Ⅴ期の阿玉台式は西関東の勝坂式との併出例から前半をⅤb式、後半がⅤ式にあたる。しかし、Ⅴa期の埼玉以東では良好な例は少ない。子和清水遺跡1号住（図版16-12）や252号住（図版16-10, 11）が考えられるが、いずれもⅤb期となる可能性もある。

埼玉のⅤa期としては勝坂遺跡の土壙から出土例（図版15-7～9, 11）がある。角押文1列の阿玉台Ⅰb式が抽出できるが、胴部に楕円形区画文を配するなど、勝坂式的な文様帯も加わる。池田遺跡（図版15-5）には頂部の窪む波状線の土器があり、本来の阿玉台式の器形、文様構成をとる。

このように、埼玉のⅤa期は勝坂遺跡1号住の3群A類の西関東系の典型があるとはいえる、阿玉台式が本来に近い形でみられる地域ではなかろうか。

Ⅴb期の阿玉台式で確定的なものはいずれも西関東の勝坂式と共に併出した土器群である。本来の分布域ではっきりしないのは、従来知られている阿玉台Ⅰb式、Ⅴ式と比較した場合、口縁の違いが大きすぎて系統的なつながりが追えず、またⅤ式の関東西部での併行関係がⅤb式とⅤ期の2段階にまたがり、明瞭な勝坂式との併出関係をもつ例が少ないとなどの多くの原因がある。

子和清水遺跡33号住（図版17-1～3）は三角区画口縁部文様帯の土器と阿玉台式土器が併出した、勝坂式との関係のわかる数少ない例である。この阿玉台式は口縁区画内に2列の角押文が巡ったもので、Ⅴb期の西関東ではまだ例の少ない扇状把手をとったものであった。この例はⅤ式段階でもⅠb式の扇状把手の系譜が引続いて残ることを示す。しかし、西関東では波状線系統のつながりははっきりしない。

近年、阿玉台Ⅰb式からⅤ式にかけての良好な資料として千葉の藤立遺跡（図版16-15～25）、朽木の石神遺跡（川原他 1982）が報告された。いずれも勝坂式がほとんど出土しておらず、直接の対比は難かしいが、阿玉台式の変遷と西関東での併出関係から判断して、Ⅴb期に相当するものが主と考えられる。

波状縁の土器では、神谷原遺跡のような平坦な頂部の一端から曲線の隆帯で器面を分割するものではなく、波頂部を大きく「U」字状に窪ませた短い隆帯で区画するもの、富士山型の波頂部から隆帯が下りるもの、「Y」字状隆帯で口縁部文様帯を区画するものなど、Ⅶ期に後続する土器群が検出されている。

このようにみると、子和清水遺跡111号住（図版17—4）の富士山型の波状縁の例もⅦb期とすることができると思われる。

Ⅷ期

西関東のⅧ期はⅦ期に比べて著しく少ない。日野吹上遺跡、前原遺跡がまとまっている他、中山谷遺跡7、8号住、宮田遺跡、貫井南遺跡、讃岐山遺跡が代表的なところである。

埼玉ではⅧ期1群をもつ東洋大工学部敷地内遺跡（大農他 1972）3号住例（図版15—21～24）があり、西関東の組合せであった。これに対し、下加遺跡5号住（図版18—1～10）は阿玉台式が多量に出土した例である。併出している勝坂式の要素をもった土器の主なものに、円筒形で横に数段分帶する土器と8単位の内輪する波状縁で各単位の膨らむ独特の口縁がある。いずれも西関東の土器とはかなり異なる。

横に分帶する土器（図版18—8）はⅦb期にもかなりみられるが、口縁に幅広の無文帯をもつこと、幅広の文様帯で加わること、2段目の文様帯内に下端から立上がる渦を巻き、縱位区画的な小区画文が構成されること、さらに隆帯に沿う爪形文も1列の部分が多いことなどⅦb期のものより新しい要素をもつ。

後者の独特的波状縁の文様帯（図版18—10）は、中部の藤内遺跡特殊遺構、北丘B遺跡（小池他 1973）2号土壇に例があり、いずれも藤内I式段階に当る。

下加遺跡の阿玉台式土器がすべてI式であることからⅦb期とする意見もあるが、本稿では一段階新しいⅧ期と考えておきたい。

下加遺跡の阿玉台式は2列の角押文が多用され、I式と考えられるが、波状縁の土器がなく、明確な時期は比定しがたい。また、多段の横円区画文の土器（図版8—2）があるが、子和清水遺跡92号住（図版17—5～8）にも類似した例がある。Ⅷ期段階のものと考えられる。

下加遺跡より東の岩槻支台にある西原遺跡（小川 1972）9号土壇出土の土器（図版18—11～13）もこの段階のものであろう。三角区画口縁部文様帯をもつ土器、貫井南遺跡16号住のような変形した三角区画口縁部文様帯内に2列の角押の巡る土器である。三角区画口縁部文様帯の土器は、千葉の子和清水遺跡にも多くみられ、共通したものである。

併出した勝坂式タイプの土器からこの種の土器がⅧ期の東関東にあることを示していよう。

このように、埼玉の西部では西関東的な土器のものもあるが、大宮台地以東では阿玉台式の色彩がかなり強い地域であることは間違いないであろう。

千葉では子和清水遺跡の92（図版17—5～8）、149（図版18—14～21）、106（図版17—9～16）、117（図版18—17～20）号住が良好な例である。これらに併出した勝坂式系の土器は、106、149号住では爪形文で区画を埋めた縱形区画文の土器（図版18—20）、117号住では抽象文系の土器や、抽象文土器の口縁部文様帯をもつ横帯区画の土器がみられた。

この他の勝坂式の土器としては、三角区西口縁部文様帯の一群の土器（図版18—14、18）があるが、モチーフの4単位化、粗大化、縁帶に沿う爪形文の間隔の荒さなど東関東の土器に変質している。

VII期になるとこの種の土器は大きく2つに分かれ、VII期と同構成で展開するものと、阿玉台式の文様帯や口縁部の文様要素をとり入れた柄木の湯坂遺跡（海老原他 1979）や横沢遺跡（海老原他 1980）にみられるような阿玉台Ⅱ式へと変化したものとがある。

この時期の阿玉台式土器は、腹部に多段の梢円区画や細長い長方形区画文、縦長の三角区画文帯をとるなど、勝坂式の文様要素を多く取入れている。

波状線となる土器は突起状の波状であり、水平な部分が増えている。波頂下に、「Y」字状懸垂文がつくことではVb期の系譜を引き、系統的展開を読みとることができよう。

いずれにしても、2列の角押文をとることで阿玉台式の色彩が濃いとはいえ、勝坂式の影響による阿玉台式の変質は疑いえない。

なお、117号住には大形把手がつき、口縁上端の細長い梢円区画下に三角形を置く土器（図版17—20）がある。三角区画には底辺から延びる渦巻文が配され、地文に縦文をもつ土器であり注目される。口縁部の三角区画は関東のⅢ期、大木式系の土器のなかにみられるものであるが、系統的にみると大木式系の三角区画文とつながる土器といえるだろう。東北中部から北部の大木8a式にも口縁部文様帯として用いられるが、子和清水遺跡例はまだ大木8a式とはいらず、VII期が大木8a式成立以前の段階であることを示していよう。

（谷井 雄）

第4節 VII期、VIII期

(1) 時間軸としての時期設定

本項で対象となるのはVII、VIII期である。VII期は井戸尻編年に対比すると（藤森 1965）、藤内Ⅰ、井戸尻Ⅰ式に相当する。この段階は、VII期の土器群から直接系統のたどれる土器群や、新たに成立了した土器群を混え、複雑な状況を呈している。

従来の藤内Ⅰ式の土器群を検討してみると、住居址出土資料には、共通した土器群もあるが、偏りが大きい。従来の編年観から言えば、古い様相をもつ土器群が主体となる場合や、それらをもたない土器群があるため、一概に新旧（藤内Ⅰ、井戸尻Ⅰ式）を論することはできない。したがって本項では、両者をまとめ、VII期とした。本段階に並行する東関東の土器群に阿玉台Ⅱ式土器（註1）がある。

VII期は勝坂式の終末段階であり、従来の井戸尻Ⅰ式に相当する。本段階の土器群は、VII期と比較して、器種が限られてくるが、文様要素自体はVII期の系統を引くものが主体で、各種に様々な文様を施してゆくなど、バリエティーが多くなる段階である。本段階には多聚丘陵を主体に、いわゆる梯形文系土器群がある。

VII期に並行する東関東の土器群には、阿玉台Ⅱ式、中峰式（註2）があり、北関東では大木8a

式（註3）がある。各々の土器群には、研究者間で意見の相違が著るしく、土器自体も量的に充分とは言えないため混乱した状況にある。

いわゆる中峰式土器については、型式としての認定に疑問もあるが、本稿では、東関東に分布の中心をもつ土器群として概括的な意味で用いており、後続するⅦ期にまで残ることが想定される。

本項ではⅦ、Ⅷ期の土器群について、各々土器群の分類を行ない、その後、各段階の土器群の構成について、住居址一括資料を加味し、系統、地域性について論述べてゆく。

註1 阿玉台式の概念は、本稿では西村編年に従った。なかんずく、阿玉台式土器細編と、勝坂式編年との対比は、その後の研究に大きな影響を与えていた。

註2 中峰式土器という名称が適切か否かの議論は、本稿の目的からはずれるので、混乱を避けるため、従来の型式名に従った。

註3 大木8a式は、地域性の強い土器群であり、一括呼称するには不都合な面が多い。また、特徴的な胴部文様のあり方は、周辺地域を含めて、その成立、展開は今後、検討が必要である。

(2) 土器群の分類

Ⅶ期 勝坂式土器（9図）

1群土器

口縁部に三角連續区画文をもつ土器群である。基本的には、口縁、胸部上半、胴下半と3つの文様帯をもつ。三角区画の連接部分は独立化し、弧状を呈するようになる。

A類（1）3帯の文様帯をもつ。胸部文様1単位を大きくとり、縱位に区画する隆帯に接し、渦巻文をもつ。

B類（2）胸部文様帯が大形の三角連續文で構成されるもの。文様空白部は沈線、三叉状文などで充填するもの、隆帯のみのものなどもある。

C類（3）胴部文様が平行四辺形の連續文で構成されるもの。量的には少ない。

D類（4）前類の基本的文様帯構成をとらず、頭部が文様帯に転化した土器群である。

2群土器

A類（5）口縁部が素文となる土器群。器形は1群土器に類する。幅の広い胴部区画内に渦巻き文をもつ。充填手法など、第Ⅵ期と比較すると省略化が窺える。

B類（6）A類に含まれない土器群。縱位区画と「J」字状の陸帯文で構成される。「J」字状陸帯の端部は円錐状になる。その他、口縁部が文様帯に転化したものもある。文様帯構成はA、B類とも1群に近い。

3群土器

縱位区画文の土器群である。Ⅵ期にあり、Ⅶ期ではバリエーションの多くなる土器群である。口縁が円珠をもち、胸部下半で括れをもつ器形が多くなる。文様帶1単位の幅が広くなり、文様帶の位置も上升してくるのが特徴である。本群はⅧ期で終息する。

A類（7）縱位区画文の基本的な構成をもつもの。Ⅵ期と比べ各文様の1単位が幅広く、比較的幅広い長方形モチーフの組み合わせで構成される。

B類（8）文様が曲線的陸帯文、三角形の組合わさったモチーフなどで構成されるもの。Ⅶ

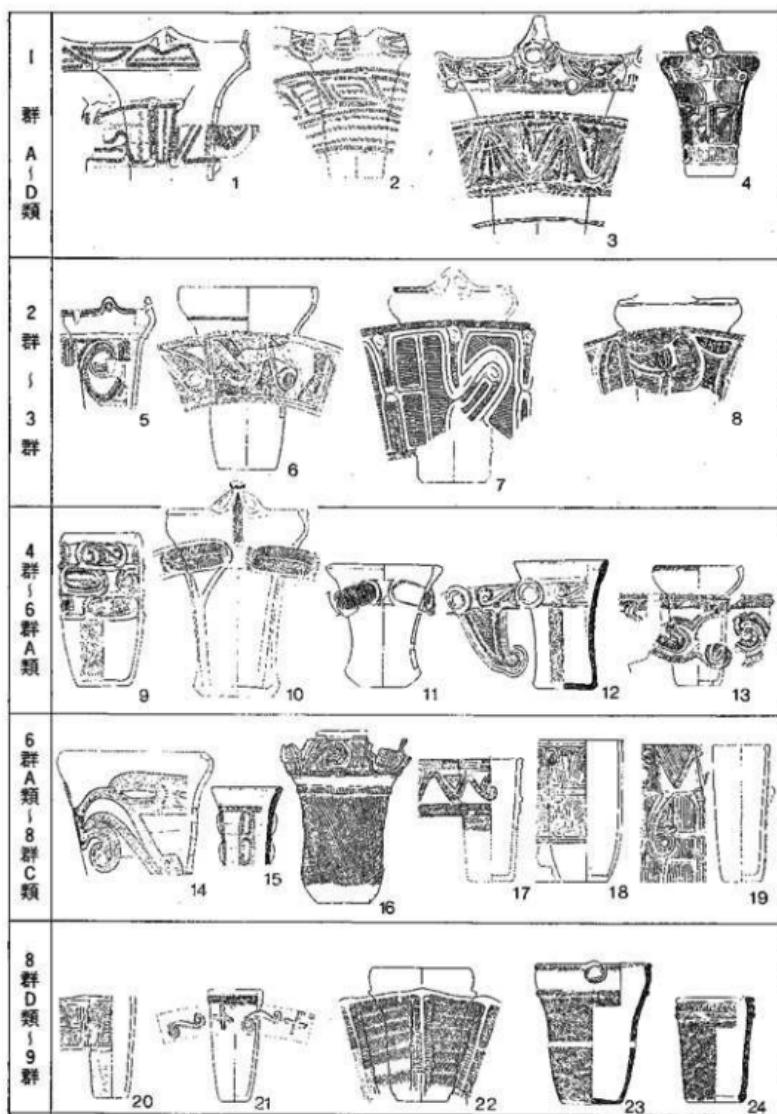


図9 青期土器の分類表(勝板式系)

期のバリエーションの1つと考えられる。

4群土器(9)

多段横円区画文の土器群である。器形はおおむね円筒形になり持形を呈するものもある。横円形モチーフは交互にずらしながら配され、器全面に巡るものや、胴下部を残すものなどがある。Ⅶ期の特徴となる土器群である。区画内部は、爪形文の巡るもの、縦位平行沈線間を連続「コ」の字文で充填するもの、「S」字文、爪形文や波状沈線をもつものなどがあり、それぞれが組み合わさって充填される場合が多い。

5群土器

口縁下に一段の横円区画文帯をもつもの。口縁部は素文となる。Ⅶ期以降Ⅷ期に統く、4群同様区画内充填手法にはバリエーションが多い。

A類(10) 口唇が円味を帯び、口縁が直立気味となるもの。

B類(11) 無文の口縁部が外方に強く開き、口縁下に一段の横円区画文を配するもの。

C類(12) B類と共通した器形をもつが、端部が渦巻く「S」字状縫帶をもつもの。B、C類でも量的には多くない。C類は7群とも共通する要素をもつ。

6群土器

抽象文土器である。中部地方ではⅥ期には大変少ない。西関東ではⅦ期以降Ⅷ期にまで統く。地文縄文は少くなり、口縁素文や、口縁部に文様をもつものなどがある。器形は円筒形や、口縁が外反し、円味をもつものなどがあり、胴部の輪積み痕は不明瞭となる。

A類(13~14) 横位展開の文様をもつもの。大型爪形文、沈線で文様表出するものが主体だが、爪形文のみで隆帯構成の土器、口縁素文の他、縦位沈線をもつ2带構成のものもある。

B類(15) 草履虫状モチーフを口縁直下に配したもの。量的には少ない。

7群土器(16)

口縁部文様帯をもち、胴部は地文のみのもの。口縁はキャリバー形で、胴部は下半で張る。口縁部文様は三角区画文のものや、1群と共通した文様をもつものなどがある。

8群土器

円筒深鉢形をまとめた。本群はⅦ期に統き、終末段階の主体となる土器群である。

A類(17) 三角形連続文をもつもの。胴部文様帯下端の区画が抜けたものもある。

B類(18) 文様はA類に類似するが、2段の文様帯をもつもの。

C類(19) 2段の文様帯をもち、胴部が縦位区画文的モチーフをもつもの。

D類(20) 1段の縦位区画文的モチーフ構成をとるもの。

E類(21) 文様が「S」字文と「十」字文からなる土器。量的には少ない。

9群土器

上記以外の土器を一括した。器形、文様のあり方から分類した。

A類(22~23) 口縁が素文で、胴部は地文のみのもの、あるいは懸垂墻帶文が付くだけのもの。

B類(24) 口縁下に連続爪形文、交互刺突文帯の連続するもの。岳ノ上遺跡SB3(服部1971)にまとめたものがある。

VII期 阿玉台式土器（10回）

VII期に併行する阿玉台式土器は、西村編年のⅡ式に相当する。大形爪形文を隆帯に付隨させた土器が主体であるが、2本並列の角押文をもつ土器群も小量存在する。基本となる一括資料に子和清水遺跡160、104号住の土器群（松戸市教委 1978）があるが、他には良好な資料が乏しい。本項では、子和清水遺跡160号住を主体に分類した。細部にわたる検討は今後の資料増加による部分が大きい。

1 群土器

隆帯に並列角押文の付隨する土器群。阿玉台Ⅱ式に顕著な手法であるが、個々の土器群をみると、波状線の形態、口縁部モチーフ、隆帯のあり方等は、より新しい様相をもつ。今後検討が必要とされよう。

A類（1） 富士山形の波状口縁把手をもち、胴部に蛇行する懸垂文をもつもの。

B類（2） A類と同様の口縁部をもち、胴部は「ハ」の字形に開くモチーフをとるもの。

C類（3） 口縁部が三角区画文の土器。三角区画文は新道式以降展開したモチーフであり、阿玉台式の文様帶構成に新らしく取り入れられた土器群であろう。

D類（4） 胴部に「X」字状モチーフをもつもの。基本的な形態はA～B類と大差なく、一系統のバラエティーしてとらえるべきかもしれない。

2 群土器

隆帯に大形爪形文の付隨する土器群。阿玉台Ⅲ式の最も特徴的な土器群である。口縁、胴部に文様帶をもつ深鉢形土器をまとめた。

A類（5） 胴部文様に円環状の隆帯をもち、クランク状構成をとるもの。Ⅲ式の特徴的な土器群であり、本段階で成立したものであろう。胴部文様帯が下半で区切られるものが最も多い。

B類（6） 胴部文様は横位に巡る隆帯に接して「ハ」の字状に開くモチーフをもつもの。胴部の区切られるものは少ない。1群B類と共通した構成をとる。

C類（7） 胴部文様が三角連続文で構成されるもの。

D類（8） 胴部文様は縱位区画文的モチーフで、胴部を区切るものと区切らないものがある。

E類（9） 胴部に「Y」字形懸垂文をもつもの。「ハ」の字形懸垂文とともに量的には少ない。

3 群土器（10）

胴部文様帯が2段構成をとるもの。本群の分帯のあり方は、勝坂式土器と共通する。東関東における該期の特徴を示す土器群である。

4 群土器（11）

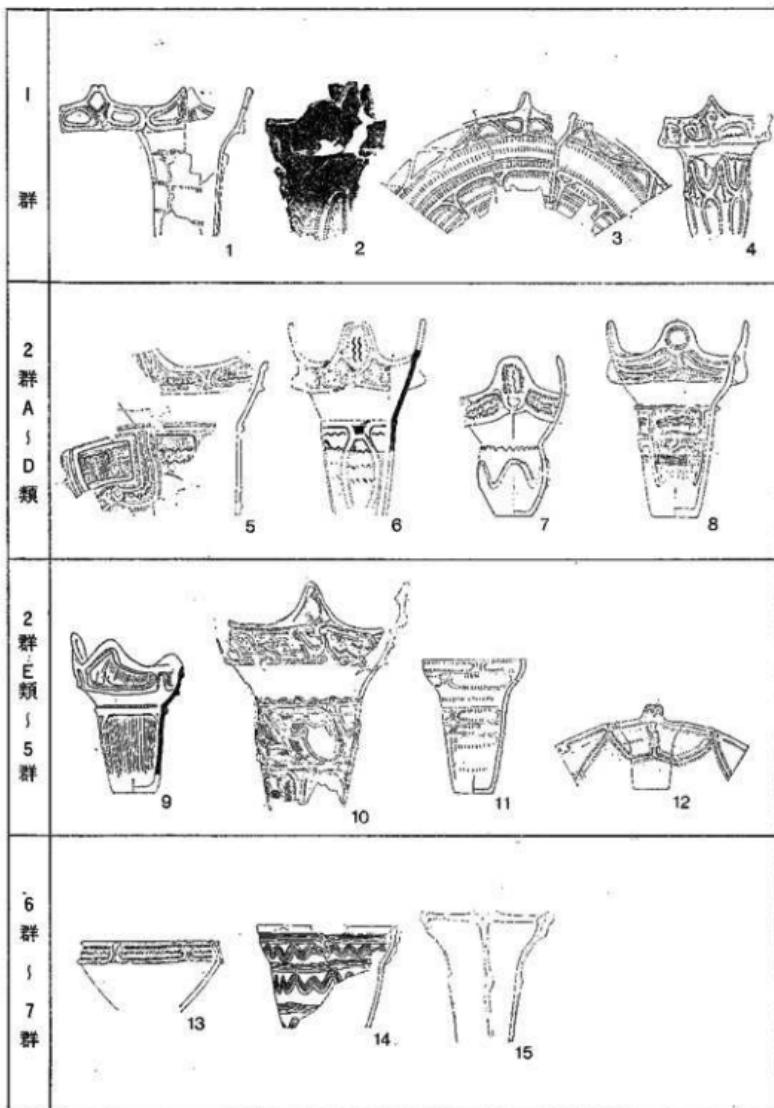
胴部に梢円区画文を重層したもの。平縁の他波状線のものもあるが、量的には少ない。

5 群土器（12）

口縁から胴部にかけて文様の展開する土器群。口縁の突起を中心とした三角形文様を構成する。子和清水遺跡106号住、西原遺跡9号土壙出土土器と比較して、文様が大形化、懸垂文の消失、大形爪形文の採用など、明らかに後出的要素をもつ。

6 群土器（13）

浅鉢形土器。口縁部は内彫し、梢円区画文のみで、爪形文、波状沈線文などが施される。



10圖 VII期土器分類表（阿玉台式系）

7群土器

上記に含まれない土器をまとめた。

A類（14） 楊状工具で波状文を描く土器。

B類（15） 無文で、口唇上の把手から陸帯の垂下する単純な構成。把手のみのものもある。

VII期 勝坂式土器（11図）

1群土器

A類（1） 無文の外反する口縁下に一段の梢円区画文帯をもつもの。区画内を沈線が巡り、空白部に継位沈線、「S」字状沈線、末端に渦巻く沈線などが充填される。三叉状沈線も加えられることが多い。VII期4群A類に続く土器群である。

B類（2） 口縁直下に円形と直線を交互に配し、全体に鋸歯状構成をとるもの。

2群土器（3）

口縁部に文様帯をもつ土器群。器形は1群に類似し、口縁部のモチーフや充填手法などはVII期1群と比較して省略化が窺える。

3群土器

円筒深鉢形土器である。VII期と比較し、文様帯が上半部に集約する傾向がある。口縁が無文帯となるものや、無文帯をもたないものなどがある。文様モチーフはバラエティーが多い。文様帯、文様構成から分類した。

A類（4） 文様単位を幅広くとり、内部を直線、円形隆帯との組み合わせによって2等分するモチーフを描くもの。他に直線のみによって描かれるものがある。「レ」の字状文を配するものなど、バラエティーが多い。

B類（5） 文様構成に幅広いものと狭いものの2者からなり、モチーフが沈線で描かれることが特徴である。VII期8群D類に続く。

C類（6） 半円形の上下対向するモチーフ構成をもつ。口縁部には沈線、三叉文等が加えられる。

4群土器（7）

口縁がラッパ状に開き、胴上半～下半にかけて文様帯をもつ。文様は1単位の独立した構成となり、渦巻き状の張り出し部がある隆帯文をもつ。

5群土器（8）

広い口唇無文帯とキャリバー形の口縁部文様帯をもつ土器群。

6群土器（9）

広い無文帯と2段の張り出した器形をもつ。文様は胴上半に限られ、垂下する隆帯を基本にモチーフ構成される。2群A類と共通したモチーフをとる。

7群土器

いわゆる「梯形文土器」と呼称される土器群。VII期に新たに出現する。4単位構成が特徴で、文様帯は、頸部無文帯を挟んで口縁、胴部の2帯構成をとる。底部が算盤玉状に張り出す。

A類（10） 脊部に「梯形文」をもつ。梯形文土器の典型例。内部は継位沈線で充填される。



11図 隋期土器分類表（勝坂式系）

B類 (11) 口縁部文様帯のみで、胴部は無文となるもの。

C類 (12) 口縁に大形把手を4単位に配しただけのもの。把手は4単位の他、2単位構成のものも存在する。

D類 (13) 地文のみで、文様帯をもたないもの。

8群土器 (14)

外反する無文の口縁と直線的な胴部をもち、4単位の隆帯が懸垂する。地域的に限られている。

VII期 阿玉台式土器 (12図)

VII期に並行す阿玉台式土器は、西村編年のV式が相当する(註7)。V式からの系統をもち、隆帯に沈線が付随する土器群である。

1群土器

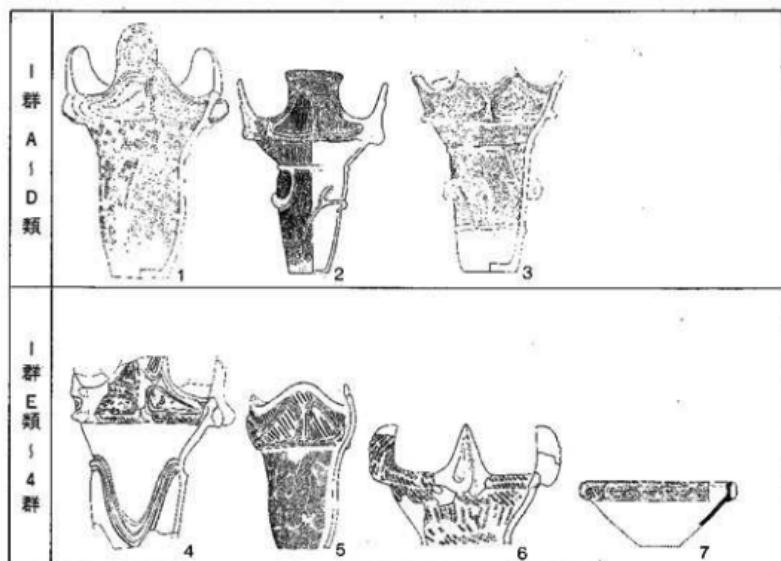
口縁部、胴部に文様帯をもつ。3~4単位の大波状口縁をもち、胴部文様帯を区切るものと区切らないものがある。

A類 (1) 胴部文様帯に区切りをもたず、胴部が「ハ」の字形隆帯で構成されるもの。

B類 (2) 胴部文様が区切りをもたず、クランク状隆帯文をもつもの。

C類 (3) B類と同様のモチーフをもつが、胴下半で文様帯を区切るもの。

D類 (4) 胴部文様帯が区画的モチーフ展開をもつもの。前類と異なり、懸垂する隆帯の一



12図 VII期土器分類表（阿玉台式系）

部に張り出し部をもつ。

E類（5） 胸部文様が三角連続文で構成されるもの。

2群土器（6）

胸部に文様帶をもたない深鉢形土器。胸部は地文のみで、大波状口縁をもつ。

3群土器（7）

口縁に把手のみをもつ深鉢形土器。口縁の把手に接して「Y」字文が垂下するものもある。

4群土器（8）

浅鉢形土器である。口縁部にのみ文様帶をもつ。口縁部は梢円区画文で構成され、内部は縦沈線、交差刺突文等で充填される。

VII期 中晩式土器（13図）

1群土器

口縁部が頸部で屈曲し、ゆるやかにすぼまるもの。口縁部文様帶は幅が狭く、文様帶、文様のあり方から3分類される。

A類（1） 口縁部文様帶と副部文様帶が沈線によって分帶され、無文の頸部をもつ。口縁部には4単位の突出が付され、連続「コ」の字文帯が複列に施される。この種の土器には、胸部文様をもつものがある。

B類（2） 器形、口縁部文様はA類と共通するが、胸部を分帶しないもの。

C類（3～5） 器形、文様帶構成はB類に同じだが、口縁部文様が沈線とそれを埋める爪形文の土器群。A～C類共に平縁が一般的である。

2群土器

器形、文様帶は1群とはほぼ同様の構成だが、縦沈線の充填を主としたもの。

A類（6） 縦沈線の充填手法をもち、胸部の分帶をもたないもの。

B類（7） A類と同様のモチーフをもつが、沈線により口縁部、胸部の各文様帶を分帶するもの。A、B類共に2単位の対向する把手を有するものが多い。

3群土器

口縁下の括れ部に隆起文をもつもの。文様帶構成及び文様から4分類される。器形は1群と共通する。

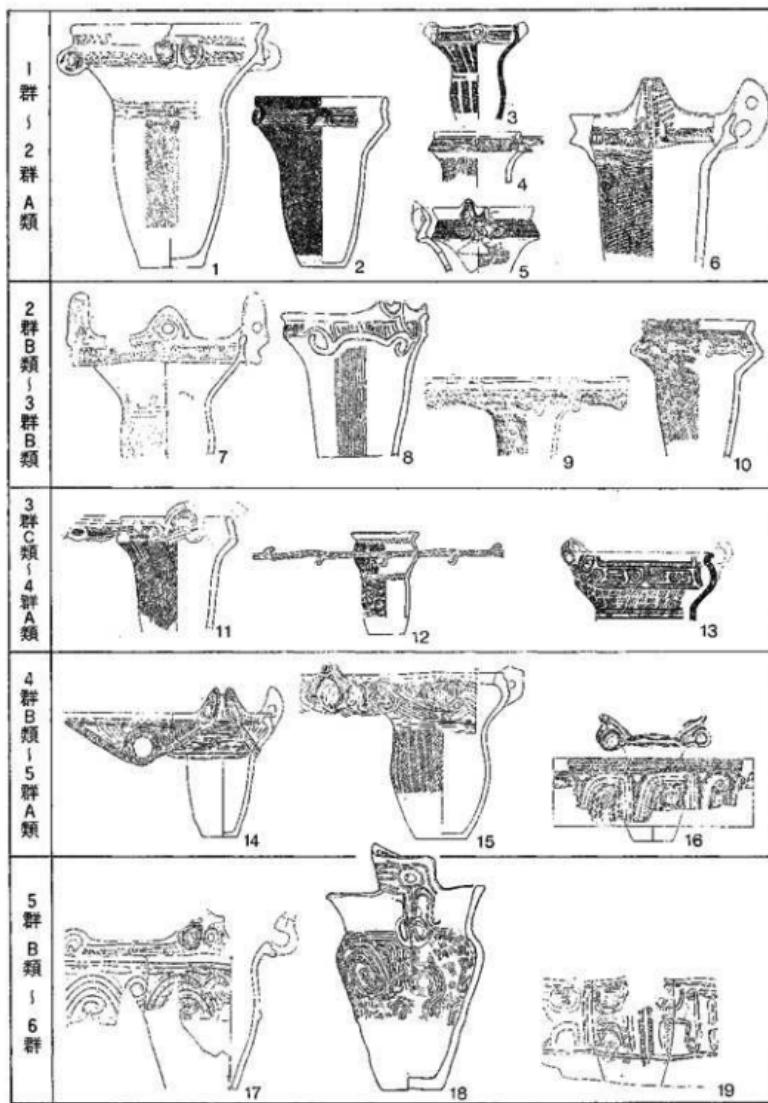
A類（8～9） 端部が渦巻く直線的隆帶や「S」字状隆帶を口縁に配したもの。文様空白部分の充填は、縦位沈線のみのもの、横位と縦位沈線の組合せられたものがある。口唇無文帶下に連続「コ」の字文全局の有無がある。

B類（10） 蛇行する隆帶文をもつもの。口唇下には連続「コ」の字文が全局する。

C類（11） 幅の狭い口縁部に梢円と直線的な隆帶の組合せ文様をもつ。梢円形文及び文様帶の空白部は縦位沈線で充填される。

D類（12） 口縁部文様帶が区画され、やや幅広い文様帶をもつ。口縁部には「S」字状隆帶が貼付される。この他「S」字と直線の隆帶からなるものもある。

4群土器



13圖 雜類土器分類表（中古式系）

キャリバー形土器群をまとめた。文様帯、文様構成のあり方によって分類した。他の器種同様口縁無文帯をもつものが一般的である。

A類（13） 区画的モチーフ構成をとる土器群。文様は1単位ごとに独立しており、内部には曲直線の沈線文様が描出される。

B類（14） 口縁上の2単位の大把手を中心に、円形隆帯を連結する文様構成をとる。2単位構成が主で、文様空白部は幅広い縦沈線で充填される。

C類（15） 頭部をめぐる横位の沈線で文様帯を区画する。把手を中心曲線的な隆帯文をもつ。文様空白部は三叉文、沈線等で充填される。3群C類と共通した文様もある。

5群土器

幅の狭い口縁部と、ゆるやかに張る胴部に文様帯をもつもの。文様帯は胴上半に位置するものが多いが、下半部にまで及ぶものも存在する。文様は沈線描出される。

A類（16） 口縁に2対の把手をもち、胴部文様は縦位区画的なモチーフ構成をもつもの。

B類（17） 脇部の張りが強く屈曲気味で、上半部に文様帯の位置するもの。4単位の把手をもつものもある。胴部文様は複列の沈線で描出される連続的モチーフをもつ。

C類（18） 5群A、B類の口縁部文様帯の省略された土器群である。複列の沈線による懸垂文と横位文様の組合せをもつ。ほぼ勝坂Ⅲ期3群B類に近い文様構成である。

6群土器（19）

勝坂式の小形円筒深鉢形系統の土器群である。いずれも沈線で文様描出され、細部の省略が著しい。5群C類も含めて、勝坂Ⅲ期よりも後出的段階が想定される。

（3） 土器群の構成

Ⅴ期 勝坂式土器

勝坂式の最も発達し、後続するⅥ期とともに、遺跡が増加しているが、基本的にはⅤ期から継続する土器群で構成される。この段階には、区画内を沈線で充填する手法が一般的だが、第1群土器のように、隆帯に爪形文ないしは角押文の付箇する土器群も存在する。

この段階の主な遺跡に、貫井南遺跡6号住（図版21—1～22）、多摩ニュータウンNo.46遺跡（安孫子他 1969）7、8号住（図版20—1～21）、恋ヶ窪遺跡（秋山 1979）3号住（図版22—1～8）、貫井遺跡（実川他 1978）2号住（図版23—11～26）、同6号住（図版22—9～25）、四上遺跡B：地点上層（図版23—1～10）、埼玉県では、松ノ木遺跡（荒井 1980）30号住（図版19—8～13）、舟山遺跡（谷井 1980）1号住（図版19—1～8）などがあげられよう。

先行するⅣ期との比較から、この時期の土器群の特徴をみてみよう。Ⅴ期の代表例には、日野吹上遺跡1号住、貫井南遺跡16号住、讀嶺山遺跡などがある。

1群土器は、新道式以降展開する土器群である。胴部に2段の文様帯をもつ構成は変わらない。A類は、胴部に円環状斜帯をもつものや、クランク状構成をとるようになる。口縁部三角区画文は、端部に円味を帯びたり、荏田第10遺跡（坂上 1971）2号住のように、独立的な構成をとるものが多くなってくる。

3群土器はⅤ期に最も発達・分化した土器群であり、この時期の特徴をよく示している。

4群土器はⅦ期でも少量みられたが、Ⅷ期で最も発達する。区画内には、縦位の沈線や、交互刺突文などを充填したり、区画内を斜めに分割する西上B: 地点上層例や、区画内を「S」字的に表現したものなど、5群土器と共通するあり方を示す。なお、本群は、Ⅷ期で終る。従来、藤内Ⅰ式の主体的土器とされ、出土例も多い。岳ノ上遺跡（服部 1972）SB3、西上遺跡B: 地点上層では、本群がまとまった出土をみせている。

5群土器はⅧ期以降、Ⅸ期にわたって存在する土器群である。4群土器と共に、安定した出土を示す。5群類は、貫井南遺跡6号住で主体を占めている。

6群土器は、関東ではⅧ期に入りても継続して存在するが、口唇が円味をもち、口縁が外反するものや、口縁部が素文化、または文様帶に転化するなど、Ⅷ期で分化する土器群である。基本的なモチーフ構成はⅦ期と大きな変化はない。なお、本群もⅨ期には極く少いようである。

7群土器は、日野吹上遺跡5号住などの系譜から展開する。口縁部の渦巻文や梢円区西文をもち、2群土器の胴部文様などのモチーフと類似する特異な土器群である。量的に多いとはいえないが、文様帶、文様構成は定型的である。

8群土器は、7群同様、Ⅷ期に最も発達する土器群である。Ⅷ期のA～D類の基本的な文様帶構成、モチーフは継続して展開する。

次に、各住居址毎の出土土器を検討してみることにしよう。

多摩ニュータウン№46遺跡7号住は、3群A類、4群A～C類、5群A類等の組合わものをもつ比較的まとまった資料である。ほぼ同様の組み合わせをもつものに、貫井南遺跡6号住があげられよう。岳ノ上遺跡SB3では、4群を主体に地文纏文のみの9群B～C類からなり、Ⅷ期にあってはかたよった特異な土器構成である。西上遺跡B: 地点上層、貫井遺跡6号住例では、4・5群が主体であるなど、遺跡間での土器構成はばらつきが大きい。

Ⅷ期での1群土器の占める位置は特異である。佐藤透夫氏が「関東風の勝坂式土器」（註4）と呼称した一群に近く、多摩ニュータウン№46遺跡2号住、若干異なる構成だが、胴部に円窓状隆帯をもちクラシック状に構成される恋ヶ窪遺跡3号住（図版22-6）、貫井南遺跡6号住（図版21-1）例がある。従来、このタイプの土器群を含む遺跡を古く、これをもたらす4～5群を主体に構成される西上遺跡B: 地点上層などを新しくする考えもあったが、住居址ごとの出土土器内容が、必ずしもまとまった出土とは言い難く、遺跡間の偏りが多いこと、両者に共通して出土する4・5群土器を検討するとその文様帶構成や区画内光景手法に共通性の強いことなどから、1～3群や6群土器をもつ多摩ニュータウン№46遺跡8号住、恋ヶ窪遺跡3号住等と、それら土器群を含まない西上B: 地点上層などの土器群を一段階と考えた。多摩ニュータウン№46遺跡8号住は、隆帯に付随した大形爪形文の土器群からなり、該期にあっては特異な例であろう。

従来の井戸尻編年では、藤内Ⅰ式と井戸尻Ⅰ式土器を分離して考えていた。しかし、松村恵司氏も指摘したごとく（註5）、藤内Ⅰ式→井戸尻Ⅰ式土器の設定が疑問であったこと、関東を編年軸とした場合、Ⅷ期藤内Ⅰ式→Ⅸ期への変遷が確認されるが、Ⅸ期では、井戸尻編年、井戸尻Ⅰ式をも含む土器群となっていること、Ⅸ期にほぼ併行する重郎原遺跡（上川名 1972）や荒神山遺跡（伴1974）48号住を比較してみても、共に3・4群に共通性が強い。従って、本稿では井戸尻編年の井

戸尻 I 式を含め、一括して VII 期として扱った。なお、1 群土器は、関東に中心をもち、阿玉台式と密接な関連をもつ。本段階には、西村編年の中玉台 II 式が並行するが、両者の関連については、さらに、今後の検討が必要となろう。

VII 期 勝坂式土器

井戸尻編年の井戸尻 II 式に並行する段階である。

本段階は、VII 期から変遷したものや、新たな土器群などを混える。遺跡数も多いが、各土器群は、爪形文が消失し、区画内の沈線充填手法が中心となる。器形も比較的単純で、各系統のモチーフを集約的に施す傾向が窺える。勝坂式の終末の段階である。

この段階の遺跡には、瀬山遺跡（佐伯 1982）8 号住（図版 28-1～7）、貫井南遺跡 5 号住（図版 28-8～16）、同 15 号住（図版 29-8～15）、多摩ニュータウン N46 遺跡 1 号住（図版 30-1～16）、岳ノ上遺跡（服部 1971）SB 5（図版 29-1～7）、中山谷遺跡（肥留間 1975）6 号住（図版 28-17～24）、勘坂遺跡（安孫子 1978）5 号住（図版 29-16～17）。埼玉では、膳棚遺跡（岩井 1970）12 号住（図版 26-1～8）、木曾呂表遺跡（並木 1980）2 号住（図版 26-9～13）、西原遺跡（小川 1972）5 号住（図版 29-14～16）、同 28 号住（図版 27-11～13）、松ノ木遺跡 2 号住（図版 27-1～4）などがある。大宮台地を含めた東関東では、いわゆる中峠式土器があり、子和清水遺跡（関根 1978）83 号住（図版 31-1～6）、同 28 号住（図版 31-14～18）、同 240 号住（図版 32-5～22）、海老ヶ作貝塚（岡崎 1972）11 号住（図版 31-19～24）が並行する土器群と考えられる。

VII 期では、VII 期 1・3・4・6 群の系統からの土器群は極めて少なく、VII 期 1・2・3 群が主体を占める。

1 群土器は、VI 期には既にみられ、VII 期にまで残る土器群である。区画内充填手法は、VII 期のそれを受けつぎ、沈線による「S」字文や、継ぎの沈線で充填したり、沈線を縦帶に付箋させただけのものがある。また、区画を分割して「S」字的效果をもたらしたものも VII 期以降発達する他、B 類の如く、他の系統のモチーフを施したものもあるが、VII 期と比べて大きな変化はみられない。

2 群は VII 期 7 群の系統にある土器群である。貫井遺跡 3 号住、9 号住例のように胴部文様帯の土器群は、2 群土器からの変化が想定されるが、充填手法が著しく変化しており、1 群土器と同様傾向を示す。

3 群土器は、勝坂終末段階の主体を占める土器群で、VI 期では加曾利 E I 式と併出している。文様分割手法に様々なバリエーションを持つ土器が多くなり、文様帯も胴上半に限定されてくる。通常 1 段の文様帯構成だが、多摩ニュータウン N46 遺跡 3 号住のような多段構成の土器もある。

4 群土器は、かつて加曾利 E I 式の最も古い段階とされた土器群である。文様帯は 1 段で、渦巻きとそれを上下の区画端部に連結してゆくモチーフをもつ。区画手法、モチーフとも安定している。この種の器形は勝坂式の古い段階から存在している。区画内は縦帶のみで充填手法をもつ土器は少ない。

6 群は 2 群と器形、文様帯構成が共通するが、この種の幅広い口縁無文部と梢円形縦帶は、独特なもので、北関東（栃木県）に出土している大木 8 a 式に共通する手法である。埼玉県内では 2 例

あるが、客体的である。

7群も1・2群同様、本段階の特徴的な土器群で、口縁から垂下する隆帯を中心として、大単位2単位の文様構成をとる。滝久保遺跡（吉田 1965）はこれに近い資料で、分割手法も共通する。

8～9群土器は、中部地方を中心にモチーフをもつ、櫛形文土器である。関東ではⅦ期に新たに出現する。孤塚遺跡（服部 1971）3号住（国版30-17～24）は8群を中心とした中部的な影響の強い土器群が出土しているが、他遺跡ではまとまった出土例が少ない。8群土器は、他の勝坂式とは異なり、4単位構成をとることが大きな特徴である。胴部に櫛形文をもつ8群A類、口縁部装飾のみのC類、地文繩文で口縁部文様帶のみのB類、その他繩文だけを施したD類がある。9群土器は、隆帯が4単位に懸垂するだけの浅鉢形土器で、8群同様、曾利I式につながる要素をもつ。

なお、この段階には、東関東を中心に、阿玉台IV式、中峰式がある。

阿玉台式土器

Ⅶ期には、勝坂式土器の影響を強く受け、I式土器の文様帶とは異なる構成をもつII式土器があるが、Ⅷ期では、最末期の様相を呈しながらも利根川流域や、栃木県などの一部の地域で存在する。阿玉台IV式は、子和清水遺跡の検討からも、下縁を中心とした地域では、勝坂式土器などの影響下に独自の土器群が展開し、千駄堀寒風遺跡（西野 1963）、涌老ヶ作貝塚以外に全体の判別しえる資料は極めて少なく、客体的存在であろう。

Ⅷ期は、1群土器が主体を占め、他の土器群の占める割合は少ないと言える。

1群B類が最も安定して存在する。I式に出現したモチーフをそのまま受けついぐものであるが、この段階では、胴部隆帯に付く円環状隆帯は、突起状に変化しており、子和清水遺跡や湯原遺跡T-Ⅴ区土壇出土土器等の形態はとらない。

1群A類は、I式以降変化のないモチーフであり、Ⅶ、Ⅷ期を通じ、安定して存在する。

1群C類は、Ⅶ期、阿玉台I式に成立した胴部区画手法を受けついだものである。

1群C類土器は、I式土器にみられた。荏田第10遺跡2号住（10図-8）や岳ノ上SB3例からの変化と考えられる。

1群D類も、C類同様、西関東の勝坂式に文様の系譜を求められるであろう。

浅鉢形土器は量的に少ない。村田貝塚（西村 1982）を検討してみると、該期の浅鉢形土器に、縦沈線や交互刺突文を加えた例がある。この手法は浅鉢形口縁部にも施される例が散見される。

ところで、西関東でのⅧ期の土器群で、勝坂式との関係を知りうる伴出例は極めて少ない。戦前江坂輝氏の調査で出土した下高井戸塚山遺跡出土資料は、阿玉台IV式に相当する。高井遺跡（今井 1982）7号住は阿玉台IV式土器を出土する大宮台地では数少ない遺跡の一つであるが、破片を検討すると第Ⅷ期に相当する段階であろう。野塙前原遺跡（内田 1982）住居址第2下層（12図-6）には、大波状口縁で、波頂部を中心に2分する阿玉台式の分割法をもつ土器群がある。胴部以下は無文であるが、伴出した勝坂式は、Ⅷ期の特徴をよく示している。

この段階の北関東では、阿玉台式と共に、口縁に「S」字隆帯や沈線のクランク文をもつ、いわゆる大木8a式土器が分布する。先の高井遺跡や貫井南遺跡5号住にも同様の土器群があり、高井跡遺、貫井遺跡例や根沢遺跡14号住庐下ピットなどは同じ段階の土器群であろう。大田原市佐久山

地内（桜岡 1980）の土器群は、住居址出土資料ではないが、Ⅶ期のまとまった土器群である。添野遺跡土壇34（高 1974）では、この組合せの他に、中鉢式土器が出土しているが、他遺跡での併出例に乏しい。

註4 佐藤達夫氏は、幅の広い文様帶で渦巻文をもつ一群を開東的な土器と考え、藤内I式並行とした。

註5 松村恵司氏は、井戸尻縄年全般にわたる細分の根據を分析し、井戸尻縄年が、実際には型式学的研究に依拠していることを明らかにし、加えて、細分の再検討の必要性を述べている。

(4) 地域における様相

Ⅶ期

前項で、Ⅶ期勝坂式土器を中心に土器群の構成を扱った。本項では、東関東の阿玉台式を中心に戸崎期の地域性を考えてみたい。

まず、阿玉台I式で新たに出現する土器群に、胴部区画構成をとり、クランク状モチーフをもつ2群A類土器の存在があげられる。子和清水遺跡160号住には、併列角押文で、口縁部に三角連続文をもつものや山形波状の土器がある。

併出した勝坂式土器は、1群A、B類や2群土器、更に口縁索文の6群土器などがあり、いずれもⅦ期に属する土器群である。多摩ニュータウンNo.46遺跡8号住例と共に通した土器群もあるなど、この段階の勝坂式土器の特徴をよく示している。子和清水遺跡117、149号住と比較して、阿玉台式2群B類土器を含むことや、117、149号住で出土した阿玉台式が併列角押文土器が主体で、併出した勝坂式は戸崎山遺跡例と近似し、Ⅶ期の特徴をもつ土器が多い点など160号住居址は明らかに後出的段階を示している。

2群A類に属する土器群は、湯坂T-V区土壇、横沢遺跡などに良好な資料がある。両遺跡とも、I式的併列角押文の土器を含まない。現状では、阿玉台I式期には、石神遺跡以外に北関東ではまとまった資料に乏しい。しかし、子和清水遺跡160号住と同様に文様帶構成や、個々の文様要素は、極めて勝坂色の強い土器群で構成されており、両遺跡ともほぼ同じ時期の土器群と考えてよさそうである。

下高井戸塚山遺跡66号住（10図-2）では、Ⅶ期の勝坂式土器に併列角押文の阿玉台式土器が併出しているが、大形の山形波状文や隆帯のあり方は、IV式のあり方とすべきであろう。

また、阿玉台1群土器には、IV式段階の土器群にも、胴部下半で区切ったり、あるいは、クランク状の隆帯文をもつものは少ないようである。

この段階で、勝坂式土器の影響がかなり濃密に入込み、阿玉台式土器を変化させたことが考えられる。ここで該期の西関東の状況を窺がってみよう。

貫井遺跡2号住、岳ノ上遺跡SB3、荏田第10遺跡2号住などから出土した阿玉台式土器は、いずれも大波状口縁をもち、隆帯に大形爪形文の付随する土器群である。峯遺跡（大塚 1968）では、勝坂Ⅶ期の土器群が出土しているが、胴部に「Y」字状懸垂文や、三角連続文の施されるものが多く、西関東ではまとまった資料である。

先の、貫井、荏田、岳ノ上の諸遺跡の土器の胴部モチーフは本来の阿玉台式土器にはみられなかったものであり、クランク状文と共に、勝坂式土器に展開される文様である。この段階で、東関東同

様に、阿玉台式土器を基に、勝坂式土器の文様構成を取り入れて成立したものであろう。

ところで、勝坂式土器の基本構成をとりながら、部分的に阿玉台式の要素を取り入れたと思われる土器群がある。貫井南遺跡6、9号住、恋ヶ窪遺跡3号住などにあり、いずれも、口縁の一部が富士山形の波状線となっているが、口縁部文様が独自で、Ⅶ期で顯著となり、西原遺跡土壙19、藤立貝塚49号住（石井他 1980）、貫井南遺跡16号住などでみられる、勝坂式的文様構成をもつ土器群に後続する位置づけが与えられるものである。

従来、貫井遺跡や恋ヶ窪遺跡例は、藤内I～II式に考えられてきた。しかし、胴部分割のあり方や、文様に、いわゆる阿玉台III式と共通する部分が多いこと、阿玉台2群土器のごとく、勝坂1群土器の文様帶構成をうけて成立したと思われる土器群の存在などは、近接した段階で生じた可能性が大きく、ほぼ同時期のものと考えざるを得ない。

ところで、子和清水遺跡104号住では、1本縫合で胴部を横位に区画するII式土器があるが、勝坂1群B類土器を含むなど、160号住と近い段階が想定される。

勝坂式土器の伴出する阿玉台III式期の土器群は大変少なく、現状ではIII式は明確とは言えない。しかしながら、Ⅶ期1群土器との強い共通性を重視するならば、胴部分割手法と個々のモチーフから、III式をほぼⅦ期並行としてもよいのではなかろうか。後続するⅧ期ではIV式が出土している。いずれにしても、阿玉台式土器は、現在でもその報告例が少なく、特に、勝坂式土器との明確な関連性は明らかにできなかった。子和清水遺跡104、160号住を含めた勝坂、阿玉台両式の詳細な関係は今後の検討を必要としよう。

Ⅷ期

前項で、勝坂、阿玉台両型式の構成について概略を述べたが、本項では、東関東に分布をもつ中峰式土器の検討から、Ⅷ期の地域的特徴について考えてみたい。

大宮台地の一部を含めた東関東では、従来から中峰式と呼称される、要素の錯綜した地域的土器群がある。子和清水遺跡で良好な資料があり、該期の状況が次第に明らかになりつつある。

1群土器は、下縁では量的に多くない。添野遺跡土壙34の土器と類似した三原田遺跡例には、口縁部を幅広くとり、竹管内面で半隆起線を描く土器群がある。口縁に交互刺突文を全周させる例はないが、口縁下に4単位の突起をもつ点は1群土器と共通する。子和清水遺跡83号住がこの土器群である。基本的に4単位分割で、子和清水遺跡例の突起は、勝坂式のそれに類する。一方、「几」形突起は大畠貝塚（馬目 1970）など、いわゆる大木8a式土器にみられる要素であろうか。村田貝塚にもこれと近い土器がある。1群土器は、西関東では柏江市第1小学校校庭遺跡（金子 1874）、貫井遺跡9号住、野塩前原遺跡住居址2下層にあり、Ⅷ期の土器群と伴出している。

2群土器は、加曾利E1古式に比定され、中峰貝塚4次1号住では、覆土上層から出土し、炉体土器との時間差が指摘された。子和清水遺跡240号住、上の原遺跡（大川 1981）J D12（註7）などで出土している。文様帶構成は1群土器とほぼ共通し、胴部には横位沈線による分割の有無がある。3群土器は、西関東での出土例は少ない。口縁下部に、1帯の縫合文をもつことが特徴である。

貫井南遺跡5号住、中郷遺跡（中島 1981）1号住（図版27—5）が代表例である。東関東では、

子和清水遺跡83号住、同82号住、塙釜遺跡（松下 1979）土壇14、添野遺跡土壇34などに於ける。3群C類は、4群C類に近い文様をもち、本来ならば4群に含めるべきかも知れない。空白部を充填するものと、陸帶のみのものがある。「S」字形的な陸帶のみのものは、櫻沢遺跡など、北関東に多く、貫井南遺跡例のごとき3群D類は、西関東にあっては特異な存在であろう。高井遺跡7号住にも類例がある。櫻沢遺跡、高井遺跡とも阿玉台Ⅳ式土器が出土している。

4群土器は、該期のキャリバー形土器で、口縁部文様帯をもつ1群である。

A類は膳棚遺跡12号住以外、良好な資料がない。口縁に1対の把手をもち、勝坂式の構成をとる。村田貝塚に近い資料がある。

B類は対向する口縁の把手を中心に、両側に円環形の陸帶を結ぶもので、海老ヶ作貝塚12、17号住にあり文様構成は共通性の強いまとまった土器群である。

C類は口縁部に文様を集約した土器群で、基本構成は、勝坂Ⅶ期2群土器に類似する。平縁で口唇無文帶の土器に塙釜遺跡例がある。空白部を沈線、三叉文等で充填しており、勝坂Ⅶ期2群と共に、勝坂式の東関東での在り方を示すものと言えようか。

5群はⅦ期の特徴的な土器群である。子和清水遺跡240号住、ハットヤ遺跡（海老原 1964）、金井台遺跡（崎 1970）にあり、西関東では、動坂遺跡5号住にある。動坂例は口縁に1対の「S」字を基本とした把手と、縦位構成の沈線文をもつが、4群同様、勝坂式の文様構成である。他の2例も、動坂例同様、勝坂式からの系譜をもつ。

6群土器は勝坂式の小型深鉢形土器Ⅶ期3群などと共通したモチーフをもつものであり、海老ヶ作貝塚11号住（図版31-19～24）にはほぼ同じ資料がある。

以上、土器群の概略を述べた。次に、子和清水遺跡83、28、240各住居址の土器群をもとに、各地域の比較をしてみることにする。

83住では、1、3群土器を含み、添野遺跡土壇34例に近い内容をもっていた。この段階の要素には勝坂、大木両系統の施文要素があり、併出例から勝坂Ⅶ期に相当する。

28号住では1群、3群土器の他、勝坂式土器も併出しており、Ⅶ期に相当し、83住と近い段階が想定される。

240住は、前2者と大きく土器内容が異なり、4群C類や、2群、1群土器に近いが、交互刺突文が一帯で、区画も沈線で描かれるなど、83、28住と比較すると、より新しい1群と考えられる。峠4次1住の関係を重複するならば、共通する土器内容をもつ240住は加曾利E+古式に並行する中段階と考えられる。

この段階の東関東では、海老ヶ作貝塚14号住例のように、口縁部に勝坂式の区画、モチーフをもち、胸部に算盤玉状の張り出しをもつ1群がある。胴部懸垂文は明らかに加曾利E式的で、同様の土器群は東関東に多そうである。一概に型式命名することの困難さをもっている。

この段階の西関東を中心とした地域では、勝坂式の文様を一部受けつぐものの加曾利E式への変化は急激であり、E+式初頭に若干勝坂式が併出する程度に過ぎない。しかしながら、花積貝塚（下村 1970）2A号住では、一部、子和清水遺跡240号住と共通する土器を含んでおり、このことから、大宮台地の一部を含む東関東では、クラシック文をもつわゆる東関東的E+式土器の出現が若

干渉する可能性もある。なお、この段階には、栃木県や、茨城県北部に大木 8 a 式が分布する。

大木 8 a 式土器自体が、実態の明確でない土器群だが、櫻沢遺跡、石神遺跡をみると、Ⅷ期には、加曾利 E 式の基本となるクランク文をもっている。この観点からすれば、Ⅹ期にかかる子和清水遺跡 240 号住のクランク文土器群をもって、東関東の加曾利 E 期の最古段階と考えることも不可能ではないだろう。東大橋原遺跡 3 号土塙(川崎他 1978)は口縁部にクランク文をもつ土器群と一緒に、縦沈線で口縁を充填し、交互刺突文の全周する土器が出土している。この伴出例が正しいものとするならば、Ⅹ期中葉まで、いわゆる中峰式の影響が残る可能性も否定しえない。

いわゆる中峰式土器と一括呼称される土器は複雑な内容をもっていた。ここでは、各系統と、その時間幅については、組合せのはっきりした住居址が極端に少ないので、一応別個のものとして扱っている。

三原田遺跡(赤山 1980) 8 区 9 号住や、共通した土器をもつ子和清水遺跡 83、28 号住を古く、上ノ原 J D12、子和清水遺跡 240 号住を、伴出した勝坂式土器から新しく考えた。両遺跡の土器群同士を比較してみると、1 群土器に共通した土器もあるが、子和清水遺跡 28 号住に比べて、突起が沈線で描かれ、交互刺突文帯も 1 段となるなど、崩れた構成を示している。細かな点を見るならば、連続「コ」の字文の指出に交互刺突と、陸帯貼付によるものがあるが、時間差を示すものか否か明らかでない。

阿玉台 IV 式土器との関連は、添野遺跡土塙 34 出土土器群以外、明確な共伴例はない。櫻沢遺跡 14 号住炉下ビットでは、阿玉台 IV 式がまとまっており、添野遺跡とはほぼ近い段階が想定されよう。

Ⅸ期では、勝坂式、阿玉台式、大木 8 a 式などの土器群があり、阿玉台式の衰退と、勝坂式の強い影響の下に、下総などでは、中峰式と呼称される簡経した土器群が生じている。この段階は、地域的に好対称を示し、地域色のはっきりした時期にあたると言えよう。

加曾利 E 式初頭では、西関東では、勝坂式のモチーフを用いた「S」字文の土器群が顕著であるが、東関東での錯綜した状況はⅩ期にまで及び、クランク文をもつ加曾利 E 式が一般的となるのは E I 式中様以降の可能性がある。

いざれにしても、該期の東関東は錯綜とした状況で、実態はかなり複雑である。個々の器種の系統を追うには資料不足と言わざるをえない。

註 6 恋ヶ窪遺跡 3 号住からは、Ⅷ期の勝坂式土器とともに、阿玉台 IV 式土器が出土し、西村編年に疑問が出されている。更に検討を要しよう。

註 7 上の原遺跡 J D12 からは、子和清水遺跡 240 号住と近い土器組成をもつが、他に、中峰式の一つとされた、平林西遺跡タイプの土器などもあり、まとまった資料である。子和清水跡同様、Ⅹ期にかかる資料と思われ、添野遺跡や、櫻沢遺跡 14 号住炉下ビット出土土器群に後続する段階が与えられる。

(細田 勝)

第5節 IX期、X期

(1) 時間軸としての時期設定

IX期、X期は、従来の加曾利E I式(1、2式)に比定される時期である。ここでは、加曾利E I式を3段階に細分し、IXa期、IXb期、X期と時間軸を設定した。IXa期、IXb期はX期と比較して、土器群の変遷が連続的であることからIX期の細分段階として位置付けた。

前段階のVII期では、勝坂式、中峠式、阿玉台式、大木8a式などの土器が交錯して、強い地域色を示していたが、IXa期になると口縁部文様帯を特徴とし、齊一性を持つキャリバー形土器を主体とする加曾利E I式が成立する。キャリバー形土器は、大木8a式の器形や文様構成を基盤としているが、口縁部文様帯の形成において、勝坂式、阿玉台式、中峠式の文様を多数取り込んでいる。また、前段階の土器の系統をそのまま残している土器も存在する。このように、加曾利E I式成立段階であるIXa期には、前段階匂期の様相が反映されて、かなりの地域色が残っている。

統いて、IXb期ではキャリバー形土器の口縁部文様帯が発達して齊一性が強まってくる。頸部無文帯を持つ土器が目立ってくるのもこの時期である。前段階の系統を持つ土器の存在は減少し、地域色が薄れてくる。しかし、土器群の構成や住居址の出土状況は、IXa期と連続的であり、IXa期からIXb期は主に内部的な発達段階として把握される。

X期になると、キャリバー形土器は、口縁部文様帯及び頸部無文帯が確立して最も齊一性を示し、関東地方全体に分布するようになる。前段階の系統を持つ土器は消えて、代りに関東地方西部を中心に中部地方から曾利I式が流入し、土器群の構成が大幅に変化していく。

次に、各時期と中部地方、東北地方の編年との関係をみると、中部地方は、IXa期、IXb期が井戸尻I式を含めた曾利I式、X期が曾利II式に対比される。西部を中心に関東地方へ常に影響を及ぼしている。IXa期は量は少ないが、関東地方全体に分布している。IXb期は、西部に分布が片寄る傾向があり、全体としての広がりは薄れている。X期は西部を中心に曾利I式が流入し、土器群の構成を大幅に変化させる程、多大な影響を与えていている。

東北地方は、IXa期が大木8a式、IXb期、X期が大木8b式と対比される。大木8a式は、前段階のVII期から関連し、IXa期ではキャリバー形土器成立の基盤として重要な役割を果たしたが、IXb期では、神奈川県など一部の地域に大木8b式の影響がみられるが、全体的には少ない。逆に、頸部無文帯構成など加曾利E I式が大木8b式に影響を与えていている。X期でもほぼ同様の傾向が続いている。

次に、神奈川県で行われたシンポジウム(神奈川考古同人会 1980)において具体的に示された神奈川編年、東京・埼玉編年と比較検討してみたい。神奈川編年は、加曾利E I式を神奈川I期、II期と細分し、II期は更にa、b、cと分類している。曾利式は、IIa期に曾利I式、IIb、IIc期に曾利II式を比定している。IXa期は神奈川I期に、IXb期は神奈川IIa期にX期は神奈川IIb、IIc期におおよそ対比される。神奈川県では、I期の資料が乏しく、IIa期から曾利I式、大木8b式と関連して住居址が増加するために、I期とIIa期の連續性が薄くII期中心の編年になっていると思われる。

東京・埼玉編年は、加曾利E I式をI、II、III期の3段階に細分している。曾利式は、I期に曾利I式、II期、III期に曾利II式を比定している。3段階の細分は同様であるが、IIa期は東京I期、IIb期は東京II～III期、III期は東京III～IV期に対比され、住居址の把握に相違がある。これは、曾利式の対比の違いで示されるように、東京編年のIII期が、どちらかといえばIII期からの細分であるのに対して、本稿のIIb期がIIa期からの細分である点に原因があると思われる。埼玉県では、IIa期の資料が多く、東部の様相を併せ持つために前段階からの系統がIIb期まで残存する。一方東京都では曾利I式の影響が大きく、東京II期、III期において土器群の様相が変化する。このように各編年の相違は地域の様相の違いを示したものともいえよう。

以上、時間軸として設定したIIa・IIb・III期と他の編年を比較検討したが、それらを整理すれば、おおよそ次のようになる。

本稿の時間軸	IIa期	IIb期	III期
神奈川編年	I期	II期a	II期b
東京編年	I期		II期
中部地方	(井戸尻II式)曾利I式		
東北地方	大木8a式		
	大木8b式		

(2) 土器群の分類

各時期の土器群を、加曾利E I式全体としての系統性を考慮して、最初に1～5群土器に分類し、次に各期ごとに群の中を類として分類した。

1群土器 加曾利E I式の主体となるキャリバー形土器である。口縁部文様帶に最も特徴を持つ。

2群土器 キャリバー形土器同様、加曾利E I式段階に開拓して成立し、変遷する土器である。客体的存在であるが、加曾利E I式土器群の構成において、常に一部を占めている。

3群土器 中部地方に主体を持つ曾利I式、II式に比定される土器、あるいは類似する土器である。

4群土器 前段階の勝坂式及び中鉢式の系統を残す土器である。

5群土器 1～4群の深鉢形土器に対して、浅鉢形を中心に小型土器等を一括した。

IIa期 (14図)

1群土器

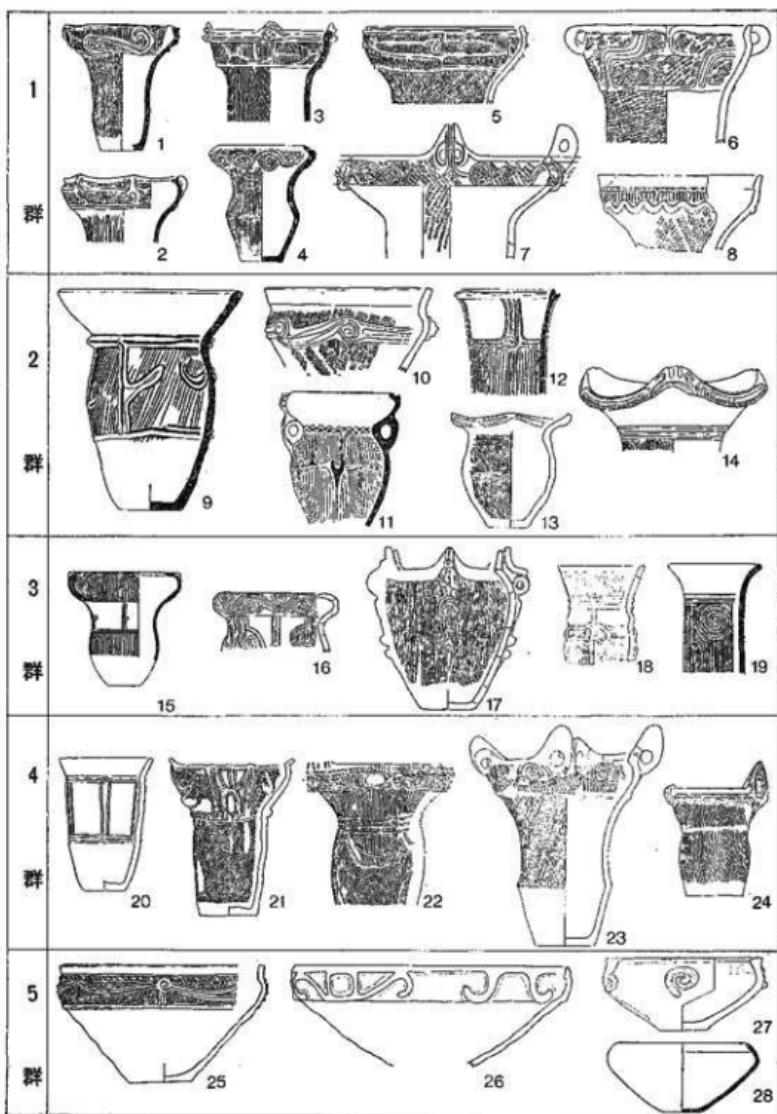
口縁部文様帶の違いからA～H類に分類した。

A類 (1) 口縁部文様帶に、「の」字文を中心に「C」字文、「十」字文を持つ土器である。

「の」字文を連続したり、「の」字文と「C」字文、「十」字文を組合せ種々の文様を作り出している。地文に捺糸文を持つ土器が多い。

B類 (2) 口縁部文様帶を小突起状の隆帯により区画する土器である。地文に捺糸文を持つ土器が多い。

C類 (3) 口縁部文様帶を、小突起を中心にして4単位に区画し、区画内に「X」字文を持つ土器である。2重口唇部を持つ土器が多い。地文は捺糸文と繩文がある。



14図 Xa期土器分類表

D類（4） 口縁部文様帯に隆帯による渦巻文を持つ土器である。地文には撚糸文を施している。

E類（5） 口縁部文様帯に細隆帯を貼付して、区画文と渦巻文を描く土器である。地文には、撚糸文と繩文の土器がある。

F類（6） 口縁部文様帯にクランク文を持つ土器である。クランク文は縦長のものが多い。地文は大部分が繩文である。

G類（7） 口縁部文様帯に、隆帯により曲線文を描く土器である。隆帯は1本のものが多い。眼鏡状突起が特徴ともなっている。地文は繩文の土器が多い。

H類（8） 口縁部文様帯に、棒状沈線文の充填を多用する土器である。

1群土器の中で、A類は、東京都、埼玉県の台地部、丘陵部に分布の中心を持ち、西部のⅢa期を代表する土器である。C～D類を含め地文に撚糸文を持つことが大きな特徴である。D類は、能登健、石坂茂兩氏が指摘したように（能登、石坂 1980）、3群土器の影響を受けて関東地方で成立し、変遷する土器である。E～H類は東部を中心に分布する土器である。地文に繩文を持つ土器が多く、西部の撚糸文と対象的である。クランク文を持つF類はⅢa期には意外と少なく、Ⅲb期になって広がる土器であろう。

2群土器

A類（9） 無文の口縁部が「く」の字状に外反する深鉢形で、幅広な胴部文様帯を持っている。

B類（10） 口縁部に、隆帯による突起状渦巻文を連結した文様を描く。地文には繩文の土器が多い。

C類（11） 無文の口縁部が内曲し、胴部に文様帯を持つ土器である。地文は撚糸文が多い。

D類（12） 若干外反する深鉢形で、口縁部に沈線による区画文を描く。胴部は撚糸文である。

E類（13） 口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が若干脹む土器である。波状口縁のものが多い。文様は、地文に撚糸文だけを施した土器が多く、簡単な沈線文が描かれる土器もある。

F類（14） 浅鉢形の深鉢形を呈する土器である。肥厚した口縁部に、沈線文、櫛状文による文様帯を持ち、幅広な頸部無文帯を特徴とする。

2群土器の中で、A類の胴部文様帯は4群土器A類と、B類～D類の文様は3群土器B～D類と類似する。3群、4群土器の文様を取り込んで成立した土器と考えられる。E類の口唇部は大木8a式に類似する。C～E類は地文に撚糸文を持つ土器が多く、西部を中心に分布する。F類は東部の特徴的土器の1つである。口縁部文様帯は、4群土器D類と類似している。中井式の影響を持って成立した土器であろう。

3群土器

A類（15） 口縁部文様帯を細隆線文により描く土器である。井戸尻Ⅲ式の櫛形文土器に文様構成は類似する。

B類（16） 細隆線文により曲線文様が描かれる土器である。

C類（17） 地文に条線文を持ち、4単位の眼鏡状突起を持つ棒状隆帯を貼付ける土器である。

D類（18） 文様はC類と類似するが、口縁部が外反し、櫛状沈線文による文様帯を持つ。

E類（19） 脊部文様帶に、沈線による渦巻文を描く土器である。

3群土器は、中部地方の曾利Ⅰ式に比定されるが、梨久保遺跡B式系統（宮坂 1972）の土器が大部分である。

4群土器

A類（20） 円筒形の深鉢形を呈し、幅広な脣部文様帶を持つ土器である。脣部文様帶は沈線化している。

B類（21） 口縁部文様帶に勝坂式の文様を残す土器である。地文には縦文を持つ。

C類（22） 集約化した口縁部文様帶を持つ土器である。文様は刻みのある隆帯、刺突文など勝坂式の手法による。

D類（23） 口縁部文様帶が刻みを持つ隆帯と沈線文により描かれる土器である。眼鏡状把手が付くものが多い。

E類（24） 口縁部に蛇行する隆帯等により簡単な文様帶を持つ土器である。

4群土器のA類、B類は勝坂式に、C類、D類、E類は中峠式に比定される。A類、B類は西部、C～E類は東部を中心に分布する。

5群土器

A類（25） 口縁部にキャリバー形土器と同じ文様帶を持つ土器である。

B類（26） 口縁部に隆帯だけの文様帶を持つ土器である。

C類（27） 口縁部文様帶は持たないが、隆帯による渦巻文等を貼付けている土器である。

D類（28） 無文の土器である。

5群土器の中で、B類～D類は勝坂式から連続するが、A類は加曾利EⅠ式に特徴的な文様帶を持っている。

IX b期（15図）

1群土器

A類（1） 口縁部文様帶の「め」字文が大きく発達した土器である。「C」字文、十字文は「め」字文に取り込まれ連続的になる。

B類（2） 口縁部文様帶に隆帯による区画文を持つ土器である。区画は把手や突起と連続する。

C類（3） 口縁部文様帶に区画文と「め」字文が絡み合っている土器である。

D類（4） 口縁部文様帶に4単位の区画文を持つ土器である。

E類（5） 口縁部文様帶全体に隆帯の渦巻文を持つ土器である。

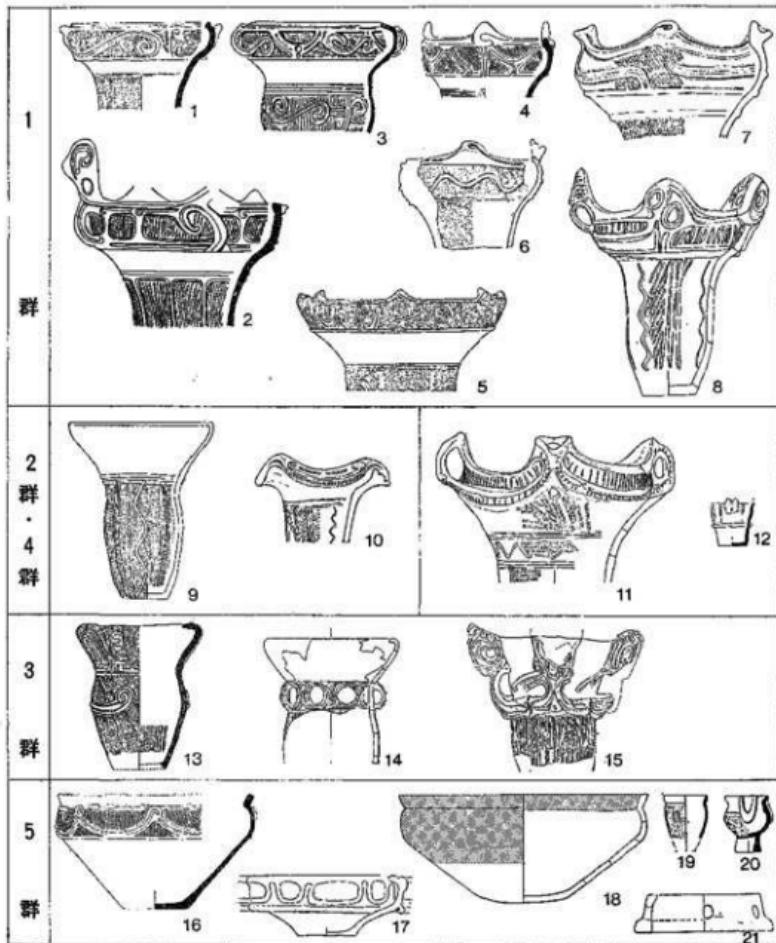
F類（6） 口縁部文様帶に隆帯により曲線文を描く土器である。

G類（7） 口縁部文様帶にクランク文を持つ土器である。横位に連続している。

H類（8） 口縁部文様帶に棒状沈線文を充填する土器である。

1群土器の中で、A～C、E類は西部、D、F～H類は東部を中心に分布している。各類ともIXa期と比較して、口縁部文様帶が発達し、横位に連続的になる。頸部無文帯を持つ土器が多くなる。IXa期の西部で特徴的であった地文の撚糸文は、幾分減少し縦文の割合が増加している。

2群土器



15図 Kibayashi期土器分類表

A類（9） 無文の口縁部が外反し、胴部文様帶に、隆帯による蛇行文と懸垂文を持つ土器。

B類（10） 浅鉢形を呈する土器である。Kibayashi期と比較すると、口縁部文様帶が沈線化している。

2群土器は、Kibayashi期ではA～F類と多くあったが、Kibayashi期では2種類に減少している。

3群土器

A類（13） 口縁部に細隆線文による渦巻文を持つ土器である。胴部にも渦巻文が貼付される。

B類（14） 頭部に横状把手を配した土器。

C類 (15) 口縁部及び頸部に横状把手を4単位付け、胴部は条線文を施文する土器である。

3群土器は曾利I式に類似し、西部に分布する。

4群土器

A類 (12) 勝坂式の胴部文様帯の系統が残存した土器である。

B類 (11) 橫状把手を4個持ち、口縁部文様帯は柳状沈線文が描かれる。

4群土器も2群土器同様Ⅹa期と比較すると極く少數に減っている。

5群土器

A類 (16) 口縁部文様帯に撚糸文を施文し、隆帯を連結した区画文を持つ土器である。

B類 (17) 口縁部文様帯に隆帯による区画文を描く土器である。

C類 (18) 無文土器であるが、胴上半部に丹を塗る土器も多い。

D類 (19) 台付變形土器、器台形土器である。

5群土器A類、C類の浅鉢形土器は、Ⅹa期と比較すると、口縁部が「く」の字状に外反し、器高が大きくなる傾向がある。

X期 (16図)

1群土器

A類 (1) 口縁部文様帯に連結渦巻文と区画文を持つ土器である。

B類 (2) 口縁部文様帯に区画文を持つ土器である。

C類 (3) 橫状把手により区画され、区画間に渦巻文を配する土器である。

D類 (4) 口縁部文様帯に、末端が小さく渦を巻く「S」字文を描く土器である。

E類 (5) 口縁部文様帯に隆帯がくずれ頸部無文帯が広い土器である。

F類 (6) 口縁部と胴部に細隆線による渦巻文を描く土器である。

G類 (9) 口縁部文様帯に1本隆帯による曲線文を持つ土器である。Ⅹb期よりも曲線が弱い。

H類 (8) 口縁部文様帯にクランク文を持つ土器である。クランク文は横長で連続的になる。

I類 (7) 口縁部文様帯に棒状沈線文を持つ系統の上器である。

1群土器は、A～F類が西部、G～I類が東部に分布する。Ⅹb期と比較して、口縁部文様帯は退化し、区画文や渦巻文が主体となり、頸部無文帯の確立した土器となる。地文は繩文が多くなる。

2群土器

A類 (10) 口縁部が無文で胴部文様帯に地文の繩文の上に沈線又は隆帯による懸垂文を描く。

B類 (11) 頸部及び胴部に細隆帯を貼付して文様を描く土器である。地文は繩文である。

C類 (12) 胴部文様帯に隆帯による大きな渦巻文を描く土器である。

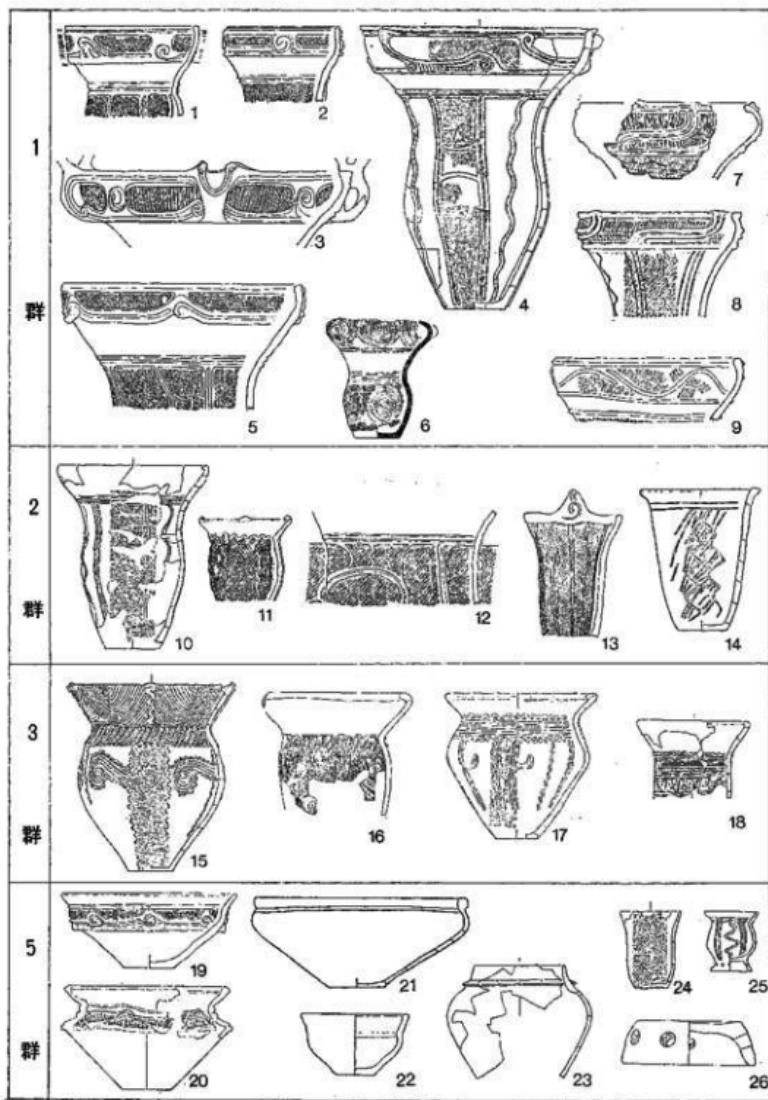
D類 (13, 14) 胴上半部が若干開く深鉢形を呈し、胴部文様帯は地文の上に懸垂文を施文する。

2群土器A類は、Ⅹb期では隆帯であった胴部文様が沈線化している。B類、C類には3群土器の影響が窺われる。D類はⅩb期のB類系統と考えられる。各類とも地文に繩文を施文している。

3群土器 (15～18)

A類 (15) 口縁部に重弧文を持つ土器である。頸部には格子目文を持つことが多い。

B類 (16, 17) 口縁部は無文で、頸部に細隆帯を巡らし、胴部に条線文を施文する土器である。



16图 X 土器分類表

C類(18) 無文の口縁部が外反し、脣部に沈線が横走する土器である。

3群土器は曾利Ⅱ式に比定される。

5群土器

A類(19, 20) 口縁部が「く」の字状に屈曲し、文様帯を持つ浅鉢形土器である。

B類(21, 22) 無文土器である。22は鉢形を呈する。

C類(23~26) 有孔鉗付土器、台付變形土器、コップ形土器、器台形土器を一括する。

A類の文様帯は1群土器の口縁部文様帯、3群土器の頸部文様帯と類似する。Ⅹb期よりも口縁部の屈曲が強く、器高が高くなっている。C類の存在が顕著になることが特徴である。

以上、各時期ごとに土器群を分類したが、1群、2群、5群では系統的変遷をたどる事が可能である。3群土器は中部地方に主体があり、各時期ごとにその系統が違っている。4群土器はⅩa期、Ⅹb期と続くが、Ⅺ期にはみられない。

(3) 土器群の構成

ここでは、住居址を単位として各時期における土器群の構成を明らかにしたい。資料は、埼玉県を中心に、東京都、千葉県の代表例を呈示した。

Ⅹa期(図版33~36)

埼玉県では、吹上貝塚(栗原 1959)2号住、3号住、勝沼遺跡2号住、岩の上遺跡(栗原 1973)21号住、23号住、花影遺跡(谷井 1974)2号住、4号住、舟山遺跡5号住、松ノ木遺跡5号住、花積貝塚2A号住、西原遺跡29号住など多数の住居址が検出されている。武藏野台地及び丘陵部では、図版33の吹上貝塚3号住、岩の上遺跡23号住、舟山遺跡5号住に示されるように1群土器A~D類のキャリパー形土器を主体とし、2群土器A~E類を併出している。吹上貝塚3号住、岩の上遺跡23号住は、4群土器A、B類が含まれるが、舟山遺跡5号住には含まれない。舟山遺跡5号住は若干新しい様相といえよう。松ノ木遺跡5号住もほぼ同様の様相を持っている。このように土器群の構成に若干の違いは認められるが、1群土器を中心とした構成は、極めて類似しているといえよう。大宮台地に位置する花積貝塚2A号住(図版34)は、1群土器、2群土器、3群土器、4群土器の大部分を含む構成を持っている。Ⅹa期における東西の様相及び、若干の新旧の様相を併せ持つ住居址である。同じ大宮台地の西原遺跡29号住は、1群土器A~C類で構成され、東部の影響はみられるが、武藏野台地に類似する。大宮台地は、東西の接点に当たり、その状況を良く示しているといえよう。

東京都では、中村橋遺跡(大沢、芝崎 1962)、東原遺跡10号住(石川 1969)、下高井戸塚山遺跡3号住、貫井南遺跡3上号住、中山谷遺跡10号住、動坂遺跡8号住(安孫子 1978)、孤塚遺跡2号住(服部 1971)等が上げられる。中村橋遺跡(図版35-1~18)、東原遺跡10号住、下高井戸塚山遺跡3号住は、1群土器A~D類を主体として、2群土器、4群土器A、B類を含む。貫井南遺跡3上号住(図版35-8~16)、中山谷遺跡10号住(図版35-17~26)は4群土器を含まない。埼玉県同様、1群土器を主体とする構成は類似しながらも、4群土器のあり方などから、若干の新旧の様相が窺われる。動坂遺跡8号住は1群土器F類からなり、花積貝塚2A号住の一部分に相当し、Ⅹa期でも若干新しい様相である。孤塚遺跡2号住は、井戸尻式の系統の3群土器を主体と

し、2群土器を伴出している。中部地方の影響が強く残存した、特異な土器群の構成を持つといえる。

千葉県では、子和清水遺跡B5号住、31号住、86号住、89号住、156号住、161号住、今島田遺跡10号住（熊野 1969）及び海老ヶ作貝塚、高根木戸北遺跡（岡崎 1971）の小堅穴などが上げられる。図版36に示したように、子和清水遺跡31号住、86号住、89号住、161号住、156号住は、1群土器G、H類、2群土器B、E、F類、4群土器B～E類により構成されるが、まとまった資料は少ない。土器群の構成にも、中峠式の複雑な様相が反映されている。

Ⅹb期（図版37～40）

埼玉県では、花影遺跡6号住、堺窯遺跡（佐藤 1982）1号住、池田遺跡10号住、19号住、松ノ木遺跡1号住、6号住、西原遺跡15号住、21号住、秩父山遺跡（金子 1978）7号住、木曾呂呂表遺跡（並木 1980）3号住などが上げられる。図版37で示した武藏野台地の堺窯遺跡1号住、池田遺跡10号住、19号住、花影遺跡6号住、松ノ木遺跡6号住は、1群土器A～E類と2群土器A類から成り、単純な土器群の構成を持っている。3群土器、4群土器はほとんど含まれない。図版38で示した大宮台地では、秩父山遺跡7号住、西原遺跡15号住は武藏野台地とほぼ同様の構成である。西原遺跡18号住は、1群土器D、G、H類からなり、東部に類似した様相を持っている。

東京都では、三鷹市立5号遺跡（川崎 1966）、堂ヶ谷戸遺跡（十菱 1975）1号住、松原遺跡（水沢 1979）16号住、中山谷遺跡5号住、6号住、二宮遺跡（紀野 1978）1号住などがある。図版39で示したとおり埼玉県とほぼ同様の構成を持っているが、中山谷遺跡5号住、松原遺跡16号住では3群土器A類、B類を伴出している。3群土器の存在は、神奈川県の当麻遺跡（白石、山本 1977）4号住、7号住に示されているように、中部地方の影響が窺われる。

千葉県では、高根木戸遺跡43号住、34号住、子和清水遺跡B4号住、16号住、116号住、129号住、179号住、243号住などが上げられる。高根木戸遺跡43号住（図版40-1～10）は、1群土器A、G、H類、2群土器B類から成り、土器群の構成を示す資料である。子和清水遺跡16号住、116号住、243号住（図版40-11～19）では、1群土器D、G、H類と2群土器B類であり、Ⅹb期に至り、1群土器のキャリバー形上器が土器群の構成においても主体を占めてきたといえよう。

Ⅺ期（図版41～44）

埼玉県では、新座遺跡（坂詰 1965）4号住、5号住、岩の上遺跡1号住、19号住、坂東山遺跡（谷井 1973）9号住、12号住、16号住、松ノ木遺跡4号住、西原遺跡14号住、16号住、19号住がある。図版41の坂東山遺跡9号住は、1群土器A、B類、2群土器A類、5群土器からなり、極めて齊一性に富み、関東的土器群の構成を持っている。対して9号住、12号住は1群土器A類、2群土器A～C類からなるが、2群土器には3群土器の影響が多分にみられる。16号住は、9号住、12号住よりも若干古い様相といえよう。坂東山遺跡に示されるように、Ⅺ期の中でも曾利Ⅲ式に比定される3群土器の存在や、1群土器、2群土器への影響により、土器群の構成に違いがあり若干の時期差が窺われる。新座遺跡5号住、岩の上遺跡1号住、19号住、松ノ木遺跡4号住は、坂東山遺跡16号住に類似する様相を持っている。図版42に示した大宮台地の西原遺跡14号住、16号住、19号住、27号住は、1群土器A類、B類、D類を主体としているが、19号住、27号住は東部的、14号

住、16号住は西部的様相を持っている。

東京都では、二宮遺跡3号住、平山橋遺跡(高林 1974)4号住、下寺田遺跡(新藤 1975)7号住、鶴川遺跡J地点(河野 1972)19号住、網島園内遺跡(野本 1980)1号住、堂ヶ谷戸遺跡2号住が上げられる。これらの住居址は、二宮遺跡3号住(図版43)で示したように、1群土器A~F類、2群土器A~C類、3群土器A~D類、5群土器により構成され、3群土器曾利I式の存在によって特徴付けられる。埼玉県と比較すると一層直接的な曾利I式土器の流入が考えられる。鶴川遺跡J地点19号住は3群土器を含まず、坂東山遺跡16号住に類似する。

千葉県では、高根木戸遺跡57号住、65号住、今島田遺跡8号住、子和清水遺跡29号住、77号住、148号住が上げられる。図版44で示したように、これらの住居址は、1群土器A、B、F~I類のキャリバー形土器が主体を占め、2群土器A類、D類を伴出し、比較的単純な土器群の構成を持つ。1群土器では、タランク文を持つH類が特徴的であるが、A類、B類の渦巻文、区画文の存在も顯著になってきている。

(4) 地域における様相

前項において、時間軸を設定し、東京都、埼玉県、千葉県を中心に各時期の土器群を分類し、その構成について住居址を単位として明らかにしてきた。関東地方における該期は、キャリバー形土器の成立、発達、確立段階を基本軸として全体的な変遷がたどれるが、前段階Ⅳ期の地域色の残存と中部地方曾利I式、II式の流入による影響を主な要因として地域における様相が色彩られている。大きくは、荒川を境として西部と東部の地域相が認められる。ここでは、西部と東部を中心に各時期の地域における様相を概観していきたい。

Ⅹa期

西部 東京都、埼玉県に広がる武藏野台地及び周辺の丘陵部では、「S」字文を持つ口縁部文様帯と地文の撚糸文を特徴とする1群土器A類のキャリバー形土器を中心に、1群土器B~D類、2群土器A~E類を含む土器群が主体を占めている。この土器群は、この地域において成立した加曾利E-I式土器と考えられる。また、勝坂式の系統にある4群土器A類、B類を共伴し、出土状況が吹上パターン(小林 1965)を示す住居址が多い。勝坂式土器から加曾利E-I式土器への変換の状況を窺うことができよう。Ⅹa期の中でも、中山谷遺跡10号住、舟山遺跡5号住は4群土器が含まれない。この地域における勝坂式土器から加曾利E-I式土器への変換は急速であったと思われる。西部でも、中部地方に隣接する東京都の丘陵地帯や神奈川県では、このような土器群の構成を持つ住居址が少ない。狐塚遺跡2号住は、井戸尻II式及び曾利I式の系統を持つ3群土器が主体を占めている。この地域では、中部地方の影響が強く加曾利E-I式の1群土器が主体を占め、広がるのはⅩb期になってからと考えられる。

東部 千葉県、茨城県の常総台地は西部と様相を異にしている。前段階Ⅳ期に成立した中峰式土器の系統が強く残存している。中峰式の系統を持つ4群土器C~E類と、中峰式の特徴的文様である1本縁帯の曲線文、棹状波線による充填、眼鏡状突起などを口縁部文様帯に取り入れたキャリバー形土器である1群土器G類、H類が主体を占める。1群土器G類、H類はこの地域で成立した加曾利E-I式土器といえよう。また、大木8a式に類似する1群土器E類や、北部寄りに中心を持つ

クランク文のF類が客体的に出土している。口縁部文様帶にクランク文を持つキャリバー形土器が、主体的になるのはⅩb期においてである。

北部に位置する栃木県、群馬県では、既にⅦ期に大木8a式や馬高式が流入して在地化が進み、地域色の強い土器を成立させている(日本考古学協会 1981)。Ⅹa期でもこの地域色は残るが、キャリバー形土器の1群土器が併出するようになり、関東地方全体の様相に組まれていく。

Ⅹb期

西部 東京都、埼玉県ではⅩa期に成立した加曾利E1式キャリバー形土器は、口縁部文様帶が発達して横位に連続した構成を取り、頸部無文帯が確立した齊一的な土器へと変化している。土器群の構成では、勝坂式の系統を持つ4群土器は存在しなくなり、2群土器も整理され、全体としては貧弱になっている。曾利I式土器の出土も少數である。一方、神奈川県では、曾利I式土器や大木8b式に類似する土器が比較的多数出土しており、他地域からの影響を窺うことができる。Ⅹb期に、中部地方のいわゆる曾利系の曾利I式土器の分布が拡大はじめたことに因るものであろう。

東部 Ⅹa期の地域色を残しながらも、口縁部文様帶の発達したキャリバー形土器が主体を占めるようになる。口縁部の把手等は、文様帶と合体し退化していく。クランク文が盛行し、この地域の特徴的キャリバー形土器になっている。

Ⅺ期

西部 キャリバー形土器は、口縁部文様帶が渦巻文や区画文を中心とした平滑な文様帶になり、頸部無文帯の一般化とともに、最も確立した土器となる。中部地方、東北地方等他地域への影響はⅩb期にもみられるが、Ⅺ期のキャリバー形土器において顕著になる。このように、キャリバー形土器の確立と分布域の拡大が進む一方において、西部では中部地方曾利I式の3群土器が多量に流入し、土器群の構成を変え、影響を与えていく。Ⅺb期では、曾利I式の影響は神奈川県を中心とする一部であったが、Ⅺ期では、荒川以西の西部全体に及んでいる。曾利I式土器と加曾利E1式土器のこのような交錯は、関東地方西部から中部地方にまで及び、次のⅫ期では各地域において新しい土器群が生成されている。

東部 他地域からの影響は少なく、全体としてⅩb期からの連続した様相を持っている。キャリバー形土器は、口縁部文様帶にクランク文などの地域的文様の他に、渦巻文や区画文を持つようになる。頸部無文帯を持つ土器も増加し、西部のキャリバー形土器に類似していく。Ⅺ期の東部は、Ⅹa期、Ⅹb期と統いた地域色も薄れ、他地域からの影響も少なく、キャリバー形土器を主体に最も単純な様相を示しているといえよう。そして、次のⅫ期でも、キャリバー形土器を中心とした土器群を展開している。

このように、Ⅺ期では加曾利E1式の中心的系統であるキャリバー形土器は、関東地方全体において確立し、齊一性を持つようになったが、中部地方からの曾利I式土器の流入によって再び東西の地域色がもたらされ、そのままⅫ期に引き継がれている。Ⅻ期では、この地域色を反映した形で、新たな土器群が構成される。

(宮崎朝雄)

第6節 XI期、XII期

(1) 時間軸としての時期の設定

ここで対象とする段階は、XI期・XII期であるが、従来の編年観からすれば、大略、加曾利E式期に相当する。従来の加曾利E式段階の土器群は、地域や研究者によって、把握される内容が異なっている。しかし大勢として、頸部無文帯が喪失し、山内氏（山内 1941）の提唱した磨消懸垂文の伴うものという枠内で解釈されているのが現状であろう。

加曾利E式末葉期から、E式初頭期にかけての土器群の動態には、地域や系統的にみても、錯綜とした状態が認められる。加曾利E式末葉と、胴部に磨消懸垂文を持つ土器との間には、大きなギャップが感じられ、スムーズな変遷として捉えることはできない。また、磨消懸垂文の初現期と、それが地域的にみても一様に認められる段階とでは、土器における文様抽出の簡略化の方向、また、土器群における組成の変化といった観点からすれば、それらに相違が窺われ、段階的に変遷過程をたどることが可能であろう。

加曾利E式期についての具体的な分析例は、研究史的にみても数少なく、遺跡の報文中で細分が検討されてきた。蟹ヶ沢遺跡（寺村 1966）の報告例はその早い時期のものであり、出土土器を加曾利E式の中でも新しい様相をもつものとして位置付けることによって、暗に新旧における様相の違いを示唆している。膳棚遺跡では、加曾利E式の三細分が提示された。また、論文では、新藤康夫氏（新藤 1976）、白石浩之氏（白石 1978）のものがあげられるが、加曾利E式という体系の中において、文様帯・文様変遷の過程で、加曾利E式が論じられている。

しかし、これらの論考も、先述した頸部無文帯の喪失、磨消懸垂文を持つといった枠内の把握であり、細分案であるため、加曾利E式末葉からのギャップが埋まるものではなかった。

この様な研究動向に対して、笠森健一氏は島之上遺跡等の報告（笠森 1977）の中で、遺物の詳細な分析から、加曾利E式が3段階にわたって変遷していることを示した。そして、最初の段階に、頸部無文帯を喪失しても胴部に磨消懸垂文を持たないものが存在することを指摘した。ここで、加曾利E式末葉期からのギャップを埋める土器群が浮き彫りにされ、以後、大山遺跡（谷井 1979）等でのこの段階の土器群が追認されてきた。谷井（谷井 1978）は大山遺跡の資料に基づいて、加曾利E式直後の段階の様相を指摘するとともに、総括的に加曾利E式について述べている。また、宮崎（宮崎 1979）はこれらの成果をもとに、加曾利E式を2細分し、磨消懸垂文を持つ土器を後半に位置付けた。

近年、中期後半の土器群について、従来の呼称とは別に実態的・段階的変遷で捉えようとする研究が進んでいる。しかし、実際には各県ごとに見解の相違が認められ、時期区分についても共通の基盤に立っているとは言い難い。

東京都では、加曾利E式段階の土器群を東京第Ⅳ・Ⅴ期（神奈川考古同人会 1980）の2時期に細分している。時期区分の基準は逆弧文土器に置かれ、その盛行する時期が第Ⅳ期、衰退する時期が第Ⅴ期であり、加曾利E式土器は逆弧文土器と逆の現象にあるとされている。逆弧文土器は、能登健氏（能登 1975）、秋山道生氏（秋山 1980）、桐生直彦氏（桐生 1981）、笠森健一氏（笠

森 1977) 等によって段階的な変遷が論じられてきた。秋山氏と桐生氏は同様な基準で区分しているが、連弧文土器の発生時期に相違がみられ、秋山氏は東京の第Ⅳ段階に、桐生氏は第Ⅲ段階にそれを求めている。

また、神奈川県(神奈川考古同人会 1980)では、加曾利E式段階の土器群は第Ⅲ期の一時期に包括されている。第Ⅲ期は、線引きはされていないものの、a 頸部無文帯を喪失し、磨消繩文が未発達な段階、b 口縁部文様帯区画が集約化され、磨消繩文が発達する段階、c 口縁部文様帯区画が崩れ、胴部文様帯が迫り上がる段階の3段階に変遷していることが考えられている。時期区分の基準は、口縁部文様帯と胴部文様帯の2文様帯構成を持つ点に置かれている。

しかし、頸部無文帯の有無、口縁部文様帯の喪失、連弧文土器の変遷等からだけでは、充分な区分の基準が得られず、総合的な土器群の実態的な変遷をもって、区分基準を設定していかなければならないであろう。ここでは、上述の研究動向を踏まえて、従来の呼称に捉われず該期の土器群をⅩ期、Ⅺ期の2時期に区分し、更に、Ⅺ期をa、b期に細分して考えていきたい。

Ⅹ期は、加曾利E式直後から、磨消繩垂文が発生するまでの段階である。頸部無文帯を有する系統の土器が残存する。そして、頸部無文帯を喪失し、口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成が確立するとともに、主体的になる。頸部無文帯を喪失する土器は前段階に発生するが、土器組成中で主体的となるものではない。また、文様としての連弧文が認められる様になり、それが連弧文土器のスタイルとして確立する。曾利系の土器では、現在問題にされている曾利E式段階の土器とⅨ式段階の土器が伴う。この内にあっても土器群の様相に相違が認められ、細分される可能性が高い。しかし、資料不足等もあり、ここでは細分される可能性を指摘するだけに止めて置きたい。

Ⅺ期は、磨消繩垂文の発生から、加曾利E式に相当するⅫ期までの段階である。

Ⅺ-a期は、連弧文土器が盛行し、加曾利E式系土器群が減少する段階である。連弧文土器は文様構成にバラエティーが認められるものの、文様抽出法に崩れが認められる様になる。加曾利E式土器は胴部の懸垂文に磨消繩文手法が発生するが、口縁部渦巻文は比較的よく巻かれる状態にある。そして、いわゆる曾利E式段階の土器群が伴う。

Ⅺ-b期は、連弧文土器が減少・衰退し、加曾利E式系土器が増加する段階である。また、新しい器種として、口縁部文様帯を喪失した土器が出現する。加曾利E式系統の土器は、口縁部渦巻文が集約的になるとともに崩れてくる。連弧文土器は“型式”として最後の様相が窺え、抽出法が粗雑になり、連弧文の変形が著しくなる。曾利系の土器では曾利E式段階のモチーフの崩れた土器及びⅨ式段階の土器が出現するが、全体的に連弧文土器と加曾利E式との折衷的様相が強くなる。

(2) 土器群の分類

Ⅹ期、Ⅺ a、 b期を通して土器群を分類するため、各段階における群分けは共通するが、群内の類別は前後段階で対応するとは限らない。ここでの分類は説明上の便宜的なものであり、厳密な意味のものではない。

1 群土器 口縁部文様帯を持つキャリバー系土器群を一括する。加曾利E式系統で渦巻文や他の文様構成を持つ土器群や、同様な文様構成を持ち、地文に条線・沈線が施文される土器群を一括した。

2群土器 他系統の土器群の影響を受けながら、関東地方で成立した独自な土器群を一括する。個々の土器にバラエティーが認められる。

3群土器 連弧文土器を一括する。胴部で文様帯が上下に分帶され、上または上下文様帯に連弧文が描出されるスタイルをとる土器群である。連弧文土器は、上下文様帯におけるモチーフの組合せによって、文様にかなりのバリエーションを持つが、ここでは、上半部の代表的なモチーフ構成で分類した。

4群土器 いわゆる龍目文土器とか重弧文土器と呼ばれる、曾利式系統の土器群を一括する。

5群土器 口縁部文様帯を喪失した上器群を一括する。曾利Ⅳ式系統の土器群及びそれらの影響を受けた土器群である。

6群土器 浅鉢類を一括する。

7群土器 その他の器形を呈する土器群を一括する。

以上の様に大まかな群別を行ったが、次に、各段階における各群内の類別を説明したい。

X期（17図）

1群土器

A類（1） 頸部無文帯を有するもの。無文帯内に地文を施文する場合が多い。口縁部渦巻文が弧状に連結するものが多く、渦巻文と区画文で構成されるものも存在する。

B類（2） 口縁部文様帯が梢円区画と渦巻文で構成されるもの。胴部懸垂文は、隆帯や沈線が使用される。

C類（3） 渦巻文が「の」字状に描かれ、その結果、渦巻文が主導的となり、三角形区画と組み合わさって、口縁部文様帯が構成されるもの。

D類（4） 口縁部文様帯が梢円区画で構成されるもの。頸部無文帯が存在する。

E類（5） 口縁部文様帯が三角形を基調とした区画文で構成されるもの。

F類（6） 口縁部文様帯が渦巻文と区画文で構成され、地文に条線が施文されるもの。

G類（7） 口縁部文様帯を持ち、胴部に交差点状区画がみられるもの。

H類（8） 口縁部文様帯が整然と区画され、渦巻文が弧状に連結するもの。

I類（9） 口縁部文様帯・頸部無文帯を持ち、胴部に連弧文が施文され、いわゆる亥煙系土器と称されているもの。

2群土器

A類（10） 連弧文土器と同様な器形・分帯をとるが、連弧文が描出されないもの。

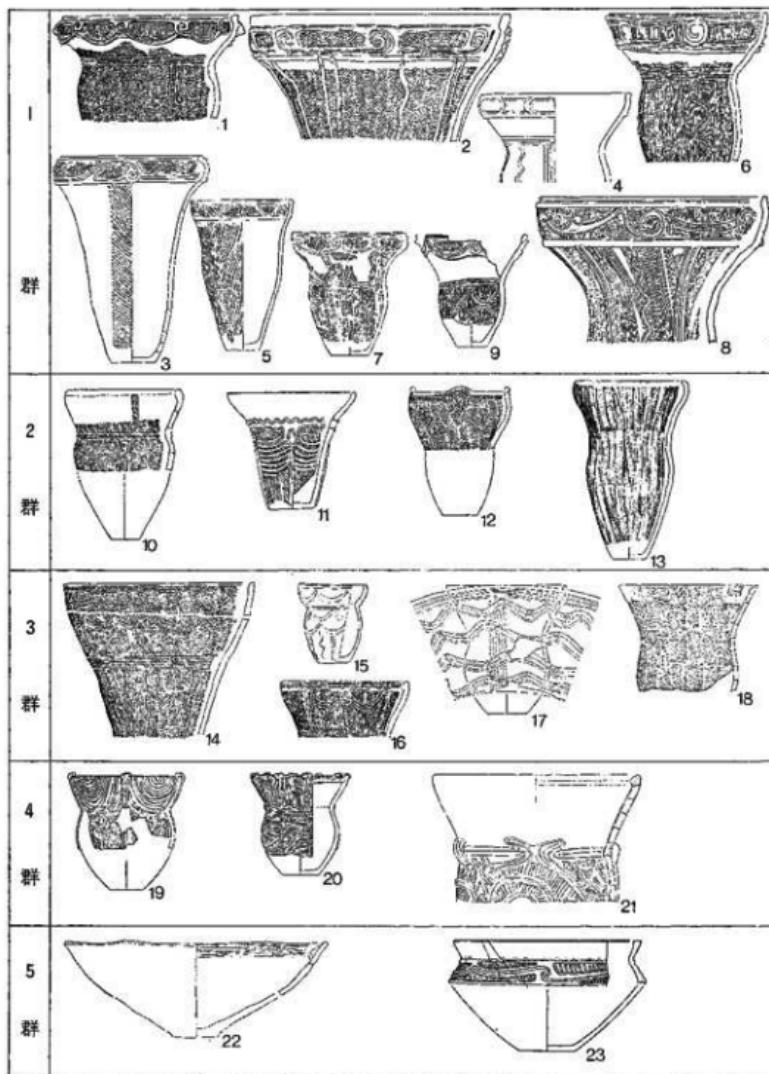
B類（11） 口縁部が朝顔状に開き、無文帯のもの。胴部には、隆帯や沈線の懸垂文が施文される。

C類（12） 連弧文土器と同様な器形で、胴部は分帯されず渦巻文が斜位に垂下するもの。

D類（13） 文様が描出されず、地文として纏文や条線のみが施文されるもの。

3群土器

A類（14） 上半部に連弧文が2段施文されるもの。下半部は懸垂文または連弧文が施文される。地文に纏文・撚糸・条線が使用される。



17図 X期土器分類表

B類 (15) 上半部に一段の連弧文が施文されるもの。下半部は懸垂文または連弧文が施文される。地文に繩文・撚糸・条線が使用される。

C類 (16) 上半部連弧文から懸垂文が垂下し、胴部分帯線との間に衿状区画を構成するもの。

D類 (17) 胴部は分帶されず、連弧文が多段に施文されるもの。

E類 (18) 胴部は分帶されず、口縁部のみに連弧文のモチーフをとるもの。

4 群土器

A類 (19) 重弧文土器系統のもの。

B類 (20) 簋目文土器系統のもの。口縁部に斜立の沈線が施文される。

C類 (21) 口縁部が開き無文帯で、胴部が張る器形のもの。胴部に唐草文等がみられる。

6 群土器

A類 (22) 口縁部が開き無文のもの。

B類 (23) 頸部と胴部が「く」の字状に屈曲し、胴部に渦巻文を基調とした文様が描出されるもの。

XII-a 期 (18図)

1 群土器

A類 (1) 口縁部文様帯が渦巻文と区画文で構成され、胴部に磨消懸垂文がみられるもの。

B類 (2) 口縁部文様帯が渦巻文主導形のもの。渦巻文と三角形区画文とが組合わさせて口縁部文様帯が構成され、胴部にA類と同様な磨消懸垂文を持つもの。

C類 (3) 口縁部文様帯が横円区画文で構成されるもの。頸部無文帯は喪失するが、胴部には磨消懸垂文手法はみられない。

D類 (4) 口縁部文様帯が、三角形を基調とした区画文で構成されるもの。

E類 (5) 口縁部文様帯が渦巻文と区画文で構成され、地文に沈線または条線が施文されるもの。

F類 (6) 口縁部文様帯を持ち、胴部に交差点状区画を持つもの。

G類 (7) 口縁部文様帯が連弧状のモチーフをとり、胴部に懸垂文が施文されるもの。

2 群土器

A類 (8) 連弧文土器と同様な分帶をとるが、連弧文が描出されないもの。

B類 (9) 口縁部が頸頭状に開き無文帯のもの。

C類 (10) 渦巻文が斜位に垂下するもの。

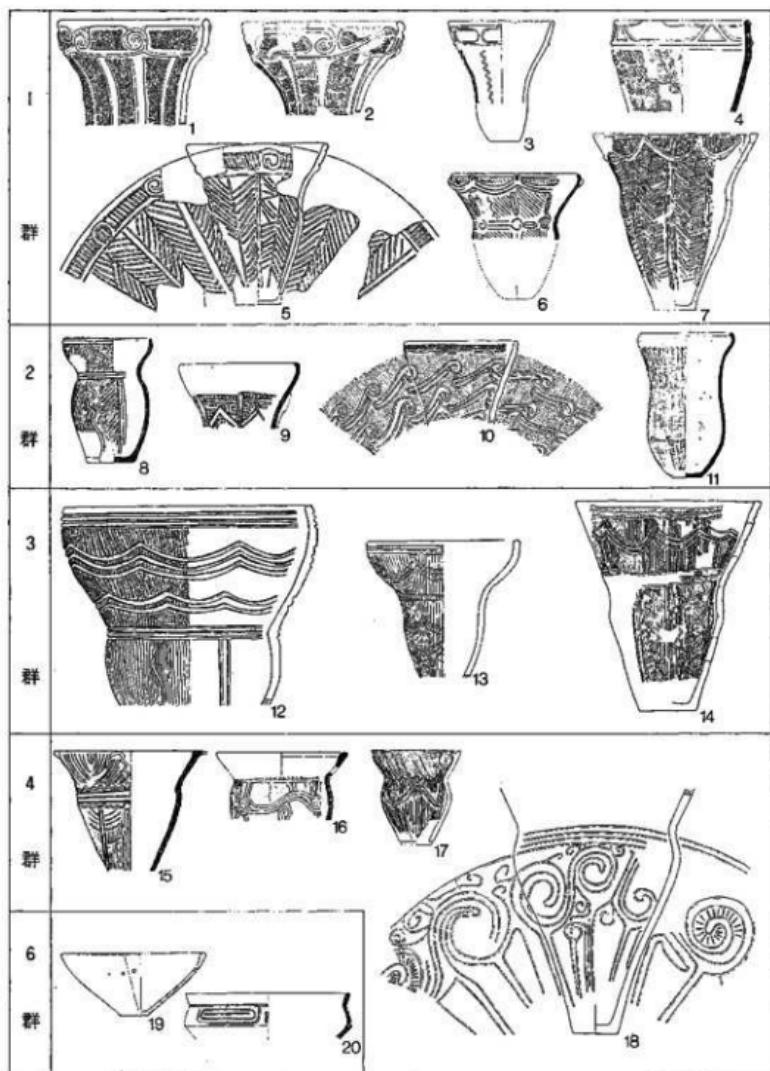
D類 (11) 文様は描出されないが、地文に繩文や条線が施文されるもの。

3 群土器

A類 (12) 上半部に連弧文が2段施文されるもの。下半部は懸垂文または連弧文が施文される。地文は繩文・撚糸・条線が使用される。

B類 (13) 上半部に連弧文が1段施文されるもの。下半部は懸垂文または連弧文が施文される。地文は繩文・撚糸・条線が使用される。

C類 (14) 上半部の連弧文と胴部分帯線との間に衿状文が区画されるもの。1段と2段の連弧



18圖 馬期土器分類表

文が存在する。下半部は懸垂文または連弧文が施文される。

4 群土器

- A類 (15) 重弧文土器系統のもの。
- B類 (16) 龍目文土器系統のもの。
- C類 (17) 口縁部が開き無文帯で、胴部が張る器形のもの。
- D類 (18) 口縁部が開き無文帯で、胴部が張りいわゆる唐草文が施文されるもの。

6 群土器

- A類 (19) 口縁部が開き無文のもの。
- B類 (20) 頸部と胴部が「く」の字状に屈曲し、胸部に文様帶を持つもの。

XI—b 期 (19|20)

1 群土器

A類 (1) 漪卷文と区画文が集約化され、連結又は崩れたモチーフとなるもの。渪巻文が円形区画化するものもあり、内部に縞文が施文されたりする。

- B類 (2) 渪巻文主導形で、渪巻文と区画文が変形し、流れる様なモチーフを構成するもの。
- C類 (3) 口縁部文様帶が橢円区画文で構成されるもの。
- D類 (4) 口縁部文様帶が三角形区画文の崩れたモチーフで構成されるもの。
- E類 (5) 口縁部文様帶が渪巻文と区画文からなり、地文が沈線または条線のもの。
- F類 (6) 口縁部文様帶が連弧文状のモチーフをとり、胴部に懸垂文が施文されるもの。

2 群土器

A類 (7) 胸部で分带し、下半部に懸垂文が施文されるもの。

B類 (8) 口縁部が開き無文帯のもの。胸部に懸垂文が施文される。

C類 (9) 胸部で分带され、上下段に懸垂文が施文される。交差点状区画の変形されたものである。

D類 (10) 頸部が括れ胴の張るもので、口縁部は無文帯のもの。地文に縞文が施文され、懸垂文が垂下する。

3 群土器

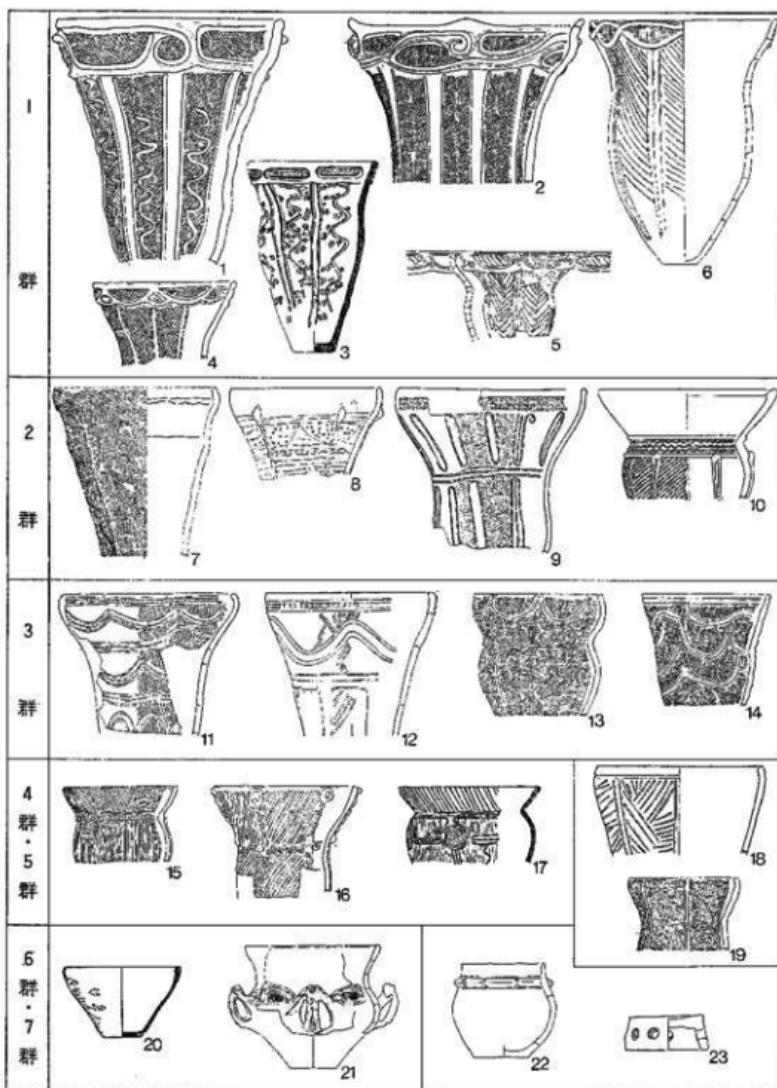
A類 (11) 文様帶が多段構成のもの。磨消縞文手法がみられ、連弧文が波状化し、直線化するものも存在する。

B類 (12) 上半部に連弧文が1段施文されるもの。連弧文は大きな波状文となり、磨消縞文手法がみられるものも存在する。

- C類 (13) 上半部連弧文から懸垂文が垂下し、胴部分帶線との間に杵状文が区画されるもの。
- D類 (14) 崩れた連弧文を描出するもの。基本的に連弧文土器のスタイルをとる。

4 群土器

- A類 (15) 頸部で括れ、胴部が張る器形のもの。口縁部に斜位の沈線が施文される。
- B類 (16) 地文に斜位の沈線が施文され、胴部に隆背による交差点状区画が行なわれるもの。
- C類 (17) 口縁部が開き、頭部が強く括れ、胴部の張るもの。



19図 XII b 類土 脊分類表

5 群土器

- A類 (18) 狹い口縁部無文帯が区画され、懸垂文が垂下するもの。地文に沈線が使用される。
B類 (19) 口縁直下から懸垂文が垂下するもの。地文に繩文が施文される。

6 群土器

- A類 (20) 口縁部が開き無文のもの。

B類 (21) 頭部と胴部が緩く「く」の字状に屈曲するもの。胴部文様帶のモチーフは簡略化される。

7 群土器

- A類 (22) 有孔鈎付土器である。
B類 (23) 器台である。

(3) 土器群の構成

XI期

この段階の代表的な遺構として、埼玉県では大山遺跡A 6号住・島之上遺跡3号住・八番遺跡(野中 1980) 4号住、東京都では門田Ⅲ遺跡(新藤 1976) 8号住・平山橋遺跡5号住、千葉県では子和清水遺跡B 3号住・穂花遺跡(岡崎 1981) 8号住等があげられる。

1群A類における口縁部文様帶と頭部無文帯の関係は、前段階の終末にその崩壊の兆がみられる。頭部無文帯間が広くまたは狭くなるに伴って、口縁部渦巻文が口唇部付近まで迫り上がり、隆帯が弧状に連結するため、口縁部文様帶下部の区画が不明瞭になるものが出現する。この様な変化過程の最後の段階に当る土器群が、XI期にみられる頭部無文帯を有する土器群である。

門田遺跡8号住(図版46—1~4)では、頭部部無文帯に繩文を施文する1群A類(2)と、頭部無文帯を喪失した1群B類(3)が出土している。両者の口縁部は、渦巻文と竪円区画文から成る同様なモチーフ構成を持つ。また、併出している4群B類(4)には、ソーメン状隆帯による格子目文はみられない。

平山橋遺跡5号住(図版46—5~15)では、1群A類(5)、D類(6)、F類(8)、G類(7)、2群B類(11)、3群A類(10)、4群C類(9)等が出土しており、該期の良好な組合せを示しているが、全体的に曾利式的な色彩が強い。

大山遺跡A 6号住(図版45—1~5)では、1群A類(1)、2群B類(4)、3群A類(2)、4群A類(5)が出土している。1群A類の口縁部文様帶は上に押し上げられて狭くなり、形態化し、本来頭部無文帯の部位に繩文が施文され、更に枠状文が区画される。器形は胴部が強く折れ、連弧文土器と類似する。2群B類も胴部に連弧文状のモチーフが施される。

島之上遺跡3号住(図版45—6~9)では、1群B類(6)、2群A類(8)、3群A類(7)、6群A類(9)が出土している。3群A類では、2段の連弧文の上側が口縁部区画線と接し、枠状の区画となる。1群B類の胴部懸垂文は隆帯が使用される。

八番遺跡(図版45—10~11)では、1群C類(10)とⅡ群A類(11)が出土している。1群C類の副部懸垂文は沈線であり、3群A類の連弧文は口縁部区画線と一体化し、枠状区画になっている。子和清水遺跡B 3号住(図版48—1~4)では、1群B類(1)、3群B類(2)、6群B類(4)

が出土している。1群B類では、胸部に懸垂文はみられない。また、海老ヶ作貝塚（図版48-5・6）では1群C類とE類が出土しており、C類（5）には懸垂文はみられない。瓈花遺跡8号住・同36号土壙からは、1群C類（図版48-7・8）が出土しており、胸部に沈線の懸垂文が施される。

この段階の土器群の基本的な組合せは、1群と3群と4群であり、それらの影響を受けて出来上がった2群と6群、7群が少量伴う。これらの組合せには、地域的な色彩が強く認められる。

連弧文土器は在地の土器として成立するが、連弧文土器としてのスタイルは、器形や文様要素等の多系統の要素が統合・複合され、胸部を分帯し、連弧文を描出すというスタイルとして確立されたものと思われる。そのため、器形・文様にバラエティが認められる。

この段階の連弧文土器は、上半部に連弧文を2段施すもの、また、連弧文から沈線を垂下して枠状文を区画するものが多く、描出法も定形化している。そして連弧文土器の中心地域やその周辺では、3群B類・2群A類の様な連弧文土器の影響を受けた土器が成立している。また、胸部を分帯せず描出法も崩れた土器の存在も知られており、大山遺跡（金子 1982）3号住では、1群B類・C類、2群A類と良好な状態で伴出している。この様に、連弧文土器はバラエティーの多い土器群であることが理解される。

Ⅹ-a期

この段階の代表的な遺構として、埼玉県では花影遺跡1号住・岩ノ上遺跡13号住・坂東山遺跡20号住、東京都では貫井南遺跡13号住・恋ヶ窪遺跡4号住・三鷹五中遺跡8号住、千葉県では今島田遺跡○土壙等があげられる。

東京では、連弧文土器が圧倒的に主体的な存在となる。貫井南遺跡13号住（図版50-1～21）では、3群土器と、それらと関連性の強い2群A類・B類が出土土器の大半を占め、これに4群B類・C類が伴い、若干の1群C類・E類が出土している。また、この傾向は恋ヶ窪遺跡（図版50-22～32）・三鷹五中遺跡8号住（図版51-9～15）等に認められ、これらの住居跡で伴う1群土器はE類・F類が多い。平和台I遺跡（神奈川考古同人会 1980）2号住（図版51-5～8）からは曾利式の色彩の強い土器群に混って1群E類（9）が出土している。

この期の1群G類は、Ⅸ期の3群E類からの系統がたどれ、当初連弧文土器の亜形として成立した土器が系統的に変遷し、一つのタイプを形成している。また、三鷹五中遺跡8号住からは、把手の付く口縁部文様帶を持ついわゆる曾利Ⅲ式とされる土器（図版51-11）や2交差点状区画を持つ土器（同12）が出土している。

埼玉県では、花影遺跡1号住（図版49-1～4）等の西部に、東京都と同様な傾向が窺われる。3群C類（1）は胸部の括れが強く、上半部に2段の連弧文を施し、下側の連弧文と胸部区画線が連結して枠状区画を構成している。下半部は懸垂文というよりも「匁」状区画を間隔を狭めて配置するため、その間に懸垂文状になっている。2群C類（2）はⅨ期2群C類の系統にあるものと思われる。斜位に垂下する渦巻文が横に並なり、連弧文と同様の効果を与えていた。他に1群G類（4）が加わる。

岩ノ上遺跡13号住（図版49—5～7）では、3群B類（6・7）と懸垂文に隆帯を使用する1群A類（5）が出土している。坂東山遺跡30号住（図版49—8～10）では、3群B類（9）・C類（8）に条線のみの2群D類（10）が伴い、同20号住では1群A類（同13）、同15号住では1群E類（同16）が検出されている。

東部では西原遺跡35号土壙から、1群B類（図版49—14）とD類（同15）が、また、黒谷田端前遺跡（宮崎 1976）10号住では、1群A類（図版49—11）と3群B類（同12）が伴出している。

千葉県では、今島田跡3号土壙から3群B類（図版52—1）、2群C類（同3）と懸垂文に磨消繩文手法を持たない2群土器（同2）が出土している。この3個体をみると、連弧文土器にやや崩れが感じられ、新しい様相として理解されるが、1群土器が出土していないため判断しきれない。他の2点には古い様相が窺われ、Ⅺ—a期においても一番古い段階か、もしくはⅪ期の終末に位置付けられる可能性がある。

また、単独の資料として荒屋敷貝塚（斎木 1978）から1群A類（図版52—4）、B類（同—5）が出土している。

この段階の1群における口縁部渦巻文のモチーフは、基本的にⅪ期のものを踏襲している。渦巻文と梢円区画文の構成は、坂東山遺跡20号住や黒谷田端前遺跡10号住のように渦巻文自体はあまり変化せず比較的よく巻かれる傾向にあるが、区画文が渦巻に沿って巻き込まれる様な形をとり、区画と渦巻が一体化する前段階的な様相を示している。

これらの土器の胴部懸垂文は、2本沈線間を磨消したものが渦巻文下と渦巻文間に下に比較的規則性を持って施文されている。これに対して、西原遺跡35号土壙の1群B類には、3本沈線間を磨消した懸垂文が使用されており、これはⅪ期以前から系統のたどれる3本線と、蛇行沈線から成る懸垂文の系譜上にあるものと思われる。また、岩ノ上遺跡13号住出土1群A類にみられる隆底懸垂文は、やはり前段階からの系譜上にあるものと思われる。しかし、2本沈線間を磨消す手法は新しいものと言えよう。

3群土器は描出される連弧文が崩れ始める。個々の土器群を比較すると、この期内において連弧文土器が細分される可能性も残されている。しかし連弧文の崩れのみでは決定的な変化の要素が識別できず他の土器群の変化の様相を比較しながら区分は行われるべきであろう。これらの土器群は、この期内における連弧文土器のパラエティーとして包括される可能性が高いと思われる。

4群土器は、文様描出・器形等が定形化しているものや崩れているもの、また、口唇部内側の三角形状突起が残っているものや、退化しつつあるもの等が存在し、新旧の要素が混在している。

6群A類は、Ⅺ期と比較してやや小型化し、器高が高くなる傾向にある。

Ⅹ—b期

この段階の代表的な遺構として、埼玉県では花影遺跡9号住、坂東山遺跡27号住、秩父山遺跡6号住、東京都では恋ヶ窓遺跡2号住、鶴川J地点遺跡20号住、吹上遺跡（小林 1978）27号住、千葉県では土守遺跡（柳沼 1979）35号住、子和清水遺跡65号住、同186号住等があげられる。

東京都の恋ヶ窓遺跡2号住（図版54—1～11）では、1群A類・B類・C類と2群B類・4群B類が出土し、1群土器が主体的となっている。吹上遺跡27号住（図版55—13～19）でも1群A類が

主体的となり、3群B類と5群A類、また、多分に曾利式的な土器が出土している。

鶴川J地点遺跡20号住（図版55—1～12）では、1群A類、2群D類、5群A類、6群B類、7群A類が出土している。2群D類（7）は、器形的には4群土器であるが、陸帯の懸垂文を持ち地文に繩文が施文され、加曾利E式ナイズされた土器である。

埼玉県では、花影遺跡9号住から1群A類（図版53—3・4）、B類（同1・2）が出土している。また、坂東山遺跡27号住では、1群土器でA類とE類の折衷的な土器（図版53—5・6）が2個体出土し、それに2群土器（同9）、4群A類（同8）、5群B類（同10）、7群土器（同11）が、3群土器では連弧文の非常に崩れたD類（同7）が伴っている。

秩父山遺跡6号住では把手の付いた1群E類（図版53—13）に連弧文の崩れた3群B類（同14・15・16）が、また、田端前遺跡12号住では、箱状把手の系統を引く1群A類（図版53—17）と5群A類（同18）が出土している。

千葉県では、土字遺跡35号住から1群A類（図版56—1・4）、B類（同2）と、連弧文が直線の帯状になったり（同6）、下半部文様帶のみの構成をとる3群土器（同5）が出土し、それに4群土器（同8）や6群土器（同7）が伴う。

子和清水遺跡65号住では、3群A類（図版56—9）、4群B類（9）、5群B類（同11・12）が出土している。また、同186号住では、1群B類（図版56—13・14）、Ⅲ-a期の1群F類の系統を引き、口縁部文様帶を喪失して文点状区画が変形された2群C類（同15）が伴っている。このように千葉県では、該期の遺跡が増加している。

この段階の1群土器の様相は、花影遺跡9号住出土土器がよく示している。渦巻文と区画文の系統であるA類では、渦巻と区画が集約的になり、または一体化する。渦巻文が円形区画化して、内部に繩文が施文されたりする。これらは主に陸帯と言えよりも、太目の沈線で描出されている。

これに対してB類は、渦巻文と三角形区画が流動的になり、渦巻文と区画文が一体化して流れるようなモチーフに変化し、Ⅲ-b期にみられる様な重層的モチーフ構成をとりはじめる。そして、渦巻文は巻ききらないが渦巻の形状を残しており、その内部には繩文の施文はみられない。渦巻文は沈線ではなく微隆起線状化した陸帯によって描出されているため、この土器は陸帯による渦巻文主導形の系譜上にあり、かなり変形はされているものの、その名残りを止めているものとして理解できよう。

東部的色彩の強かったこの種の土器群が西部にまで広く分布し、次の段階でも同様な傾向が窺われる。

また、1群土器の懸垂文は、Ⅲ-a期の様な規則的な配列は示さず、懸垂文の幅が広がって間隔が開いたり、幅が狭まって本数が多くなったりして、胸部を円錐的に分割する構成をとる。これらの懸垂文は、繩文施文後沈線間を磨消すものではなく、区画→繩文施文（充填）→区画のナゾリ返しという工程で描出されるものが一般的となる。

しかし、実際、繩文施文後区画沈線を太目にナゾリ返されると、磨消繩文手法との識別が困難となる。また、一見してそれと判断出来るものも存在する。Ⅲ-a期のものが磨消懸垂文とすると、この期のものは無文帶懸垂文とでも呼称できよう。

3群土器は文様構成の崩れが著しくなり、数量的にも急減する。そして、関東北部や東部地域では、口縁部文様帯を持つ1群土器の副部に連弧文が描出されたり、文様帯が多段構成になる形で存在している。

4群土器は、独自的な色彩が失われる傾向にあり、他の土器群との折衷的様相が強くなってⅢ群的な土器へと変化するとともに、東部地域へと波及している。

5群土器は、加曾利E式的な懸垂文を持つものや、「匁」状の懸垂文を持ち、地文が繩文であったり、条線や沈線であったりするものが存在する。

6群土器は、門田Ⅳ遺跡（新藤 1979）16号土壙から胴部に把手の付いた、いわゆる両耳壺の祖形的な土器（図版54-20）が出土しており、門田Ⅲ遺跡3号住や鶴川J地点遺跡20号住では、把手の付かない土器が存在している。

7群土器は、鶴川J地点遺跡20号住からA類の有孔鍔付土器が出土している。この系統の土器は、小形化するとともに胴部が球形状に変化し、XII期で増加してくる。7群A類、B類はこの期のみではなく、XI期～XIIa、b期を通して少量存在している。

(4) 地域における様相

XI期、XIIa・b期の土器群は、XI期に頭部無文帯を有する土器群が残存し、XIIa・b期に口縁部文様帯を喪失する土器群が出現する他は、器種的に大きな変動はない。むしろ、XI期で確立された器種が、XII期、XIIa・b期を通して全体的に“折衷的な方向性”を保ちつつ継承されていることが理解できる。ここでは、先に分類した土器群の段階的な変遷、空間的な分布から地域的な様相を考えてみたい。

XI期

東京都の多摩丘陵・武藏野台地は遺跡数は少ないものの、1群土器ではA類・D類・F類・G類・I類と3群土器が出土する。また、4群土器と、数は少ないが2群が伴う。これは、当地方が地理的にも山梨県に近いためもあって、他地域よりも曾利式の影響を強く受け、加曾利E式との折衷的な土器群ができ上がるためであろう。

本米的な加曾利E式の渦巻文の系統は、2文様帯系の土器に変遷し、3文様帯系の土器は他系統の影響を受け、相互の要素を複合しながらやがて消滅していく。なかには、口縁部文様帯を持ち、胴部に連弧文を取り入れた土器も出現する。

これらの土器群を母体にしつつ、軌を一にして当地方で連弧文土器が成立する。多摩地方を中心とする地域は、XII期直前段階の遺跡数が少なく、おそらく加曾利E式側の勢力が弱かったものと思われる。これは、曾利式側の進出を容易にさせ、加曾利E式との折衷的な土器群の成立、または、加曾利E式に代わる在地の土器としての連弧文土器の成立・発展を可能にならしめた要因の一つとして考えることが出来よう。

埼玉県では、武藏野台地（西部）と大宮台地（東部）で若干様相が異なる。1群土器は、武藏野台地ではB類が、大宮台地ではC類が多く分布する傾向にあり、両モチーフの組合わさったものも存在する。また、F類は存在するが、G類は非常に少ない。

3群土器ではA類とC類が代表的であるが総体量は少なく、3群土器と共に2群A類が存在す

る。大宮台地では東部的な2群D類の存在も知られている。

4群土器は、武藏野台地でB類・C類がみられるのに対して、大宮台地では良好な資料が少ない。

武藏野台地が西部関東的な大宮台地が東部関東的な色彩を持つものの、埼玉県全体としては、やはり西部・東部関東の中間的様相を持つ。

千葉県ではこの時期の遺跡数が少なく、不明な点が多い。1群ではC類が主体的であり、B類・E類かわずかに存在する。B類・C類の中で胴部に懸垂文を持たないものもあり、これは前段階からの系統を引いているものと思われる。またE類はこの地方獨得な土器である。

2群土器ではD類の条線や繩文のみの土器群がわずかな4群曾利系土器に代わって存在する。そして、3群連弧文土器もB類が知られるものの非常に少ない。

XII-a期

東京都では、3群である連弧文土器が急激に増加するのに伴って1群土器が減少する。1群ではA類・C類・E類・F類が存在するが、A類は良好な資料が非常に少なく、口縁部文様帯を持つ土器でも地文に条線や沈線を使用するものが多くなり、全体的に曾利式の影響を多分に受けた様相を呈している。

3群土器は文様構成にバラエティーが認められ、土器組成の中で主体的な存在となる。上半部に連弧文を1段または2段施文するもの、それに柵状区画を施すもの、下半部に懸垂文を施すもの、連弧文を施すもの、懸垂文と連弧文が組合わざるもの等、上下の文様構成の組合せによって連弧文土器にみられるバラエティーが、この時期にはほとんど出そろう。3群土器の増加は2群土器の増加をもたらし、特に連弧文の抽出されないA類が増加している。

4群土器ではA類の重弧文が崩れ、終末的な様相を呈し、D類の唐草文が変形して部分的に懸垂文状になっている。

この段階の土器群は2群・3群・4群の組合せに、僅かな1群土器が加わり、連弧文土器と曾利式的色彩の強い土器群で構成されていることが理解される。

埼玉県では、やはり連弧文土器の進展が著しい。しかし、武藏野台地では加曾利E式系統の1群A類が存在し、他に連弧文土器と曾利式土器の影響を受けて出来あがった2群土器が伴う。そして、やはり4群土器も存在する。

大宮台地では1群B類が主体的となり、3群4群土器が少量伴っている。また、3群土器の代わりに連弧文の抽出されない2群A類が増加し、4群土器の代わりに2群D類の条線文や繩文のみの土器群が存在し、東関東的な様相が窺われる。

千葉県では、前段階と同様に遺跡数が非常に少ない。単独資料から、1群土器では前段階で主体的であったB類に対して、A類土器が増加していく。3群土器は僅かに存在し、良好な4群土器はほとんど認められない。2群土器ではD類が特徴的な存在となっている。

XII-b期

東京都では前段階で隆盛を極めていた連弧文土器が衰退し、それに代って1群土器が復活する。しかし、本州の加曾利E式渦巻文系のA類は少なく、地文に沈線を使用するE類・F類が目立つて

いる。

3群土器は数量的にも減少するが、連弧文の崩れが著しく描出法も粗雑になっている。胸部を明確に分帯せず崩れた連弧文を描出する。1群F類との中间的な土器も存在する。

4群土器は独自性を失いつつ器形も崩れ、胸部に隆帯の懸垂文を施したりするが、地文に沈線又は条線を施文することによって系統性を維持している。また、2群土器では本来4群の系統を引く土器で、器形は4群であるが胸部に隆帯の懸垂文を持ち、地文に縦文が施されるもの等が含まれるようになる。

そして、これらの土器群に、口縁部文様帶を喪失した5群土器が伴い、これには曾利IV式的なものと、加曾利E式的なものが存在する。

埼玉県でも、東京都と同様な傾向が窺われ、1群土器が主体的になる。1群土器ではA類の多かった武藏野台地に、東部に特徴的であったB類が広がってくる。また曾利式の影響を受けていると思われる1群土器では、口縁部渦巻文や区画文が崩れず比較的しっかりとした構成を残している。

3群土器は連弧文の崩れが著しくなり、数量的にも減少する。大宮台地では崩れた3群土器の代わりに、2群A類土器が目立っている。

千葉県では遺跡数が急増する。1群土器ではA類・B類が主体的となり、変形されたD類も少量出土する。3群土器では連弧文が波状文に変形し、多段の文様構成をとるものや連弧文が帯状になるA類・B類が存在する。

また、連弧文土器の器形や分帯を呈し、変形された交差点状区画を施す曾利式的色彩の強い2群土器やかなり変形された4群土器もこの地方に進出している。

次に、Ⅹ期、Ⅺa・b期を通して、南関東における土器群の様相を概観してみたい。

加曾利E式からE式への変遷過程で、前段階からの系統性を帯びた地域的色彩の強い土器群が成立する。西関東では曾利式との折衷的な土器群、中央部では加曾利E式系統で2文様帶構成の土器群、東関東では大木式の影響を受けた土器群が成立する。そして、加曾利E式の系統性が弱い地域、つまり、多摩地方を中心として西関東で連弧文土器が成立する。

これらの土器群が、それぞれの系統性を持ちつつ次の段階に変遷する。しかし、西関東から中央部にかけての地域では連弧文土器が盛んし、それぞれの地域で小さな地域性は存在するものの、連弧文土器を中心として土器組成に齊一的な様相が窺われはじめる。東関東は不明な点が多いが、より東部に進むにつれて曾利式土器や連弧文土器の影響が薄らぎ、それに代わる土器群が存在している。

そして、次の段階では、早くも連弧文土器が衰退するとともに、加曾利E式土器が汎関東的に復活し、連弧文土器を凌駕する。加曾利E式・曾利式・連弧文土器はそれぞれの独自性が弱まり系統性が薄れ、相互の要素が変形されながら置換又は複合されて、新しい様相を持つ土器へと変遷している。これを発展的な変化として捉えるには疑問がある。これらの様相を持つ土器群に混って口縁部文様帶を喪失する土器群が成立している。

連弧文土器は東部地方において増加しており、連弧文土器を中心であった地域で衰退する頃に、変形されながらもその外郭地域へと波及していることが理解される。

また、曾利式系統の土器群が、Ⅹ期、Ⅺa・b期を通して、“崩れの方向性”を示しつつも、大きな変化を示さないのは、連弧文土器と関連性が強いからであろう。連弧文土器は当初曾利式土器と強い関連性を持ちながら、在地の土器、換言すれば関東側の土器として成立したものであり、曾利式土器は、あくまでも客体的な存在であったものと思われる。そのため、主体的に変化させながら繼承維持していかなければならないのは連弧文土器の方であり、曾利式土器にはその必要性が弱かったのである。

しかし、連弧文土器は一時盛衰を極めるものの、すぐに衰退の一途をたどる。連弧文土器には構造的、文様的に変化させる要素が少なかった点も、連弧文土器が“短命型式”であった要因の一つとして考えることが出来よう。

Ⅺ—Ⅻ期になって、土器群が汎関東的に齊一的な様相を示す様になる。しかし、すでに各系統の土器には変遷階梯の終末的な様相が窺われ、相互の折衷的な状態がこの期における齊一的な状況を生成している。

この様な混沌とした状態が下地となって新しい土器群が現われ、いわゆる加曾利E式土器群の出現をみるのである。しかし、口縁部文様帯に渦巻文を持つ本来の加曾利E式系統の土器は、変形されながらもⅩⅢ期にまで繼承されている。

(金子直行)

第7節 XⅢ期

(1) 時間軸としての時期の設定

XⅡ期は、従来の加曾利E式に比定される土器である。

加曾利E式の系譜である口縁部の隆帯により横位の文様帯が巡る文様が喪失し、代って波状沈線文を横位に廻らすモチーフの土器を基本として構成されている。

かって岡本勇氏が吉井城山第一貝塚の報告に示された土器を概ね基本とするものである。前段階である加曾利E式の伝統を若干残しながらも基本的な構成は一変しており、そういった意味で、口縁部文様帯を持つ土器とは断絶がみられる土器とも言えよう。

さて、XⅢ期の土器の設定は、山内清男氏によって加曾利E式の3細分を提唱したのに始まる(山内 1948)。その後、江坂輝弥(江坂 1950)、甲野勇(甲野 1953)、吉田格(吉田 1956)等の各氏によって、その編年研究史上にその名称を拾う事が出来る。しかしながら、その具体的な内容に致っては多くの見解がとられて、まちまちのままとなっていた。

1963年岡本勇氏は、吉井城山第一貝塚の報告を記した。報文中、岡本氏は「B類土器を主体とし、C類、D類、E類の一部を含めたもの」を加曾利E式として認識した。さらに、B類土器とは「A類にみられたような口辺部文様帯は無く、ただ弧線や凹線や点列がめぐっているだけである」とした。ここに至ってようやくその具体的な内容が明記され、以後波状沈線文の土器を加曾利E式に統き、加曾利E式を代表するモチーフとして理解されるようになった。そして、これらの土器認識は当時期研究の根底をなしていくのである。その後、諸氏の見解はあるものの岡本氏によ

る吉井城山第一貝塚の土器群の評価は、既く加曾利EⅣ式土器と相まって、該期の研究に少なからぬ混乱をもたらした。

さて、近年笹森氏は志久遺跡の報文中（笹森 1976）、加曾利EⅢ式の連弧文系の土器を論ずる中で、該期の土器について、その成立に連弧文土器群のあり方を一つの要素としてとらえている。さらに同氏は、島ノ上遺跡の報文中、当段階を具体的に2分しており、土器の変遷を示している。その中で、前半は加曾利E式系統の口縁部文様帯をもつ土器が併出し、沈線文系は幅広の沈線区画文により施文され、口唇部直下から文様の施文が行なわれるものとし、後半は加曾利EⅢ式の土器が影をひそめ、丸味のある沈線文が施文され、口唇部直下に1条の沈線が巡り、無文帯を構成しているものとした。このように笹森氏によって、初めて該期の実態がより明確化されたのである。

ところで、最近縄文中期のシンポジウムが相次いで行われている。1980年に行なわれた神奈川県考古学同人会主催のシンポジウムでは、神奈川地域の当段階について、吉井城山第一貝塚の報告を軸に加曾利E式第Ⅳ期としてとらえており、口縁部文様帯が喪失したものを当段階としている。一方、東京・埼玉方面の土器については、基本的には神奈川県と同様の「口縁部文様帯の喪失」としさに、「前段階のままに口縁部文様帯をもつものを共存する例も多い」と言及している。

また、1981年栃木県で開催された「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」のシンポジウムの中で、加曾利E式を各地域おしなべて10段階に細別している。該期はⅩ期としており、波状沈線文の土器と共に加曾利EⅢ式以来の土器を含めて考えられている。

この他、いくつかの論文があり（並木 1978a, b、宮崎 1979、田中 1981）、この段階の細分をこころみている。

このように、近年概ね口縁部文様帯の喪失をもって基本的に前段階の土器群と細別しており、さらに前段階からの伝統としての陸帯による口縁部文様帯を有する土器群の併出をもって当段階の実態として理解しようという共通の認識が高まっている。さらに細分の可能性も指摘されているが、具体的に明らかにされているのは少ない。それとともに、各研究者間においてはそれぞれ相違が見られることも否定出来ないであろう。

（2）土器群の分類

ⅩⅢ期は、前段階の加曾利EⅢ式の様相が失われ、磨消縄文の手法を主体とする、より後出的な時期となる。また、加曾利EⅣ式への過渡期の段階とも言える。そのために、いろいろな器形、文様が発展するに至り、整理し類型化しなければならない。器形では、浅鉢形土器、両耳壺、カッブ形土器等も出土しているが、その主体は深鉢形土器にある。文様の分類については、圧倒的な出土量を持つ深鉢形土器を行い、住居址出土土器を基本に、同一時期の資料とし、基本的な文様を群別に取り上げ、その内部の変化を示すことにしたい。

1 群土器

口縁部文様帯と胴部文様帯が分離した加曾利E式系統の土器群を一括する。器形はキャリバー形が基本となるものである。

口縁部文様帯は、陸帯と沈線文、又は沈線文からなり、いくつかの単位をなして施されている。胴部文様帯は、懸垂文状に沈線を施文し、幅の広い縦文帯と無文帯を交互に配するものである。

また、上端が連結した「匚」字状文も用いられる。なお、口縁部文様帯の渦巻文と区画文の組合せから、類別を行った。

- A類（1） 隆帯と幅広の沈線による渦巻文とそれに連結する横円区画文が相互に入り組む。
- B類（2） 隆帯と幅広の沈線による渦巻文と横円区画文で一対になったものがそれぞれ独立している。
- C類（3） 隆帯と幅広の沈線による波状文の間に横円区画文が施文されるもの。
- D類（4） 沈線による渦巻文が崩れて、区画化したもの。
- E類（5） 沈線による円文、横円区画文がめぐるもの。
- F類（6） 本来の渦巻文ではなく、沈線により弧状を呈するもの。

2 磁土器

沈線による波状沈線区画文を基本としたもので、加曾利BⅢ式を特徴づけるものである。吉井城山貝塚で分類されたB類にあたる。器形は、口縁部がやや内彎し、胴部中位がゆるく括れ、胴下半がやや膨らんで底部へ移行するものである。また頸部の屈曲の強いもの、口縁部が開きぎみになっているものがある。平縁の土器の他に、4単位の波状を呈するものがある。口唇部直下には、繩文の条の方向が変えて施文されているもの、1条の沈線がめぐり無文帯をつくるものがある。

口縁部文様帯の波状沈線と懸垂文のかかわり方から類別を行った。

- A類（7） 波状沈線文の間に、「匚」字状文を配し、垂下部には「？」状文、あるいは「匚」字状文が施されているもの。

B類（8） 波状沈線文の垂下部に対応して「匚」字状文が配されたもの。

- C類（9） B類の波状沈線文の間に「？」状文が施されるもの。波状沈線文の垂下部には、「匚」字状文が施される。

D類（10） 2本単位の沈線が波状に巡り、胴下半に「匚」字状文が施されているもの。

E類（11） 波状沈線文の波がA類より大きいもの。

F類（12） 波状沈線文の一部が切れて底部まで垂下するもの。「匚」字状文もみられる。

3 磁土器

各文様モチーフが上・下に分かれ2段構成となるものである。器形は胴部中位の括れが一層明瞭になり、文様も括れ部で分かれる。なお、文様は、沈線による区画内に繩文が施文されたものである。

A類（13） 縱位の横円区画文が2段構成で巡るもの。

- B類（14） 上段は渦巻文を基調とした、横に大きくなる「匚」字状文が形成され、下段は、「匚」字状文が配されるもの。文様は、2本沈線の間に無文帯を作り、区画外には繩文がある。

4 磁土器

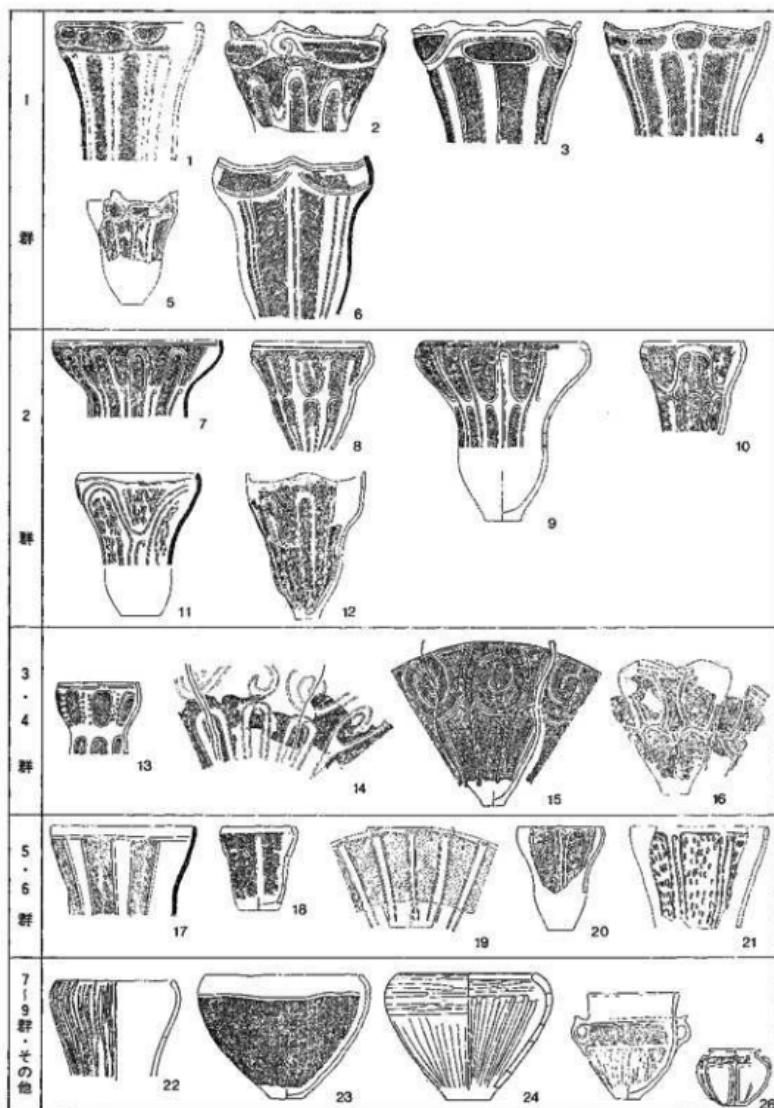
隆起帯で文様が描かれたものであり、区画内には繩文が充填されているもの。

A類（15） 渦巻文が1本の隆帯で描かれたもの。

B類（16） 「匚」字状の隆帯が、上下に接して施文されたもの。

5 磁土器

口縁部にわずかな無文帯を置き、以下底部まで縱位に区画された懸垂文が数単位施されるもの。文



20図 Xili期土器分類表

様のあり方は、2群土器の胴部文帯とほぼ同じである。なお、口縁部の無文帯は沈線で区画されるのが普通であるが、刺突文列が加わるもの、無文帯のみのもの等もある。器形は、キャリバー形を呈するものの他、底部付近ですぼまる他は直線的に外傾している。

A類 (17) 口縁にめぐる沈線から幅広の懸垂文が垂下するもの。

B類 (18) 「匂」字状の懸垂文が垂下しているもの。「匂」字状文の区画内に繩文が施文されるものと、区画外に繩文が施文されるものがある。

C類 (19) 口縁部上端に1条の沈線または点列が配され、その下に「匂」字状の懸垂文を施す。

D類 (20) 「匂」字状懸垂文の間に「？」状の懸垂文が加わったもの。

6群土器 (21)

「匂」字状の懸垂文が配され、空間を矢羽状の沈線を地文としたもの。曾利系のモチーフとされているものである。

7群土器 (22)

条線のみ施されるもの。口唇部直下から施すもの、無文帯を置くもの、無文帯下に1条の沈線を巡らしたものがある。

8群土器 (23)

繩文のみ施されるもの。口縁部上端に無文帯を置くもの、無文帯下に1条の沈線が引かれたものがある。

9群土器 (24)

全面無文のもの。数は非常に少ない。口縁部には沈線を巡らすものがある。

以上、9群の基本的な分類を行い、個々の類別の概要を述べた。次にこれらの土器がどのようなあり方を示しているのか、口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ土器、波状沈線による土器、また胴部中位で2分され文様が施文される土器等を中心に分析を行いたい。

(3) 土器群の構成

加曾利E式の伝統と、波状沈線文のモチーフを基調とする土器群が相入れる中、後者がより主体的なあり方を見せていくのが第XⅡ期の特徴で、また、陸帯を持つ土器が加わり、複雑な構成を呈しているが、基本的には吉井城山第一貝塚で岡本勇氏が報じた土器を主体として構成されているといえる。それらの土器を文様等で細別して、先に述べたように9群に分けた。

1群土器は、口縁部文様帯を有するもので、加曾利E式から続く土器である。それとの区別は困難な面もあるが、文様帯が狭まり、かつ硬直化する。最も基本的な相違は、横区画帯の喪失と言えよう。口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する隆帯が消え、直接につながってしまう傾向にある。しかし、若干区画帯が残存する土器もあり、ことに千葉方面では、中野僧見堂遺跡（斎木 1972）に代表される様に他の地域とは、異なる様相をみせている。

さて、口縁部文様帯は横位につながり、その幅が狭くなる。先に述べたように胴部文様帯との区画が明確でなくなる。井の頭池遺跡群A地点（山村 1980）出土土器（図版62-8）等のように、口縁部文様がせりあがり、胴部との間が無文化するものもある。

一方、口縁部文様帯は、陸帯と沈線によるもの及び沈線により文様が表出されている。志久遺跡

4号住（図版60—6）、ゴシン遺跡（並木 1978）2号住（図版57—1）、中野僧見堂遺跡6号住（図版63—1）、土宇遺跡（図版64—15）、新山遺跡（井口 1981）5号住（図版61—6）、同15号住（図版61—18）等には隆帯と沈線により施文されるものがあり、A～C類が多く見られる。また、D～F類は、裏慈恩寺東遺跡（並木 1978）1号住（図版58—10・12）、風早遺跡（福永 1979）14号住（図版58—1）、生谷境掘遺跡（桑原 1974）8号住（図版64—9）、新山遺跡4号住（図版62—1）等があげられよう。全体の傾向としては隆帯による区画という意識が強いようであるが、その隆帯も低隆帯化し、沈線がだいに目立つようになる。また、沈線によるものは横円区画文化したものが多い。これらの土器を見ると、小形のものや、口縁部の大きく開く土器が多い傾向にある。D類、E類含めて、より後出的な感があると言えよう。

これらの土器は、横に巡る構成をとりながらも文様単位が明確化し、小突起や波状口縁を作出し、4単位をとる土器が多くなる。

一方、胴部文様帶のモチーフは、懸垂文による無文帶の幅が広がる傾向にあると言えよう。そして、前段階にも見られるが、懸垂文の上端が付いた、「匂」字状文と「？」状文が配されるものもある。また、裏慈恩寺東遺跡1号住（図版58—10）、新山遺跡15号住（図版61—17）などでは、2本の懸垂文の他に、3本の沈線など不規則な懸垂文も見られる。

以上のように、口縁部、胴部についてはそれぞれにみて来たが、次に具体的に両者の関係についてみてみよう。

栗谷ヶ遺跡（佐々木 1981）1号住（図版57—13）の土器は、横区画が喪失し、胴部に波状沈線文が描出された土器であり、加曾利E式の伝統と新らたな手法の折衷する傾向が認められ、当段階の複雑な一面を物語っている。また、ゴシン遺跡2号住（図版57—1）はA類に属するが、「匂」字状文と「？」状文が描出されるものである。後貝塚（小西 1981）（図版63—13）では、口縁部文様が狭まり、その下に無文部を置き、胴部文様として、4群土器と同様の渦巻状のモチーフが描出されるものもある。井の頭池遺跡群A地点の土器も同様な傾向にある。また、口縁部文様帶の喪失は、志久遺跡4号土壙（図版60—1）のように、口縁部文様と胴部文様とが連なり垂下するものも認められる。このように、口縁部文様帶のあり方にかかわりなく胴部文様帶は描出され、1群以外の胴部文様との折衷的な文様構成をなし、単に口縁部文様帶は分離するという伝統の中に残存するにすぎなくなっていることを示していると言える。そして、本群土器は、前段階の構成を基本的に崩壊する傾向にある。

一方、それと軌を一にして、両耳菱形土器のなかには、当群土器にある口縁部文様帶を置換したものもあり、この種のモチーフが多くの器種に施されることに気づく。また、口縁部文様帶下が、繩文あるいは櫛歯といった、いわゆる粗製土器的な文様を施している。

深鉢形土器内における当群の文様は、遅くと相まって特異な展開をみせている。そしてこの時期を境とし、7群以下のいわゆる粗製土器と称される土器が増加する傾向にある。

2群土器は、波状沈線文を基調とする土器をまとめた。波状沈線は、胴部の括れ部を境として胴上半部に描出され、以下は波状沈線と交互に「匂」字状文のモチーフが施されるのが多い。また、波状内に「S」字状の文様や、胴部空間に「？」状の垂下するモチーフが描かれている。これらは

A～F類に細別される。

A類は、波状沈線文間に「匁」字状のモチーフが施されており、平尾遺跡（鈴木 1971）（図版62—5）や、井の頭池遺跡群A地点（図版62—7）、貫井遺跡（図版62—13）、裏恵恩寺東遺跡1号住（図版58—11）、馬込遺跡12号住等で出土しており、ことに武藏齊台地、大宮台地及び周辺に多いようである。それらにはほとんど「？」状のモチーフが空間部等に施されている。

器形は、馬込遺跡12号住は、頸部の屈曲が大きいが、他は、口縁部が内擣し、胴部中位でやや括れる比較的スマートな器形である。

B類は、胴部の括れ部を境として、下に「匁」字状のモチーフが施され、文様が上下2分される点にその特徴がある。花影遺跡5号土壙（図版57—10）、坂東山遺跡（図版57—11）、中野僧見堂遺跡3号住（図版63—7）、吉井城山第一貝塚（図版65—3）等がある。秩父山遺跡23号住（図版59—7）は、胴上半部の波状は大きくなり、口縁部に1条の沈線を巡らし、無文部を作るなど、新しい傾向が窺われる。

C類は、志久遺跡4号土壙（図版60—4）が好例である。

D類は2本の沈線を単位とする波状沈線文の土器である。前段階終末にある連弧文系土器の系譜をひくものであろう。栗谷ツ遺跡1号住（図版57—14）、ゴシン遺跡2号住（図版57—6）、風早遺跡14号住（図版58—2）がこれにあたる。

E類は、大形の波状沈線文の土器であり、栗谷ツ遺跡1号住（図版57—15）、後山遺跡（土肥 1974）（図版57—19）も櫛齒が区画内に施文されるが同様である。この他、土宇遺跡27号土壙（図版64—12）、新山遺跡3号住（図版61—4）等がある。この2個体は、いずれも口縁部に1条の沈線がひかれ、無文化している。モチーフは4単位化の傾向があり、新しい様相を呈している。

F類は、小室天神前遺跡（田中 1981）（図版60—10）や、志久遺跡1号住の胴部モチーフ、飯玉東遺跡（中島 1979）（図版60—11）、新山遺跡25号住（図版61—15）、同31号土壙（図版62—2）、宮添遺跡（松浦 1977）（図版65—8）に好例があり、いわゆる「H」字状化したモチーフを呈しているものである。小室天神前遺跡と飯玉東遺跡の土器は、モチーフが、ネガとポジの関係にある。この磨消繩文の単位文化は、大木9式以後の土器に廣く見られるところのものであり、福島県上原A遺跡（目黒 1975）、栃木県羽場遺跡（栃木県 1979）、群馬県荒砥前原遺跡（日本考古学協会 1981）にも「H」字状文の類似した土器が見られる。

以上、2群土器を概観した。A類、B類は、口縁部から繩文が施されているものが多いが、口縁部の繩文の施文方向を変え、口縁部と以下の繩文とを区別している。加曾利E式系統の土器にみられる口縁部区画内の横回転の繩文と胴部の縦回転の繩文の意識が、投影されているのではなかろうか。それと共に、口縁部文様帶としての意識が残るものと推察される。

さて、本群の土器は、前段階にはほとんどその例が見られない。しかし、波状沈線は、いわゆる連弧文にあり、中部地方にその原形が求められよう。前段階には定着し、加曾利E式土器の客体的な存在で特に相模方面に多くあり、一部に主体的な動きもみられる。この種の土器は、加曾利E式の系譜を引く土器の構造をベースとして、あるいは逆に加曾利E式土器を取り込む形で、多摩・武藏野方面においては成立したのではなかろうか。文様を胴部下半を垂下させる手法は、加曾利E式

の伝統的手法であり、強固な構造でもある。また、内側する口縁部にモチーフを配し、脣部に懸垂文を描出する手法は、波状沈線文、すなわち当群土器において胸部の括れ部を境としてモチーフが2分されるという分帯意識と無縁ではなかろう。

3群土器のA類は、風早遺跡9号住（図版58—4）に代表されるもので、文様帶が胸部中位の括れ部を境に、上下2段に分かれるものである。特に、関東東部や北部に多く、この時期の組成の一端を担っている。なお、福島県上原A遺跡、茨城県おんだし遺跡（井上 1975）にも類例が求められる。

B類は、A類とは基本的には異なる類の土器である。附川遺跡（谷井 1974）（図版57—8）、志久遺跡5号土壙（図版60—8）等が類別されたものである。これらは沈線区画による渦巻状のモチーフを基調としており、附川遺跡例の様に横「S」字状のものもある。こういったモチーフについては、後述する隆帯による渦巻文がベースになり、それが沈線化したモチーフを形成しているものと理解されよう。いずれにしろ、後出する土器群に続くものであり、新しい要素とみることができよう。しかし、類例がほとんど見られないことから、今後の検討にゆだねたい。

4群土器は、隆帯による渦巻文を基本として、構成されているものである。その分布はきわめて広範囲に及び、当Ⅲ期の重要な位置を占める土器である。A類は、梶山遺跡（神沢 1970）12号住（図版65—19）、新山遺跡1号配石（図版62—3）、風早遺跡（図版58—9）、花影遺跡（図版57—9）、機沢遺跡16号住等で出土している。かつて、村田文夫氏が梶山遺跡の報告の中で、大木8b式のモチーフをもつ土器と初めて指摘したものである。隆帯が微隆帯化したものに、風早遺跡9号住（図版58—5）、秩父山遺跡23号住（図版59—8）、生谷境編遺跡9号住（図版64—7・8）が見られ、系統的に、太い隆帯の土器よりも後出的なものとして理解できよう。

こういった、隆帯や渦巻文等といった点など、大木式土器の影響と見られる点も少くない。しかし、この種の土器は、大木式土器の分布図の中で福島県上原A遺跡で炉体土器として近似するものが出土しているもの他は少い。また、他の土器のあり方からも直接的な関連は薄いものと思われる。

また、加曾利E式の伝統の中にはこのような土器は全くなく、やはりその出自は他に求めるのが妥当であろう。前段階の中部地方には大腹な隆帯による渦巻の土器があり、同一のモチーフである。大木8b式の変形の仕方の違いかもしれない。

5群土器は、口縁に幅の狭い無文部を有し、「匂」字状のモチーフが横位に巡るものと本とする。平尾遺跡No.4遺跡（図版62—9）、新山遺跡（図版61—8）、馬込遺跡（図版59—2）、中野僧見堂遺跡（図版63—5）で出土しており、比較的広範囲の分布が知られている。

A類～D類に細別される。A類は、1条の沈線によって口縁を区画し、以下縦の沈線が垂下する。加曾利E式の系譜にある口縁部文様を有する土器群の口縁部文様帶が喪失したものとして理解するのは早計であろうか。B～D類は、A類とは異なり、「匂」字状文のモチーフを基調としているものであり、纏文が充填されており、ネガとポジの関係を作出しているもの（B類）や、間に「？」状文のモチーフを入れたもの（D類）、口縁部を1条の沈線で区画するものがある。これらのモチーフは、後述するいわゆる曾利系土器（6群）にその要素が見られ、そこにベースを置くものと推

察される。なお、大古里遺跡（小倉 1980）（図版59—13）では両耳壺に当群のモチーフが描出されている。

6群土器は、いわゆる曾利系の土器である。曾利Ⅳ式に対比されているものである。区画内には、矢羽根状の沈線や刺突を充填させているもので、平尾遺跡、当麻遺跡、尾崎遺跡（岡本 1977）、下北原遺跡（鈴木 1978）のように特に、西関東に顕著に分布する。こういった、矢羽根状の沈線や刺突を充填する手段は、図版65—9のように加曾利E式系統の土器の中でも、そのモチーフを共に取り込まれている。こういった曾利系土器の直接とも思われる分布のあり方は、先述した通り、XⅢ期の土器群の構成においてその強い影響を窺うことができる。

7～9群は、いわゆる粗製土器とされるもので、条線、縦文、無文の土器である。この段階では、条線、縦文の土器が増加し、浅鉢や、両耳壺の類にまで施文されている。また後山遺跡の例（図版57—19）のように、条線が波状沈線文の中にも施されており、粗製土器として一括されえない面も否定できない。

この他、カップ形土器、有孔鍔付土器なども、宮地遺跡（城近他1977）2号住（図版57—18）、ゴシン遺跡2号住（図版57—4）、裏慈恩寺東遺跡1号住（図版58—13）から出土している。

次に各遺跡における遺構を単位とする伴出関係をみながら該期の特色をみて行きたい。

埼玉県では、志久遺跡4号土壇、裏慈恩寺東遺跡1号住、馬込遺跡12号住、風早遺跡9号住・14号住、栗谷ヶ遺跡1号住、ゴシン遺跡2号住、秩父山遺跡23号住、花影遺跡10号住、東京都では、新山遺跡3号住・15号住・25号住、平尾遺跡、千葉県では、中野僧見堂遺跡3号住・6号住・11号住、生谷焼堀遺跡9号住等があげられる。

志久遺跡（図版60—1～4・6～9）は、大宮台地のほぼ中央部に位置する。加曾利EⅠ式期～EⅣ式期、続いて後期初頭の住居址が13軒発掘されている。4号土壇では、1群A類2個体と、括れの大きい2群C類、5群B類が出土している。なお、1群A類土器の1個体は、底部が欠損しているが現高約60cmを測り、大型である。口縁部文様帶の渦巻文が、胴部の懸垂文に移行している。1群と2群が伴出している。

裏慈恩寺東遺跡（図版58—10～14）は、大宮台地の東端に位置する。加曾利EⅡ式、称名寺式、堀之内Ⅰ式に伴なう遺構を発掘した。1号住居址では、1群D類が2個体、4単位の小突起に列点を施した2群A類、そして7群の浅鉢、有孔鍔付土器が出土した。1群と2群の伴出例である。

馬込遺跡（図版59—1～6）は、大宮台地東部に位置している。該期の住居址1軒が発掘されている。12号住では、1群F類と、括れの強い2群A類、括れが小さく、単位数の少ない2群A類、5群A類、8群の浅鉢、1群D類の両耳壺を出土している。

風早遺跡（図版58—1～9）は、下総台地の西端に位置する。関山期及び加曾利EⅠ式期～EⅣ式期の住居址が発掘されている。14号住（1～3）では、1群A類、1群E類、2群D類が出土した。1群A類土器は、胴部中位で括れるが、渦巻文は上半に施文され、以下括れ部まで条線が施文される。括れ部から下は縦文が施文される。9号住（4～6）では、3群A類、4群B類、8群鉢が出土している。1群、2群土器はみられない。

ゴシン遺跡（図版57—1～7）は、比企丘陵上に位置する。該期の住居址1軒が発掘されてい

る。2号住では、1群C類と胴部文様帶に「Ω」字状文と「？」状文を持った1群A類、2群D類が2個体、5群B類、1群A類の両耳壺、2群A類のカップ形土器が伴出している。

これらは風早遺跡9号住以外、若干違いが存在するが、1群土器、2群土器A・C・D類のような波状文の上・下に分離しているものが伴出する類似した様相を持っている。

栗谷ヶ遺跡（図版57—13～15）は、武藏野台地東岸に位置している。該期の住居址2軒が発見されている。1号住では、1群B類土器、2本単位の波状沈線文による2群C類と2群F類が出土している。1群B類土器は、波状が4単位を形成し、胴部文様帶には、2群A類の文様が施文されている。

秩父山遺跡（図版59—7～10）は、大宮台地に位置している。23号住では、上下2段に施文された2群B類に伴い、4群A類、7群、1群D類の壺が出土している。深鉢形土器では、1群、2群（B類以外）は出土していない。

花影遺跡（図版57—9・12）は、比企丘陵に位置している。10号住では4群A類と1群A類の両耳壺が伴出している。秩父山遺跡と同様、1群A類の手法は深鉢形土器には用いられていない。

以上様相から、1群土器に伴い、2群A・C～F類、5群が伴出する傾向が窺われる。また2群B類は4群と伴出し、4群は3群A類との伴出関係が求められる。

東京都では、沈線文による文様表出する土器が多く見られる。

新山遺跡（図版61—1～18・62—1～3）は、武藏野台地の中央に位置している。加曾利EⅢ式期からEⅣ式期へ連続と統き、1群と2群が伴出する遺跡である。3号住（1～5）では、1群A類、2群A類、E類、3群B類、8群が出土している。5号住、7号住も、類似した様相を示す。25号住（15・16）では、2群B類と4単位の波状を呈する2群F類が出土している。1群はみられない。

平尾遺跡（図版62—4～10）は、多摩丘陵に位置し、地点別に調査が行われた。No.2遺跡では、1群E類、2群A類が出土している。また、曾利V式に比定される土器の出土が多かった。

以上、伴出例をみると、1群A類と2群A類、3群B類、また2群B類とF類の2つに分れて出土する傾向がみられる。

千葉県では、隆背手法が発達している。

中野僧見堂遺跡（図版63—1～8）は、下総台地に位置する。加曾利EⅢ式期から加曾利B式期にわたる遺物が出土している。特に、加曾利EⅢ式期からEⅣ式期にかけた良好な資料が注意されよう。

6号住（1～6）では、2個体の1群A類、5群A類、口縁部にも繩文を施した5群A類、5群B類、9群の鉢が出土している。3号住（7・8）では、2群B類に伴って4群A類が出土している。

生谷境堀遺跡（図版64—1～9）は、下総台地に位置し、3軒の住居址が発掘されている。

8号住（9）では、1群D類の4単位を呈する土器が出土している。9号住（1～8）では、波状の細かい2群B類と、波状の大きい2群B類、4群A類、4群C類、胴部上半には8群の、下半には7群の文様が施文された深鉢、2本の沈線による無文帯が渦巻文を作る深鉢、5群B類の鉢、

4群A類の產が伴出している。

以上のように、1群A類と5群A類は伴出していることがわかる。また、2群B類は4群A類と伴出する傾向がみられる。

さて、このように、文様の系譜、及び伴出関係を見てきたが、該期を構成している土器群を中心まとめるに次のようなになる。

1. 加曾利E式土器の系譜をひくもの。
2. 波状沈線文を主体とするもの。
3. 隆帶による渦巻文を主体とするもの。
4. 「人」字状のモチーフを基調とするもの。

これらの4タイプの土器をフィルターとして、それぞれ見た場合、この時期の土器は文様及文様構成レベルで様々な交換がなされているのがみられる。すなわち、加曾利E式系統の土器の中に2の文様を取り込んだり、4の区画を1の中に取り入れているものもある。さらに、1の中に沈線化された3を取り込んだ例や、3を沈線区画化したものもある。このように、文様レベルで相互の土器群が錯綜して様々なタイプの土器が生れたといえよう。

それと共に、文様のネガ、ポジの関係が2や4の土器では特に認められる。さらに、沈線と隆帶といった施文方法も置換されている例がある。

一方、文様構成にあっては分帶の意識を残しながらも、基本的に縦の文様構成を呈している。それとともに、胴部の括れ部を境として上下2段に分帶される土器もあり次の段階へと統いてゆく。特に2のタイプの土器にあっては、波状のくり返しから大形波状化し、その単位が4単位、6単位と明確になって行く。

また、各遺跡の遺構を単位とした伴出関係から、1～4のタイプの土器は、地域によってそのあり方は異なる。1と2は、ゴシン遺跡2号住、栗谷ヶ遺跡1号住、志久遺跡4号土塙といった遺跡で伴っている。2と3は、秩父山遺跡23号住で出土している。中野僧見堂遺跡では1と4の系統の土器が伴っていることなどが指摘されよう。これらのことから、両者は同一段階の存在として理解さるものと考える。

このように、前段階からの加曾利E式土器は該期をもって崩壊し、その終焉を迎える。これにとて代り、波状沈線の土器が連弧文の系譜と加曾利E式の手法と相まって成立したものと考えるのが現在のところ妥当と思われる。波状沈線文の土器は突然出現し、その主体をなす。また、大木式系とされる隆帶によるモチーフが客体的存在としてある。それらのパラニティーのいくつかが次段階の文様の主体を占めていく。かつ、曾利式系の土器も東京・神奈川方面を主体に出土している。このように古い段階の土器群と新らな土器群とが錯綜し試行錯誤がくり返えされ、文様の様々なレベルでの交換がみられるなど、この時期の繩文土器のあり方の一端をかい間見ることが出来よう。

なお、今回は若干触れるにとどめたが、該期の土器は伴出例や文様上からも細分される可能性が高いと言えよう。

(4) 地域における様相

ことに多摩丘陵・武藏野台地では、沈線文系土器が発達している。波状沈線による文様区画文間

に纏文を施文した一群及び、「匁」字状文、「匚」状区画文を基調とした一群がある。

新山遺跡、貫井遺跡等の武藏野台地に立地する遺跡は、加曾利E式系統の土器が多く、口縁部文様帶を持つA類、E類が存在する。しかし、量は多くない。また「匁」字状文を基調とした文様のバラエティーは多くなっている。口縁部から直接文様が施文されたD類、小突起が4単位を呈し、口縁部に1条の沈線が巡り、以下に「匁」字状文及び両側に「？」状文を施し、間を纏文で施文したもの、波状4単位を呈し、口縁部に無文帶を持ったC類の文様が施文されているもの等が出土している。2群土器は、全体的に出土しており、新しい段階ではB類とF類が併出している。

一方、多摩丘陵は、中部地域に近いこともあり曾利式の影響を受け、武藏野台地とは様相を異にしている。平尾遺跡では、2群A類、5群B類、C類、5群、6群が主体を占めている。6群では、「M」字区画文の外側に列点が施文されたもの、「匚」状区画文の内外に兩だれ状刺突文の施文されたものが出土している。

1群ではF類が出土している。口縁部文様帶は、沈線による半円文が横に巡り、頭部には胴部との区画に沈線が巡る。2段に文様を施文する構造は加曾利E式によるものであるが、文様は、弧線的要素を持つものであり、これが当地域の特色といってよいであろう。

なお、神奈川県でも、当麻遺跡、尾崎遺跡等に5群、6群の出土が多く、曾利系の影響が窺われる。

埼玉県の武藏野台地、大宮台地、下総台地は共に、ほぼ同様な様相を呈している。加曾利E式系統の1群が主流を占め、2群との併出が明瞭な地域である。裏慈恩寺東遺跡1号住、志久遺跡4号土壇に代表されよう。

なお、胴部中位で括れ、文様が2分して施文される3群と4群の構造は、前段階までには見られず、新しいものとして考えられよう。3群B類は、埼玉県中央部から西部にある附川遺跡、志久遺跡、大山遺跡で出土している。4群1類では、花形遺跡に見られるように、胴部上半に大きな渦巻文を有しその一部から下部に隆帯が垂下している。これは、曾利Ⅲ式の胴部に施文されている、いわゆる唐草文に類似している。このような本群土器の系譜は大木式土器に求められるものと言われているが、曾利式の渦巻文と共通基盤も多分にあると言えよう。

新しい段階では、隆帯は微隆起に代わってくる。

千葉県方面の下総台地では、まとまった資料が少く、様相も明瞭でないが、加曾利E式系統の土器が主体を占めているといえよう。子和清水遺跡、土字遺跡等でもこの傾向が窺える。

古い段階は、中野僧見堂遺跡に代表され、5群との併出が見られる。新しい段階では、生谷境堀遺跡9号住が代表されよう。1群、5群の土器は姿を消し、2群B類、4群が主体を占めるようになる。なお、当地域では、4群の隆帯のバラエティーが多くなる。

1群の口縁部文様帶を持つ土器群が崩れ、器面全体に文様が施文される2群を介入させ、3群、4群が成立する中で、関東では、2群が受け入れられにくかったため、中野僧見堂遺跡から生谷境堀遺跡のように変化が急だったものと考えられる。

第8節 XIV期

(1) 時間軸としての時期の設定

XIV期は、岡本勇編年の加曾利EⅣ式におおよそ対比される時期である。この時期の土器群は、大蔵遺跡(栗原 1962)、吉井城山貝塚(岡本 1963)において中期加曾利E式土器と後期称名寺式土器をつなぐ、中間に位置する土器として摘出された。その呼称は、栗原氏が加曾利EⅢ式、岡本氏が加曾利EⅣ式と相違したが、両者ともXⅢ期土器群に続く中期加曾利E式終末の土器と位置付けた点では一致している。以後、関東地方を中心として中部地方に及ぶ広い地域で加曾利EⅣ式土器の存在は確認されてきている。中期と後期の中間という位置は確定したが、前後の加曾利EⅢ式土器及び称名寺式土器との関係については、研究者間にかなり違いがみられ、明確になっていない状況といえよう。

加曾利EⅢ式とⅣ式土器を分離した岡本編年に対して、堀越正行氏は時間差ではなく地域色として把え、分離を否定した(堀越 1972)。神奈川考古同人会による神奈川編年でも、神奈川第Ⅳ期として一括されている(神奈川考古同人会 1978)。XⅢ期において既述したこと、加曾利EⅣ式土器を含まない加曾利EⅢ式土器群が各地域で展開する事が明らかであり、加曾利EⅣ式土器を一括して出土する住居址や土墳も確実に存在する。志久遺跡、新山遺跡、中野僧御堂遺跡等で代表されるように、加曾利EⅢ式から加曾利EⅣ式への住居址を単位とする連続的変遷をたどることが可能である。岡本勇氏が提示した加曾利EⅢ式→加曾利EⅣ式という細分を段階的な時期として考え、加曾利EⅢ式から連続的な加曾利EⅣ式をXⅢ期として設定した。

ところで、東京都西部及び神奈川県ではXⅢ期に曾利V式の影響が強くみられる。神奈川編年では、神奈川第Ⅳ期において加曾利EⅢ式、Ⅳ式を曾利V式と対比している。また、同人の1人である戸田哲也氏は神奈川第Ⅳ期を加曾利E4古、新と細分し、曾利V式と加曾利EⅣ式新とは若干の時間差を考えているようである(戸田 1977)。このように、曾利V式土器の系統が残存する中で加曾利EⅣ式土器が出現する状況は、小野真一氏も「静岡県における縄文中期土器の編年的考察」(小野 1972)の中で入谷平V式、V式として把握している。長野県でも近年小林公明氏が加曾利EⅣ式土器を井戸式として曾利V式の次に位置付けている(小林 1980)。しかし、入谷平V式、井戸式とも後期初頭に位置付けられている。これは、曾利式土器の分布圏では、曾利V式の終えんを中期の終えんとするからであり、また、加曾利EⅣ式土器が持つ後期的側面を良く示しているともいえよう。関東地方における加曾利E式土器の系統は、加曾利EⅢ式、Ⅳ式及び称名寺式段階まで連続的であり、曾利V式は加曾利EⅢ式と基本的には併出し、加曾利EⅣ式とは神奈川県以西において残存系統として併出している。

次に後期称名寺式との関係について検討してみたい。称名寺式土器は、近年系統的研究が特に進み、西日本の中洋、東庄内式系統土器の流入による称名寺式土器の出現と、おおよそ3段階の変遷が認められている。各段階の土器群の構成については遺構出土資料が少ないために、なお不確定であるが、志久遺跡8号住、平和台1号住、上布田遺跡(赤城 1979)4号住等で明らかのように、少なくとも称名寺式1段階に加曾利EⅣ式系統の土器が併出している。神奈川シンポジウム

における東京・埼玉編年ではこれらの住居址を、称名寺式土器を含まず加曾利EⅣ式土器が主体である黒谷田端前遺跡5号住、島之上遺跡17号土壙、出口遺跡1号住等と同時期のⅦ段階として把えている(安孫子、秋山、中西 1980)。しかし、称名寺式土器の存在だけでなく、加曾利EⅣ式土器の系統的变化もたどることができ、土器群の構成にも違いがみられ、段階差として把える必要があろう。このように、加曾利EⅣ式土器が主体となる段階、次に称名寺式土器の出現と加曾利EⅣ式系統の土器が交錯する段階とする認識は、笹森健一氏、青木秀雄氏、谷井らが主張してきたところである(笹森 1977)。しかしながら、前述したように称名寺期各段階の土器群の構成は確定したとはいはず、また、前原遺跡4号住のように加曾利EⅣ式系統の土器が主体でありながら、加曾利EⅣ式としては新しい様相を持つ住居址も存在する。前原遺跡4号住については、加曾利EⅣ式以降、称名寺式段階と一応把えておきたい。

以上のように、加曾利EⅣ式土器は加曾利EⅢ式土器から系統的に変化して成立し、次の称名寺式土器が出現すると影響を受けながらも系統が残存していく。真に中期と後期をつなぐ土器といえよう。XIV期は、加曾利EⅣ式土器が土器群の主体を構成した中期終末の比較的短かい1時期として設定できよう。

(2) 土器群の分類

土器群の中で主体となり体部全体に文様を描く深鉢形土器は、文様構成としては余り変化が無く、施文手法において、沈線文と微隆起線文という相違が顕著である。ここでは、文様構成と、施文手法を中心にして、1群～5群土器に大別し、各群を文様の違いから類として細分した。

1群土器 (21図A～H)

体部全体に文様を構成し、沈線により文様を描く土器である。

A類 (A) 口縁部が内曲し、胴部中央が括れる深鉢形を呈する。口縁部無文帯を持ち、体部全体に文様を描く。文様は胴部中央の括れ部で上下2段構成を取り、上段は「W」字状、下段に「旦」字状文を描き交互に組み合っている。文様内には繩文が充填される。

B類 (B) A類と類似するが、体部上段の「W」字状文が曲線的になり、弧を描くようになる。口縁部には横状把手を1個持つものが多い。

C類 (C) 体部文様の「W」字状文、「旦」字状文の先端が鋭く、「W」字状、「A」字状になる土器である。器形は若干外反気味である。

D類 (D) 体部文様上段の「W」字状文が、口縁部無文帯を区画する沈線と連結し、円形文を描く。

E類 (E) 体部文様上段が曲線化し、連続的な渦巻文になる。下段は「A」字状で先端が鋭い。口縁部は横状把手を含み4単位化が顕著になる。

F類 (F) 脇部の括れは緩く、直線的な深鉢形を呈する。体部文様は1段構成を取る。C類の下段文様を欠いて、上段文様を1段構成としている文様である。

G類 (G) 脇部中央で若干括れる深鉢形を呈する。体部文様は1段構成を取る。文様はC類の「W」字文の磨消し部が崩れ、上段が連結するようになる。

H類 (H) 体部文様に1段構成の区画文を描く。区画内には繩文が充填される。

1群土器は、胴部中央で括れる深鉢形を呈し、上半及び下半が脹る器形が特徴的である。口縁部無文帯を持つことも共通している。文様は体部全体に構成し、A～E類は2段、F～H類は1段構成である。文様は、縦文部と磨消し部の対称よりなっている。前段階XⅢ期の土器と比較すると、XⅢ期は、胴部下半の磨消し部「U」字状文が発達し文様の主体となるが、XⅣ期では中央括れ部を境として、ほぼ均等に上、下2段に文様が分離され、かえって、上段の文様に重点が置かれている。また、1段構成のF～H類でも文様の主体は上半部に移行している。このような文様構成は、胴部中央が括れ、特に上半が脹る器形と一体であり、確立したものとなっている。しかし、体部全体の文様構成と、その文様における2段あるいは1段構成のバラエティーなどは、XⅢ期から連続するものである文様の細部では、XⅣ期では「W」字状文、「U」字状文の先端が鋭くなる点、横状把手が一般的になることが上げられる。

1群土器A～H類は、体部上段文様を中心として系統的変化をたどることも可能だが、全体として類似性が強く齊一性を持つ土器群といえよう。

2群土器 (21図A～E)

器形及び文様構成とも1群土器と類似するが、微隆起線文により文様を描く土器である。

A類 (A) 1群A類に類似する文様構成を持つ。体部全体に文様を描き、上下2段構成である。上段はW字状文、下段は「U」字状文である。微隆起線文による文様内は磨消し部、外側は縦文部である。

B類 (B) 1群B類に類似する文様構成を持ち、体部文様は上下2段構成を取ると思われる。上段のW字状文は曲線化して渦巻状になっている。横状把手を持っている。

C類 (C) 1群D類に類似する文様構成を持つ。体部文様は上下2段構成を取り、上段は磨消し部が連結して円形文を描いている。

D類 (D) 1群F類に類似する文様構成を持つ。1段構成の土器である。

E類 (E) 1群G類に類似する文様構成を持つ。口縁部無文帯の突起部と体部文様帯の微隆起線文が一体化している。

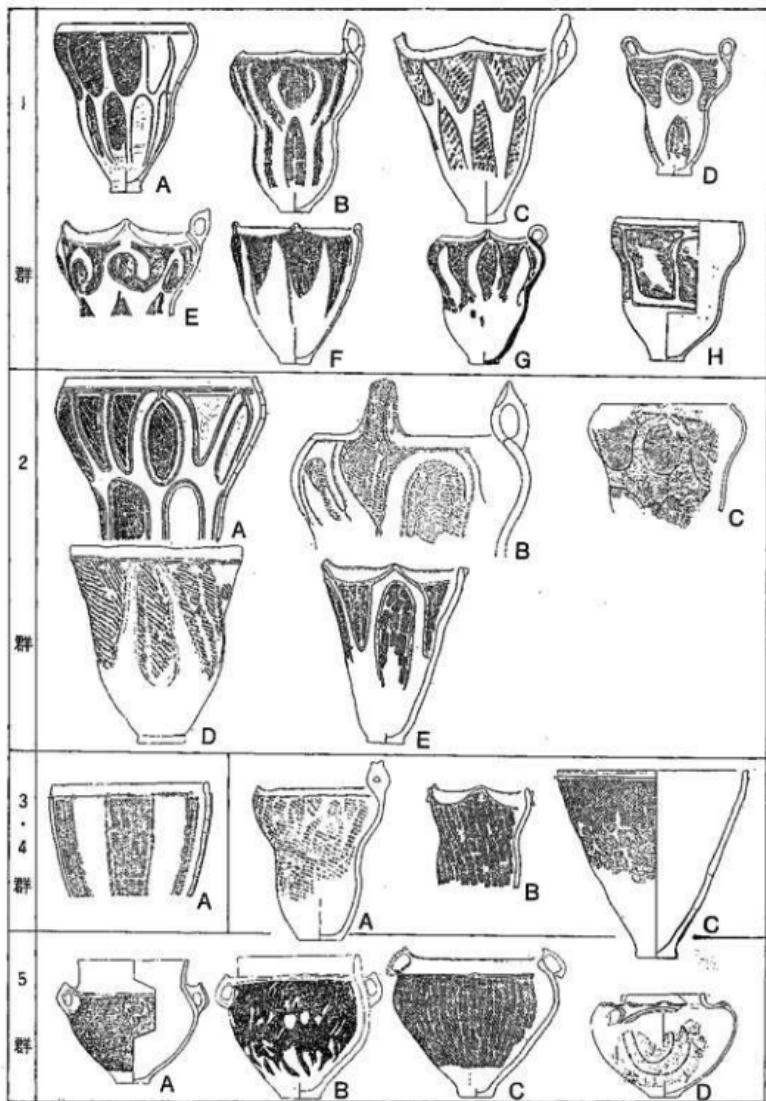
2群土器A～E類は、微隆起線文という特徴的施文手法を持つが、文様構成は1群土器と極めて共通している。XⅢ期における微隆起線文による土器と比較すると、XⅢ期は文様間の磨消し部が未発達であり、微隆起線の両端をなぞる程度の土器が大部分である。XⅣ期では、磨消し部が発達し、縦文部と対称的に組合って文様を構成する。また、XⅢ期では、沈線文による土器と文様の類似があまりみられないが、XⅣ期では沈線文の1群土器と文様構成が共通するようになる。その結果、1群、2群土器が主体となるXⅣ期の土器群は全体として極めて齊一性を持つといえよう。

3群土器 (21図A)

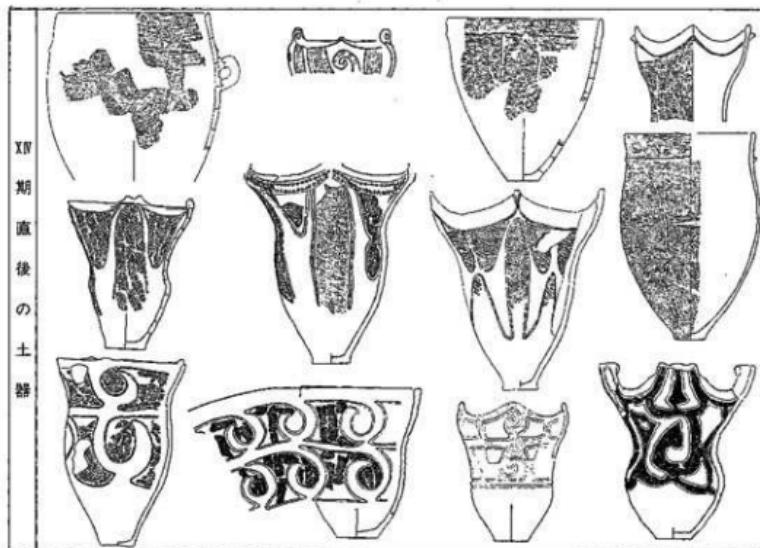
口縁部が若干開くが、直線的な深鉢形土器である。口縁部無文帯を持つ。文様は、胴部に陰帯を垂下し、幅広な磨消し部と縦文部を交互に持っている。文様構成は極めて単純である。

XⅢ期にも類似する土器が存在し、変化の乏しい土器であるが、XⅣ期になると無文部が若干幅広になる傾向にある。

4群土器 (21図A～C)



21図 XIV 陶器分類表



22図 XIV期直後の土器

口縁部無文帯を持ち、胴部全面に繩文を施文しただけの土器である。

A類（A） 胴部中央で括れ、上下半が膨む深鉢形を呈する。口縁部無文帯と横状把手を持つ。胴部全面には繩文が施文される。

B類（B） A類とはほぼ同様の器形を持つ。口縁部無文帯の区断を隆帯で行い、隆帯は波状部で渦巻文となっている。胴部には繩文が施文される。

C類（C） 胴部上半が直線的に開いた深鉢形を呈する。口縁部無文帯は1条の隆帯により区画する。胴部は、全面に繩文施文するが、上段と下段では施文方向を変える土器が多い。また、下段を条線文にした土器もある。

5群土器 (21図A～D)

両耳壺とその他の小型土器を一括する。

A類（A） 無文の口縁部を持ち肩部が膨む両耳壺である。胴部は全面に繩文を施文している。両耳の中間に隆帯による渦巻文を持つ。XⅢ期の両耳壺の文様帯が簡略化したものであろう。

B類（B） A類と比較して口縁部無文帯幅が狭く、両耳間の隆帯による渦巻文は無く、突起状に残存している。

C類（C） 口縁部無文帯が内傾し、両耳がこの無文帯に付く土器である。1群、2群土器の横状把手と同様の付き方である。両耳間にB類と同じ小突起が存在する。胴部には全面に繩文を施文する。

D類（D） 小型壺形土器である。口縁部が直立し、肩部に数個の小さな橋状把手が付いている。胴部は微隆起線文により渦巻文が描かれる。器面は丁寧に磨かれている。

5群土器A～C類の両耳壺は、V期における大形深鉢形土器に祖型を求めることが可能であるが、XⅢ期に肩部に對する両耳を持つ形が完成する。XⅢ期では、肩部に文様帯を持つことを特徴としているが、XⅣ期では文様帯は退化して、小突起が単位として残存する土器が一般的になる。両耳壺の系統はその後称名寺段階では、両耳が無くなり胴部が長くなつた深鉢形土器へと引き継がれています。口縁部無文帯や区画する1条の縁帶、小突起、胴部全面の繩文施文に両耳壺との関連が窺われる。

D類の小型壺形土器も、良く出土する土器であるが、XⅢ期及び称名寺期にも連続して存在しており、あまり変化しない土器である。

以上、1～5群土器について述べてきたが、XⅣ期の土器群は、施文手法としては沈線文と微隆起線文を主体とし、繩文部と磨消し部によって文様が基本的には全て構成されている。裝飾としては両耳を含み橋状把手が付く土器が大部分であり、全体として齊一性を持った土器群といえよう。

（3）土器群の構成

XⅣ期の資料は、近年増加してきたとはいって、住居址等遺構出土土器としてまとまった資料は、他の加曾利E期と比較して少ないといえよう。

埼玉県では、島之上遺跡17号土壇、出口遺跡1号住、4号住、9号住、坂東山遺跡1号～3号敷石住居址、黒谷田端前遺跡5号住、西原遺跡25号住、26号土壇等で出土している（図版66、67）。このうち土器群としてまとまっているのは、島之上遺跡17号土壇、黒谷田端前遺跡5号住だけである。島之上遺跡17号土壇では、1群土器C類、3群土器、5群土器B類、D類が出土している。出口遺跡では、単独的ではあるが1群土器B類、F類、3群土器、4群土器A類が出土している。このように、島之上遺跡、出口遺跡では1群土器を主体として2群～5群土器を含む土器群の構成を持つといえよう。膳棚遺跡、坂東山遺跡、宮地遺跡、西原大塚遺跡（谷井 1975）など武藏野台地及び西部の丘陵地帯でも、1群土器が目立っている。

一方、大宮台地の黒谷田端前遺跡5号住では、2群土器E類、4群土器B類、5群土器C類、D類が出土している。西原遺跡25号住は、4群土器A類、C類を出土している。黒谷田端前遺跡、西原遺跡等大宮台地の遺跡では2群土器を主体とした土器群の構成を持っている。

東京都では、船田遺跡（城近 1970）B15号住、16号住、谷保東方遺跡（佐々木 1978）2号住、新山遺跡19号住、20号住、21号住、22号住、井の頭池遺跡1号住、大藏遺跡配石址等が上げられる（図版69）。谷保東方遺跡2号住は、1群土器A類、3群土器、4群土器A類が出土している。井頭遺跡1号住は1群土器C類と2群土器D類の組合せである。新山遺跡、船田遺跡、大藏遺跡では1群土器を主体に、2群～5群七器が出土している。東京都の各遺跡における土器群の構成は、埼玉県武藏野台地以西と連続した状況であり、1群土器を主体として、2群～5群土器が併出していいる。

千葉県では、中野僧御堂遺跡8号住、中野木新山遺跡（西川 1977）2号住、18号ピット、千代田遺跡（米内 1982）IV区1号住、2号住、生谷燒畑遺跡1号住、小金沢貝塚（小宮 1982）1号住等が上げられる（図版68）。中野僧御堂遺跡8号住は1群土器A類、2群土器A類、中野木新山遺

跡18号ピットは1群土器C類、4群土器A類、生谷境畠遺跡1号住は2群土器A類、B類、小金沢貝塚は2群土器C類、5群土器B類が出土し、量は少ないが組合せがわかる資料である。千葉県では東京湾岸沿いの下総台地南部では、中野木新山遺跡にみられるように1群土器が土器群構成の主体を占めているが、下総台地北部では、1群土器よりも2群土器が主体を占めている。

このような下総台地北部の構成は、茨城県、栃木県、群馬県の関東地方北東部では一層顕著である。茨城県おんだし遺跡2号住、砂川遺跡(渡辺 1982)33号住、栃木県根沢遺跡4号住、群馬県空沢遺跡(大塚 1978)JH1号住、JD4号土壙等では、2群土器を主体とした該期のまとまった資料である。

一方、神奈川県では1群土器が主体となっている。仲町遺跡(甲元 1971)、尾崎遺跡12号住、24号住が比較的まとまっている。

以上、各遺跡における住居址出土土器を中心として土器群の構成を述べてきたが、分類の項で述べたごとく該期の土器群は系統的種類が少なく全体として齊一性を持つ特徴がある。土器群の構成においても、資料の少なさとともに、極めて単純な構成といえよう。荒川以西の関東地方南西部と下総台地南部では沈縞文の1群土器が主体を占め、大宮台地、下総台地北部を含めた関東地方北東部では微隆起縞文の2群土器が主体を占めている。そして1群土器、2群土器を主体として、全体的に出土する3群、4群、5群土器を含めて土器群を構成している。

(4) 地域における様相

XIV期は、前項で述べたようにXIII期と比較すると単純な土器群の構成を持っている。そのことは地域における様相にも反映され、関東地方全体としてXIII期よりも齊一性を持っている。地域色はXIII期の地域色が弱まったようなものとなっている。

XIII期の地域色は、① 加曾利E式キャリバー形土器系統が強い東京都、埼玉県、群馬県を含む関東平野部、② 曾利V式土器の影響が強い東京都、神奈川県の西部丘陵地帯、③ 東北地方に中心を持つ大木9式土器の影響が強く分布の周辺部に入る栃木県、茨城県の東部という地域色が考えられる。千葉県は②と③地域の中間的様相を持っているといえよう。

XIV期になると、① 地域に当たる東京都、埼玉県西部、神奈川県の一部を含む台地部、海岸部では、XIII期において新たに出現した全体全体の文様構成を持つ土器が連続的に変化した1群土器が土器群の主体として顕著になる。② 地域に当たる東京都、神奈川県の西部丘陵地帯では、曾利V式土器が退潮し、代わって1群土器が主体を占めるようになる。このような1群土器の進出は、曾利V式土器分布圏であった中部地方にも及び、この地域でも関東地方に類似する様相となっている。しかしながら、神奈川県丹麻遺跡等では1群土器に曾利V式系統の土器が併出しており、曾利V式土器の終えんについて今後検討する必要がある。いずれにしても、曾利V式土器の退潮と1群土器を主体とするXIV期土器群の進出は連続したものといえよう。③ 地域に当たる栃木県、茨城県では、XIII期において顕著になってきた微隆起縞文土器から連続する2群土器が主体となっている。2群土器は、微隆起縞文という施文手法は大木式土器の系統として地域色を示しているが、XIV期では文様構成においては1群土器と極めて類似しており、関東地方の土器として一層在地化し成立したものと考えられる。そして、XIII期の③地域ばかりでなく、群馬県、埼玉県東部、千葉県北部

まで主体となる分布域が広がっている。千葉県では、ⅩⅢ期と同様下総台地北部では2群土器、下総台地南部では1群土器が主体であり両者の中間的様相を示している。

このように、ⅩⅣ期の地域相はⅩⅢ期にみられた地域色が連續的に残存しながらも、新たに沈線文、微隆起線文という施文手法の相違として弱い地域色が再編されているといえよう。また、3群土器～5群土器は2群土器に近い土器であるが、比較的全域に分布しており共通した土器である。

以上、ⅩⅣ期について検討してきたが、加曾利EⅣ式土器の系統は次の称名寺式期にもかなり残存している事が認められる。中津、東庄内式の西からの流入を契機として称名寺式土器群が成立する状況については、既に各氏によって詳細に論じられている。ここでは次に、ⅩⅣ期との関係を明確にするために加曾利EⅣ式土器の系統を中心にして、称名寺式第1段階の様相について若干触れておきたい。

称名寺式第1段階の様相を示すものとしては、東京都坂上遺跡（能登 1973）、上布田遺跡4号住、平和台I遺跡9号住、埼玉県志久遺跡8号住、千葉県金浦台遺跡（沼沢 1974）1号住、千代田遺跡IV区3号住、茨城県砂川遺跡等がまとった資料である。このような出発状況が考えられる資料から土器群を構成する主な土器を示したのが第22図である。ⅩⅣ期加曾利EⅣ式土器の系統を視点として分類し、その特徴を検討する。

1群土器（22図上段左2個体）

ⅩⅣ期1群土器の系統を引く土器群である。ⅩⅣ期では体部文様は2段構成を取り並列的であったが、この段階になると、上段の文様が曲線状に発達して、下段の文様をその一部として取り込む傾向がある。このような上段文様の発達は器形の変化としても表われている。ⅩⅣ期では胴部中位で括れていたが、括れ部が若干下がる土器や、括れ部を持たず体部の長い土器になっている。

2群土器（22図中段左から3個体）

ⅩⅣ期2群土器E類の系統を引く土器群である。ⅩⅣ期と比較すると、口縁の波状が強まり、口縁部が一層外反するようになるが、器高が大きいために全体としては細身の土器になる。文様は体部全体に曲線的に描かれてくる。

3群土器（22図上段左から3個体目）

ⅩⅣ期3群土器の系統を引く土器である。この土器は文様の微隆起線文が沈線へと変化する傾向がある。

4群土器（22図上段右）

ⅩⅣ期4群土器の系統を引く土器である。2群土器同様口縁の波状が強まっている。

5群土器（22図中段右1個体）

ⅩⅣ期5群土器両耳壺の系統を引く土器である。両耳はなくなり、1群、2群土器同様器高が大きく細身の土器となっている。

6群土器（22図下段左2個体）

施文手法等においてⅩⅣ期土器群の系統を引きながらも、中津式東庄内式系の文様構成によって作られた土器である。左は微隆起線文、右は沈線文によって文様が描かれ、次の7群土器とは施文部と無文部が逆転している。

7群土器（22図下段右2個体）

中津式、東庄内式に極めて類似する土器である。この土器は、XIV期土器群との関連は無く、この段階に西日本からの流入あるいは影響により出現した土器と考えられる。

次に各土器群の分布状況をみると、2群土器、6群土器、7群土器の存在が顕著である。2群土器は、埼玉県東部、栃木県、茨城県、千葉県北部を含む関東地方北東部を中心に分布している。4群土器、5群土器は栃木県、茨城県に特徴的に分布する。2群土器～5群土器の分布は、XIV期における2群土器を主体とした関東地方北東部の地域色を残したものと考えられる。

一方、7群土器は神奈川県、東京都、千葉県、茨城県の海岸部に分布している。これは、中津式東庄内式土器の関東地方への流入と影響が海岸経路を取ってきたことを示している。この地域では7群土器とともに2～5群土器が出土しており、在地の土器と新しい土器の流入の状況がみられる。

6群土器は、東京都、埼玉県、千葉県、茨城県の台地部を中心に分布し、ちょうど7群土器の周縁部において成立している。2群土器も6群土器とはほぼ同様の分布を示している。

このように、XIV期では1群土器と2群土器の地域色があったが全体としては齊一性を保っている。しかし、称名寺式1段階になると、西日本の中津式、東庄内式系統の7群土器が、おそらくは海岸経路によって関東地方へ流入する。その結果、海岸部では7群土器が分布し、その周縁部では6群土器が成立するが、北東部ではXIV期の系統を強く残した2～5群土器が主体となっており、新たな地域性が出現している。

以上のように、称名寺式1段階においてもXIV期加曾利EIV式土器の系統が残存することが明らかであるが、現状では良好な資料は少なく土器群の構成や、この段階の細分については今後検討していく必要があろう。

(大塚孝司)

第6章 今後の課題

縄文時代中期を14段階Ⅰ期～ⅩⅣ期に区分し、時期ごとに、(1) 時間軸のとしての時期区分、(2) 土器群の分類、(3) 土器群の構成、(4) 地域における様相という共通項目に従い説明した。(1)では、時期区分の根拠を、(2)、(3)では土器群の内容と考え方を、(4)では地域における様相を検討することから全体的動向を明らかにしたつもりではあるが、時期によって、資料の多少、遺跡の偏在などかなりの違いがあり、土器群の考え方にも各期の特徴が表われており、必ずしも全体として統一的な説明になっていない。しかし、関東地方における中期土器群に対して、一定区分による時間軸としての時期区分し、土器群の変遷を把握しようという当初の目的は幾分かは達成できたのではないかと思っている。

本稿の時間軸としての時期を從来の代表的な時期区分や他地域との関係を整理したのが128ページの表である。最初に協会（協会 1981）の時期区分と比較すると、協会のⅠ期を本稿ではⅠ～Ⅲ期に3細分し、Ⅴ期をⅦ、Ⅷ期、Ⅸ期をⅩ、Ⅺ期に2細分している。Ⅰ～Ⅲ期は五領ヶ台式に比定される時期である。五領ヶ台式は今村啓爾氏によりⅠ式、Ⅱ式に2細分されて以来（今村 1972）2時期細分は定着したといえよう。山口明氏は雷7類相当の土器を含め4段階細分を示している（山口 1980）。本稿では山口氏の第1、2段階を確実に細分できる資料がないためⅠ期としたが、今後細分される可能性がある。Ⅲ期は佐藤達夫氏により五領ヶ台式直後段階として指摘され、阿玉台式、勝坂式成立につながる重要な時期であるが、現状では資料が少なく土器群の構成が不安定である。このように、Ⅰ～Ⅲ期については、資料の増加とともに改めて検討する必要があろう。

Ⅳ期～Ⅹ期は、阿玉台式及び勝坂式に比定される時期である。この時期は、佐藤達夫氏の分析（佐藤 1974）以後、阿玉台式西村編年（西村 1972）と中部地方の井戸尻編年（藤森 1965）を両極において詳細な分析が行われ、細分が急速に進展した。井戸尻編年に対しては、猪沢、新道、藤内、井戸尻の各段階は大枠として認められているが、各段階の細分や、藤内Ⅰ式、井戸尻Ⅰ式、Ⅲ式の位置付けが確定していない。本稿では、猪沢、新道段階に対比されるⅤ、Ⅵ期についてa、bの2細分を行っている。藤内、井戸尻段階についてはⅦ～Ⅹ期の時期として土器群を改めて整理した。阿玉台式については、Ⅰ式の内容が明らかでないために、Ⅰb式、Ⅱ式との関係が確定していない。佐藤氏はⅠb式古段階を猪沢式、新段階を新道式に対比したが、本稿では新道式の新段階をⅨb期としてⅢ式に対比させている。Ⅳ期～Ⅹ期については、土器群を構成する種類が多く複雑であることから、神谷原遺跡のような住居址単位の良好な伴出資料を基本として把握していく必要があろう。

Ⅺ期～ⅩⅣ期は、加曾利E式に比定される時期である。本稿では6期に区分し、Ⅺ期、Ⅻ期を更にa、bに2細分している。神奈川シンボジウムにおける安孫子昭二氏らの東京埼玉編年は7期に区分しており、段階設定としては近いといえよう。同じく神奈川考古同人会による神奈川編年は、4期に区分し、Ⅲ期に3細分、Ⅳ期に2細分の可能性を示しており、Ⅲ期を除くと段階設定にあまり差はない（神奈川考古同人会 1980）。各县の区分を從来の岡本編年と照合すると、加曾利E式

は3～4細分、Ⅰ式は1～3細分、Ⅲ式、Ⅳ式となる。加曾利EⅡ式については、住居址における伴出関係が一定しない点もあり今後検討する必要があろう。

以上のように、時間軸としての時期区分においては、中期全体として連続する段階設定が進展しており、おおよその点では一致して来ているといえよう。しかしながら、各段階の把え方はXⅣ期の区分でも明らかなように所々で不整合である。この不整合は、地域性によることが大きいと思われ、地域における土器群の変遷を考慮しながら、関東地方全体としての様相を把握していく必要があると思われる。また、本稿では時間軸の設定という時期区分が中心的であったが、このような一定の時間軸としての時期を得た後、この中で展開される土器群の系統性や地域的広がりと他地域との交流についても検討する必要があろう。

なお、最後に時間軸としての時期の比較表をかかげた。本論の参考にしていただければ幸いである。

(宮崎朝雄)

時間軸としての時期の比較表

様式	本 稿	協 会 (1981)	関 東	中 部	東 北
五 領 ヶ 台	I 期	I 期 (下小野・五領ヶ台)	五領ヶ台 I 今村 (1972)	五領ヶ台 I 山口 2 (1980)	九兵衛尾根 大木 7 a
	II 期		I	3	
	III 期		雷 7 頸 西 村 阿玉台 I a (1954) ↑ 1969	4	
勝 板 ・ 阿 玉 台	IV 期 a b	I 期 (阿玉台出現期)	阿玉台 I b 古 佐藤 (1974)	勝坂 I a 鈴木 (1981)	路 沢
	V 期 a b	II 期 (勝坂最古段階)	I b 新	I b	新 道
	VI 期	III 期 (勝坂盛時段階)	I	2 a	藤 内
	VII 期	IV 期 (勝坂終末)	I	2 b	
	VIII 期	中 峰	IV 坂 田 (1976)	3 a	
	IX 期 a b	V 期 (加 E I 古)	中 西 (1980)	3 b	井 戸 尾
加 曾 利	X 期	VI 期 (加 E I 新)	神 I 期 神奈川 秋 山	神 I 期 神奈川	
	XI 期		I a 考古同人	I a 考古同人	
	XII 期 a b	VI 期 (加 E II)	I b (1980)	I b (1980)	大木 8 b
	XIII 期	VII 期 (加 E III)	I c	I c	
	XIV 期		II	II	
		IV	II	II	大木 9 a
		V	II	II	
		VI	IV a	IV a	大木 9 b
		VI	IV b	IV b	大木 10
	称名寺 I			井 戸 尾	

引用・参考文献

- ア 会田 道ほか「県久保遺跡」 地域の文化財 6 岡谷市教育委員会 1972
 会田 道ほか「扇平遺跡」 地域の文化財 7 岡谷市教育委員会 1974
 青木秀雄「称名寺式土器の再検討」『埼玉考古』16 1977
 青木秀雄・福永久美子「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会 1979
 青木義信ほか「中原前遺跡・大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第17集 1981
 青木義信ほか「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第15集 1981
 赤城高志「調布市上布田遺跡第1地点(仮称)の調査調査『研究・研究発表会V』 1979
 赤星直忠「相模江戸坂貝塚の土器資料」『史前学雑誌』5-10 1933
 添山容造『三原田遺跡』資料合冊 群馬県企業局 1980
 秋山道生「連弧文土器に關して」恋ヶ窪遺跡調査報告 1980
 秋山道生「恋ヶ窪遺跡調査報告！」1979
 秋門健郎・服部牧史「東京都孤塚遺跡の調査」『長野県考古学会誌』11 1971
 安孫子昭二ほか「文京区動坂遺跡」動坂貝塚調査会 1978
 安孫子昭二「貫井南」小金井市貫井南遺跡調査報告 小金井市貫井南遺跡調査会 1974
 安孫子昭二ほか「№46遺跡—縄文中期前半の土器」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ 東京都多摩ニュータウン遺跡調査会 1969
 安孫子昭二「縄文式土器の型式と編年」日本考古学を学ぶ(1) 1978
 新井康夫ほか「下寺田・要石」1975
 荒井幹夫ほか「松ノ木遺跡第2地点発掘調査報告書」富士見市遺跡調査会 1980
 荒井幹夫ほか「打越遺跡」富士見市文化財報告第14集 1978
 安藤文一「栗島台式土器の認定—東関東における縄文前期終末の一様相」『房総文化』14 1979
 イ 井口直司・橋口尚武「新山遺跡」東久留米市埋蔵文化財調査報告第8集 1981
 池谷信之ほか「秦野市山之台遺跡出土の土器と石器」『小田原考古学研究会会報』10 小田原考古学研究会 1981
 石野 英「相模国中部金目村五箇ヶ台貝塚調査記」『考古集録』4 1941
 稲村坦元「入間郡高麗村発見の石器時代住居址」『埼玉史談』1-1 1929
 井上義安「茨城県おんだし遺跡」日本核燃料開拓株式会社 大洗町教育委員会 1975
 今井康博ほか「池辺第4遺跡」南北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅳ 1974
 今井正文「高井遺跡」桶川市文化財調査報告 1982
 今村啓爾ほか「宮の原貝塚」武藏野美術大学考古学研究会 1972
 今村啓爾ほか「とけっぱら遺跡」東京都奥多摩町永川登計原遺跡調査会 1974
 今村啓爾「称名寺式土器の研究」『考古学雑誌』63-1、2 1977
 今村啓爾ほか「羽ヶ丘」武藏野美術大学考古学研究会 1973
 今村啓爾ほか「横浜市日吉中駒遺跡の中期縄文式土器」考古学雑誌57-1 1971
 岩井住男ほか「膳棚」「鳳翔」7 1970
 石川和明「調布市深大寺町東原遺跡調査報告」『多摩考古』9 1969

- ウ 鶴飼幸雄「平出第Ⅱ類A土器の編年的位置付けと社会的背景」『信濃』29—4 1977
内田祐治「野塙前原」 清瀬市文化財調査報告書1 1982
宇都宮大学考古学研究会「芳賀町弁天池遺跡第二次調査報告」 1976
- エ 江坂輝弥「縄文時代の生活と社会—生活の舞台」 日本の考古学 1965
江坂輝弥「相模五領ヶ台貝塚調査報告」『考古学雑誌』3 1949
江坂輝弥ほか「相模国五領ヶ台貝塚調査予報」『古代文化』12—10 1941
江藤千萬樹「静岡県駿東郡長泉村柏原の石器時代の遺蹟」『考古学』8—5 1937
海老原郁雄「栃木県ハットヤ遺跡調査報告」 塩谷郷土史料館研究報告第1集 1964
海老原郁雄「湯坂遺跡」 栃木県考古学会 1979
海老原郁雄ほか「根沢遺跡」 栃木県教育委員会 栃木県埋蔵文化財調査報告第34集 1980
海老原郁雄ほか「糸平木遺跡第4次調査報告書」 上河内村文化財調査報告書第3集 上河内村教育委員会 1975
海老沢 稔「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(1)」『姿良岐考古』4 姿良岐考古同人会 1982
- オ 及川ほか「貝塚データーベース」『国立民族学博物館研究報告』5—2 1980
青梅市郷土博物館「千ヶ瀬遺跡」 多摩の縄文 1981
大島秀俊ほか「茨城県美浦村虚空藏貝塚」 国士館大学考古学研究会 1978
大塚和義「東京都崖遺跡調査概報」『下総考古学』3 1968
大塚昌彦「空沢遺跡」 湖西市教育委員会調査報告書 II 群馬県湖西市教育委員会 1978
大川 清「上の原遺跡」 日本建築史研究所 1981
大沢慶爾・芝崎 孝「東京都中村橋遺跡の中期縄文土器」 考古学手帖 1962
大山 柏「神奈川県新井村字勝坂遺物包含地調査報告」 史前学研究会小報第1号 1927
岡崎文喜ほか「高根木戸」 1971
岡崎文喜ほか「高根木戸北」 船橋市教育委員会 1971
岡崎文喜「磯花遺跡」 1981
岡崎文喜・石井 稔「竪立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究」『遺跡研究論集』I 1982
岡崎文喜「海老ヶ作貝塚」 船橋市教育委員会 1972
岡本孝之ほか「尾崎遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告第13集 1977
岡本 男「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」『横須賀市博物館研究報告』7 1963
岡本 男「縄文文化の発展と地歴性—関東」 日本の考古学 1965
岡本 男「原始社会の生産と呪術」 岩波講座 日本国歴史 I 1975
岡本 男「五領台上層式土器についての覚え書」『貝塚』3 1969
岡本 男ほか「平塚市広川五領ヶ台貝塚調査報告」 平塚市文化財調査報告書第9集 1970
小川良祐・宮崎朝雄「加倉・西原・馬込・平林寺」 埼玉県遺跡調査会報告第14集 1972
小川和博「成田市における縄文時代中期初頭の一資料」『なわ』第15号 1972
小野真一ほか「三福向原」 大仁町教育委員会 1971
小野真一ほか「上長瀬遺跡群」 静岡県長泉町教育委員会 1971
小野真一「静岡県における縄文中期土器の編年の考察」『駒豆考古』12号 1972
折原 篤「関東地方における縄文時代中期末の土器群」『千葉県文化財センター研究紀要』2 1977

- カ 柿沼修平・新井和之「千葉県市原市土字蓮跡発掘調査報告」 日本文化財研究所文化財調査報告第6集 日本文化財研究所 1979
- 柿沼修平「加曾利B式土器終末の諸段階」『なわ』15 1977
- 神奈川考古同人会「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年表試案」『神奈川考古』4 1978
- 神奈川考古同人会「縄文中期後半の諸問題——加曾利B式と曾利式土器と関係」『神奈川考古』10 1980
- 金井翠良一「平松台遺跡」 埼玉県教育委員会 1971
- 金子直行「大山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集 1982
- 金子智江・赤石光實「宮内正勝「秩父山遺跡」 上尾市文化財調査報告第5集 1978
- 金子結彦・青木 堃「猿江第一小学校・庭遺跡」 猿江市史編さん委員会 1974
- 上川名昭「日野吹上遺跡」 日野吹上遺跡調査会 1970
- 上川名昭「重郎原」 山梨県教育委員会 1972
- 川口正幸ほか「藤の台遺跡」 藤の台遺跡調査会 1982
- 川崎純徳ほか「石岡市東大橋原遺跡第一回調査報告書」 石岡市教育委員会 1978
- 川崎義雄ほか「福生市長沢遺跡発掘調査概報」 1972
- 川崎義雄ほか「宮谷遺跡発掘調査報告」 大月市教育委員会 1973
- 川崎義雄ほか「下高井戸塚山遺跡発掘調査報告」 文化財シリーズ11 1975
- 川原由典ほか「石神遺跡」 (財)樹木県文化振興事業団 1982
- 神沢勇一「梶山遺跡(3)」 神奈川県立博物館発掘調査報告書第4集 1970
- キ C・T・キーリー編「前原遺跡」 国際基督教大学考古学研究センター 1976
- 桐生直彦「連弧文土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器 1981
- ク 久保 真「八王子月夜峰・松子前向遺跡採集の五個台式土器について」『多摩考古』12 1972
- 門 国男ほか「八王子市明神社遺跡第3次調査概報」『考古学ジャーナル』122号 1976
- 熊野正也「今島田遺跡」 1969
- 栗原文藏ほか「岩の上・姫子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集 1973
- 栗原文藏「大藏遺跡」 新修世田谷区史付録 世田谷区役所 1962
- 栗原文藏ほか「大和町のむかし吹上貝塚」 地土資料第3集 1959
- 桑原 雄・横尾義明「飯重」 佐倉市教育委員会 1974
- コ 小池正義ほか「北丘B遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財財庫地発掘調査報告書—伊那市西春近一 1973
- 小泉 功ほか「東部遺跡群発掘調査報告書」 文化財調査報告書第9集 大井町教育委員会 1980
- 小宮 孟「小金沢貝塚」 千葉県南部ニュータウン10 1982
- 河野 実ほか「鷺川遺跡群J地点」 1972
- 後藤守一「柳原石器時代住居跡」 東京府史跡保存物調査報告10 1933
- 小林公明ほか「曾利第3・4・5次発掘調査報告書」 富士見町教育委員会 1978
- 小林達雄ほか「シンポジウム—北関東を中心とする縄文中期の諸問題」 日本考古学協会 昭和56年度大会 1981
- 小林達夫ほか「米島貝塚」 庄和町文化財調査報告 1965
- 小林達雄「縄文早期に関する諸問題」 多摩ニュータウン遺跡調査報告 1967
- 小林達雄編「日本原始美術大系1 縄文土器」 講談社 1977

- 小林和男ほか「火上遺跡・第1次調査」日野市遺跡調査会年報1 1978
- サ 斎木 勝ほか「千葉市荒川貝塚」 1978
- 斎木 勝ほか「千葉市中野御堂遺跡」 千葉県文化財センター 1972
- 佐伯弘晃ほか「扇山遺跡」 扇山遺跡調査団 1980
- 坂詰秀一「新庭」 1963
- 坂上克弘ほか「荏田第10遺跡」 港北ニュータウン地域内文化財調査報告 1971
- 坂上克弘ほか「東方第7遺跡」 港北ニュータウン地域内文化財調査報告 1974
- 桜岡正信「大田原市佐久山地内出土の縄文土器」『茨城県考古学会誌』5 1980
- 佐々木保俊・飯塚雅子「針ヶ谷遺跡群・栗谷ノ遺跡」 富士見市遺跡調査会調査報告第13集 1981
- 佐々木勝ほか「西田遺跡」 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告 1980
- 笠森鶴一「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第31集 1976
- 笠森鶴一ほか「前島・島之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第12集 1977
- 佐藤達夫「駿東郡長泉町柏窪遺跡の調査」 駿岡県文化財調査報告書第16集 1977
- 佐藤達夫「土器型式の実態—五箇ケ台式と腰張式の間一縄文式土器」 日本考古学の現状と課題 1974
- 佐藤達夫ほか「勝板式成立の問題点」『北夷古代文化』8 1976
- 佐藤典邦ほか「柏窪遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第6集 1982
- 甲元真之・岩崎 卓也「仲町遺跡」 川崎市教育委員会 1971
- シ 重住 豊ほか「松ノ木遺跡」 1977
- 静岡県考古学会「長井崎遺跡」 第4回シンポジウム資料 「縄文土器の交流とその背景」所収 1979
- 実川順一・高橋博文「黄井」 小金井市文化財調査報告書第5集 小金井市教育委員会 1978
- 斯波 治「池田遺跡発掘調査報告書」 新座市埋蔵文化財調査書第2集 新座市教育委員会 1976
- 白石浩之ほか「当麻遺跡・上依知遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告集12第 1977
- 白石浩之「加曾利B式土器の変遷」『考古学研究』25-1 1978
- 城近憲市ほか「船田！」 1970
- 城近憲市・並木 隆ほか「宮地」 狛江市文化財調査報告 1972
- 追那鹿麻呂「月見松遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 1973
- 新藤康夫「門田遺跡群1975年度調査概報」 1976
- 新藤康夫「加曾利B式土器細分の再検討」『考古学雑誌』62-3 1976
- 新藤康夫ほか「門田遺跡群1978年度調査概報」 1979
- 下村克章「花旗貝塚発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第15集 1970
- ス 末木 錠「寺平遺跡発掘調査報告書」 寺平遺跡調査会 1977
- 末木 錠ほか「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡小淵沢町地内一」 山梨県教育委員会 1974
- 杉原和雄ほか「奥陰遺跡発掘調査概報」 京都府大宮町教育委員会 1980
- 鈴木保彦ほか「平尾遺跡調査報告！」 南多摩郡平尾遺跡調査会 1971
- 鈴木保彦ほか「縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古』11 1981
- 鈴木保彦「下北原遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告第14集 神奈川県教育委員会 1978
- 鈴木保彦ほか「縄文中期後半の諸問題—土器資料集成図集—」『神奈川考古』10 1980

- 鈴木正博ほか「大森貝塚」 大田区史資料編考古 1 1980
- 鈴木公雄「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21 1964
- 鈴木裕芳ほか「諫訪遺跡発掘調査報告書」 日立市文化財報告第7集 1980
- 鈴木敏昭「下南原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集 1982
- 鈴木敏昭ほか「足利遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書 1980
- 杉山莊平「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報」『史報』72 1965
- ステュアート・ヘンリー「海進・海退(1)」『縄文文化の研究』1 1982
- 七 濑川裕市郎ほか「柏庭遺跡採集の土器」 静岡考古学研究7 1979 a
- 瀬川裕市郎「静岡県における縄文中期初頭土器群研究の現代と2、3の問題点」『静岡考古学研究』7 1979 b
- 関根孝夫ほか「幸田貝塚第一2次(昭和46年度)調査概報一」 1972
- 芹沢長介「縄文文化」 世界陶磁全集 第1巻 1958
- ソ 外岡電二「河津町段間遺跡について」 静岡県考古学会第4回シンポジウム資料所収 1979
- タ 大庭八郎ほか「川越市史」第1巻 原始・古代編 1972
- 第4紀学会稿「日本の第4紀研究」 資料集1~8 A 1976
- 高橋 康「土器とその型式」『考古学手帖』1 1958
- 高橋博文ほか「貴井」 小金井市文化財調査報告書第5集 1978
- 高橋良治「千葉県鳴神山貝塚の土器」『考古学手帖』10 1959
- 高橋良治・江森正義ほか「千葉県中崎第一地点貝塚の土器とその類例について」『考古学手帖』23 1964
- 高橋良治「阿玉台式土器の研究史と問題の提起」『考古学手帖』16 1962
- 高橋良治「阿玉台式土器の研究の現状と問題点」『考古学手帖』25 1965
- 高橋良治ほか「千葉県子和清水貝塚調査概報」『考古学雑誌』49-2 1964
- 高林 均「平山遺跡」 1974
- 流沢 浩「埼玉県渡戸山遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』18 1963
- 田代 寛「金井台遺跡」 芳賀町の文化財第4集 1970
- 田中 信「小室天神前遺跡」 伊奈町天神前遺跡調査会 1981
- 谷井 超「称名寺式土器の推移について」 埼玉県立博物館紀要3 1977
- 谷井 超「加曾利E式土器の観察」 埼玉県立博物館紀要5 1978
- 谷井 超「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 1974
- 谷井 超ほか「南大塚・中鉢・上鉢・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 1974
- 谷井 超ほか「舟山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集 1980
- 谷井 超「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)(後)」『信濃』29-4, 6 1977
- 谷井 超ほか「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 1979
- 谷井 超ほか「坂東山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集 1973
- 谷井 超ほか「西原大塚遺跡発掘調査報告」志木市の文化財第4集 1975
- 谷井 超「縄文土器と単位とその意味」『古代文化』31-2, 3 1979
- 谷口一夫「東京都下高井戸遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』14 1962
- チ 中部高地縄文土器集成グループ「中部高地縄文土器集成」第1集 縄文中期後半の部その1 1979

- ツ 塚田明治ほか「横浜市室ノ木遺跡」 横須賀考古学会研究報告 2 1973
塚田 光「群馬県新道遺跡の中期縄文土器」『下諏考古学』1 1964
- チ 寺田良喜ほか「八幡山遺跡」 1979
寺村光晴ほか「蟹ケ沢・鈴鹿遺跡」 神奈川県座間町文化財調査報告第2集 1966
- ト 土肥 孝「上尾市後山遺跡」 上尾市教育委員会 1974
土肥 孝「阿玉台 I a式以前の土器」『土曜考古』4 1981
戸沢充則ほか「長地村桑久保遺跡調査報告」『諏訪考古学』7 1951 b
戸沢充則ほか「後田原遺跡」 開谷市文化財調査報告第3集 1970
戸沢充則ほか「宮川村清ヶ峯発見の土器」『諏訪考古学』7 1961 a
戸沢充則ほか「市川市史」第1巻 1971
戸沢充則「原始・古代の両谷」『両谷市史』上巻 1973
戸田哲也ほか「町田市高ヶ坂八幡平遺跡調査報告」『多摩考古』10 1970
戸田哲也ほか「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査報告」 文化財の保護 3 1971
戸田哲也ほか「都留市海戸遺跡出土土器と中期末編年について」『丘陵』1—3、4合併号 甲斐丘陵考古学研究会 1977
栃木県「羽場遺跡」 栃木県史 通史編 1 1981
利根川章彦「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』5 1982
島居龍藏「武藏野の有史以前」 1920
- ナ 中島 宏「金堀沢遺跡」 入間市金堀沢遺跡調査会 1977
中島 宏ほか「中郷遺跡発掘調査報告書」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集 1982
中島 宏「雷電下・飯玉東」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 1979
中西 充ほか「門田遺跡群1978年度調査概報」 八王子門田遺跡調査会 1979
中西 光ほか「神谷原Ⅰ」 八王子門田遺跡調査報告会 1982
中野国雄「柏庭遺跡について」 静岡県考古学会第4回 シンポジウム資料所収 1979
中村嘉男「水子貝塚発掘調査報告」 富士見町教育委員会 1971
中村金司ほか「殿藤神社・一本松遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第39集 1980
中山修宏ほか「桂見遺跡発掘調査報告」 烏取市文化財報告V 1978
中村記男「益子町焼遺跡出土の縄文中期土器について」『栃木考古学研究』5
並木 隆「甘粕原・ゴシン・蘿梨子遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第35集 1978
並木 隆「裏慈恩寺東遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第33集 1978
並木 隆「木曾呂表遺跡」 川口市教育委員会 1980
奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報 8」 1978
- ニ 西川博孝「中野木新山遺跡」 中野木新山遺跡調査団 1977
西野 元ほか「高槻木戸」 船橋市教育委員会 1971
西野 元「千駄堀寒風遺跡」 和洋女子大学研究紀要 1963
西村正衛「茨城県江戸崎町村田貝塚」 東部関東における縄文中・後期文化研究その5『学術研究』30 1981
西村正衛「阿玉台式土器縄年の研究の概要一利根川下流域を中心にして一』『早稲田大学研究科紀要』18
1972

- 西村正衛「千葉県小見川町阿玉台貝塚」東部関東における縄文中・後期文化の研究その2 『学術研究』19
1970
- 西村正衛「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚」『学術研究』3 1954
- 丹羽 茂「大木式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器 1982
- △ 沼沢 豊「松戸市金崎台遺跡」房総考古資料刊行会 1974
- △ 根本美喜子ほか「栗山」小金井市教育委員会 1975
- △ 野口義磨ほか「千葉県銚子市栗島台遺跡の出土土器」『上代文化』22 1952
- 能登 健「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として」『信濃』27
—4 1975
- 能登 健「狛江市以上遺跡」東京都教育委員会 1973
- 能登 健・石坂 茂「重張文土器の系譜」『信濃』32—4 1980
- 能登 健「阿玉台式」縄文土器大成2 中期 1981
- 野中松夫「八番遺跡」蓮田市文化財調査報告書第1集 1980
- 野中松夫「的場・八番・荒川附遺跡」蓮田市文化財調査報告書第2集 1981
- 野本幸明ほか「網島島内遺跡」大田区の埋蔵文化財 1680
- △ 服部牧史ほか「門田遺跡群予備調査報告」八王子門田遺跡調査会 1975
- 服部牧史「岳ノ上遺跡」日の出村教育委員会 1971
- 服部牧史「東京都孤塚遺跡の調査」長野県考古学会誌11 1971
- 塙 静夫ほか「添野遺跡の研究」市貝町教育委員会 1974
- 塙 静夫ほか「金井台」芳賀町教育委員会 1970
- 林 茂樹ほか「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」伊那市教育委員会 1969
- 林 茂樹「駒ヶ根市中沢高見原横山B地点遺跡調査報告」長野県考古学会誌34 長野県考古学会 1979
- 伴 信夫「荒神山遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市内その1・その2 1974
- 伴 信夫ほか「大石遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その1 1976
- △ 平山久夫ほか「杉並区編文土器写真集成」文化財シリーズ14 1975
- 肥留間 博ほか「狭山・六道山・浅間谷遺跡」東京都瑞穂町文化財調査報告第1集 1970
- 肥留間 博ほか「中山谷」小金井市文化財調査報告書 1975
- △ 藤本赤城「大洗町吹上・竹ノ下貝塚」那珂川下流の石器時代研究 1977
- 藤森栄一「中部高地の中霧切頭縄文式土器」富士国立公園博物館研究報告第16号 1966
- 藤森栄一「井戸尻」中央公論美術出版 1965
- 藤森栄一「各地域の縄文式土器—中部」日本考古学講座3 1956
- 藤森栄一「縄文式土器」中央公論美術出版 1969
- 藤森栄一「信濃上諏訪町隨場の土器」『人類学雑誌』49—10 1934
- 藤 则雄「富山県射水平野における沖積統の花粉学的研究」『地質学雑誌』71 1946
- △ 堀口万吉「寿能泥炭層遺跡—自然遺物編—」1982
- 堀越正行「加曾利E式土器研究史」『信濃』24—2～4 1972
- △ 松浦有一郎ほか「宮原遺跡」多摩沿線地区埋蔵文化財発掘調査委員会 1977
- 松村恵司「縄文時代中期初頭土器研究史—五領ケ台式系土器群の編年研究をめぐって—」史第3 1974

- 松本信広ほか「加茂遺跡」 三田史学会 1952
- 松島義京「木戸作貝塚周辺の沖積低地」 千葉東南部ニュータウン7 木戸作遺跡(第2次) 財団法人千葉県文化財センター 1979
- 松戸市教育委員会「子和清水」 遺物図版編 1978
- 馬目順一「大畠貝塚調査報告」 いわき市教育委員会 1975
- 水沢裕子「松原遺跡」 1979
- 三鷹市遺跡調査会「三鷹市第五中学校遺跡発掘調査報告書一岡坂編」 三鷹市埋蔵文化財調査報告第1集 1979
- 宮坂英式ほか「茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書」 1970
- 宮坂光昭「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」『長野県考古学会誌』3 1965
- 宮崎利雄「加賀利E式土器について一埼玉県出土土器を中心にして」『奈和』17 1979
- 宮崎利雄ほか「鴻巣市原遺跡出土の土器について」一加賀利E式土器発生期の状況一『埼玉考古』17 1977
- 宮崎利雄ほか「墨谷田端前遺跡」 1976
- 宮坂義人・福山光明「東京都八王子宮田遺跡の調査1」『多摩考古』12 1972
- 宮内正勝「下加茂遺跡」 大宮市教育委員会 1965
- △ 村田文夫「多摩丘陵東端発見の縄文前期末葉から中期初頭の土器について」『古代』53 1970
- 武藤雄六「長野県富士見町龍塚遺跡の調査」『考古学雑誌』4-1 1968
- 武藤雄六ほか「晉利」 長野県富士見町教育委員会 1978
- モ 森下松寿「塩釜遺跡発掘調査概報」 鹿島考古資料刊行会 1979
- ヤ 八木光則ほか「長野県中央道堀藏文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その2—昭和48年度」 1974
- 八木美三郎・下村三四吉「常陸国佐原貝塚発掘報告」『人類雑誌』97 1894
- 安田喜蔵「花粉分析による気候環境の復元」『考古学ジャーナル』192 1981
- 安田喜蔵「森境考古学事始」 1980
- 八幡一郎「日本石器時代文化」『日本民族』 1935
- 八幡一郎「千葉県加賀利貝塚の発掘」『人類学雑誌』39-4、5、6 1924
- 山本寿々雄ほか「中溝遺跡」 郡留市教育委員会 1974
- 山口 明「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年一関東・中部地方を中心にして」『駿台史学』43 1978
- 山口 明「縄文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態」『長野県考古学会誌』39 1980
- 山口 明「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」 静岡考古学会シンポジウム4 1980
- 山内清男「縄文草創期の諸問題」『ミージアム』224 1969
- 山内清男「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古』1-1 1937
- 山内清男「加賀利E式」 日本先史土器図譜第Ⅱ集 1940
- 山内清男「勝板式」 『日本先史土器図譜』第Ⅲ集 1941
- 山村貴輝「井の頭池遺跡群A地点発掘調査報告」 三鷹市埋蔵文化財調査報告第5集 1980
- △ 横山悦枝ほか「北八王子西野遺跡」 東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会 1974
- 吉田 格「東京都玉川野毛町公園内遺跡」『武藏野』35-1 1956

- 吉田 格「東京都国分寺町恋窓堅穴住居の土器に就て」『鉄錆』12 1957
- 吉田 格「東京都小金井町貢井遺跡調査報告」『武蔵野』38-1 1958
- 吉田 格「山梨県東八代郡下向山遺跡—縄文中期五領ヶ台式土器の研究一」『考古学雑誌』48-3 1963
- 吉田 格「各地域の縄文土器—関東」『日本考古学講座』3 1956
- 吉田 格「東京都国分寺町中筋縄文式堅穴住居址調査概報」『武蔵野』32-3、4 1952
- 米内邦雄ほか「千代田遺跡」四街道千代田遺跡調査会 1972
- 木田明訓「曾利式土器編年の現状と課題」『神奈川考古』10 1980
- リ 林王子遺跡調査団「林王子遺跡」厚木市林王子遺跡子備調査報告書 1973
- ワ 和田 哲「西上遺跡—縄文中期文化の研究」昭島市教育委員会 1975
- 渡辺恵夫「宮部・鹿の子・砂川遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告XVI 1982

研究紀要

1982

昭和57年12月20日 印刷

昭和57年12月25日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印刷 株式会社 眞美堂印刷所

研 究 紀 要

1982(別冊)

縄文中期土器群の再編(図版)

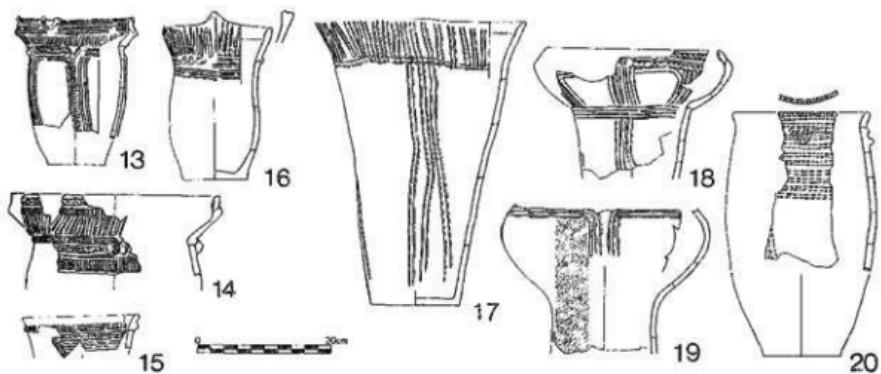
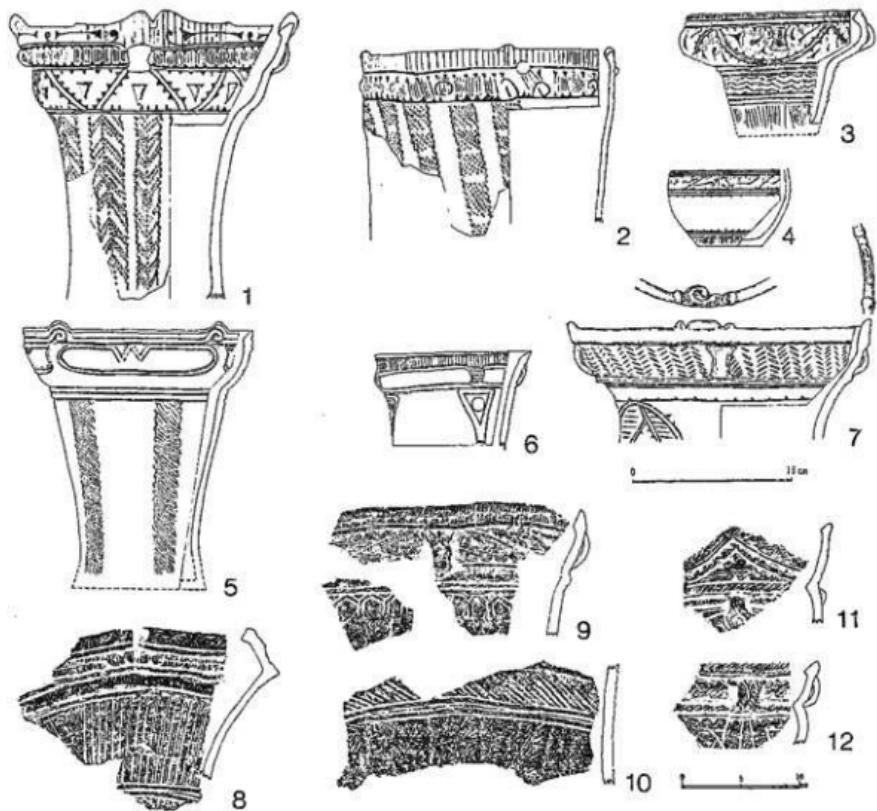
財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

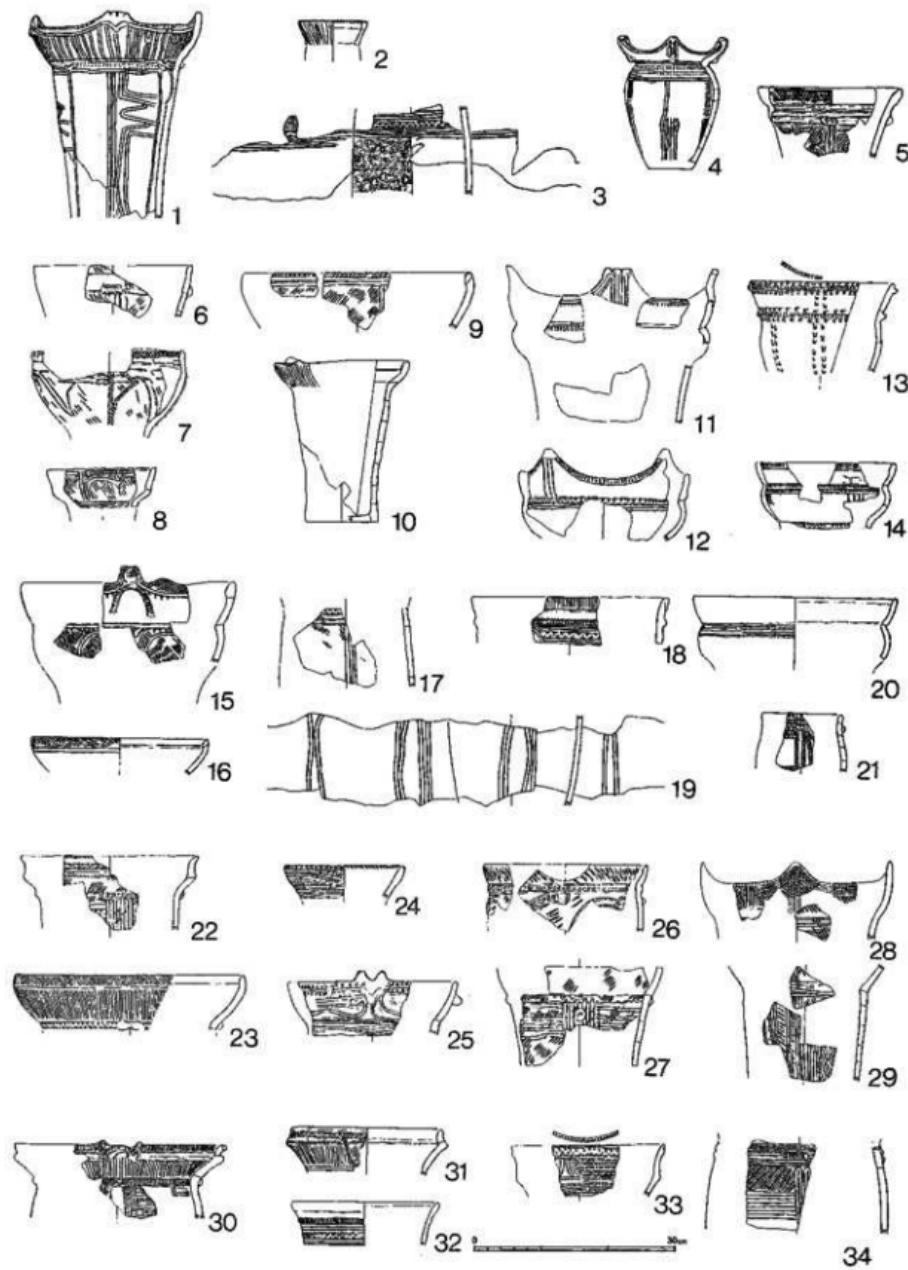
1982(別冊)

縄文中期土器群の再編(図版)

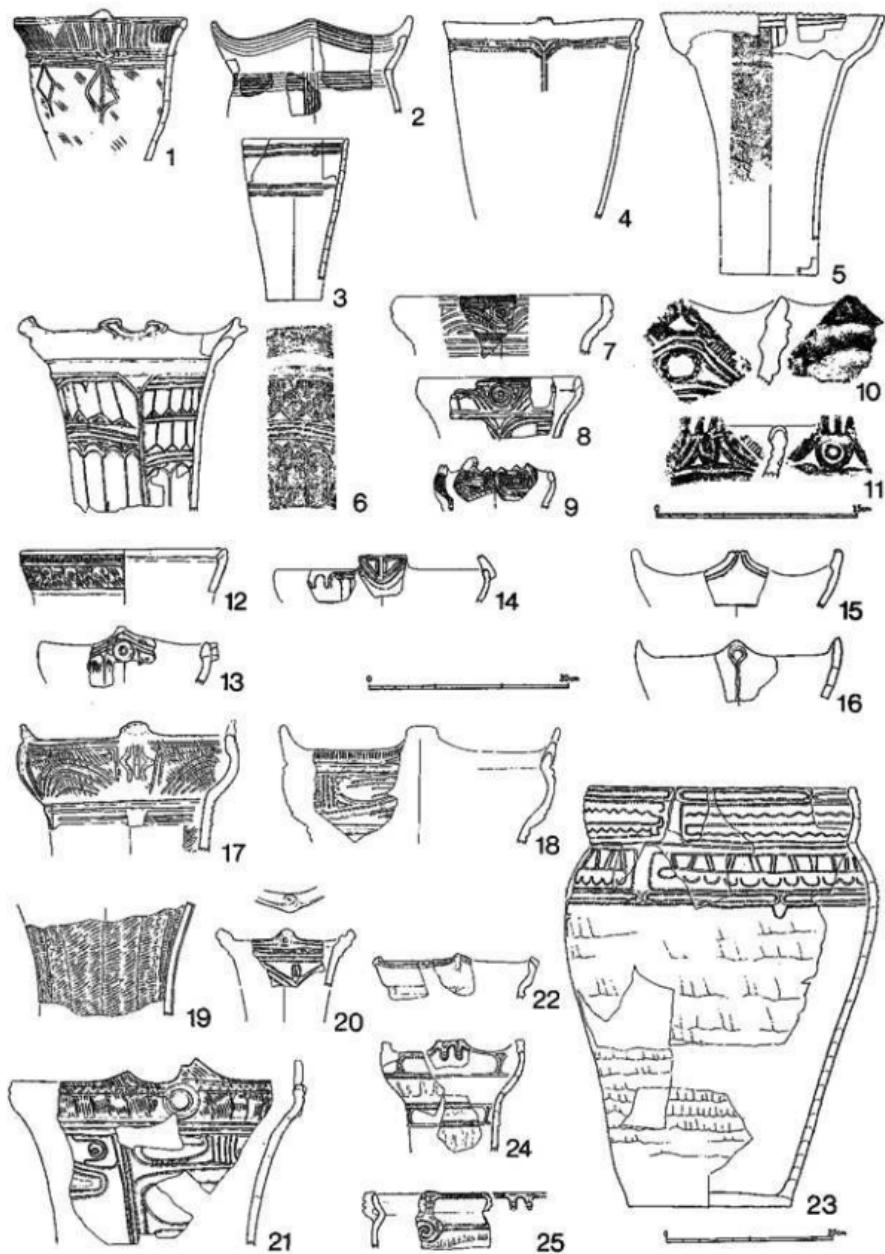
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



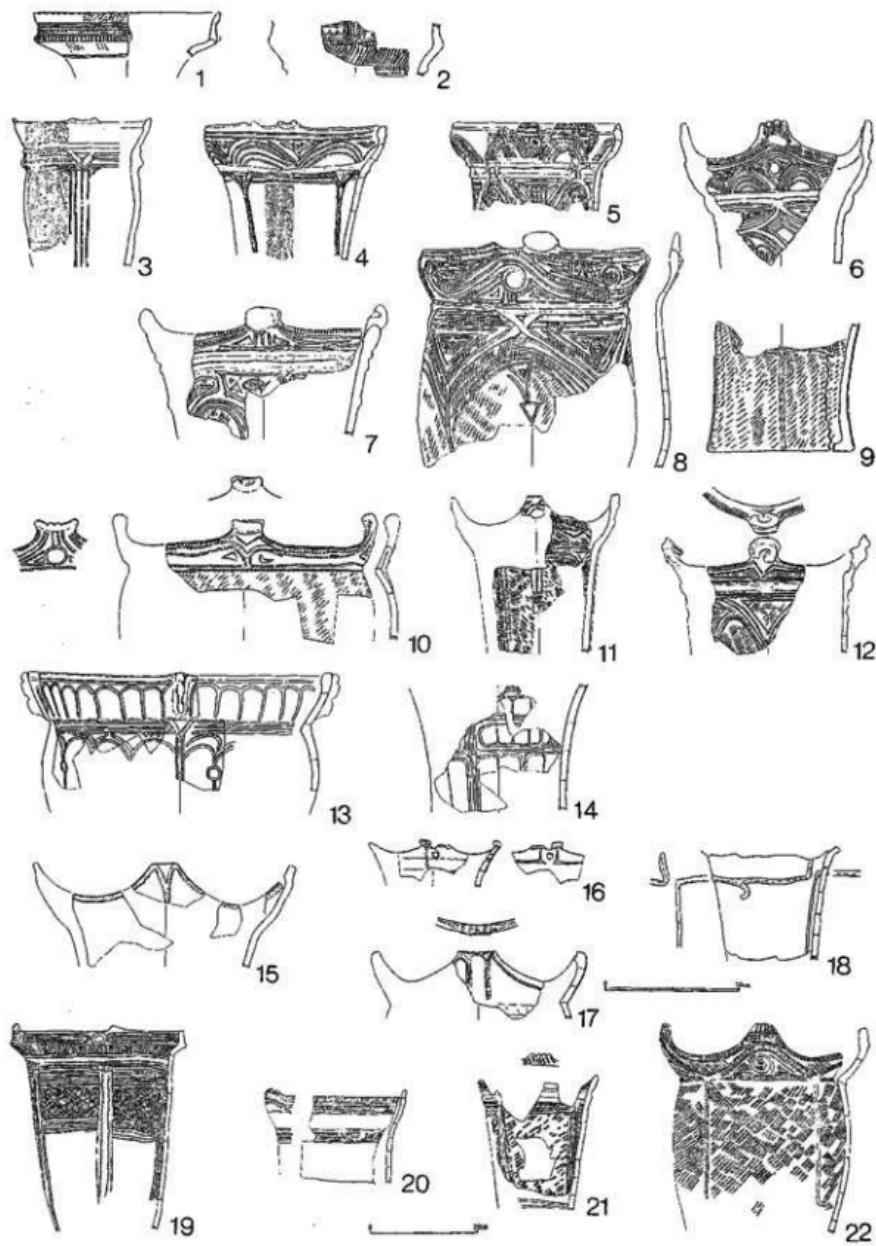
1 一期(東京) 1~12 明神社北遺跡 1号住 13~20 四野遺跡



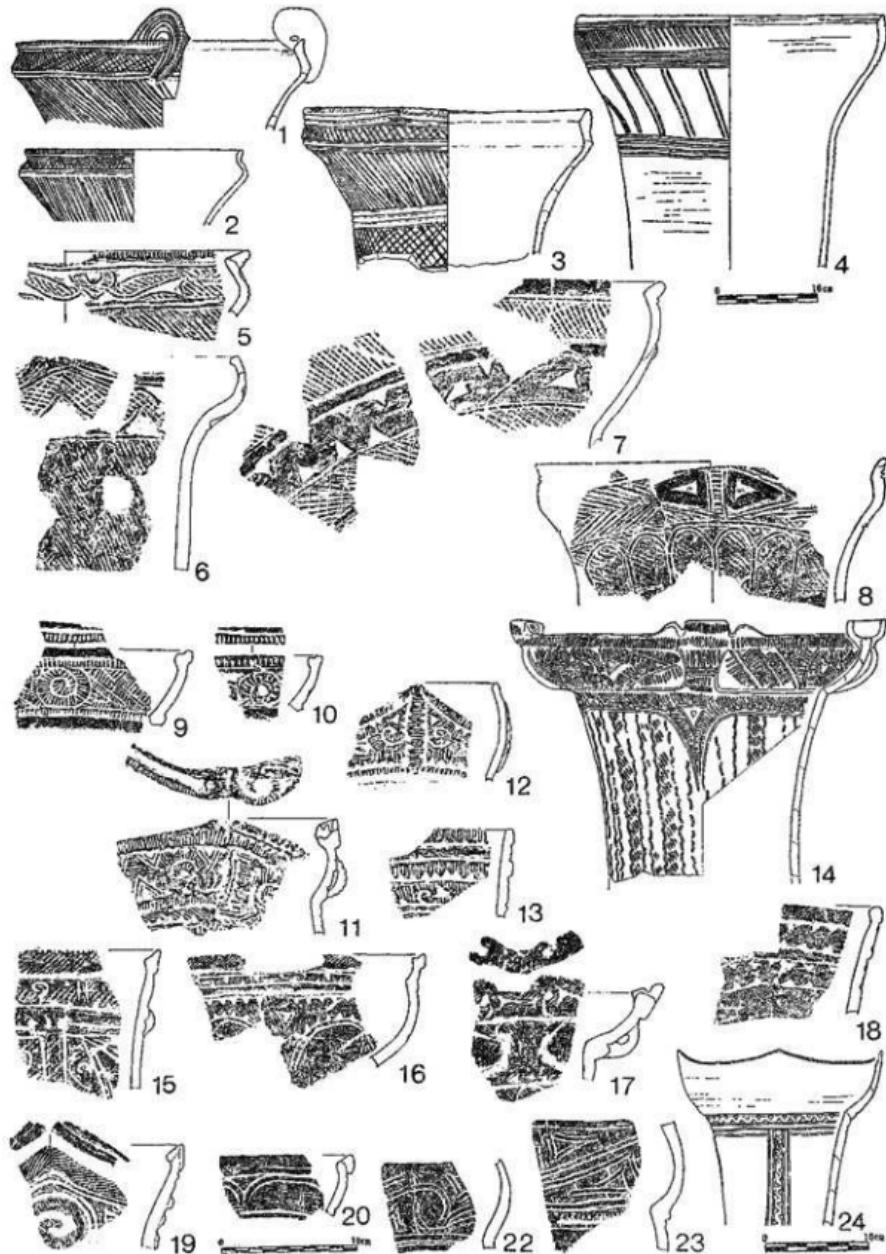
2 Ⅰ期(東京) 門田第IV遺跡 1~5 (S B13) 6~14 (S B14) 15~21 (S B15)



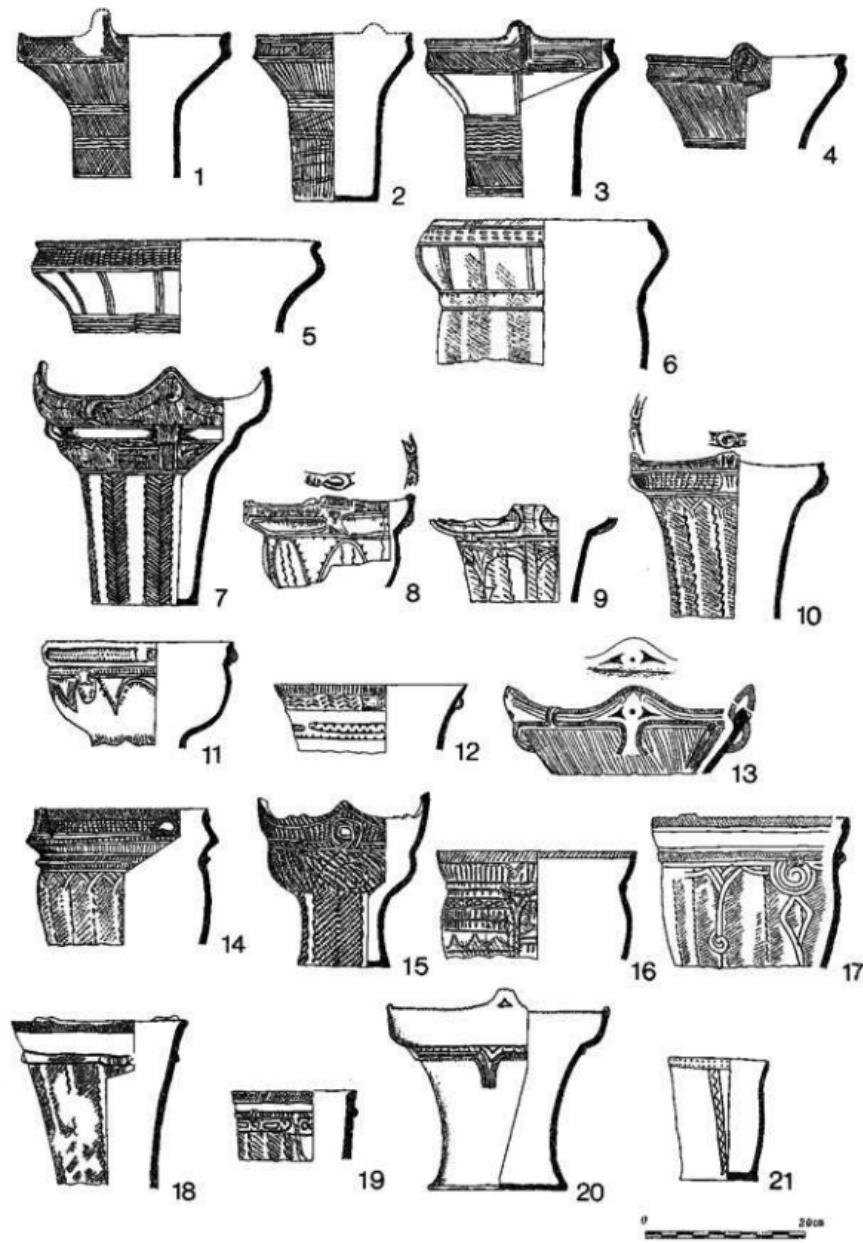
3 Ⅰ・Ⅱ期(東京) 1~16 堀田第Ⅱ遺跡 1 SX19 4 SX12 5 SX17
6 SX14 17~25 神谷原遺
跡 S B113

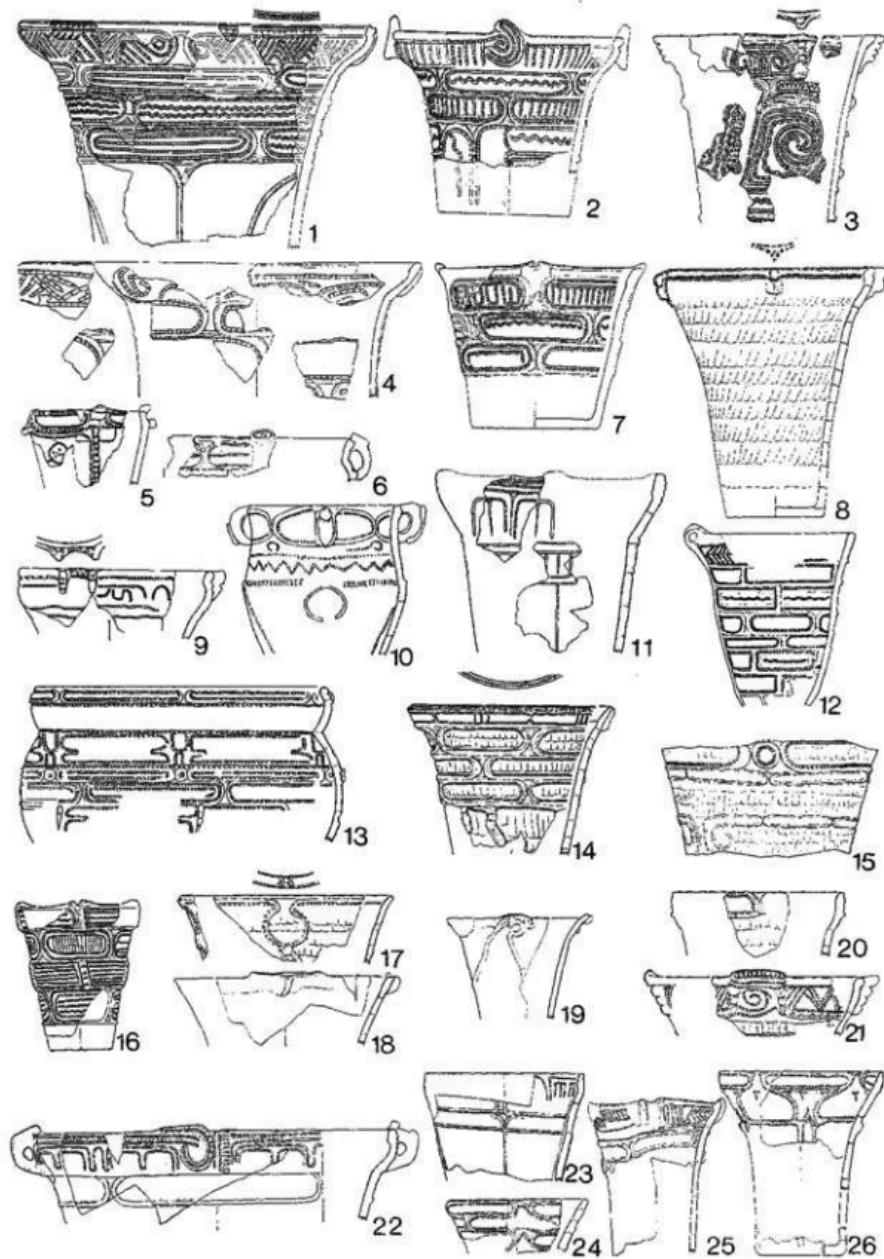


4 I・II期(東京) 1~18 神谷原遺跡 3 SK27 4 SK81 8 SK30 9 SB112 14 SB10
15 SB122 16 SB145B 17 SB150 19~22 網田遺跡



5 Ⅰ・Ⅱ期(神奈川) 池辺第4遺跡 1(8号土塗) 3(11号土塗) 5、7、8、11~13、14(10号土塗)
6(6号土塗) 東方第7遺跡 2(2号土塗) 4(78号土塗) 6、9、10、15~23 24(6号土塗)

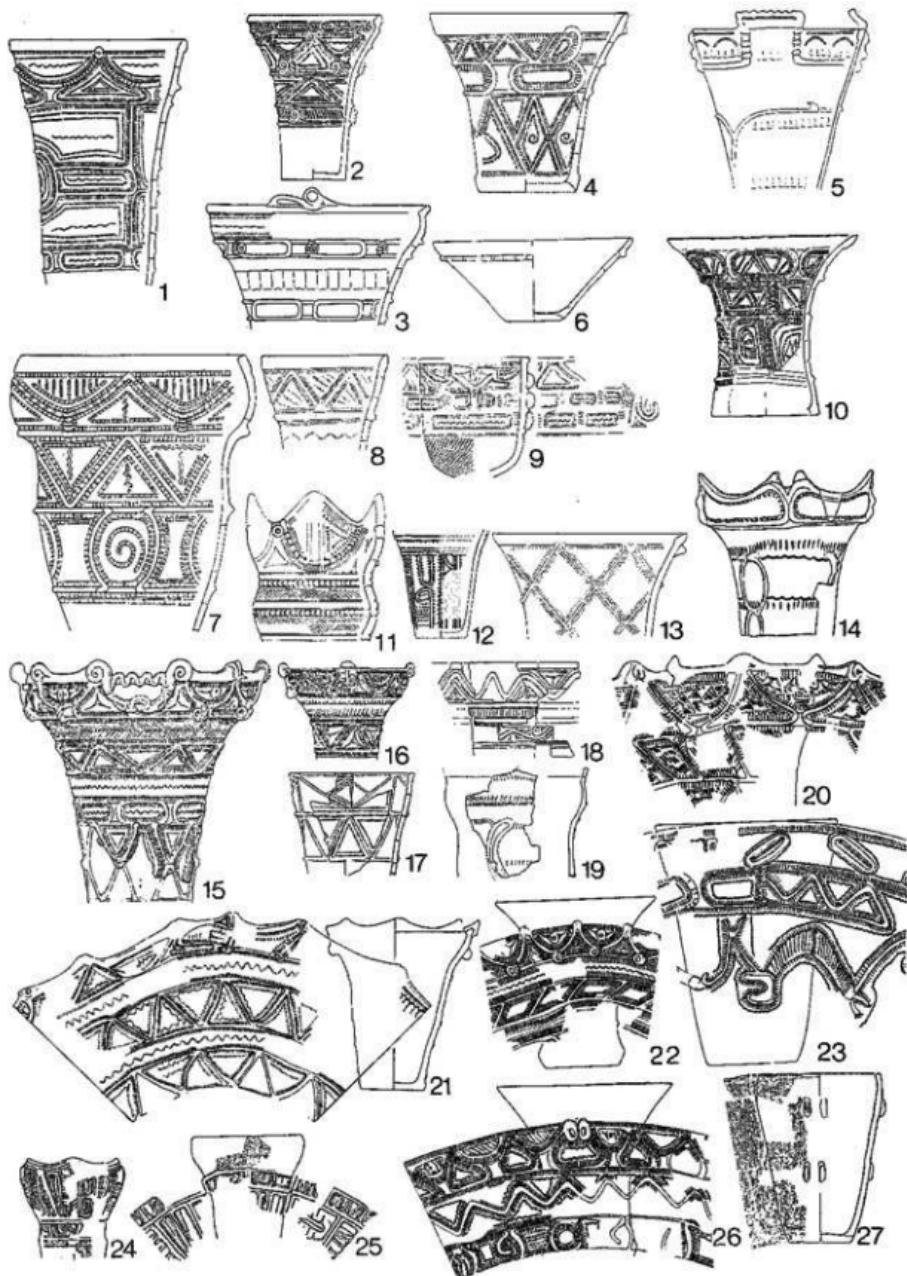




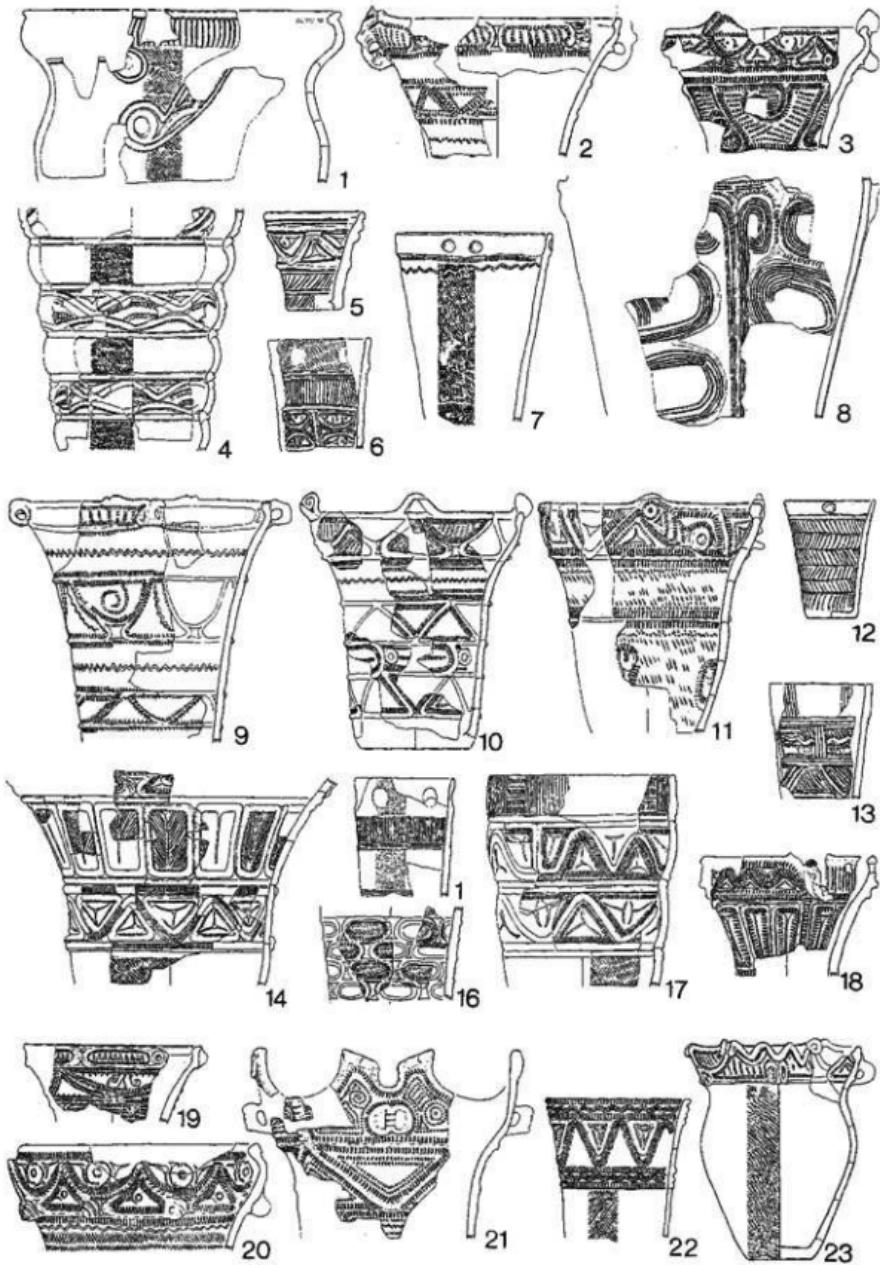
7 N期(東京) 1~6 藤の台遺跡3号住 7, 8 藤の台遺跡4号住 9~12 長沢遺跡
14~21 神谷原遺跡S B155 22~26 神谷原遺跡S B160



8 計期(東京) 1~8 神谷原遺跡 S B178 9 神谷原遺跡方形柱穴列ピットNo.11 10 神谷原遺跡 S K66 11 椿原遺跡
12 長沢遺跡 13~21 神谷原遺跡 S B10 22~26 神谷原遺跡 S B147 27 神谷原遺跡 S K86



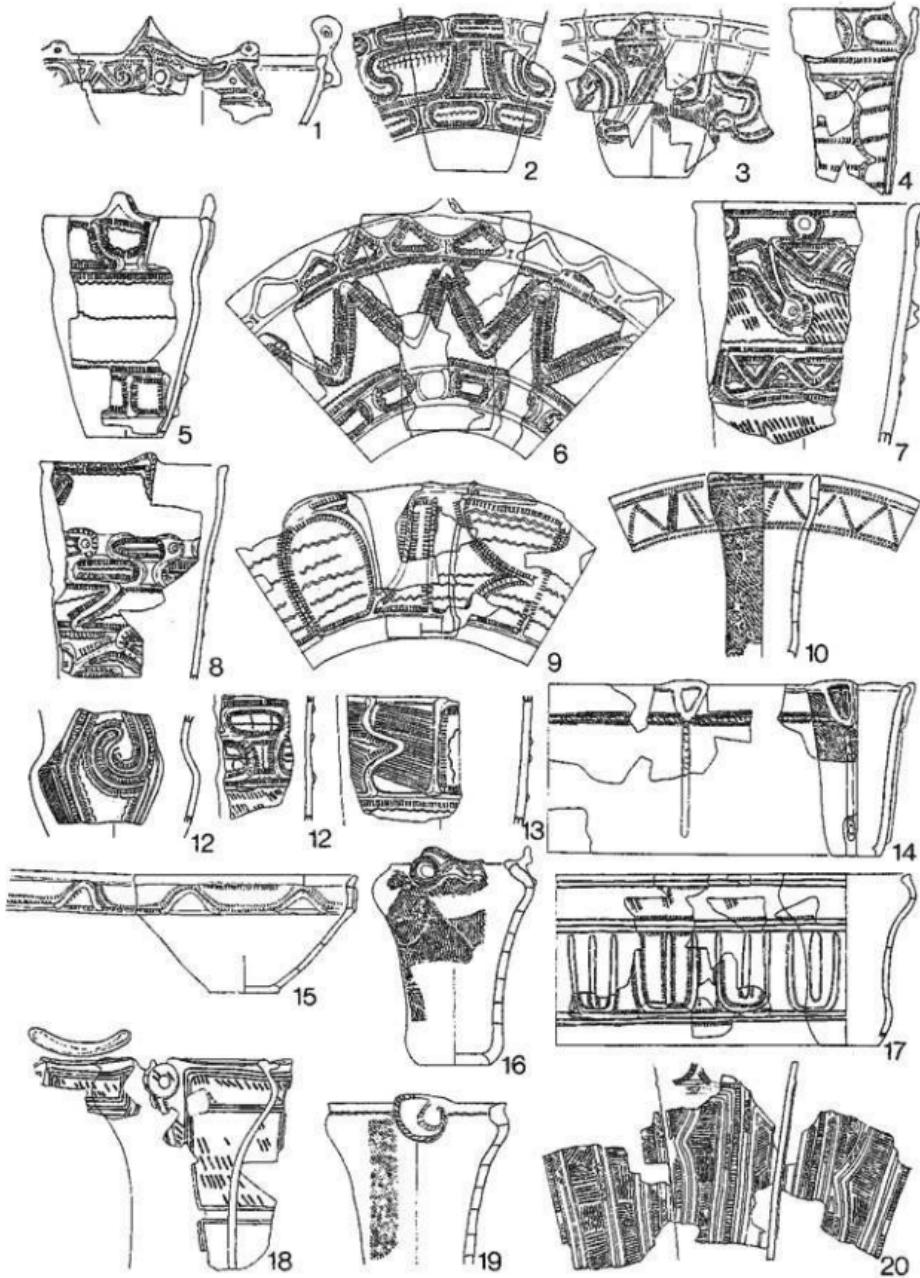
9 Y湖(東京) 1~6 西上遺跡B地点下層
14~18 黄井南遺跡10号住 8, 9 西上遺跡NS, 4T
19~26 栗山遺跡B地点 7, 10~12 西上遺跡B:N 13 动坂遺跡



10 Y期(東京) 1~8 神谷原遺跡SB66 9~18 神谷原遺跡SB109 19~23 神谷原遺跡SB122



11 Ⅴ期(東京) 1~9 神谷原遺跡 S B144 10~12 神谷原遺跡 S B145 13, 14 神谷原遺跡 S B151 15~17 神谷原遺跡 S B181 18 神谷原遺跡 SK92 19 神谷原遺跡 SK88 20 神谷原遺跡遺様外

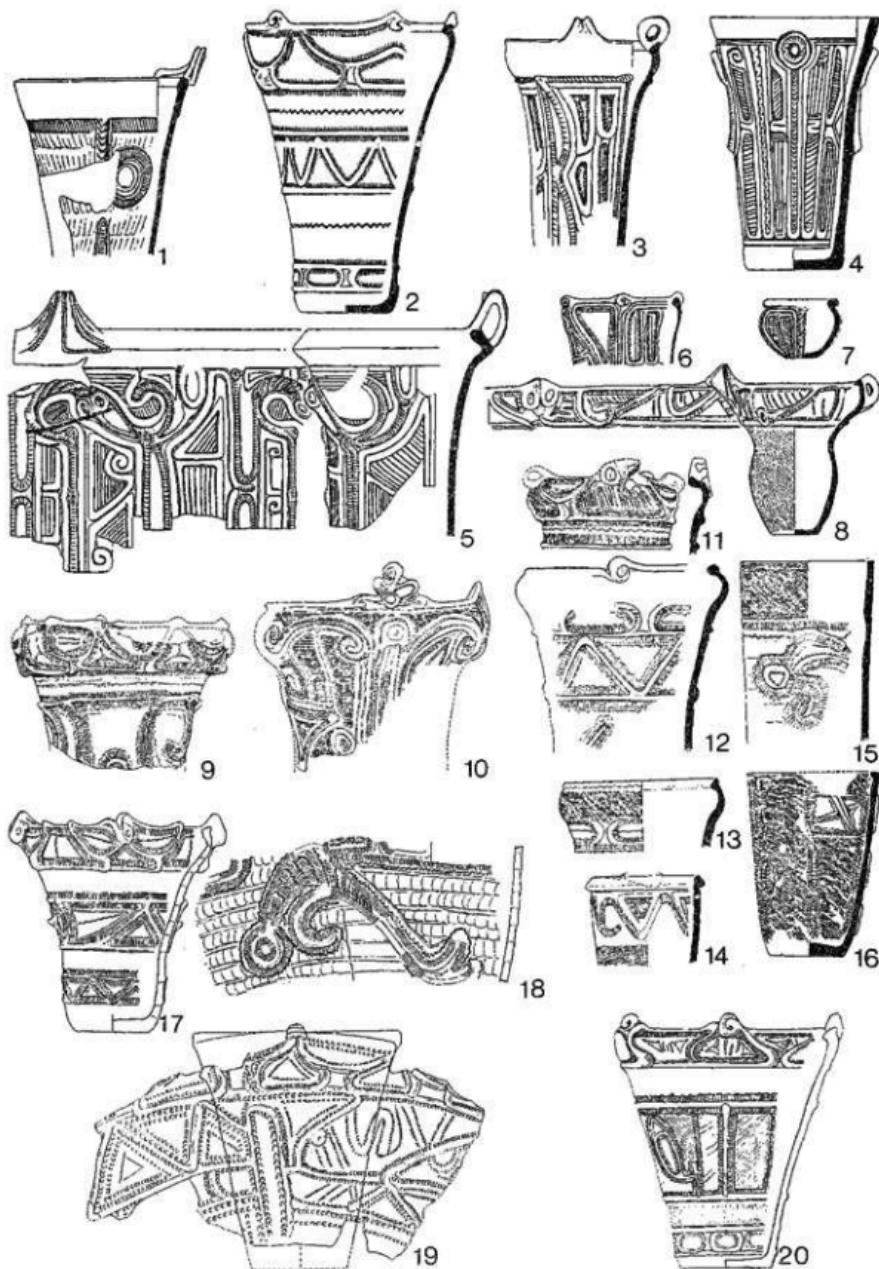


12 Ⅷ期(東京)

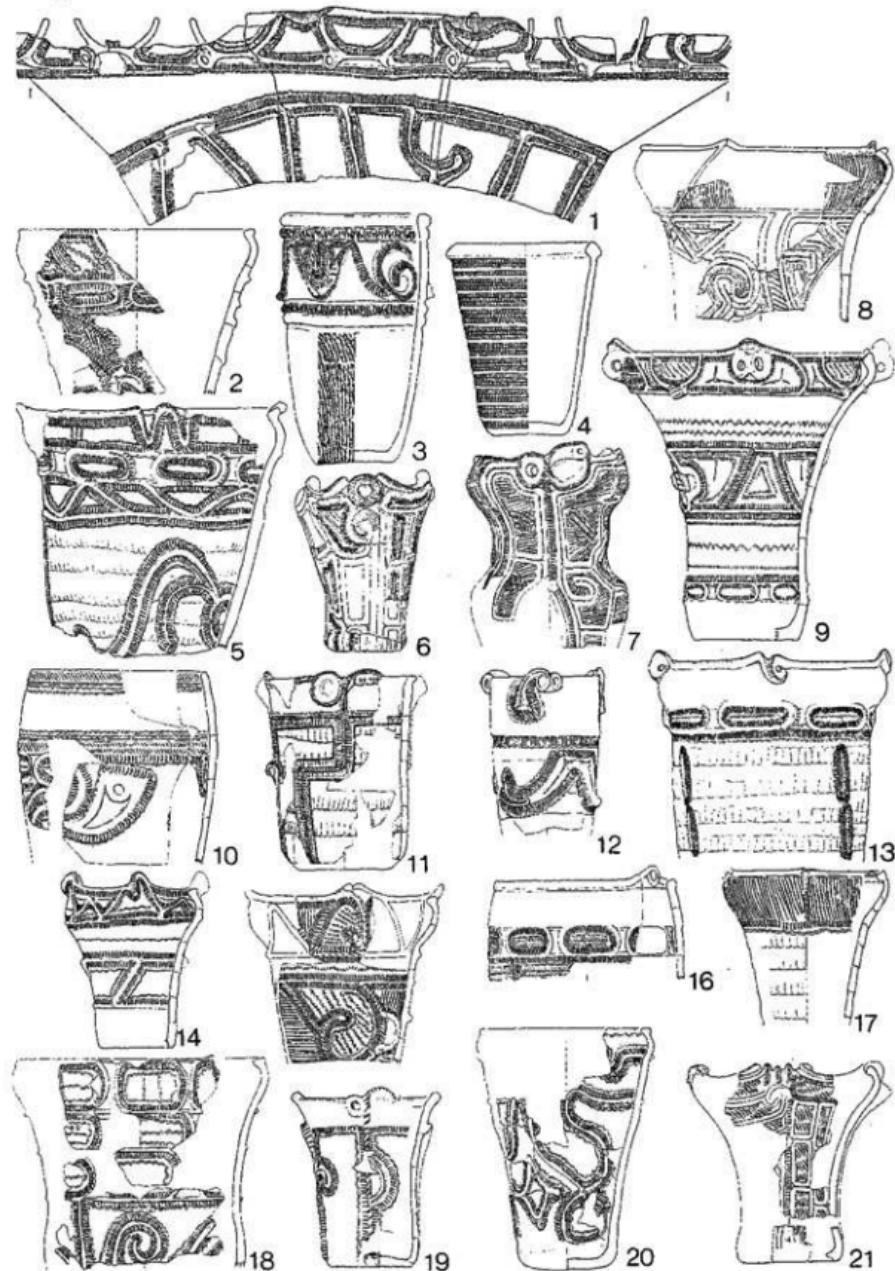
1~4 貝井南遺跡16号住

5~17 前原遺跡2号住

18~20 長浜遺跡



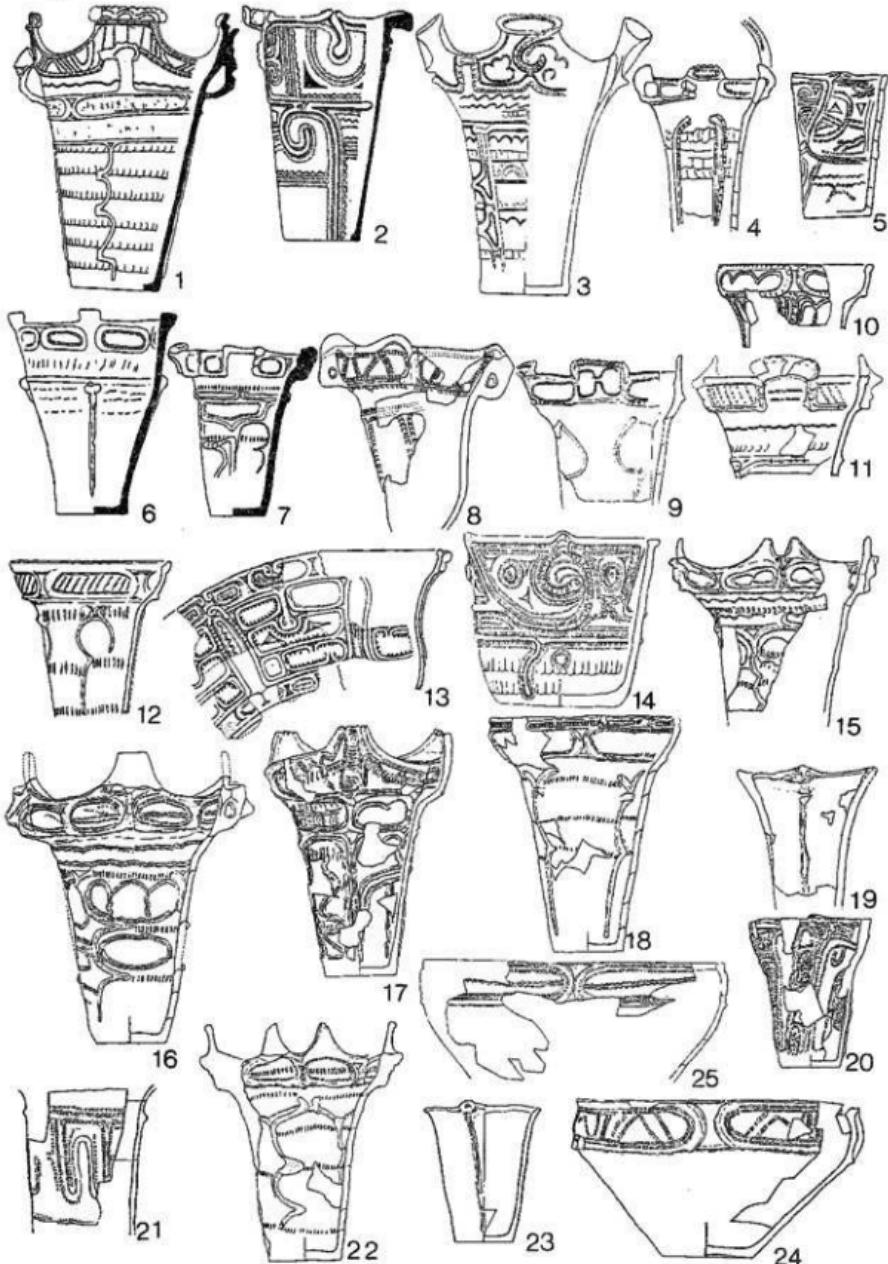
13 聖期(東京) 1~5 日野吹上遺跡1号住 6~8 日野吹上遺跡5号住 9, 10 中山谷遺跡7号住
遺跡8号住 17~18 宮田遺跡A-4号住 19 多摩ニュータウンNo.46遺跡4号住 11~16 中山谷
20 平台遺跡



14 VI期(東京) 1 貨井遺跡11号住 2~4 神谷原遺跡SB54 5 神谷原遺跡SB155 6~12 神谷原遺跡SB154
遺構群 13 神谷原遺跡SB158 14~16 神谷原遺跡SB202 17~21 神谷原遺跡SK5



15 N～V期（埼玉） 1 西原遺跡2号土塗 2～4 亀居遺跡1号住 5 池田遺跡 6 藤原遺跡1号住 7 藤原遺跡KT11P 8 藤原遺跡30号住 9 藤原遺跡13号住 10 平松台遺跡 11 藤原遺跡AP 12～14 金堀沢遺跡24号土塗 15 亀居遺跡2号住 16～20 萩嶺山遺跡 21～24 東洋大學工学部敷地内遺跡



16 IV・V期(千葉)

1、2、14 鳴神山遺跡

9 蒙立遺跡小堅穴7

15~20 蒙立遺跡47号住

3~5 高根木戸遺跡72号住

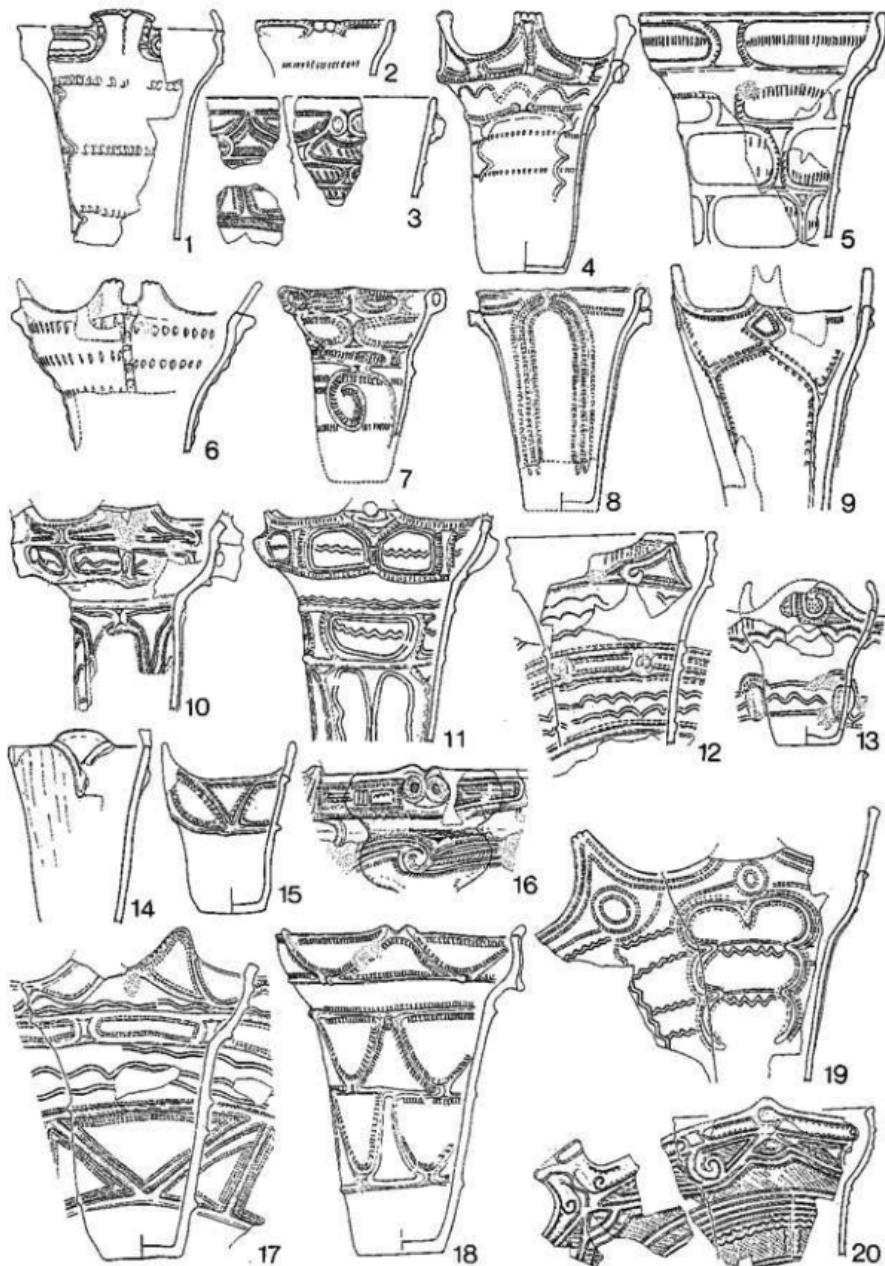
10、11 子和清水遺跡252号住

21~24 蒙立遺跡9号住

6、7 中峠遺跡

8 蒙立遺跡26号住

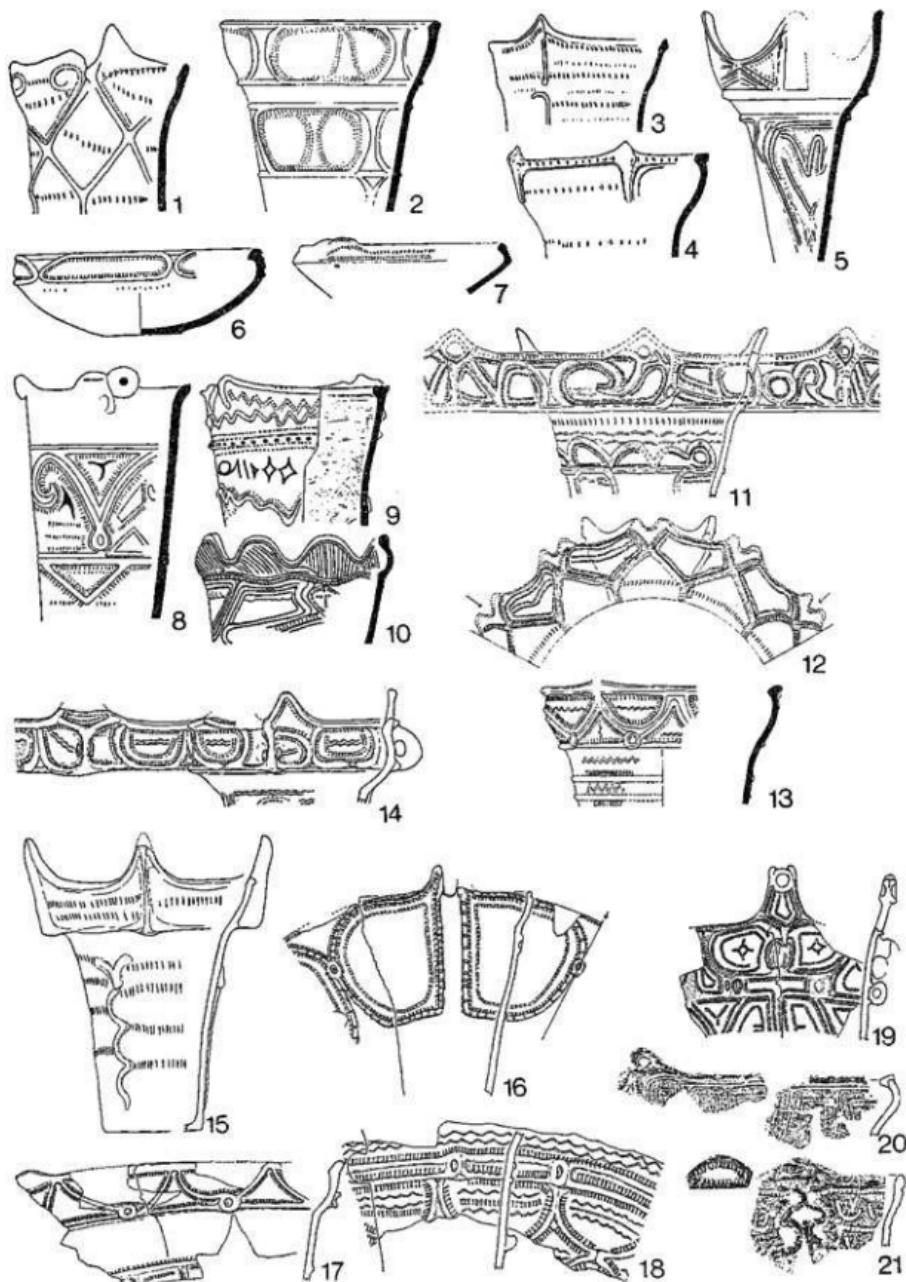
12、13 子和清水遺跡1号住



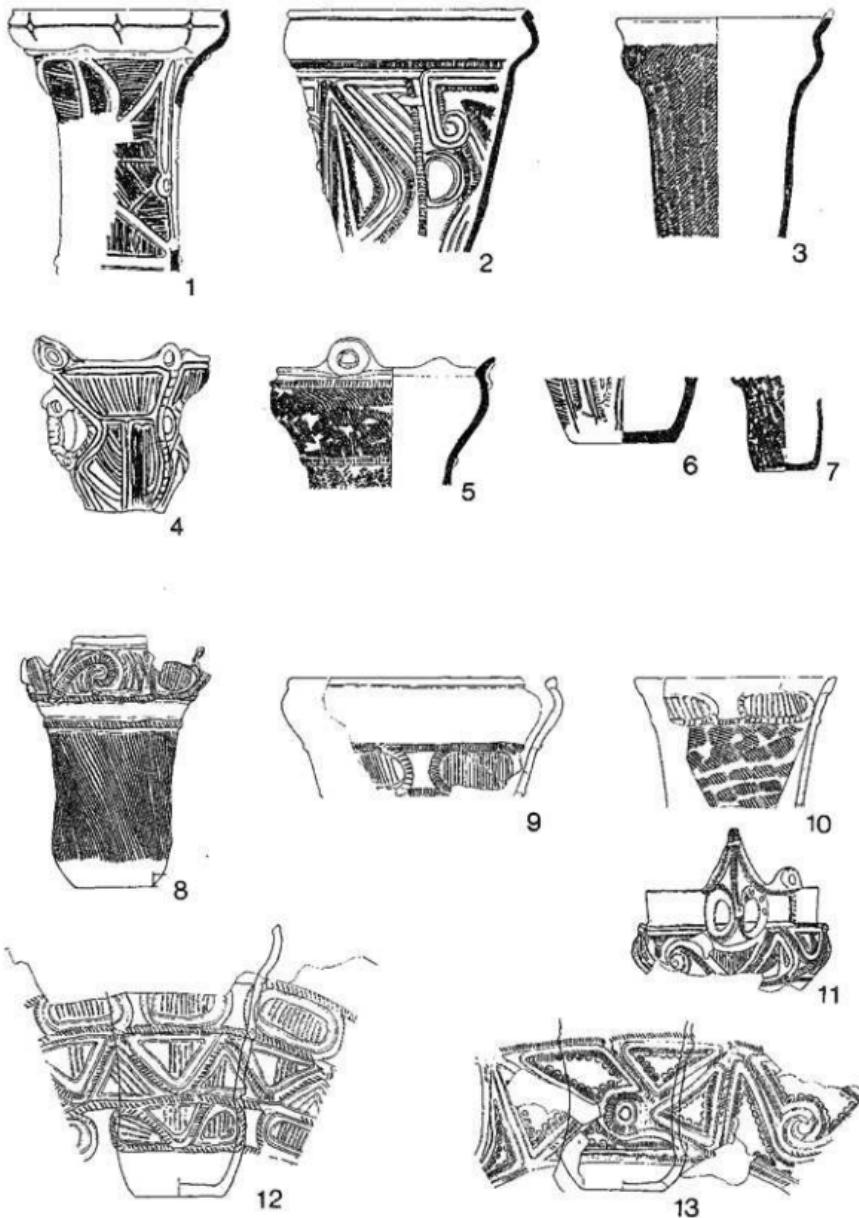
17 V・Ⅺ期(千葉)

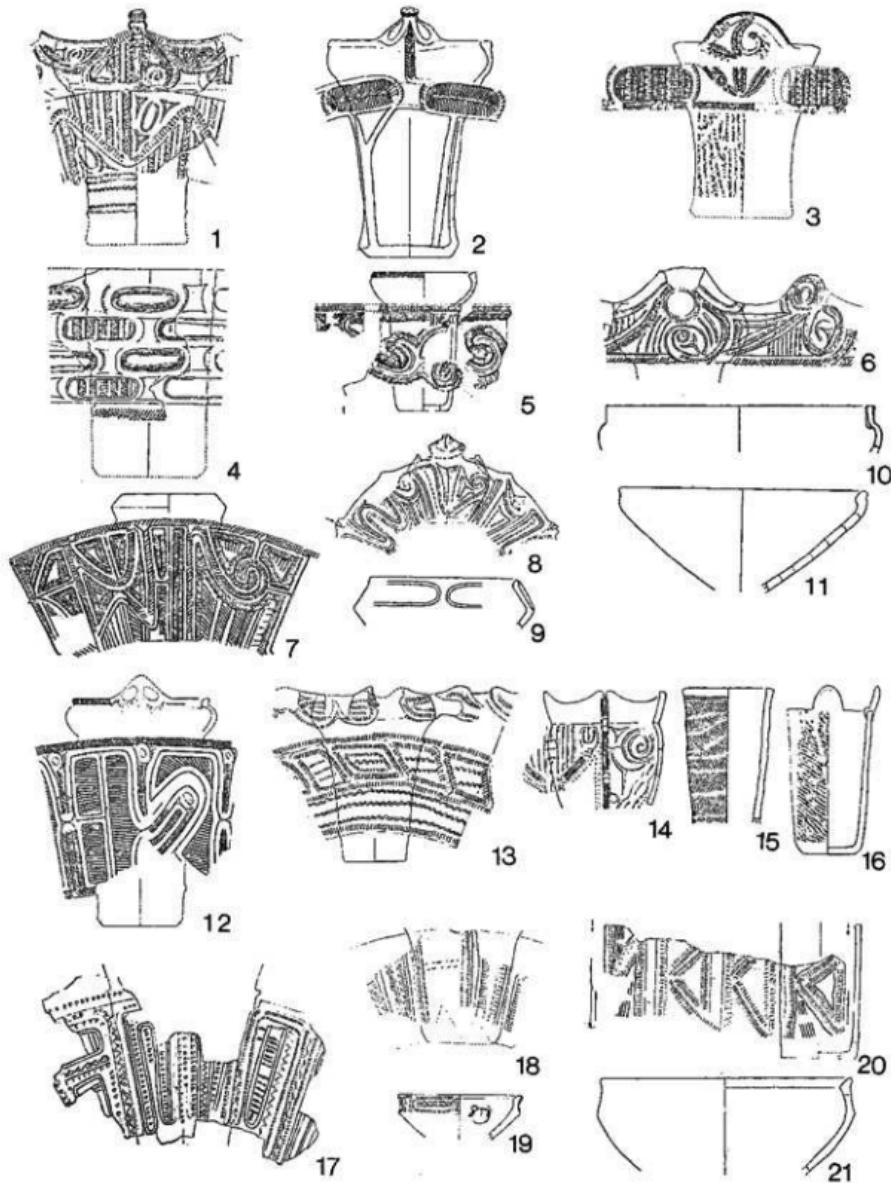
1~3 子和清水遺跡33号住
9~16 子和清水遺跡106号住

4 子和清水遺跡111号住 5~8 子和清水遺跡92号住
17~20 子和清水遺跡117号住

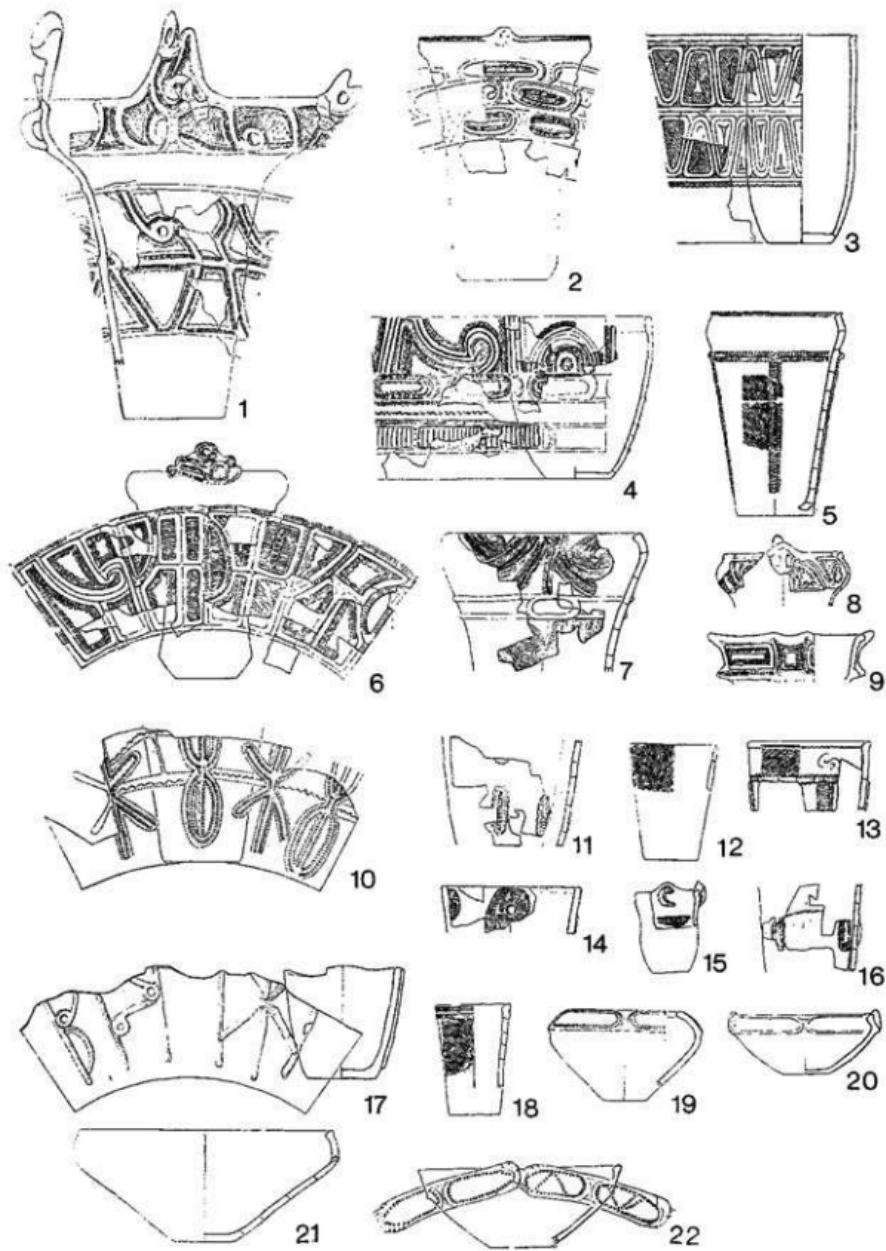


18 Y・VI期(埼玉・千葉) 1~10 下加道跡5号住 11~13 西原遺跡9号土塙 14~21 子和清水遺跡149号住

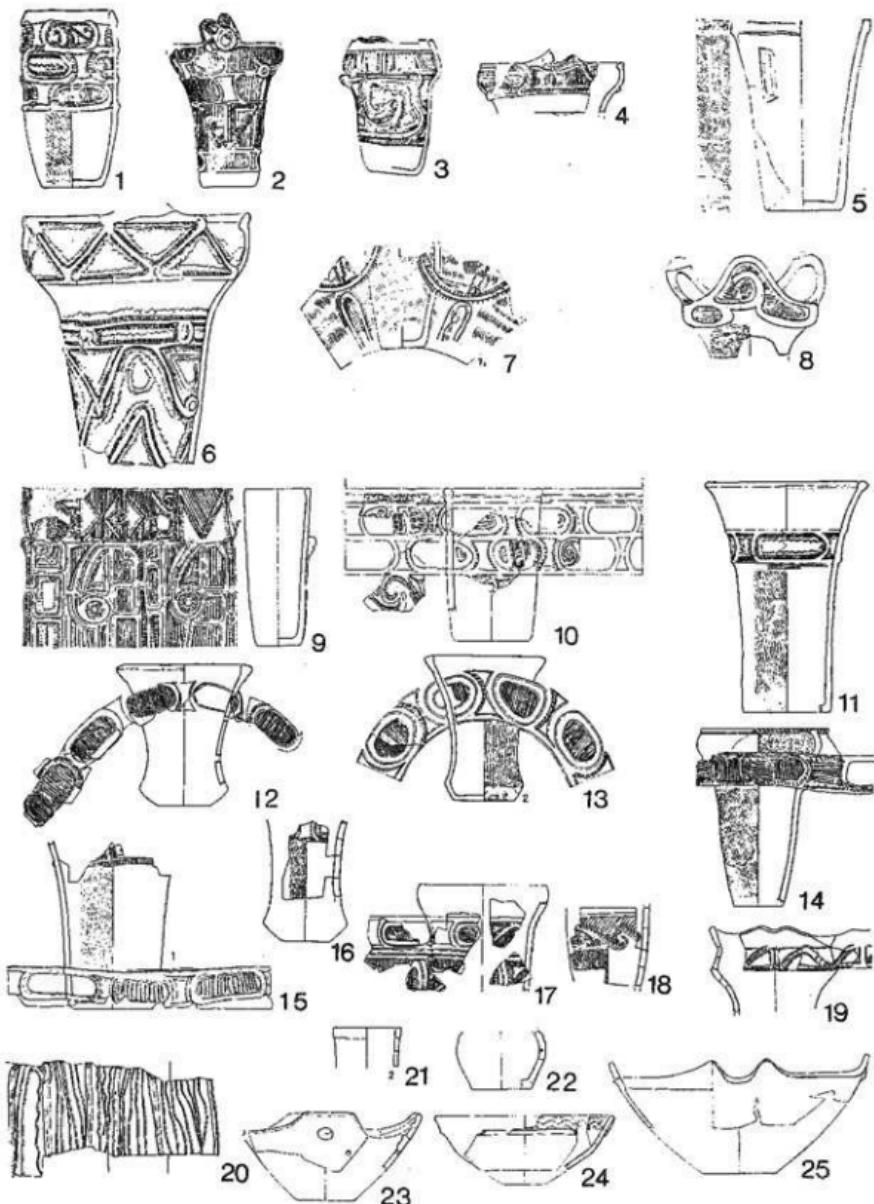




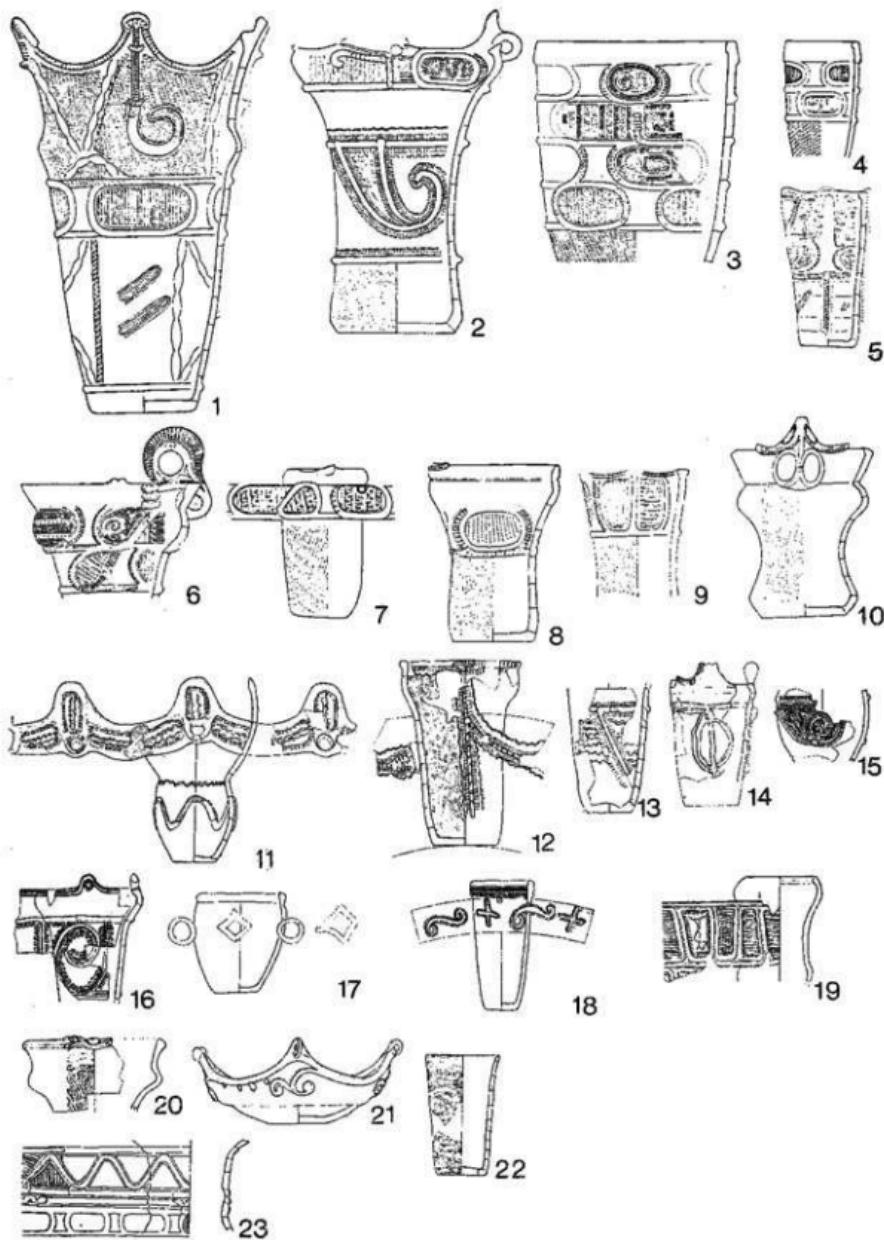
20 VI期(東京) 1~11 多摩ニータウンNo46遺跡7号住 12~21 多摩ニータウンNo46遺跡8号住



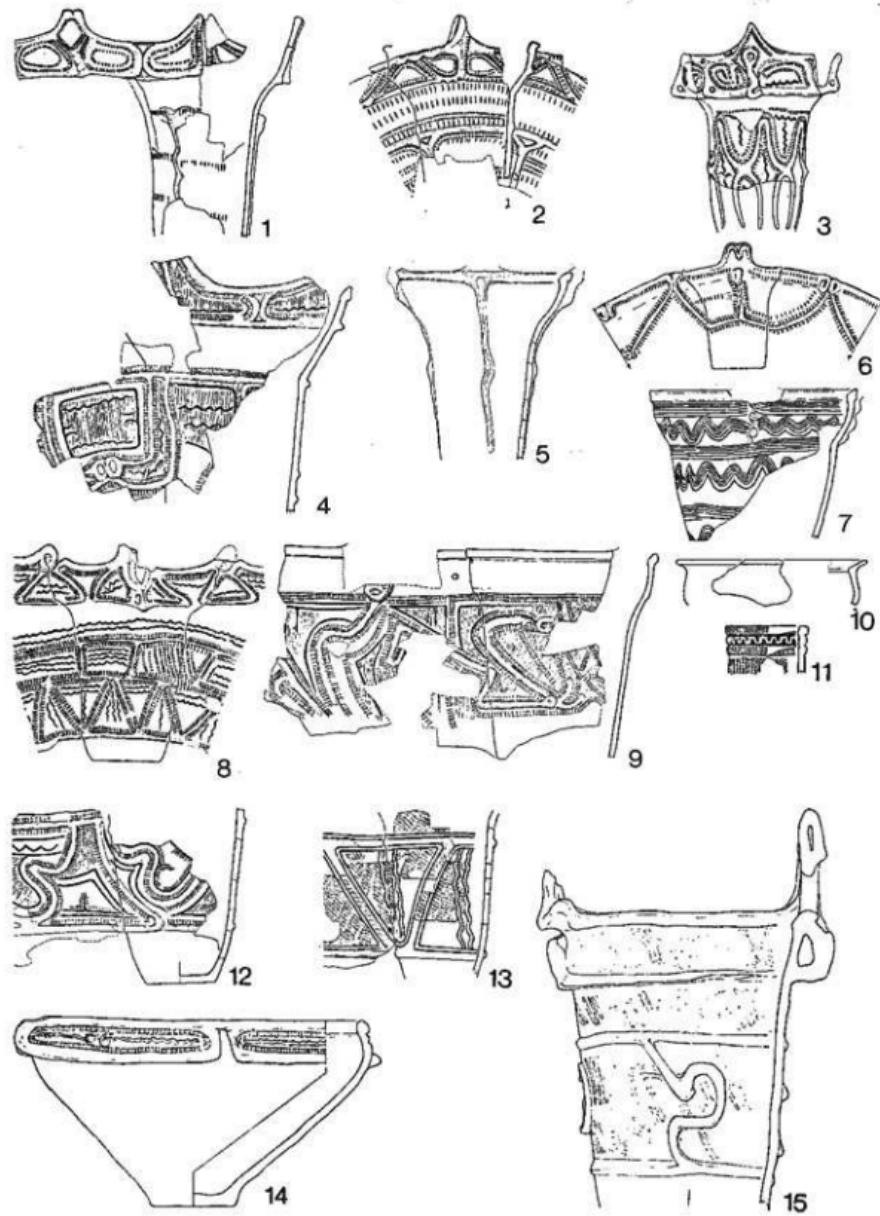
21 植期(東京) 1~22 貫井南遺跡 6号住



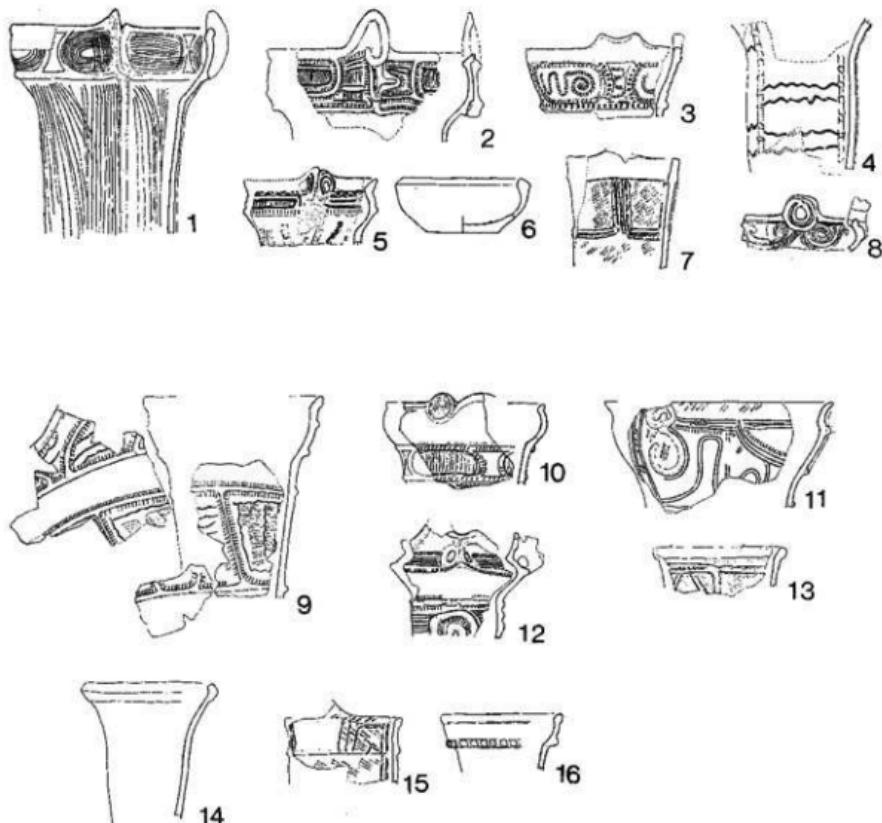
22 VI期(東京) 1~8 恋ヶ窪遺跡3号住 9~25 黄井遺跡6号住



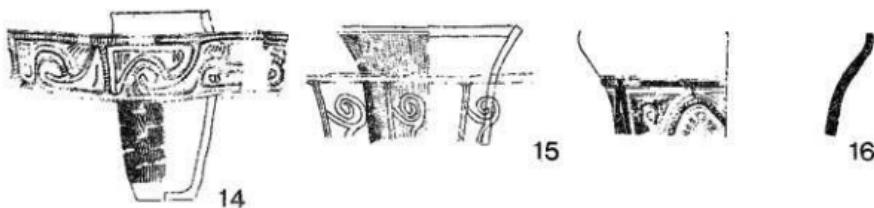
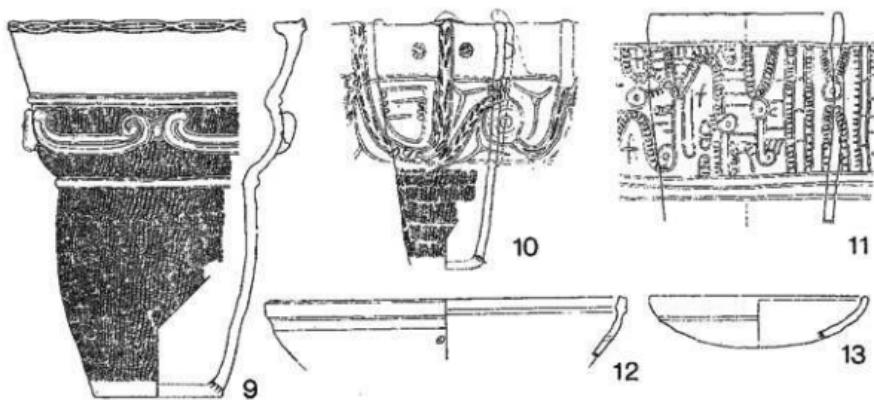
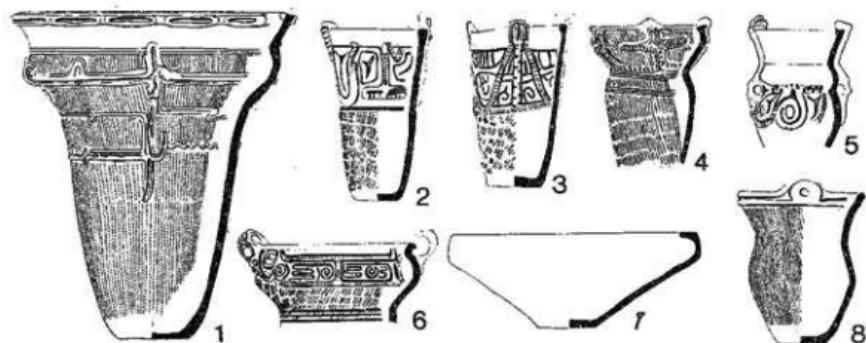
23 墓期(東京) 1~10 西上遺跡B地点上層 11~26 寶井遺跡2号室



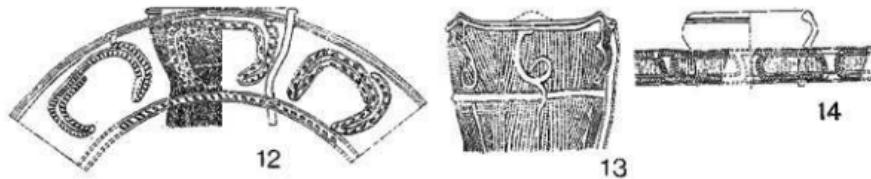
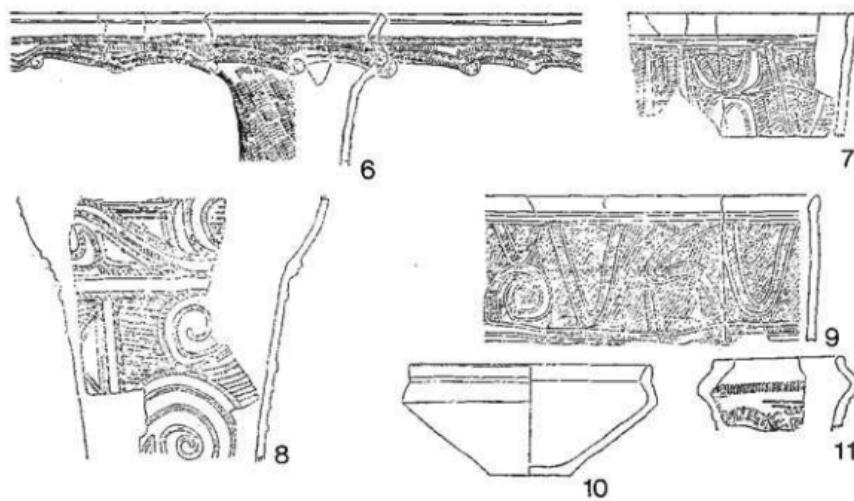
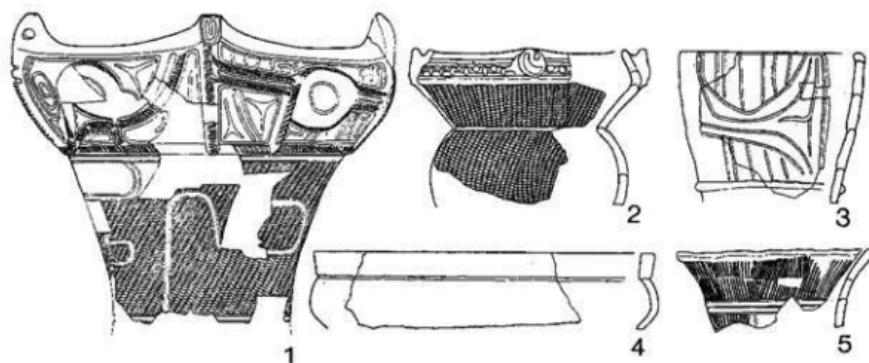
24 Ⅳ期(千葉) 1~13 子和清水遺跡160号住 14、15 城ノ腰貝塚306号住



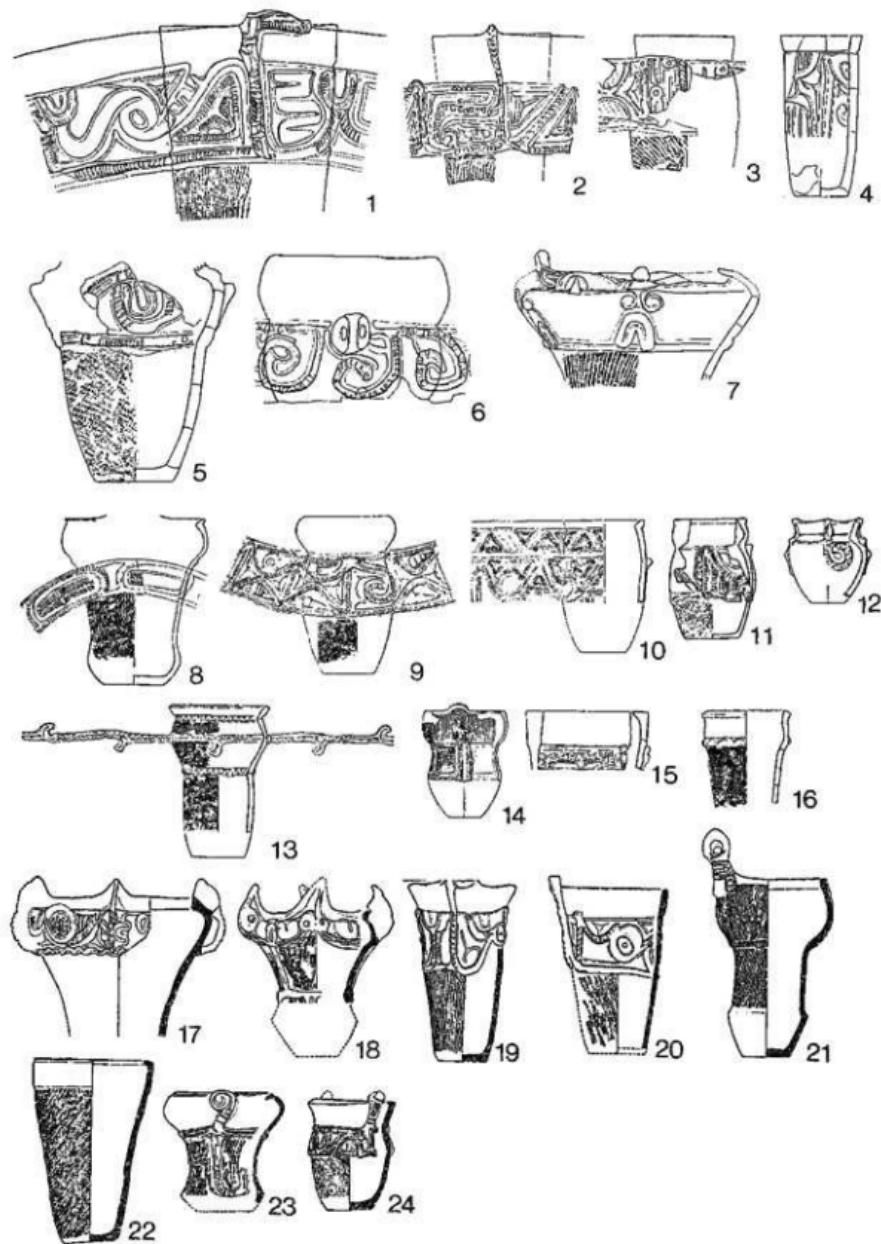
25 周期(千葉) 1~8 子和清水遺跡A1号住 9~16 子和清水遺跡104号住



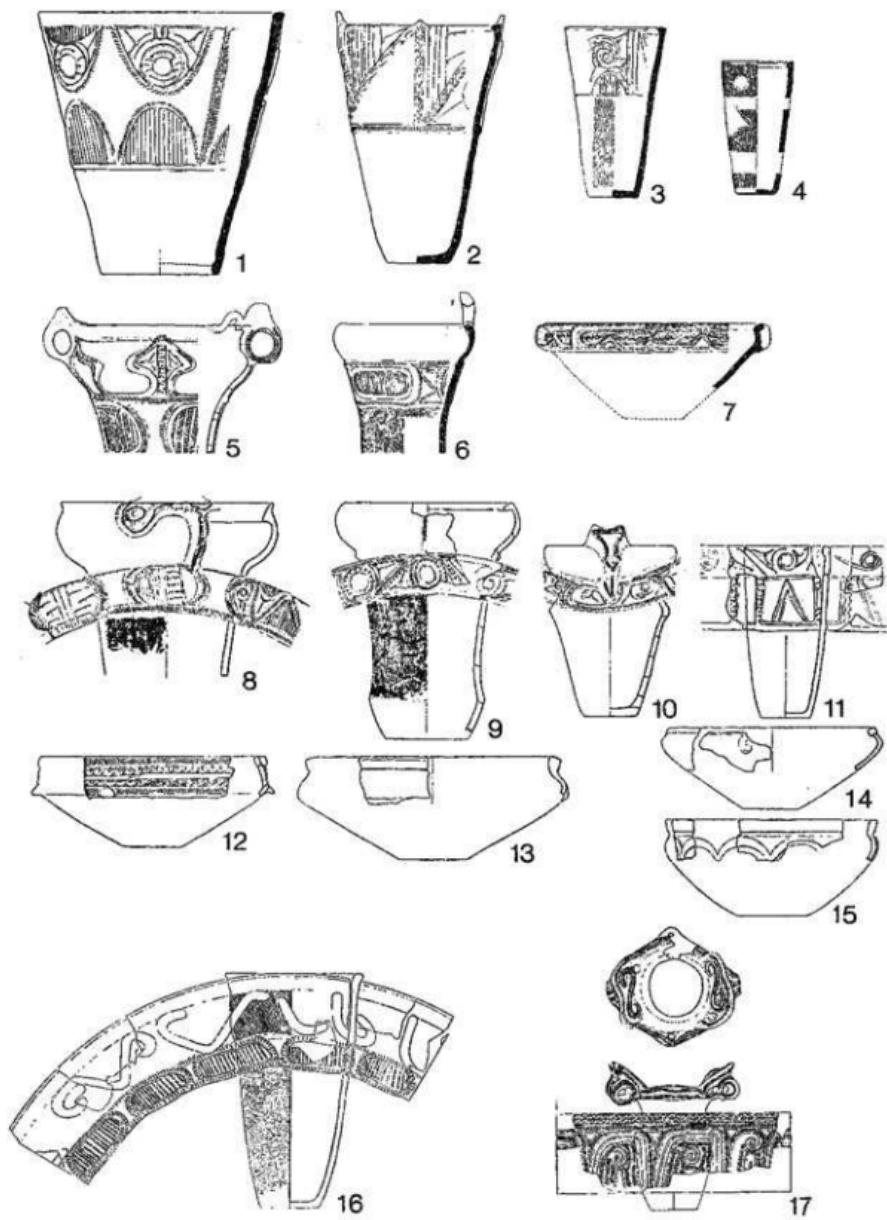
26 周期（埼玉） 1~8 諏原遺跡12号住 9~13 木曾呂表遺跡2号住 14~16 西原遺跡5号住



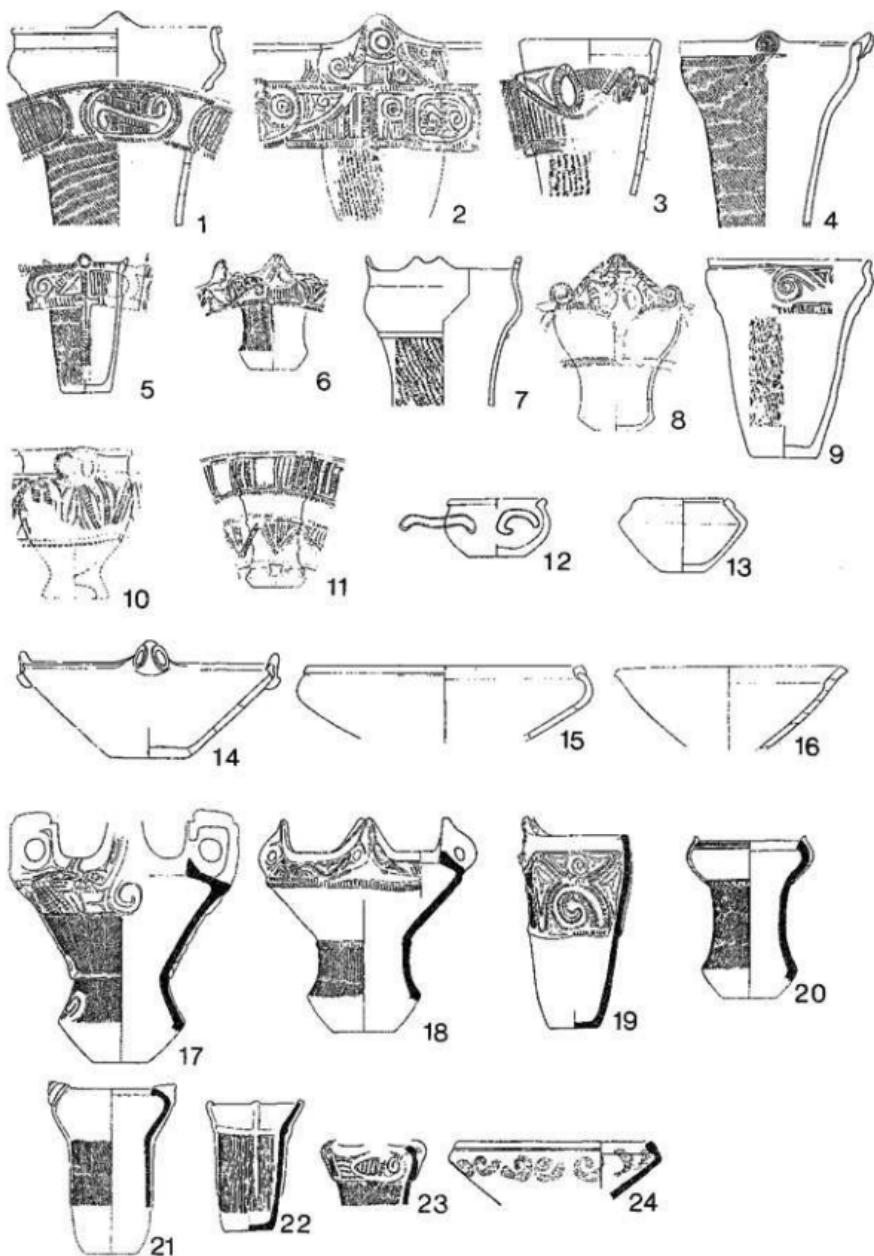
27 植期(埼玉) 1~5 松ノ木遺跡30号住 5~11 中郷遺跡2号住 12~14 西原遺跡28号住



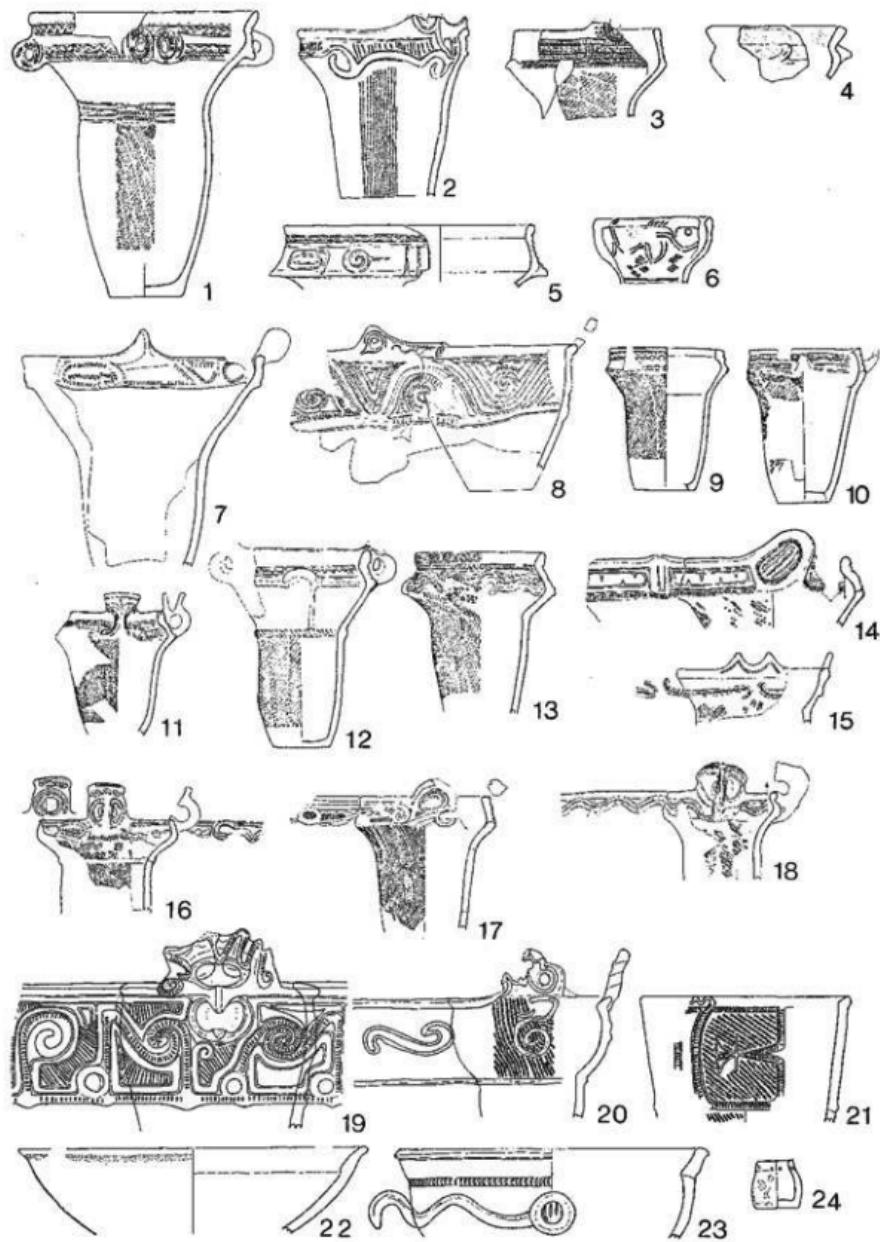
28 周期（東京） 1~7 周山遺跡 8号住 8~16 貢井南遺跡 5号住 17~24 中山谷遺跡 1号住



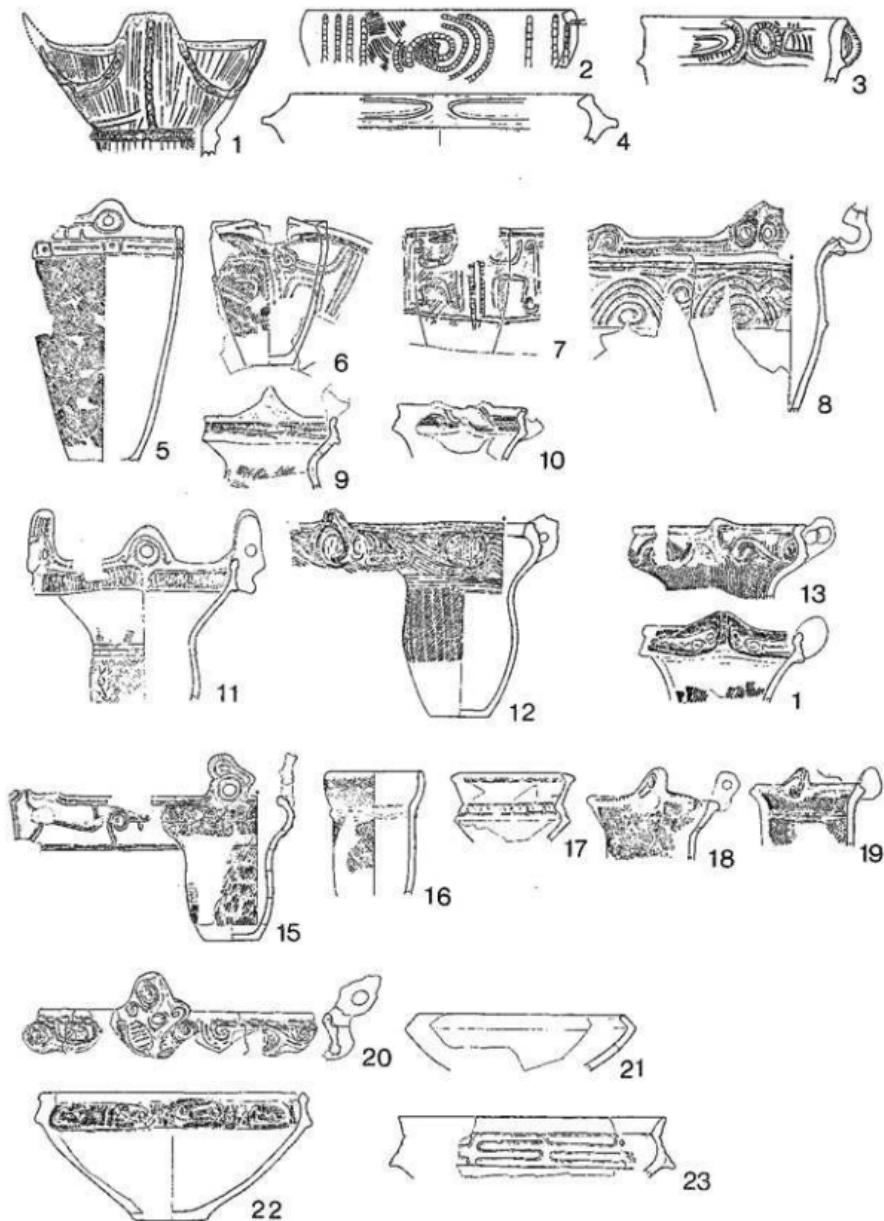
29 墓期(東京) 1~7 岳ノ上遺跡SB5 8~15 貴井南遺跡15号住 16、17 動板遺跡5号住



30 VII期(東京) 1~16 多摩ニータウンNo46遺跡1号住 17~24 狐塚遺跡3号住



31 雷期(千葉) 1~6 子和清水遺跡83号住 7~18 子和清水遺跡28号住 19~24 海老ヶ作貝塚11号住



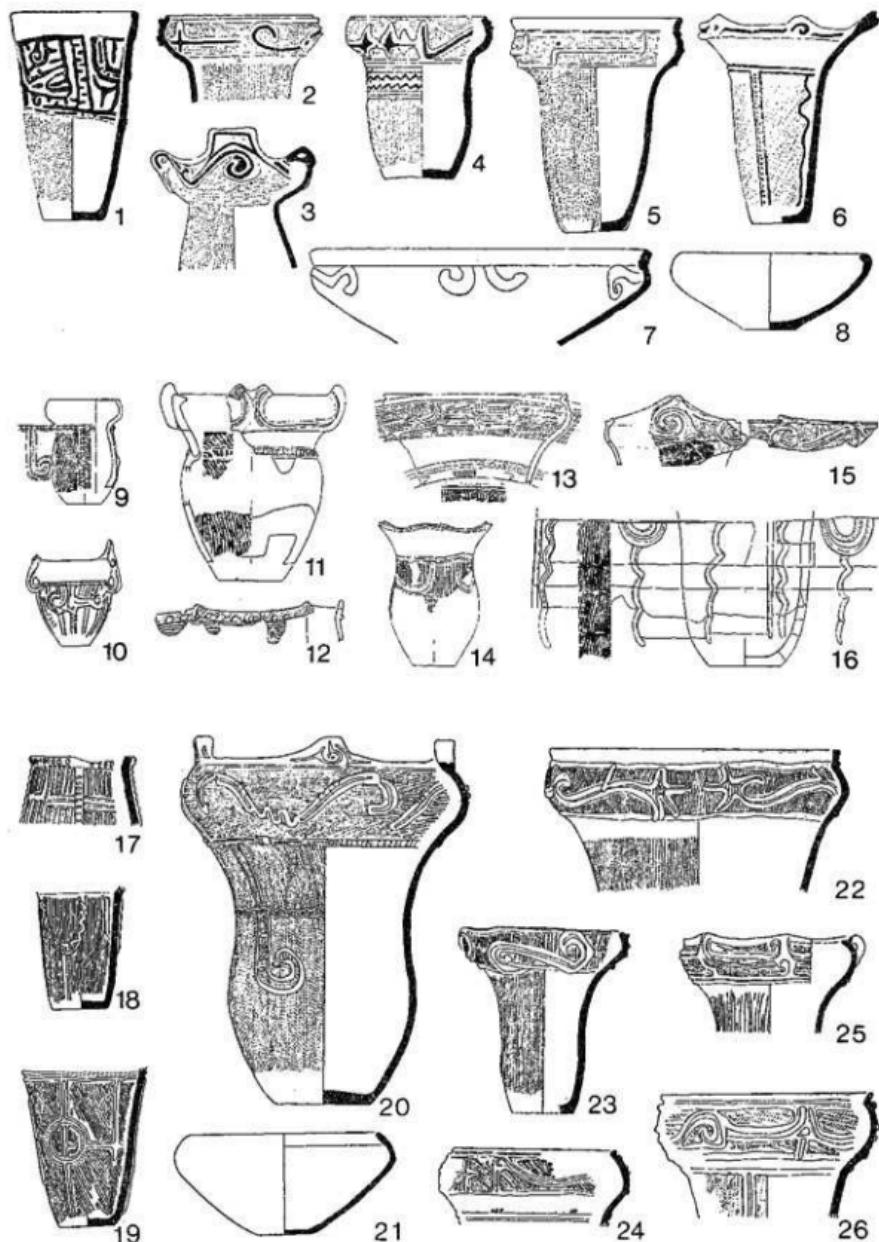
32 墓期（千葉） 1~4 海老ヶ作貝塚11号住 5~23 子和清水遺跡240号住



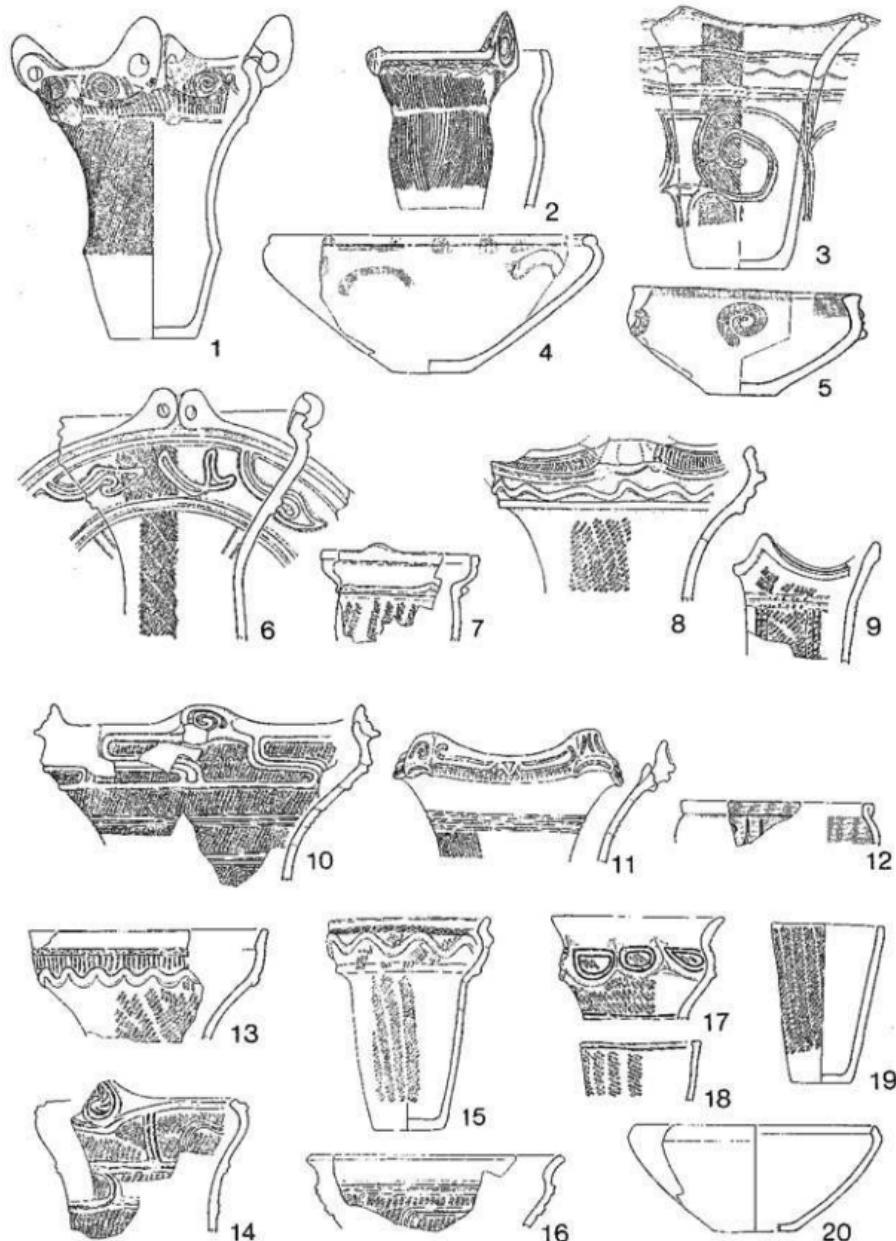
33 Ⅱ a期(埼玉) 1~11 吹上貝塚3号住 12~21 岩の上遺跡23号住 22~26 舟山遺跡5号住



34 Ⅳ a.期(海王) 1~19 花旗貝塚 2 A号住



35 K a期(東京) 1~8 中村橋遺跡 9~16 貢井南遺跡3上号作 17~26 中山谷遺跡10号住



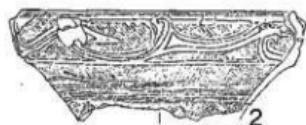
36 [Kofun (Kanze)] 1~5 子和清水遺跡31号住 6、7 子和清水遺跡161号住 8~9 子和清水遺跡89号住
10~12 子和清水遺跡243号住 13~20 子和清水遺跡156号住



3



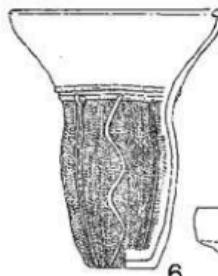
5



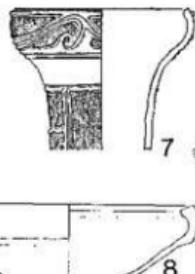
2



4



6



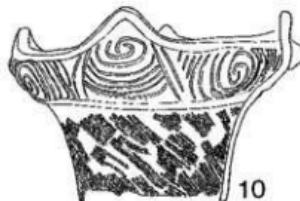
7



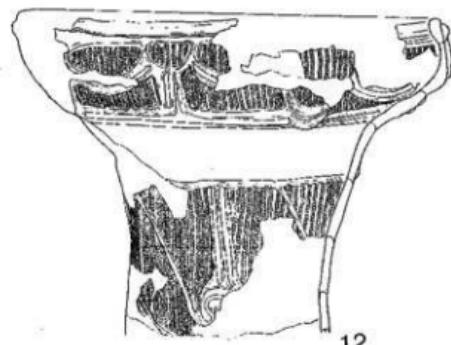
8



9

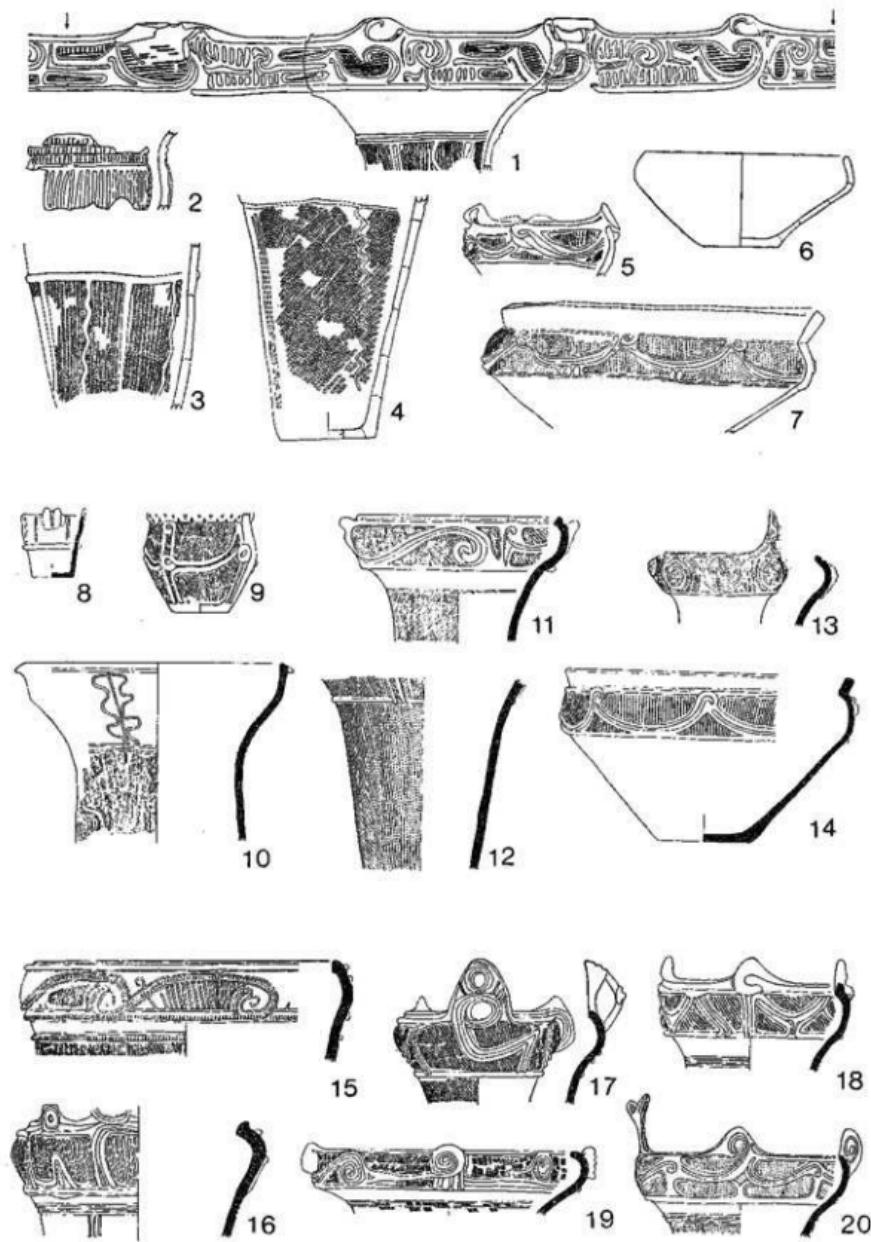


10

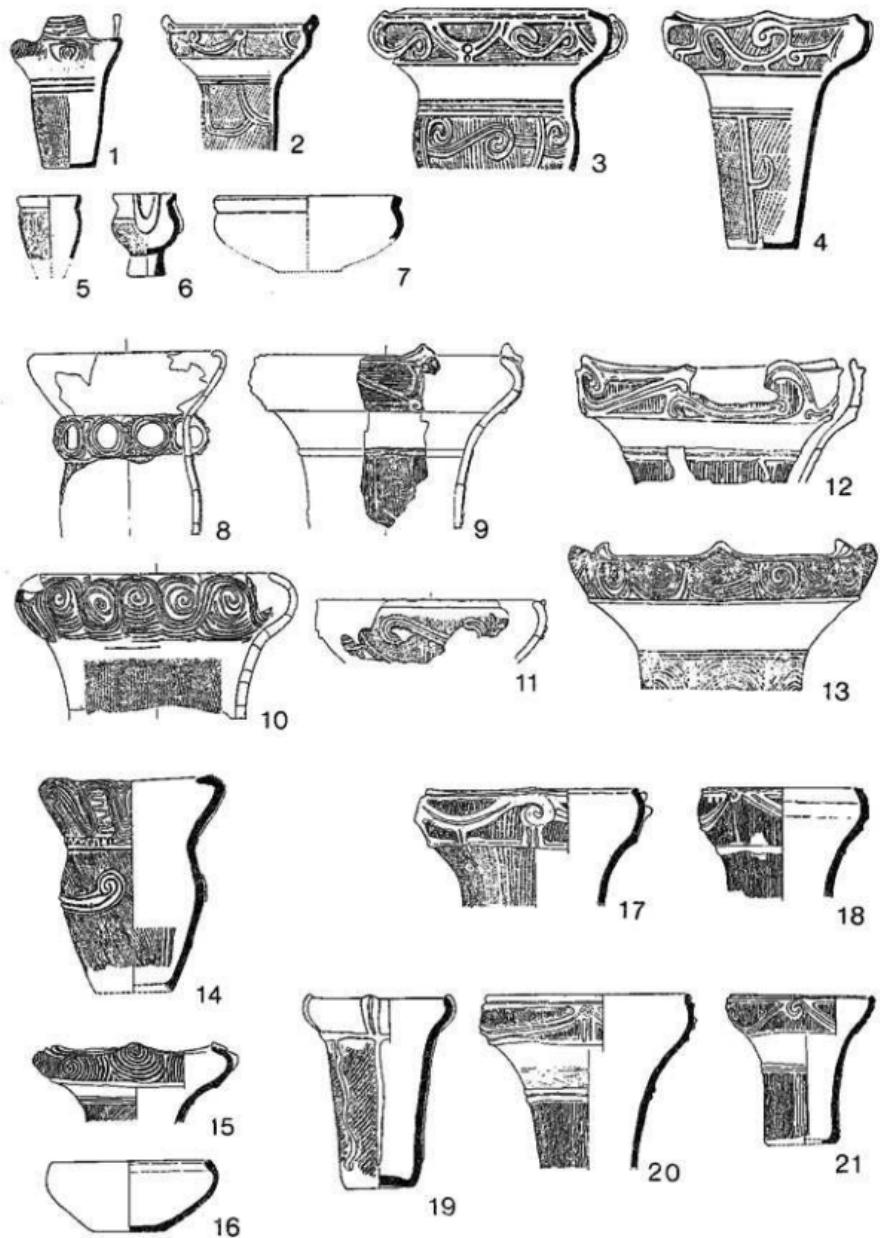


12

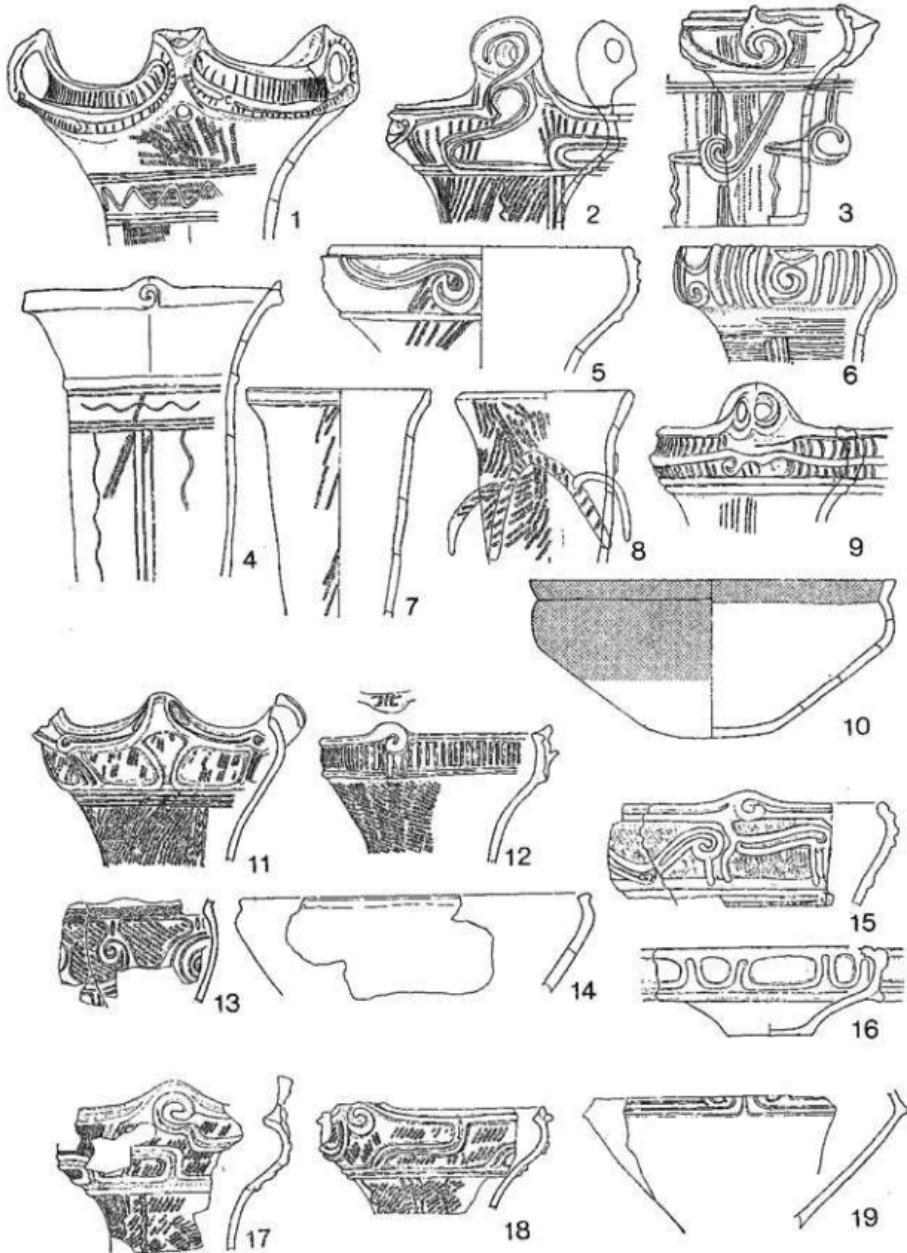
37 X b 期（精玉） 1、2 桥型造脉 1号住 3~5 池田造脉 10号住 6~9 花影造脉 6号住 10~12 池田造脉 19号住



38 亂 b 期（埼玉） 1~7 秩父山遺跡7号住 8~14 西原遺跡15号住 15~20 西原遺跡18号住



39 K b 期（東京） 1~7 三笠五中遺跡 1 号住 8~11 二宮遺跡 1 号住 12、13 松ノ木遺跡 6 号住
14~16 中山谷遺跡 4 号住 17~21 中山谷遺跡 6 号住

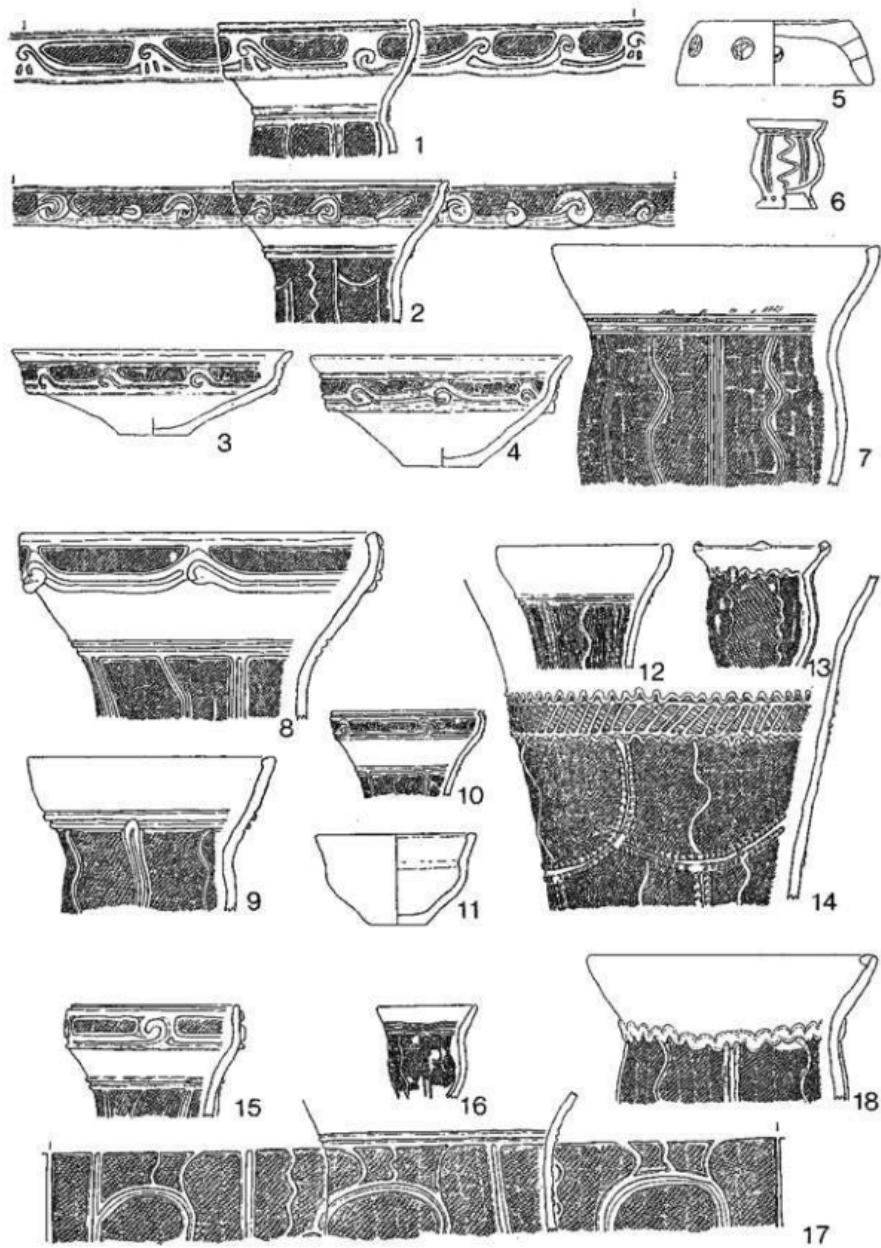


40 K b期(千葉)

1~10 高根木戸遺跡43号住
17~19 子和清水遺跡116号住

11~14 子和清水遺跡16号住

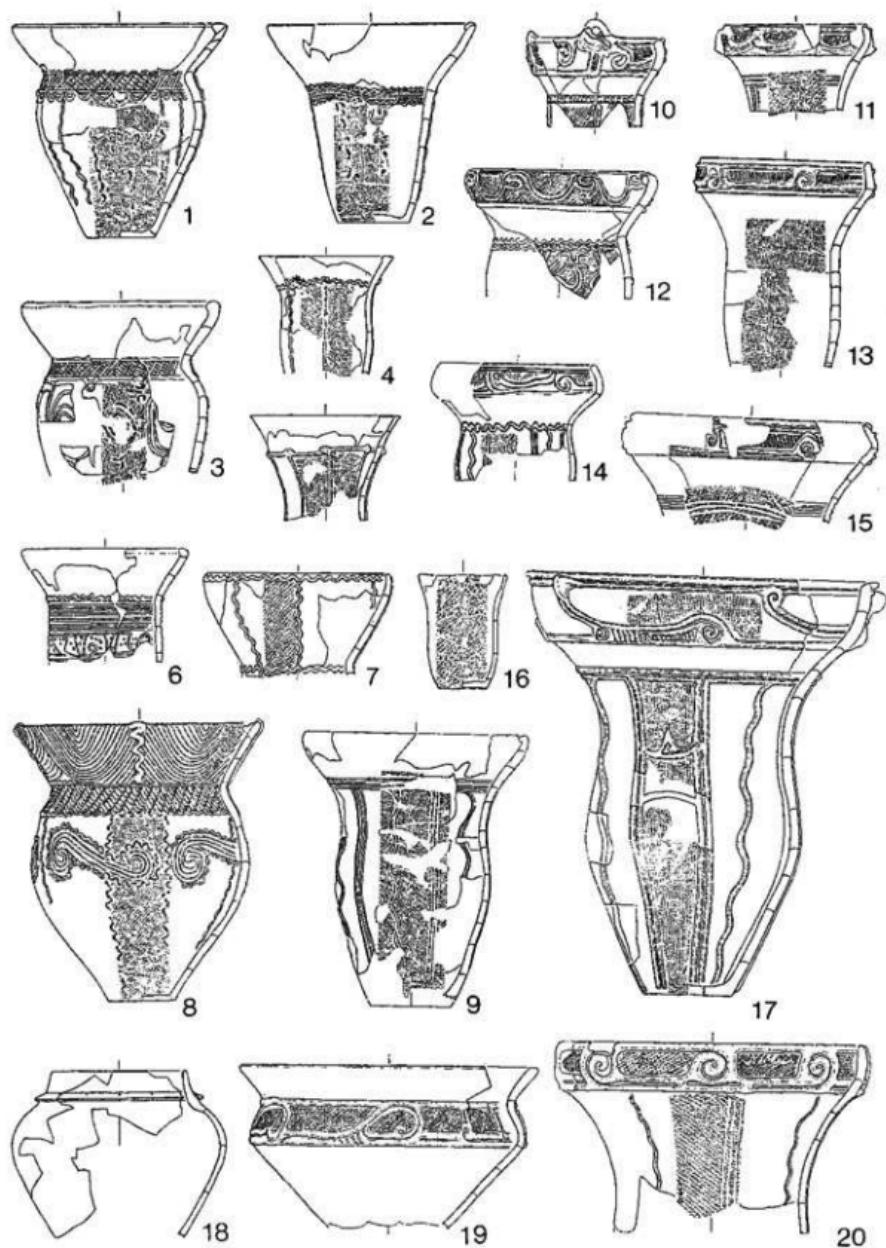
15~16 子和清水遺跡B 4号住

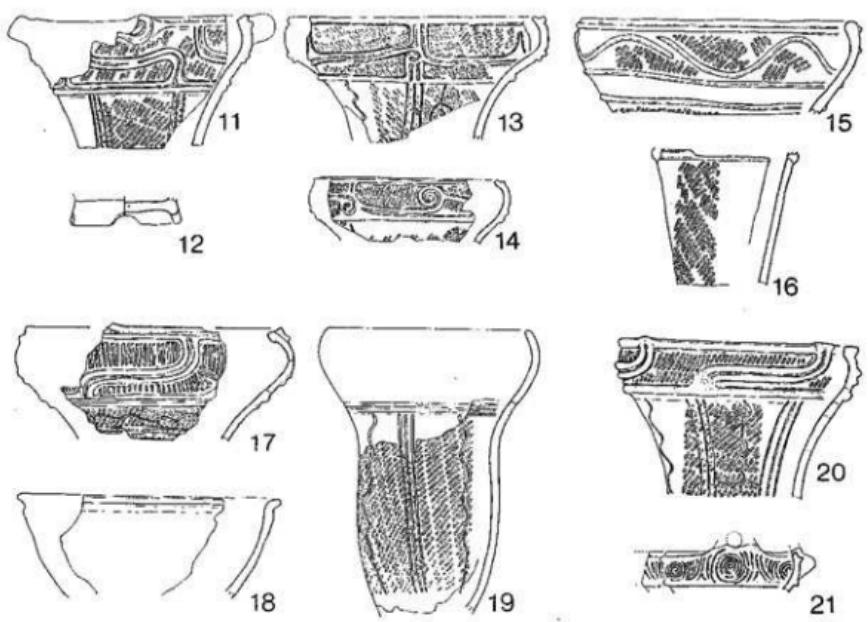
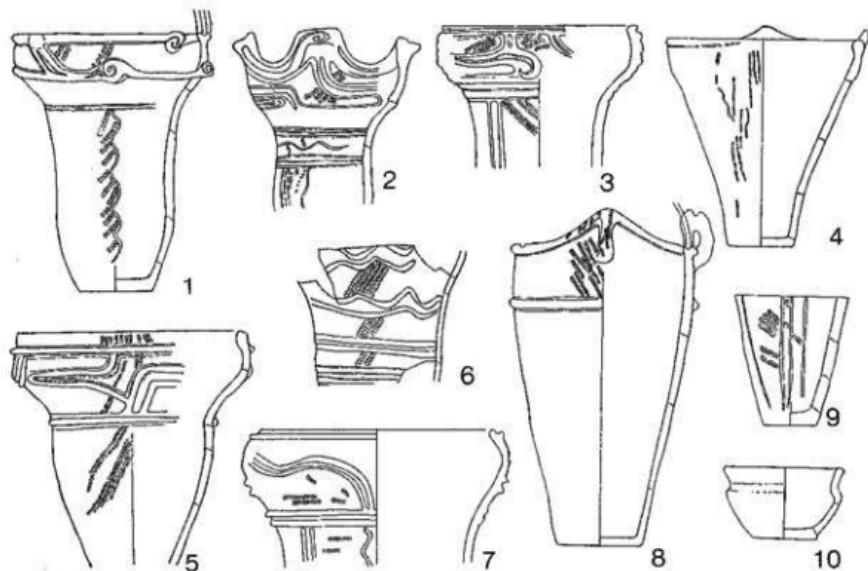


41 X 捷(埼玉) 1~7 坂東山遺跡16号住 8~14 坂東山遺跡12号住 15~18 坂東山遺跡9号住

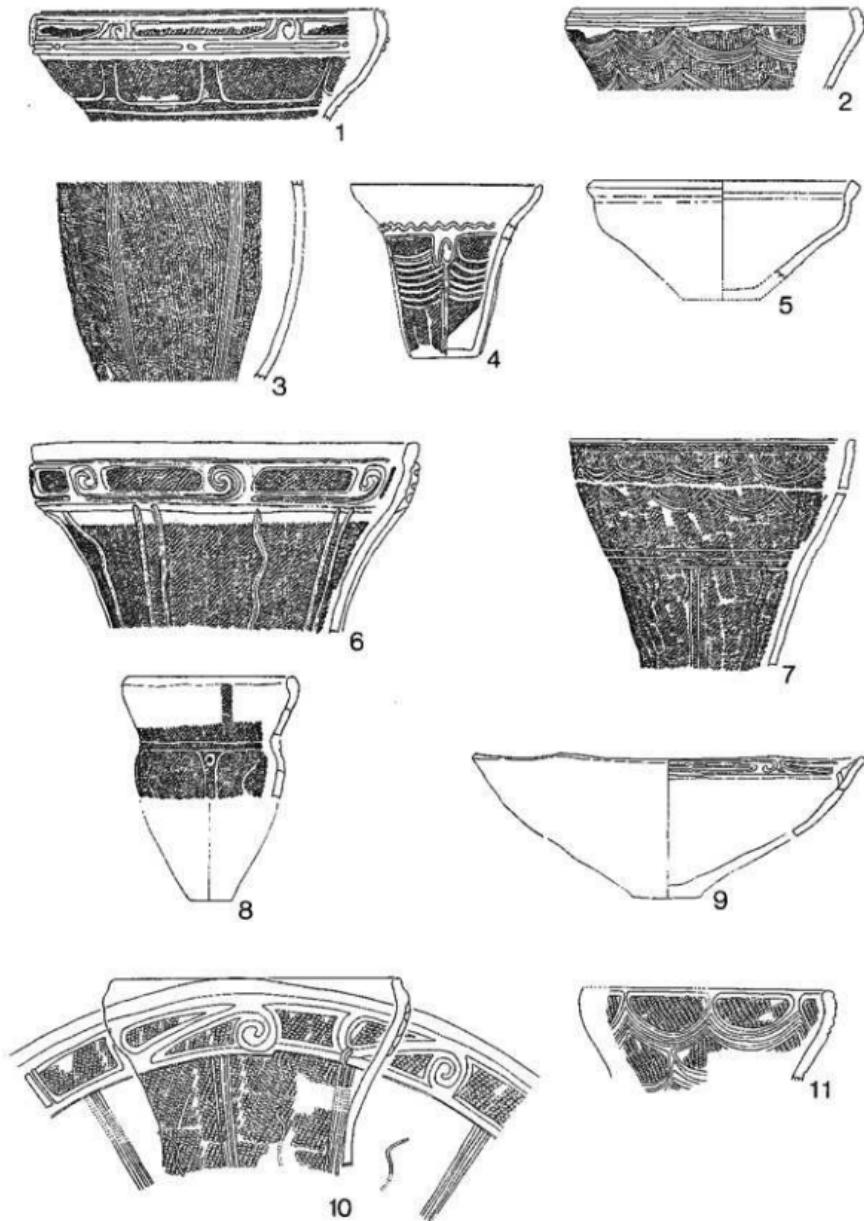


42 X期(埼玉) 1、2 黒谷田端前遺跡1号住 3 西原遺跡9号住 4~7 西原遺跡19号住
8~13 西原遺跡27号住 14~18 西原遺跡14号住 19~22 西原遺跡16号住

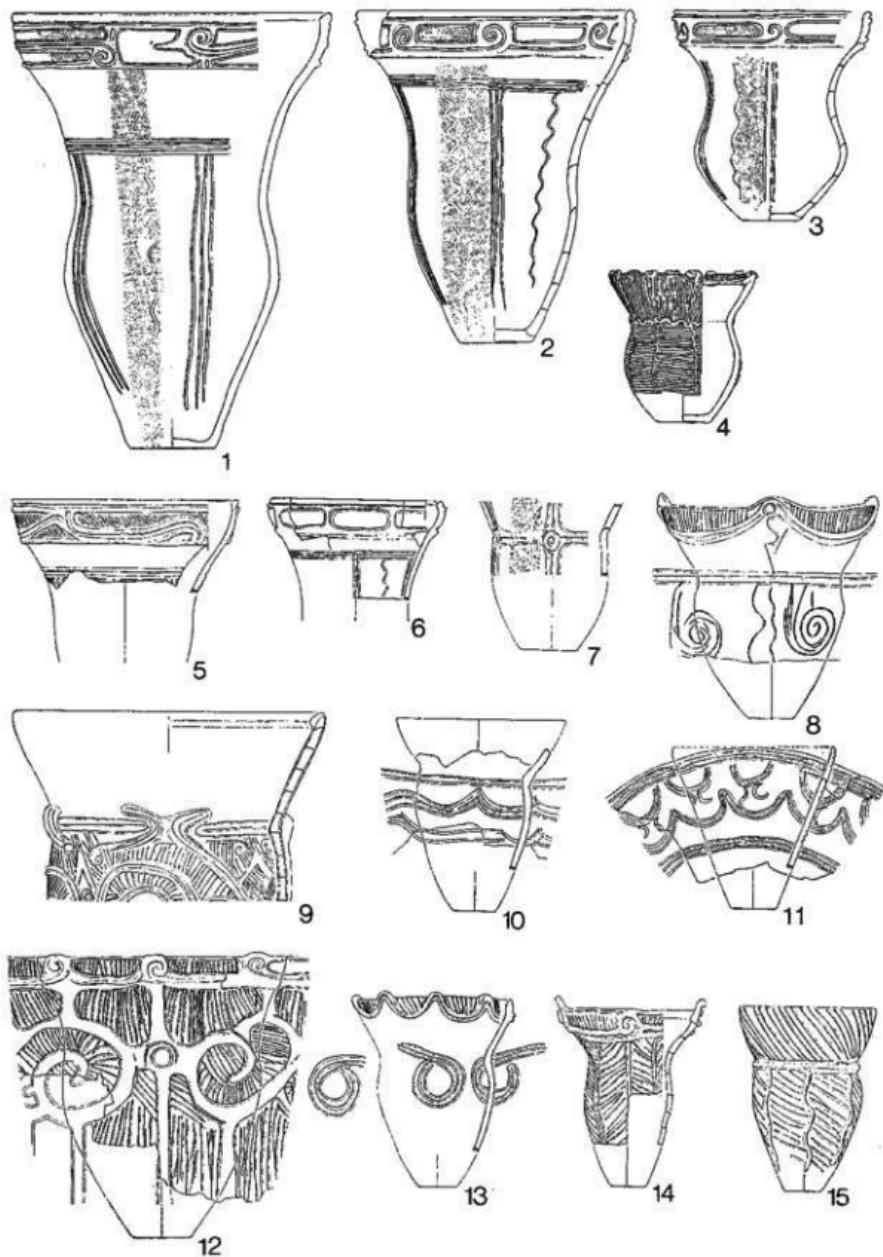




44 X期(千葉) 1~10 高根木戸遺跡57号住 11~16 子和清水遺跡148号住
20、21 子和清水遺跡123号住 17~19 子和清水遺跡77号住

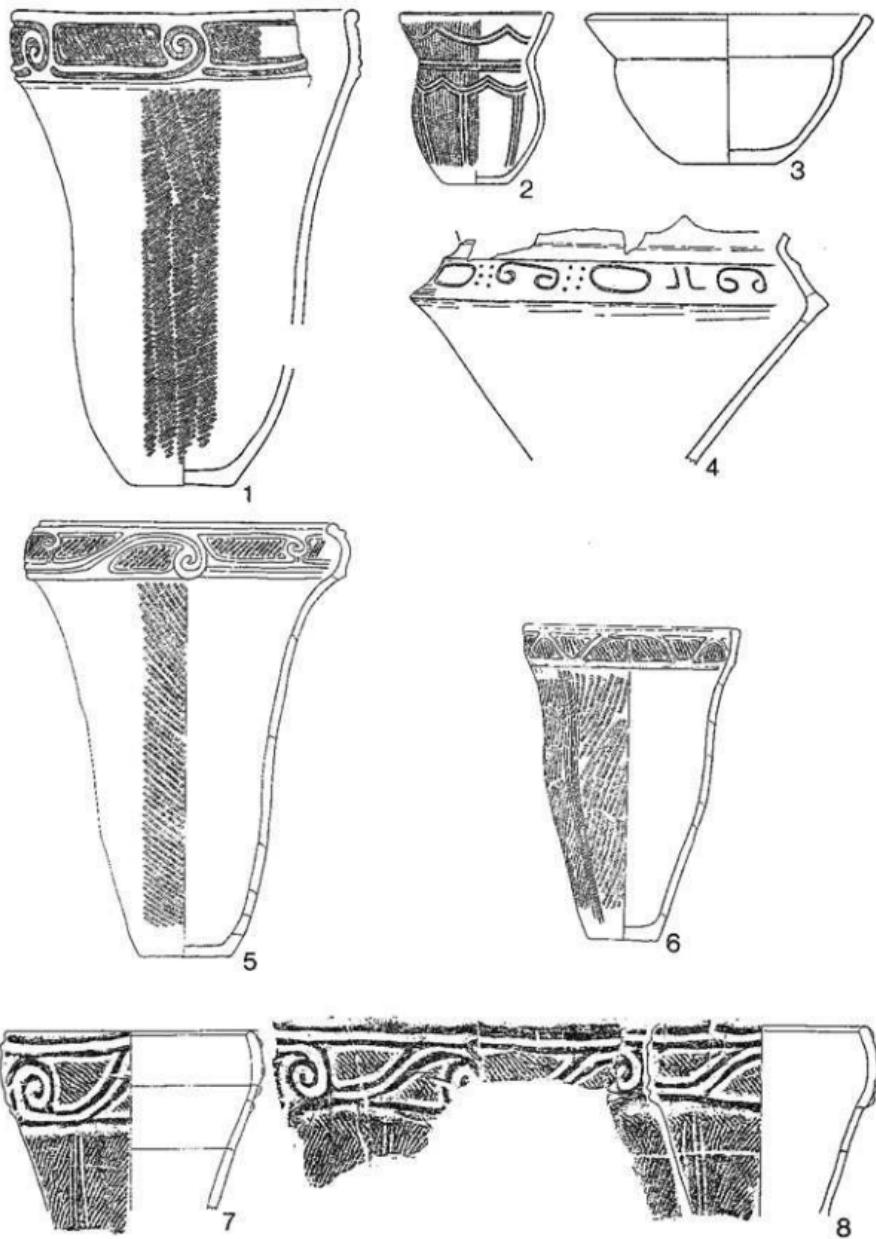


45 K期(埼玉) 1~5 大山遺跡A 6号住 6~9 島之上遺跡3号住 10, 11 八番遺跡4号住

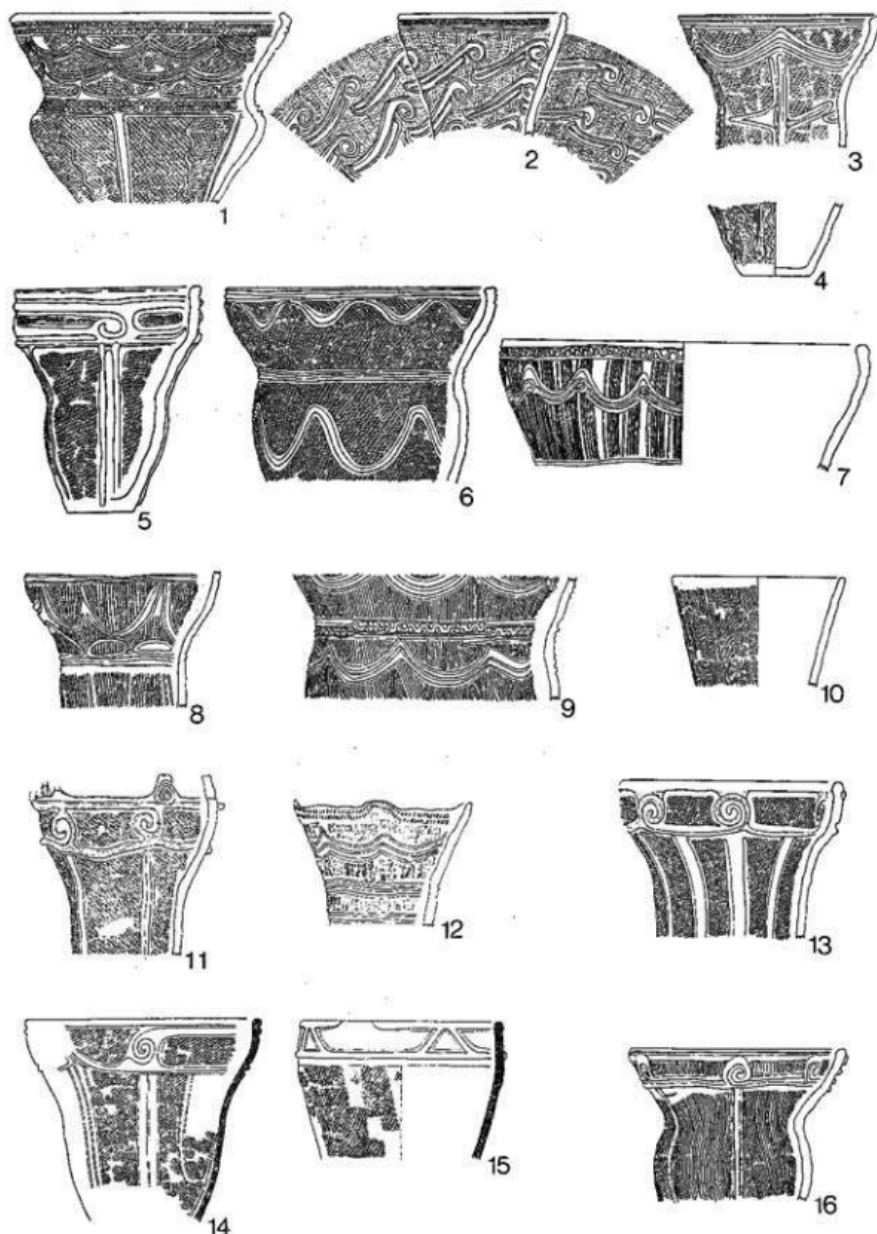




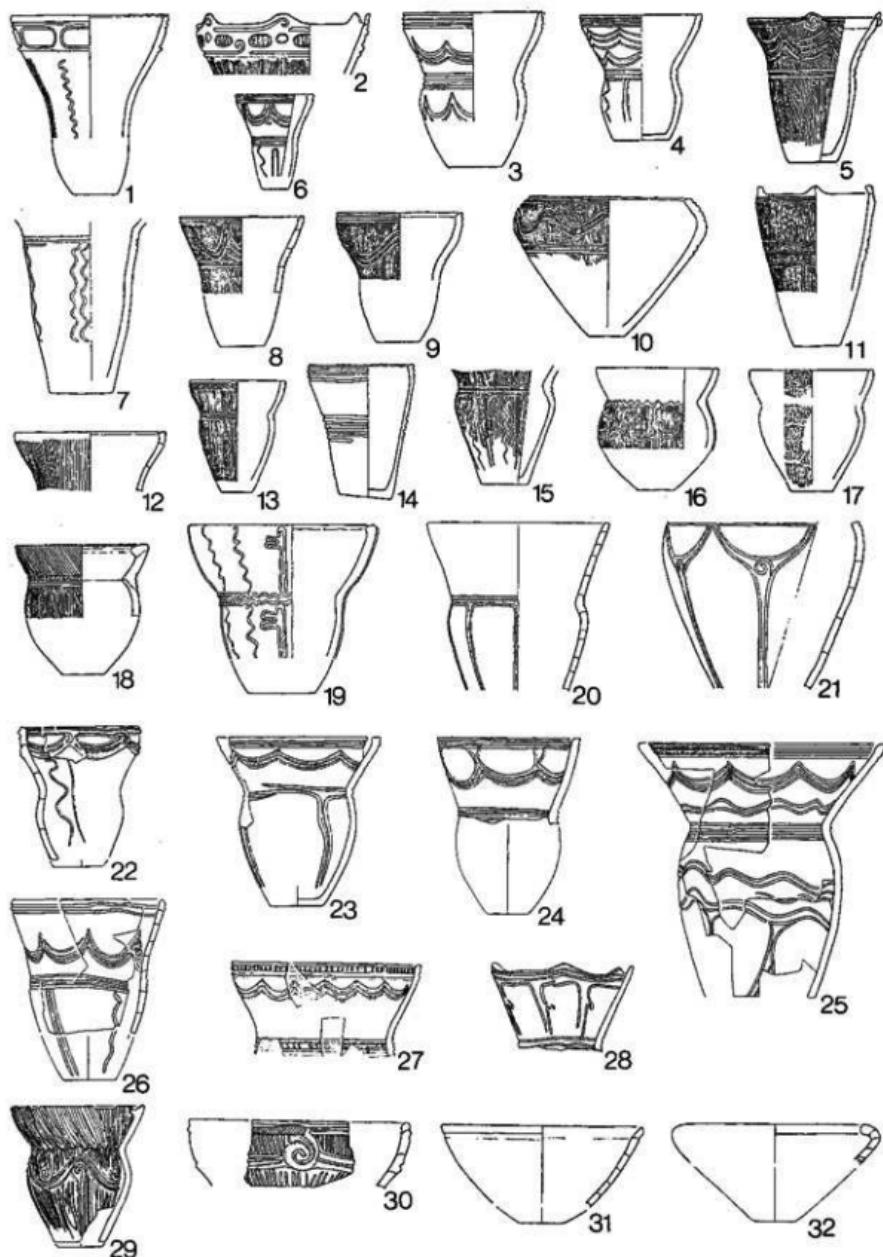
47 猿 a 期(東京) 1~7 狹山遺跡 A 1号住 8~14 下野毛遺跡 15~19 八幡山遺跡 2号住



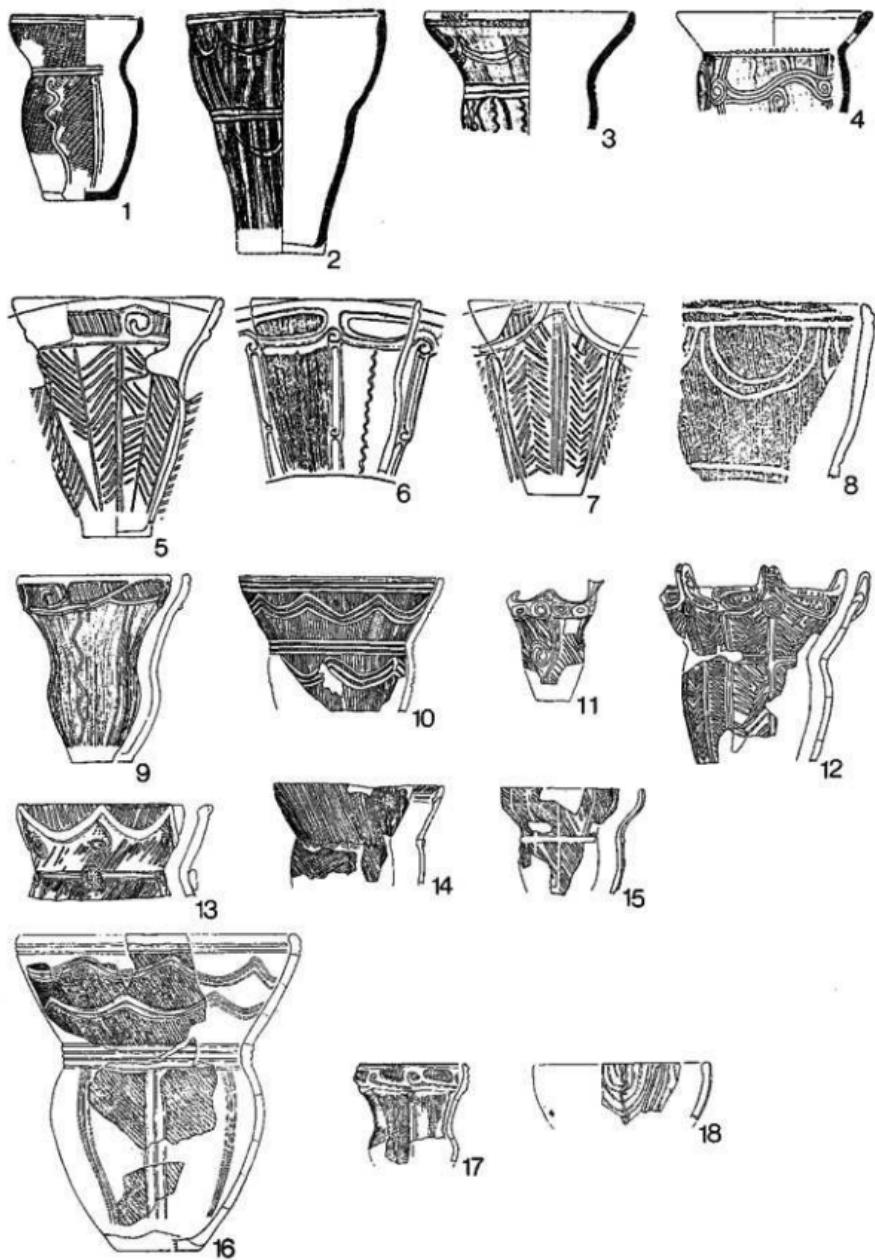
48 XI a 期(千葉) 1~4 子和清水遺跡B 3号住 5、6 海老ヶ作貝塚 7 磨花遺跡8号住 8 磨花遺跡36号土塗



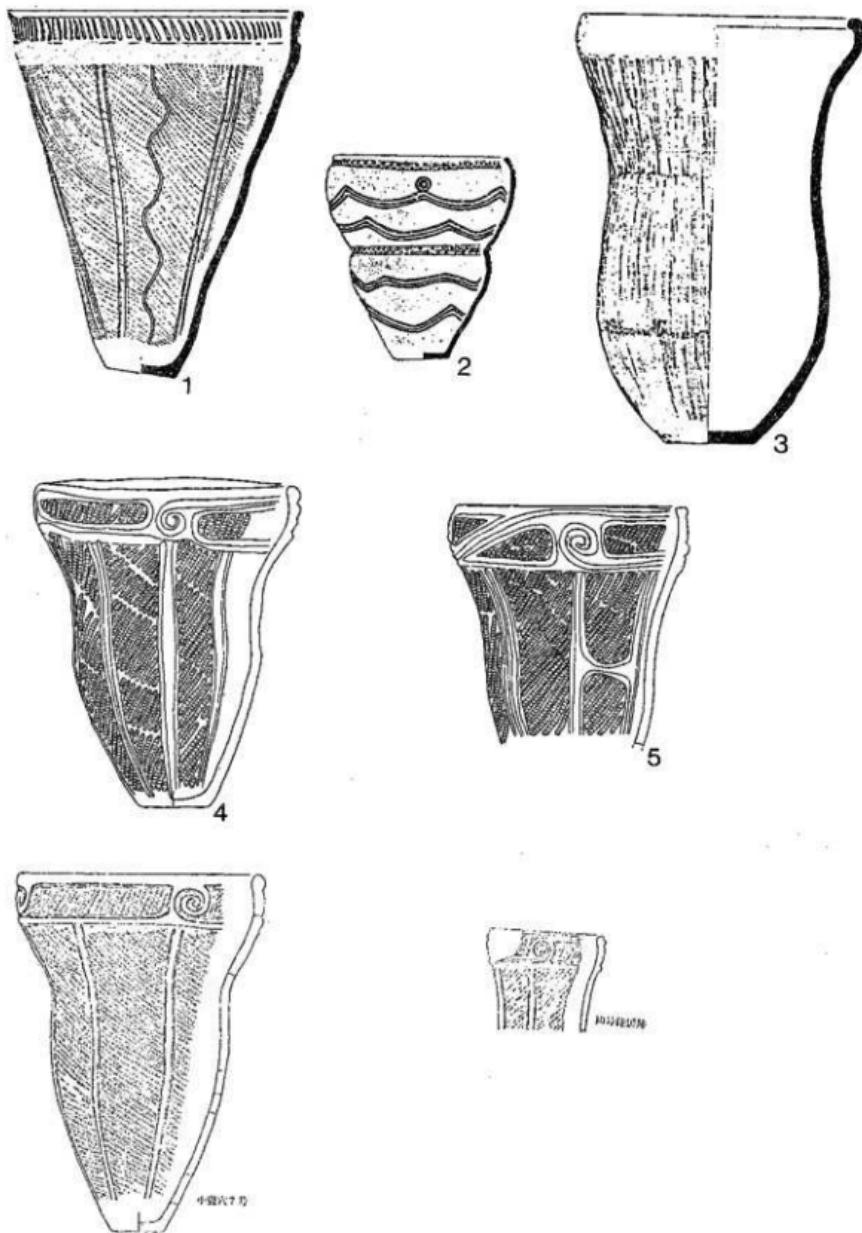
49 翁a期(培玉) 1~4 花影迹1号住 5~7 岩上迹13号住 8~10 坂東山迹30号住 11、12 田端前遺
跡10号住 13 坂東山迹20号住 14、15 四原遺跡35号土廣 16 坂東山迹15号住



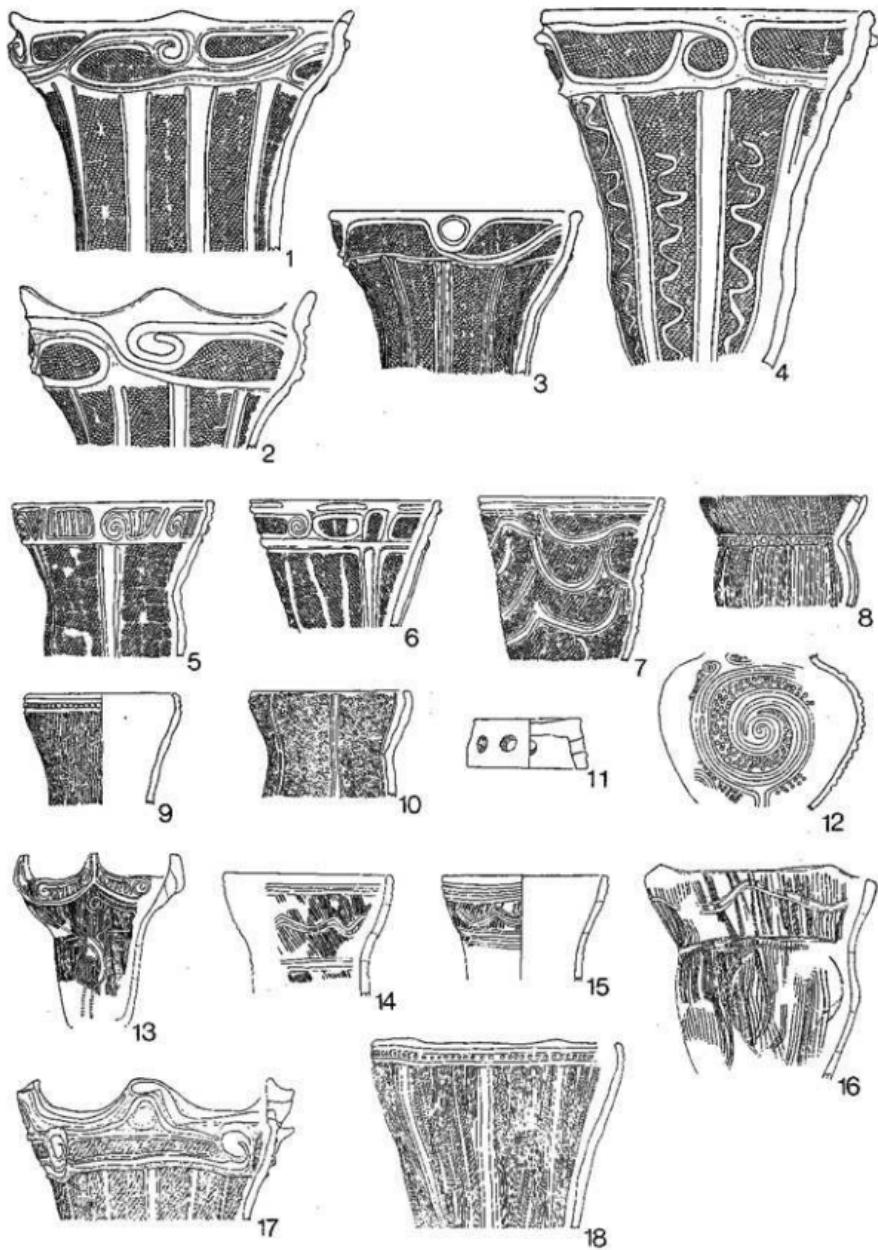
50 XI a 期(東京) 1~21 真井南遺跡13号住 22~32 恋ヶ窪遺跡4号住



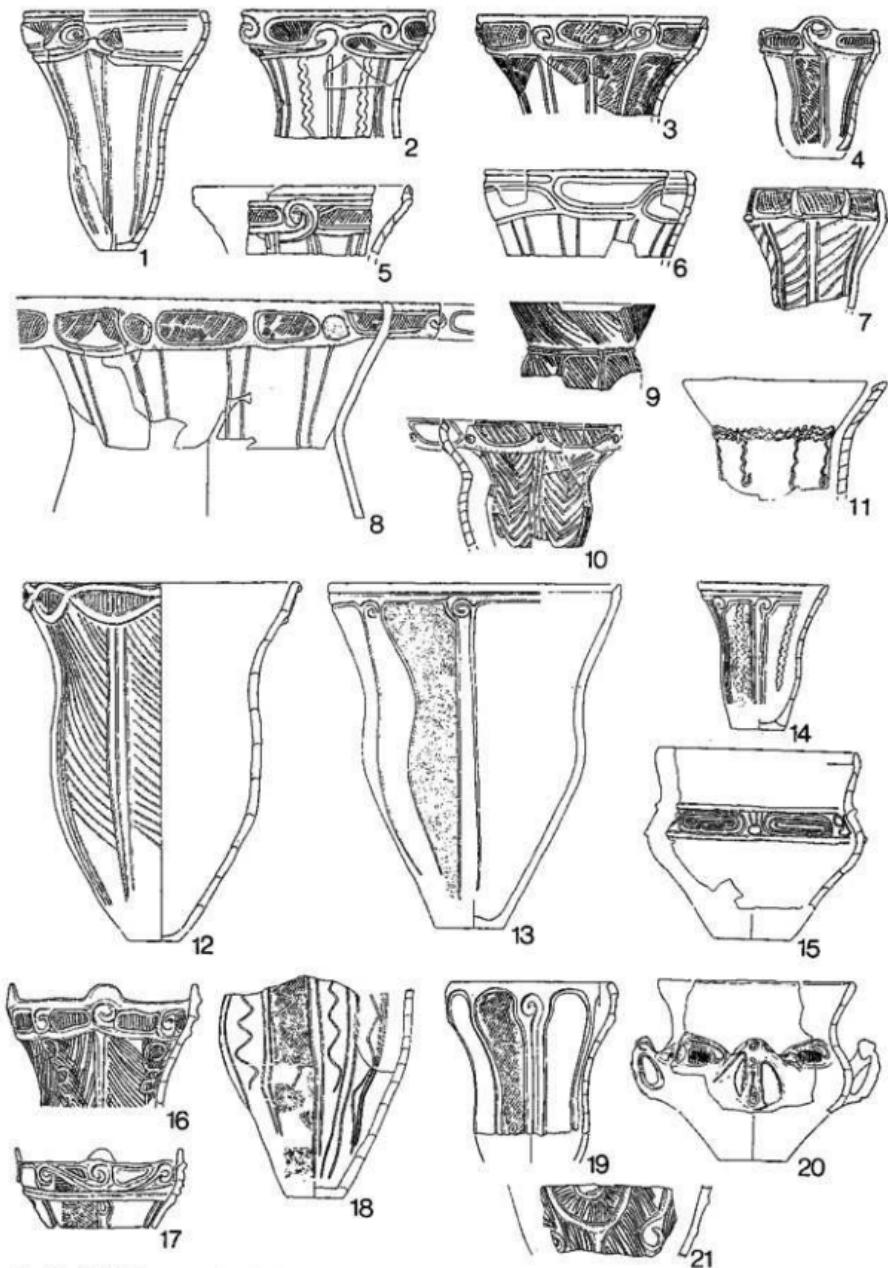
51 離a期(東京) 狹山遺跡A2号住 5~8 平和台I遺跡2号住
9~15 三麗五中遺跡8号住
16~18 松原遺跡12号住



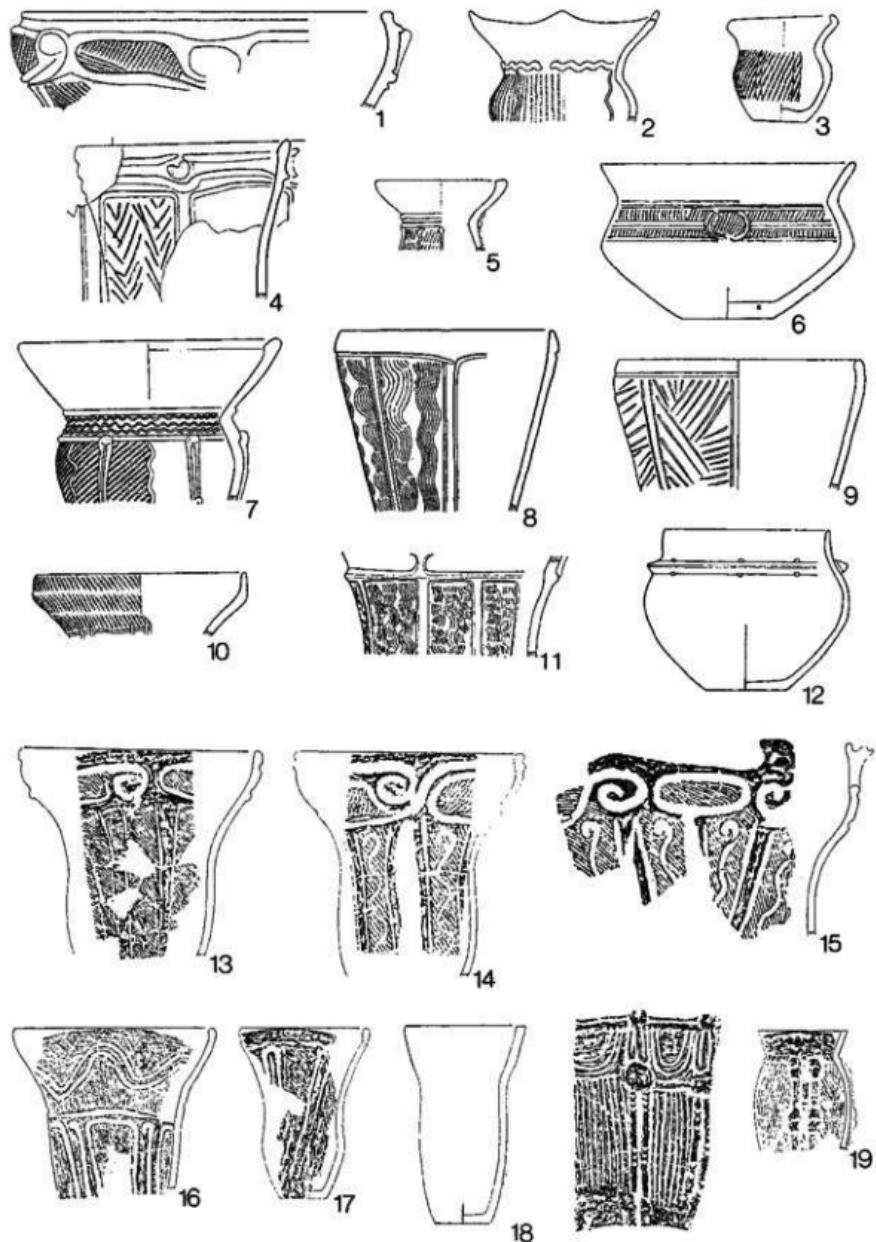
52 Xa期(千葉) 1~3 今島田遺跡②土壤 4、5 荒屋敷貝塚
下段左 今島田遺跡小窓穴7号
下段右 今島田遺跡10号住



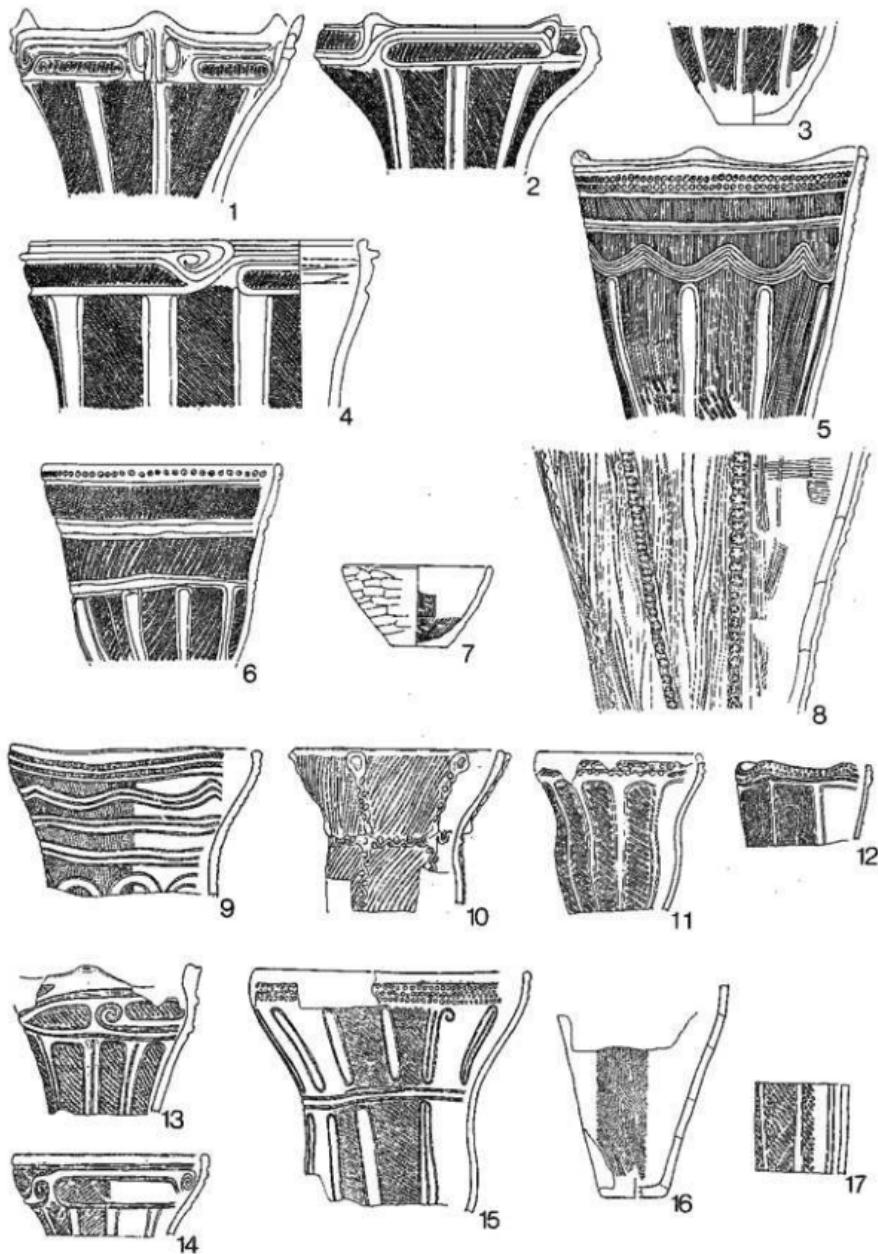
53 鎏 b 期 (培玉) 花彩遺跡 9 号住 5~12 坂東山遺跡 27 号住 13~16 秋父山遺跡 6 号住
17、18 田嶺前遺跡 12 号住



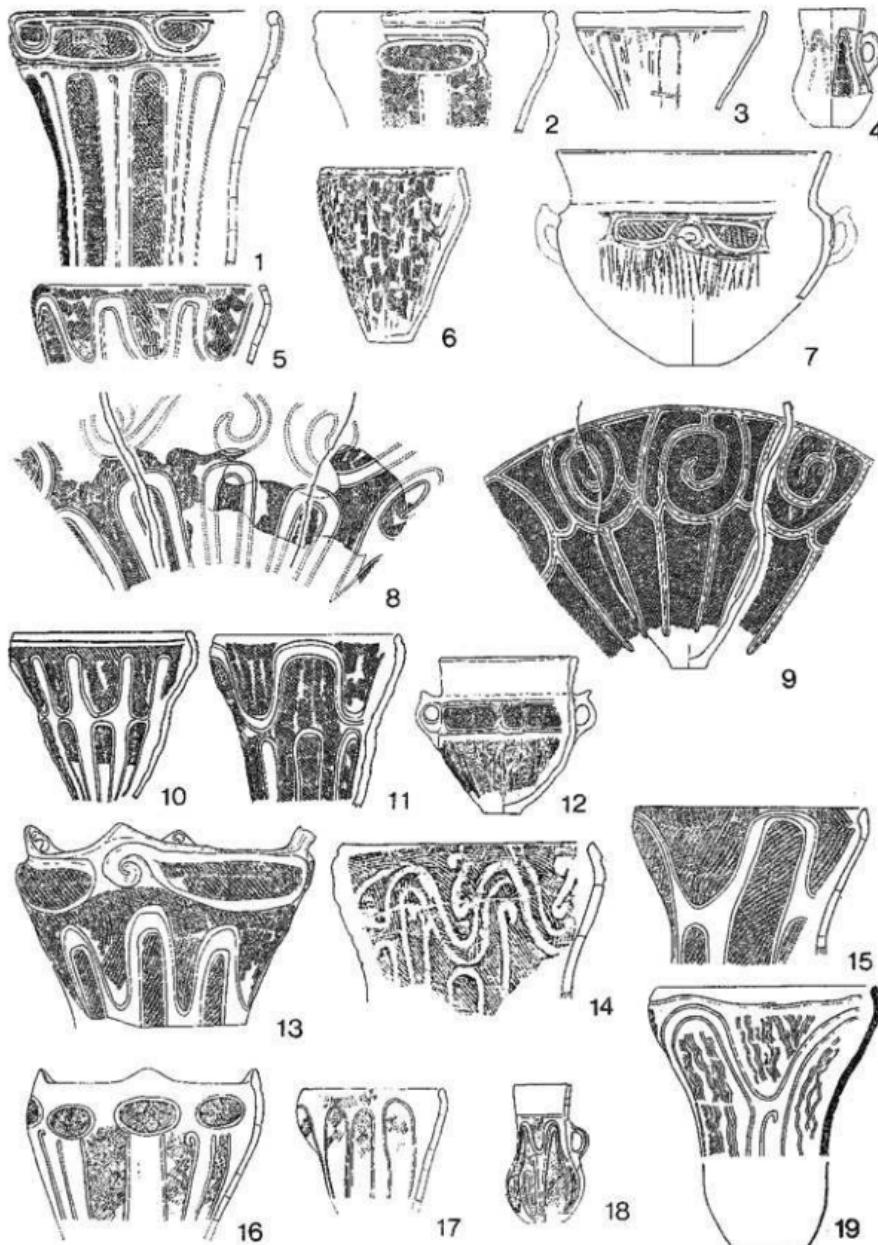
54 XI b 期(東京) 1~11 恋ヶ窪遺跡 2 号住 12~15 堀田第Ⅱ遺跡 3 号住 16~21 堀田第Ⅳ遺跡 16号土壙



55 遺 b 期 (東京) 1~12 藤川遺跡 J 地点20号住 13~19 吹上遺跡27号住



56 龙 b 期(千秦) 1~8 土字遗址35号住 9~12 子和清水遗址65号住 13~17 子和清水遗址186号住

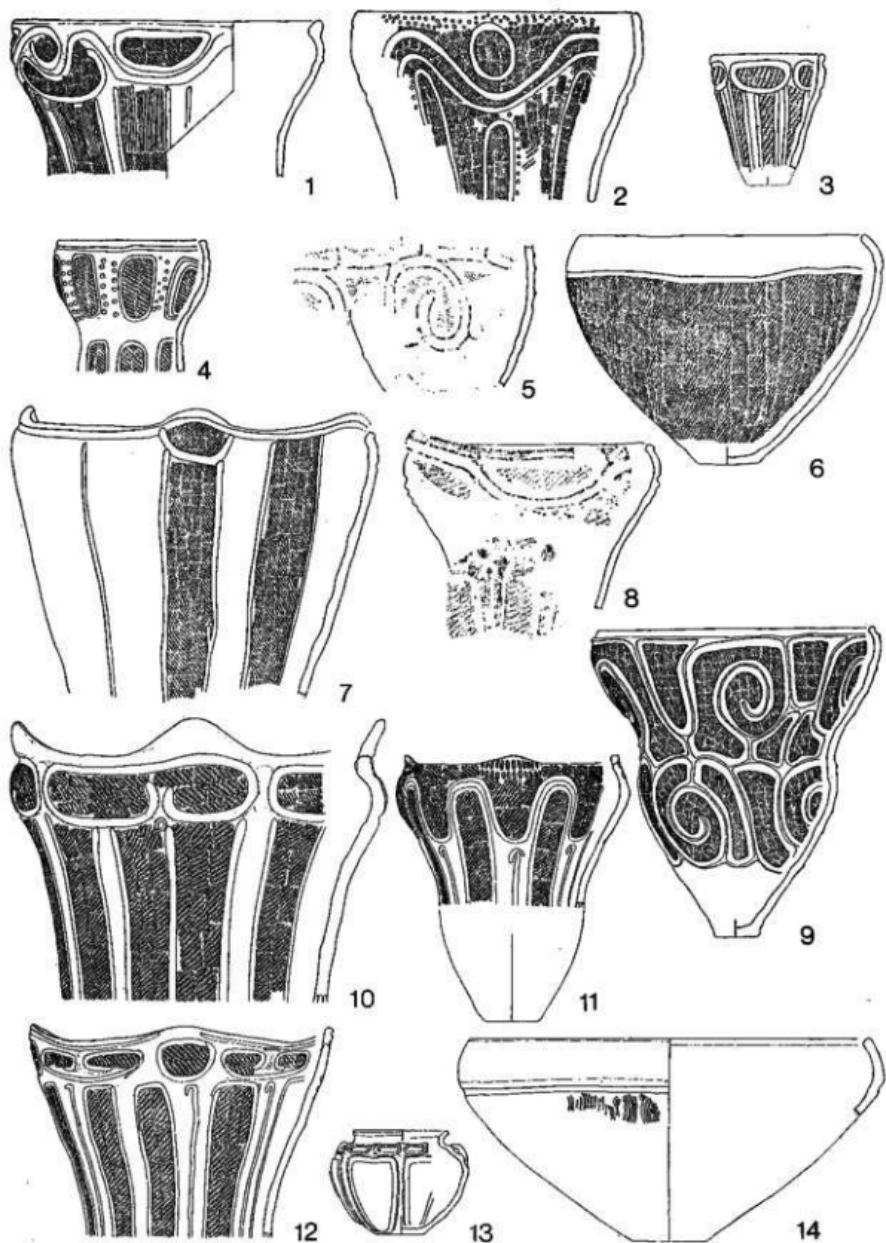


57 X Ⅲ期(埼玉)

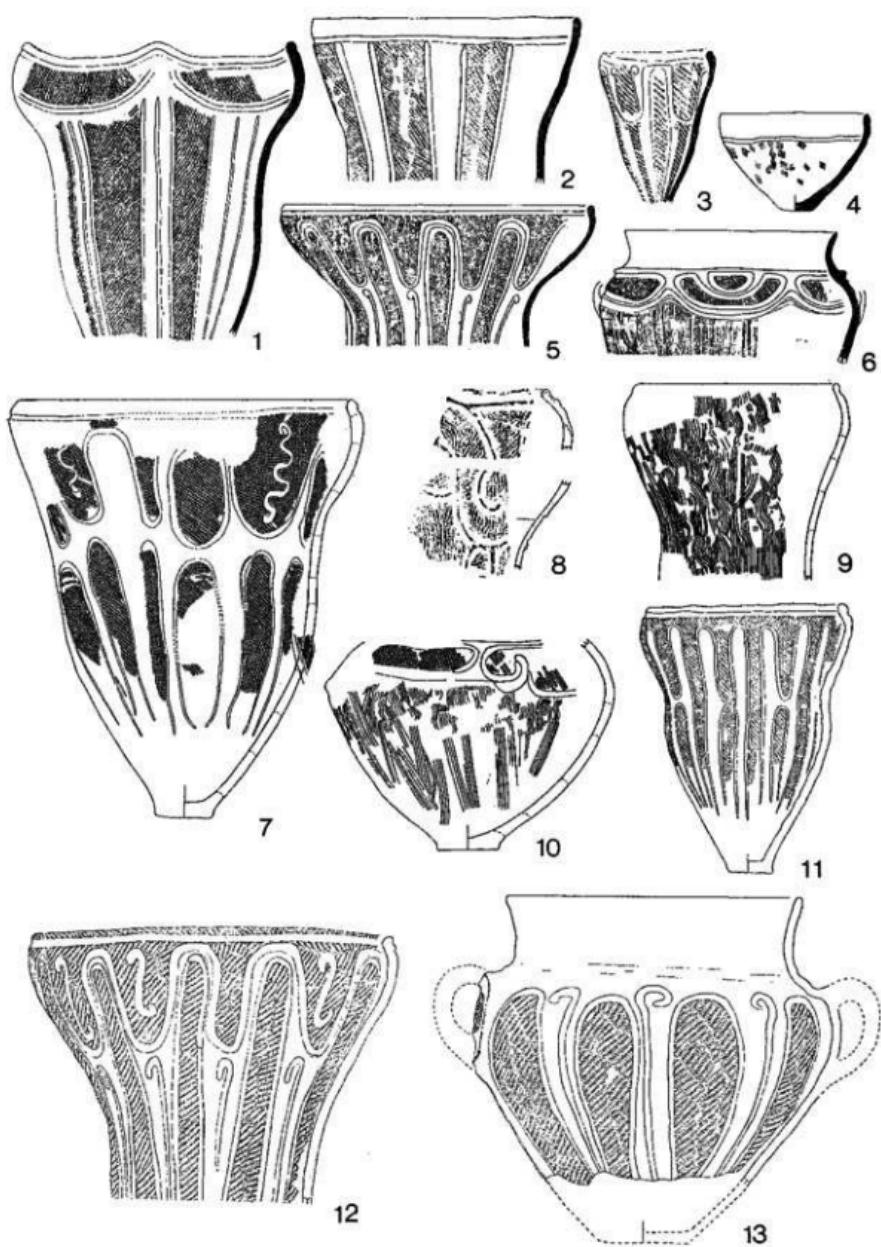
1~7 ゴシン遺跡2号住
8 附川遺跡埋甕
11 坂東山遺跡
13~15 蓼谷ノ遺跡1号住

9、12 花影遺跡15号住
16~18 宮地遺跡2号住

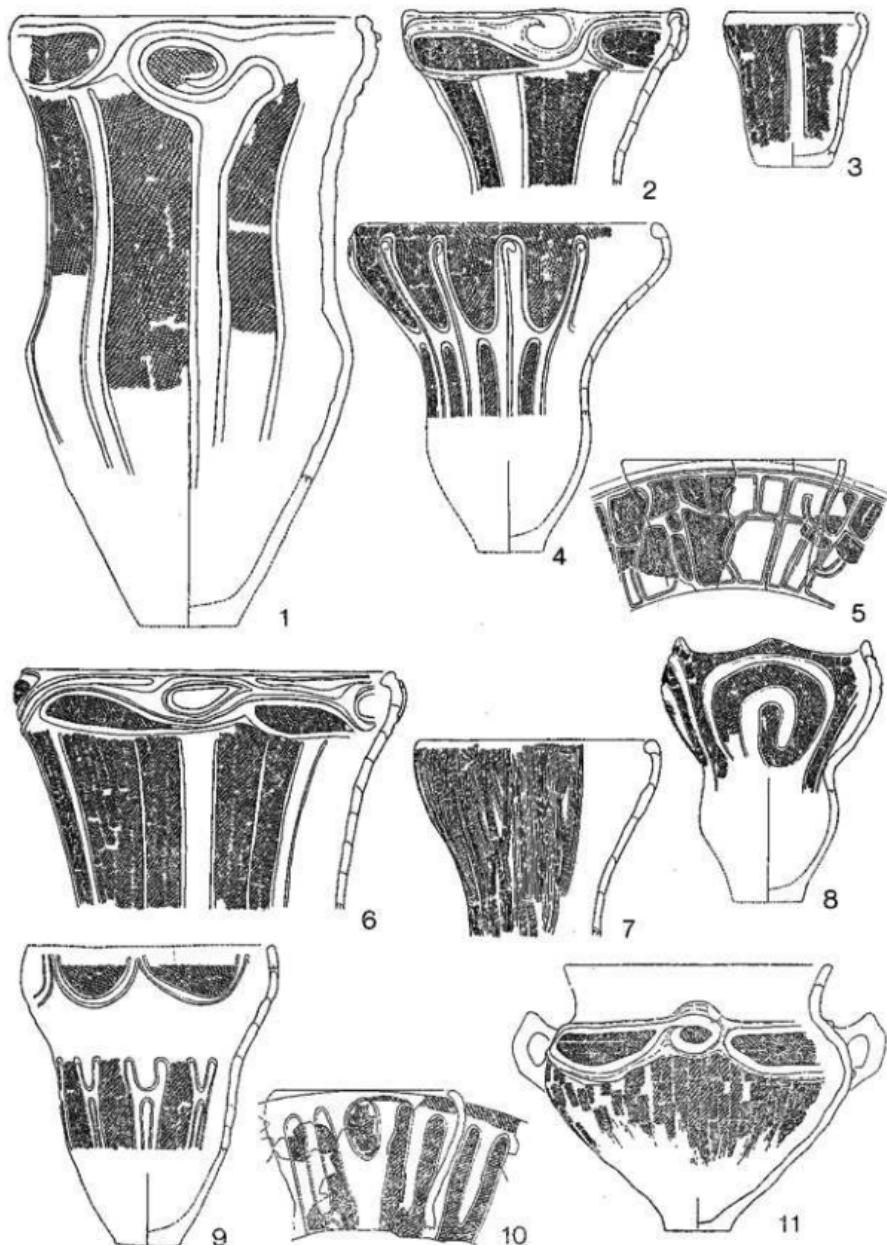
10 花影遺跡5号土壤
19 後山遺跡



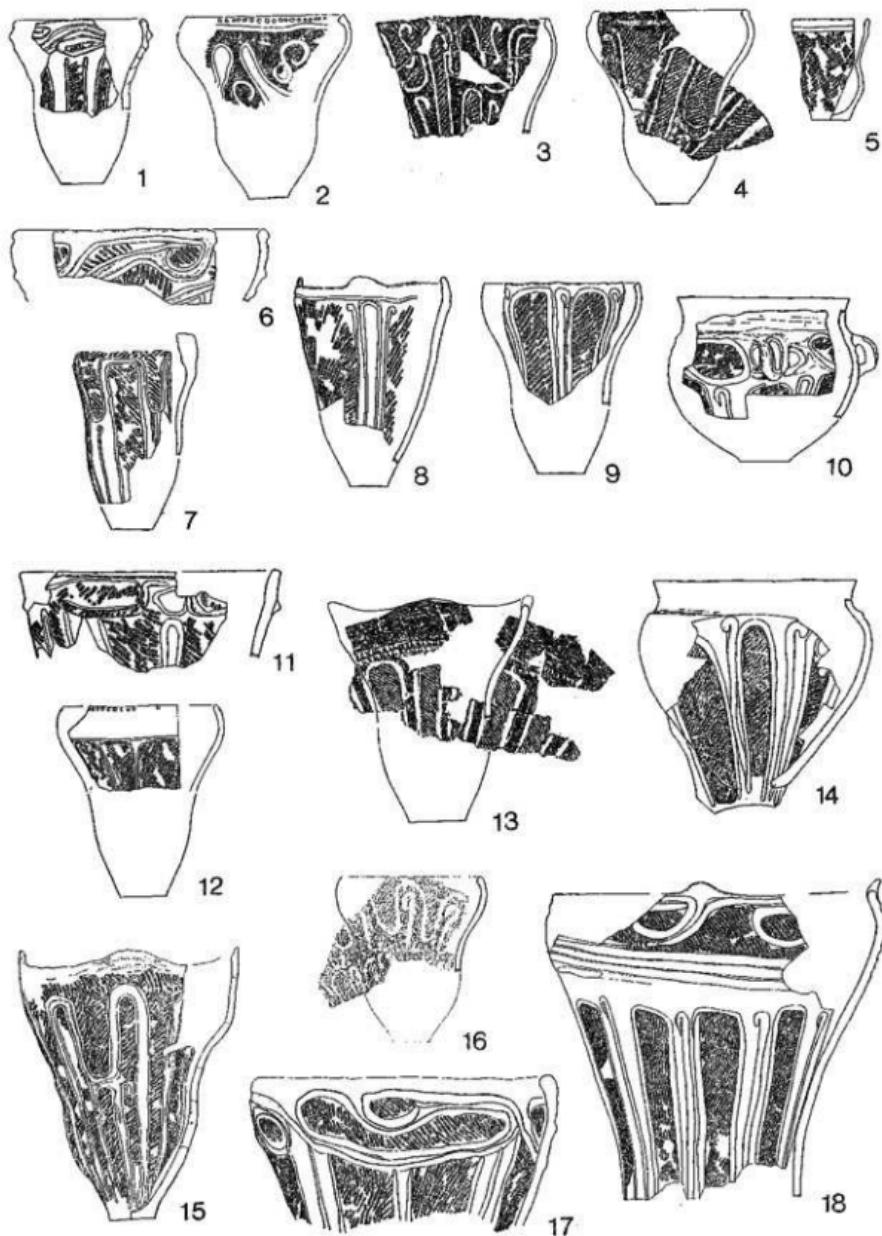
58 X ■ 期 (埼玉) 1~3 風早遺跡14号住 4~6 風早遺跡 9号住 7、8 風早遺跡 6号住 9 風早遺跡埋甕
10~14 美慈恩寺東遺跡 1号住



59 X Ⅲ期(埼玉) 1~6 馬込遺跡12号住 7~10 鉄火山遺跡23号住 11 飯玉東遺跡 12 大北遺跡
13 大古里遺跡



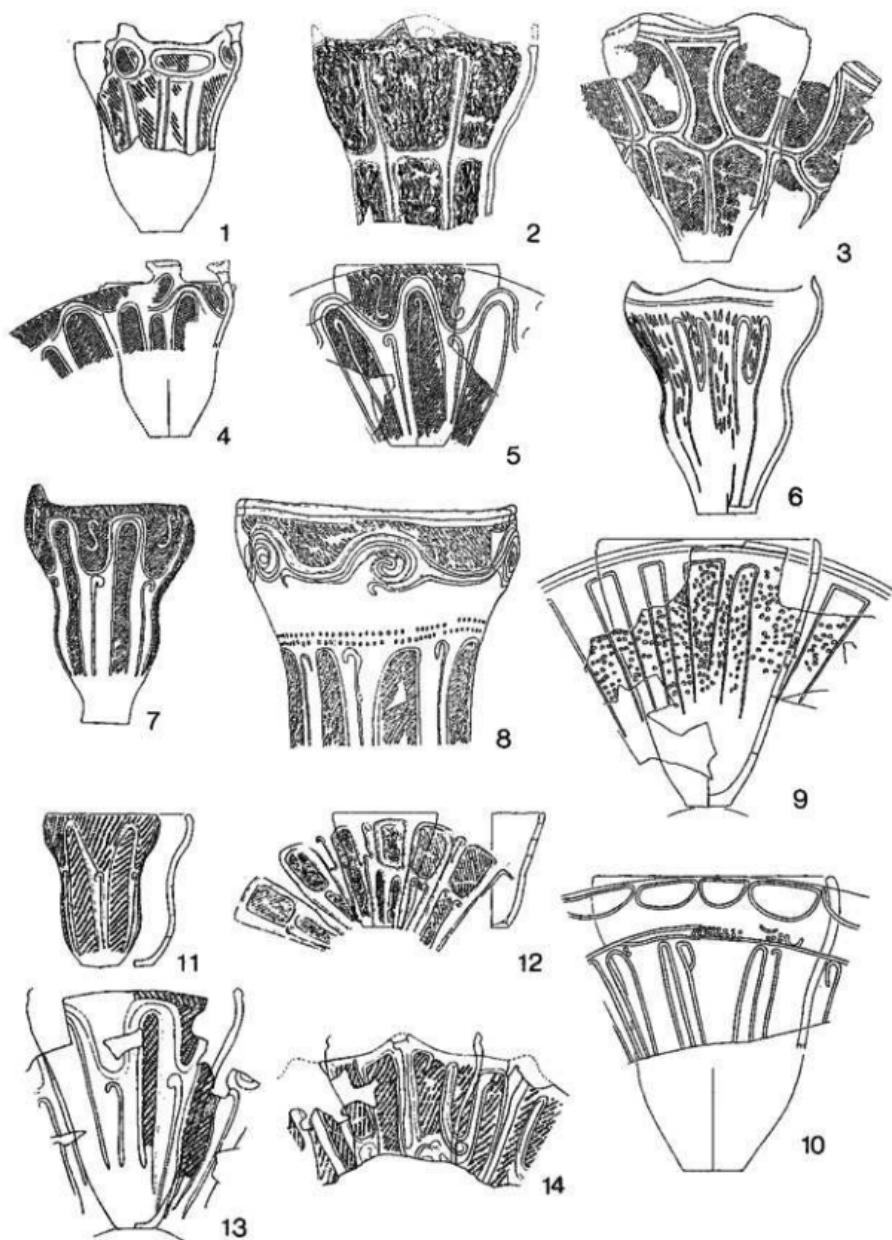
60 X Ⅲ期（埼玉） 1~4 志久遺跡4号土器 5 大山遺跡A区7号住
6、7 志久遺跡4号住 8 志久遺跡5号土器 9 志久遺跡9号住
10、11 小室天神前遺跡A区土器



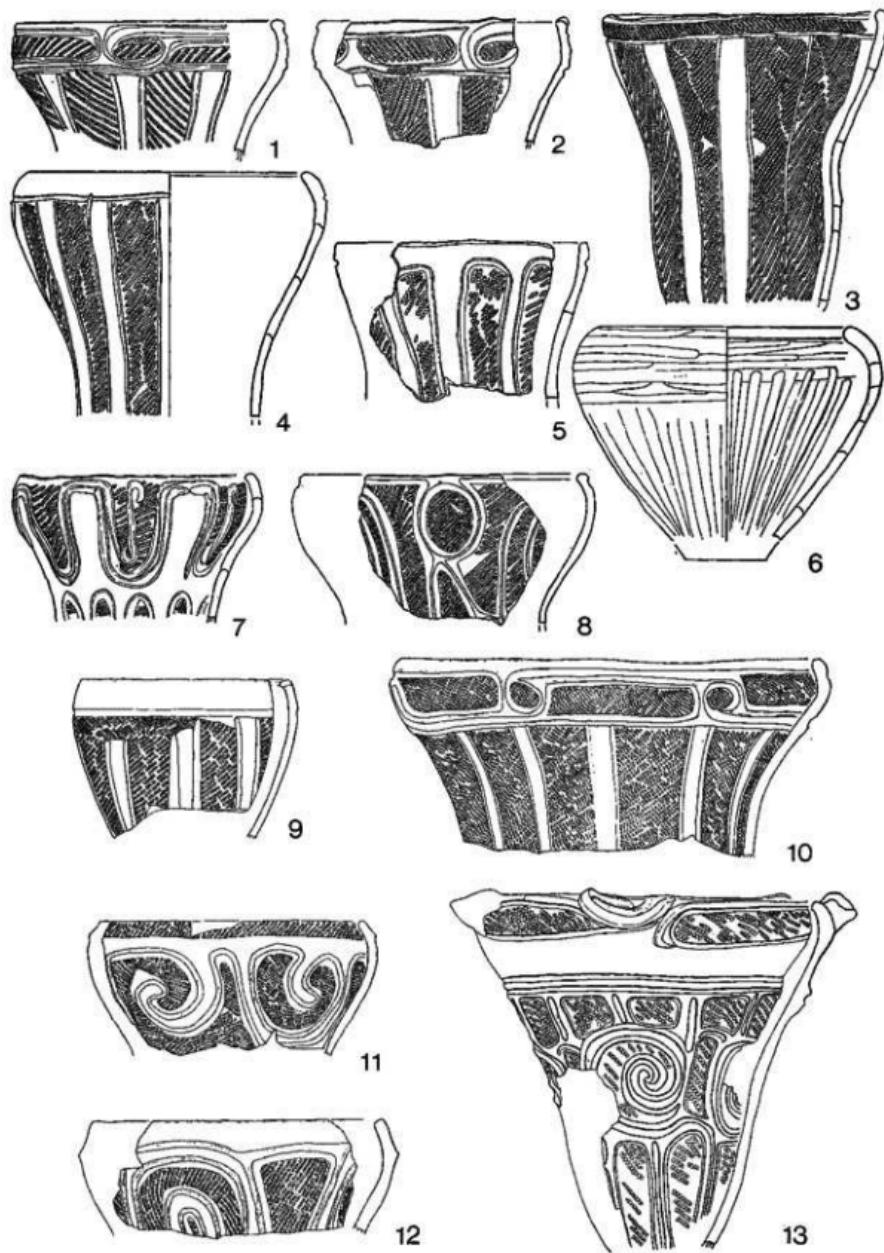
61 X II 期 (東京)

1~5 新山遺跡 3号住 6~10 新山遺跡 5号住 11~14 新山遺跡 7号住

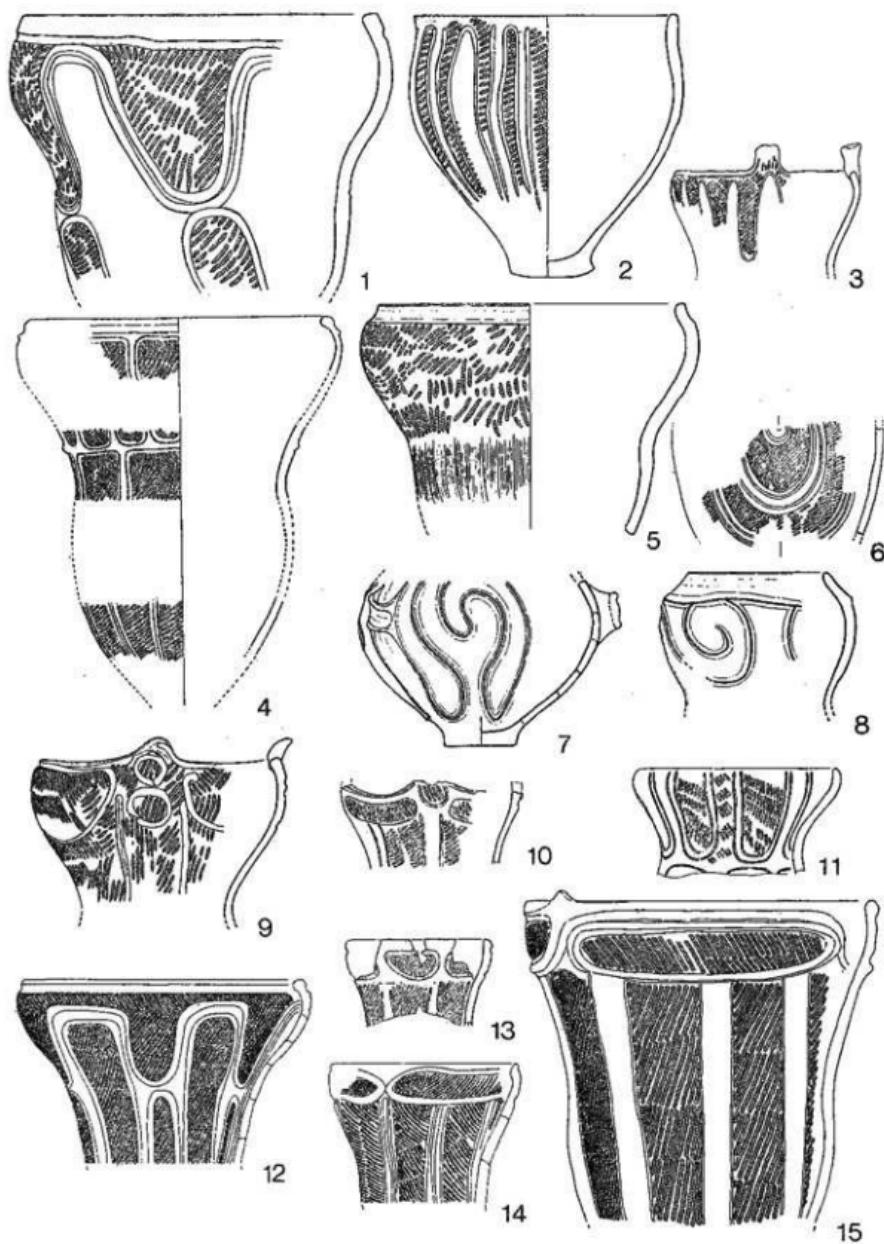
15, 16 新山遺跡 25号住 17, 18 新山遺跡 15号住



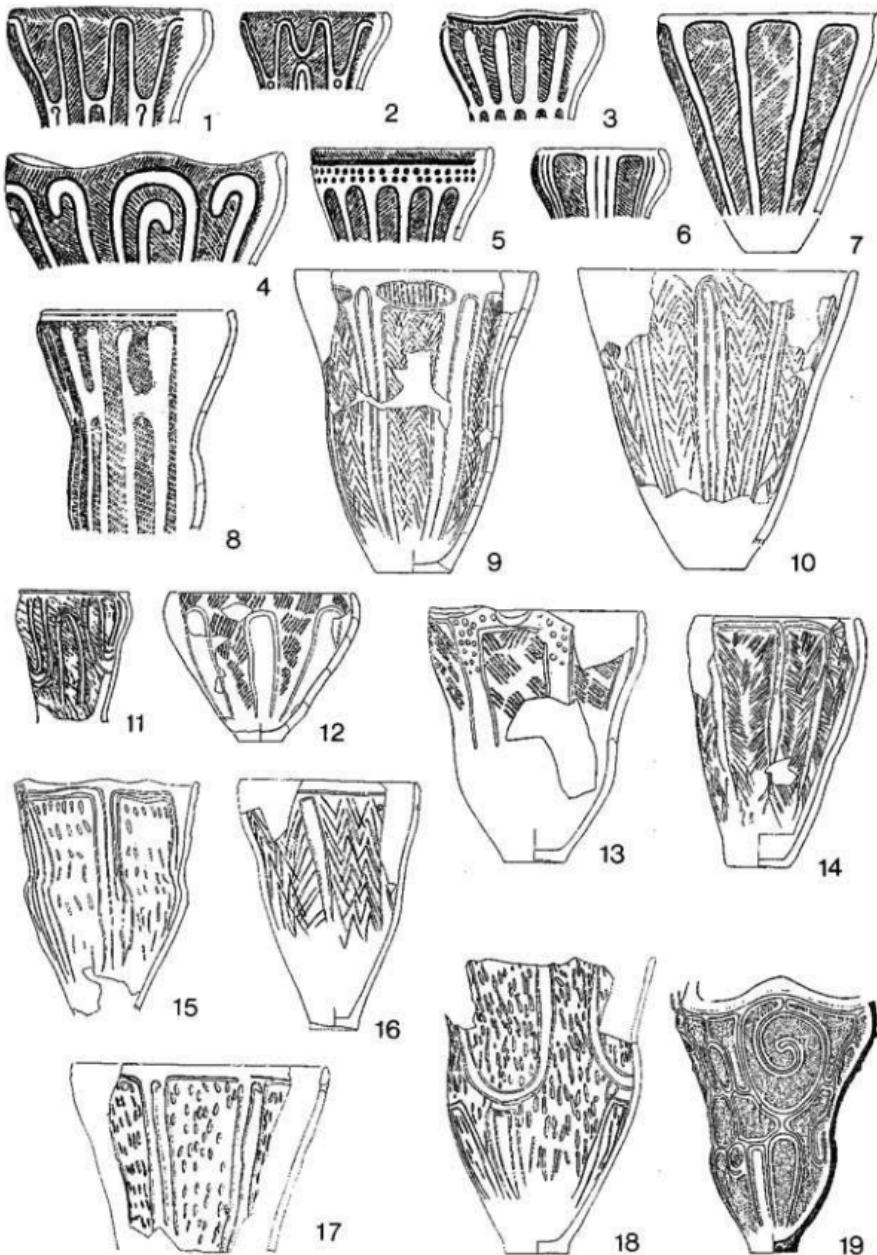
62 X Ⅲ期(東京) 1 新山遺跡4号住 2 新山遺跡31号土塹 3 新山遺跡1号配石 4, 9 平尾No.4遺跡
5, 10 平尾No.2遺跡 6 平尾No.9遺跡 7, 8 井の頭池遺跡群A地点1号土塹
11, 12 松原遺跡 13, 14 貫井遺跡



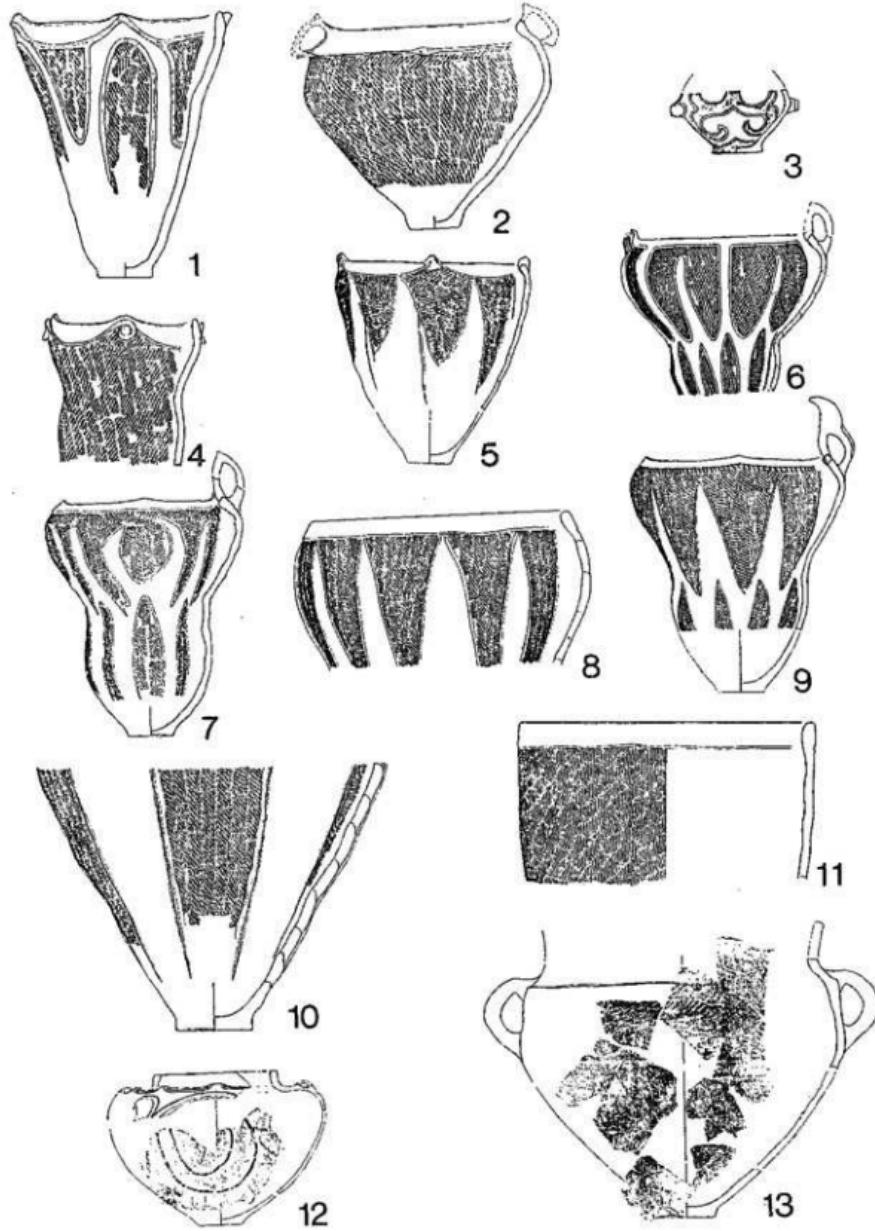
63 X Ⅱ期（千葉） 1~6 中野僧見堂遺跡 6号住 7、8 中野僧見堂遺跡 3号住 9~12 六通金山遺跡 13 後貝塚



64 XⅡ期(千葉) 1~8 生谷境掘遺跡9号住 9 生谷境掘遺跡8号住 10 子和清水遺跡15号住 11 丁和清水
遺跡158号住 13 子和清水遺跡182号住 12 土字遺跡27号土質 14 土字遺跡12号住 15 土字遺跡49号住

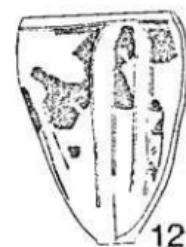
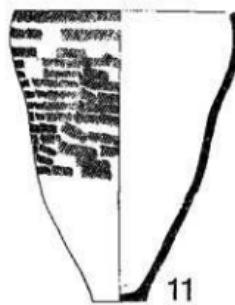
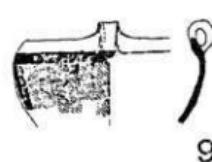
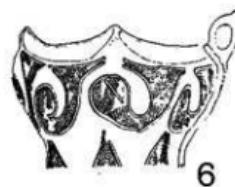
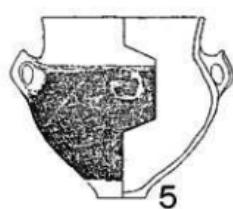
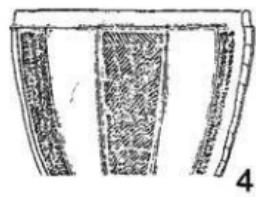
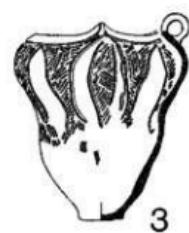
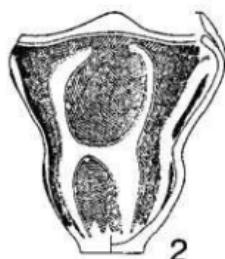


65 X Ⅲ期(神奈川) 1~7 吉井城山第一貝塚 8 宮添遺跡 9, 10, 12, 14 下北原遺跡
11, 13, 15~18 当麻遺跡 19 椎山遺跡

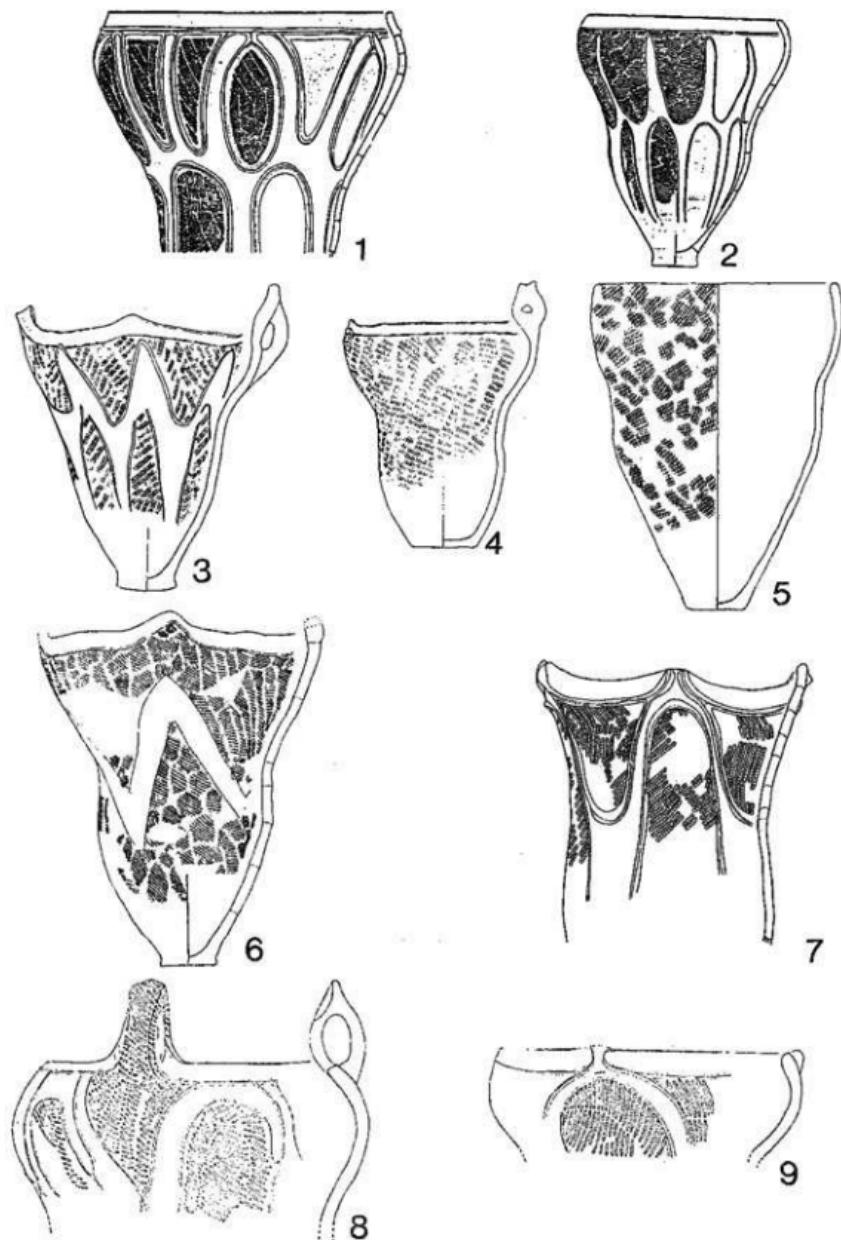


66 X朝期(埼玉) 1~4 黒谷田端前遺跡 5号住
8~13 島ノ上遺跡17号土壤

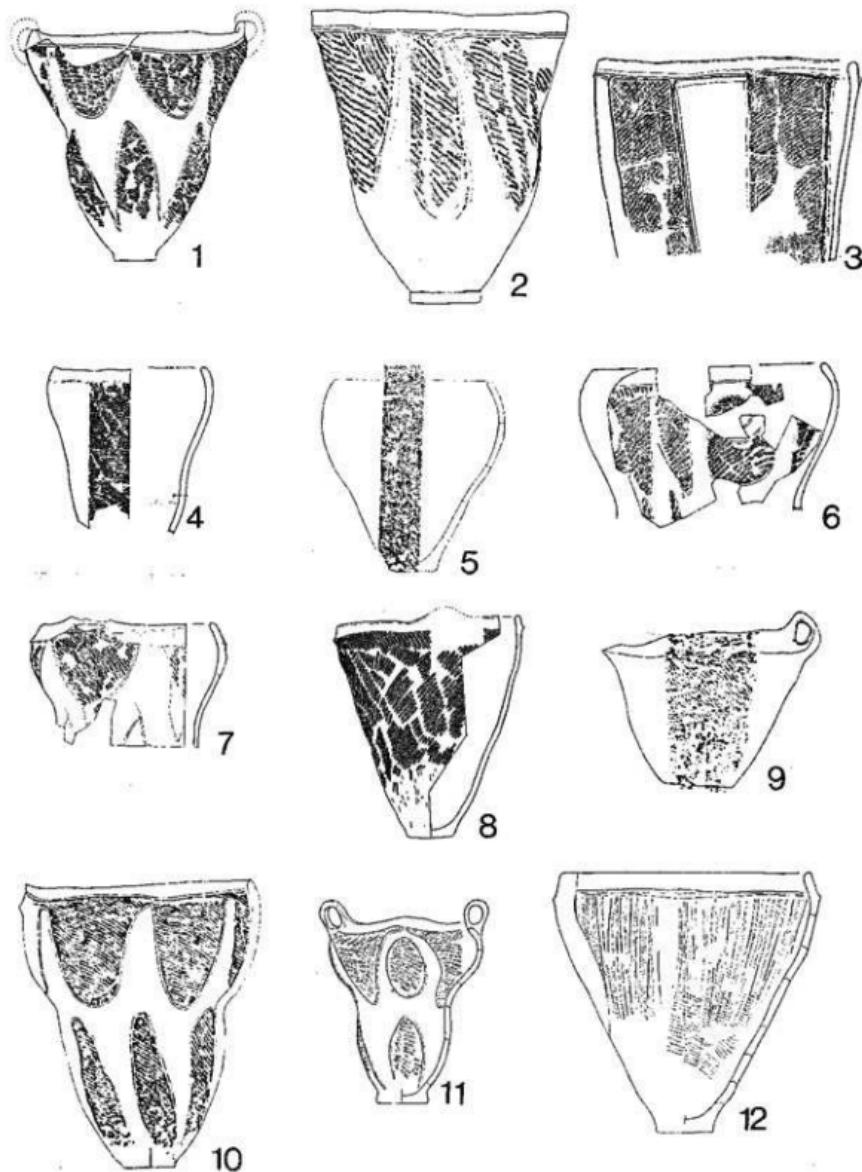
5 出口遺跡 4号住 6 出口遺跡 2号住 7 出口遺跡 9号住



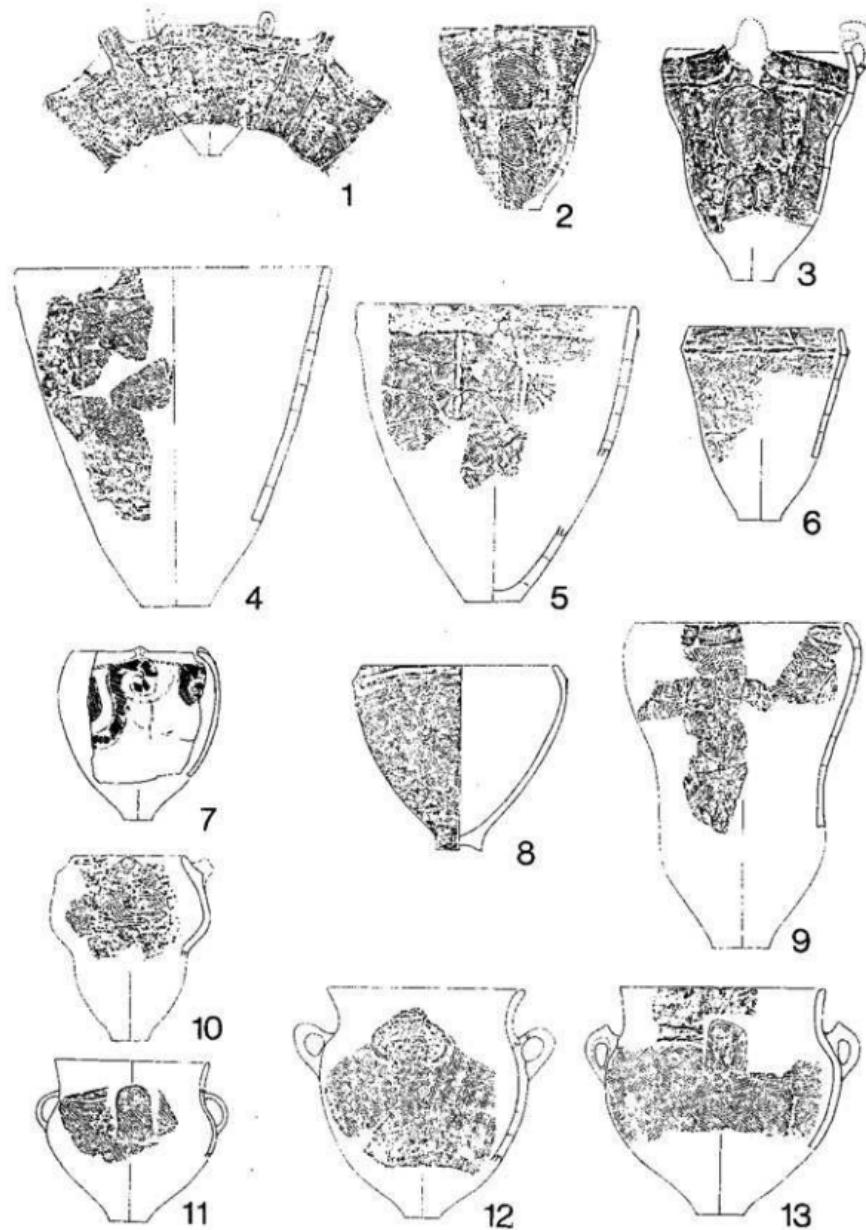
67 X IV 期（埴玉） 1, 2 衣生ヶ谷戸遺跡 3 路櫛遺跡 A.T 1 P 4, 5 出口遺跡 1 号住 6 西原大塚遺跡 5 号土塗
7~9 西原遺跡 25 号住 10 西原遺跡 25 号土塗 11 西原遺跡 39 号土塗 12 殿山古墳



68 X IV 期 (千葉) 1, 2 中野岱見堂遺跡 3~5 中野木新山遺跡 2号柱
7 築地台貝塚 8, 9 生谷境堀遺跡 6 中野木新山遺跡 18号土壤



69 XIV期(東京) 1~2 井の頭池遺跡群A地点1号住 3 新山遺跡20号住 4~6 新山遺跡21号住
7, 8 新山遺跡22号住 9, 10 谷保東方遺跡2号住 11, 12 真山遺跡1号住



研究紀要

1982(別冊)

縄文中期土器群の再編(図版)

昭和57年12月20日 印刷

昭和57年12月25日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印刷 株式会社 誠美堂印刷所